

機動戦士ガンダムForce

狼牙竜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは…ある少年ガンプラバトルプレイヤーの物語。

クラスメイトと共に異世界に連れて行かれた彼は、世界を救う勇者の力など無い。

世界を支配できる魔王のような力もない。

彼にあるのは、『ごくありふれた能力』と『ガンプラバトルの実力』。

そして…『愛した少女との誓い』。

機動戦士ガンダムForce

歪んだ世界に…蘇れ、ガンダム!!

昨今のありふれのハジカオブーム?に触発されて書きました。

応援、よろしく願います!!

目次

プロローグ 出会いの物語

第0話	運命のハジマリ	1
第1話	ガンプラを探そう	7
第2話	進む道	14
第3話	このセカイを飛んで	22
第4話	エルドラという世界	30
登場人物紹介&ガンプラバトルVR・公式ルールの一部紹介		

36

第5話	運命の前日(前編)	40
-----	-----------	----

第6話	運命の前日(中編)	49
-----	-----------	----

第7話	運命の前日(後編)	64
-----	-----------	----

第1章 異界の機人

第8話	異世界の扉	70
-----	-------	----

第9話	トータスという世界	79
-----	-----------	----

第10話	ステータス	86
------	-------	----

第11話	鋼鉄の魂	97
------	------	----

第12話	月下の誓い	105
------	-------	-----

第13話	迷宮冒険	114
------	------	-----

第14話	死闘と裏切り	126
------	--------	-----

第15話	決意、固めて	139
------	--------	-----

第16話	魂が軋む時	151
------	-------	-----

第17話	力と種	163
------	-----	-----

第18話	その光、ガンダム	170
------	----------	-----

第19話	月虹の吸血姫	177
------	--------	-----

第20話	刻が動く	188
第21話	奈落の底のヒュドラ	197
第22話	ガンダム、迷宮に立つ!	206
第23話	反逆者の正体	218
第24話	旅立ちの朝	230
特別編第1話	帝国の傭兵	242
特別編2話	目覚める者たち	255
第2章 集う戦士		
第1話	ウサギと電撃	264
第2話	命の重み	271
第3話	亜人の森	281
第4話	約束	288
第5話	強さを掴め	300
第6話	大地の目覚め	308
第7話	信念と誓いと	317
第8話	人の世へ	325
第9話	人の営み	333
第10話	突撃、死の大峡谷	342
第11話	第2の迷宮	350
第12話	その名はサタン	359
第13話	鋼の少女	370
第14話	運命の一打	377
第15話	悪魔のシステム	383
第16話	『救世主とガンダム』	394
特別編第1話	楽園の勇者	403

特別編2話 再開への秒読み

第3章 狂い咲く勇士

第1話 商業都市へ

第2話 支部長からの依頼

第3話 再会、友よ

第4話 真実の遊戯

第5話 厄災の爪痕

第6話 集う戦士たち

417

426

435

446

454

468

484

プロローグ 出会いの物語 第0話 運命のハジマリ

少女の眼前では大きな歓声の中で戦う、四本角のロボットの姿があった。

『さあ始まりました！ガンプラバトルVR、南陽バトルトーナメント決勝戦！』

広大な宇宙空間を飛び回るのは、金色のボディを持ち、肩に『百』と描かれたモビルスーツ『百式』を改良したもの。

『前大会優勝者、四十万選手の操る『百式・ジエツト』に対抗するは…』
百式・ジエツトを追いかけるのはメタリックブルーと白が目立つボディに、ボディと同じ青…そして黄色の2種のV字アンテナを持ったモビルスーツ。

その背中には赤と白の翼状のスラスターユニットがくっついていた。

『初出場ながら決勝戦まで上り詰めたルーキー、南雲選手！その相棒であるインパルスガンダムは元のカラーリングをベースに塗装されており、試合の都度使うバックパックを交換！その姿はさながらオリジナルの持つ『シルエツトシステム』を思わせるギミックだ!!そしてこの赤と白の翼を持った名は……』

『セイバーインパルスガンダム!!』

「セイバー…インパルス…」

アナウンスの言葉を小さな声で復唱するのは、長い黒髪の少女。

「くっそ！このスピードに食らいつくとか、ほんとにこいつ初心者かよ!?!」

百式・ジエツトはビームライフルで攻撃するもセイバーインパルスは左腕のシールドで防ぎ、右手に握っていた剣をビームライフルに変

形、応戦する。

「……………次は、これ！」

セイバーインパルスは胸部に搭載されている2門の機関砲『MMI—GAU25A 20ミリCIWS』で百式・ジェットを牽制すると右手に持っていた実体剣を逆手に持つてすれ違いざまに切り裂く。

「これで…終わり！」

実体剣を左手に持ち変えると、セイバーインパルスは左腰に下げていた刀：『シロガネ』を引き抜き、スラスターが開く。

スラスターが開いたことで加速力が引き上げられ、セイバーインパルスは百式・ジェットを追い抜き…

次の瞬間、百式・ジェットは真つ二つになって爆発。

画面いっぱい『YOU WIN!!』の文字が大きく表示される。

「……………よおおおっし!!」

コックピット内部でセイバーインパルスのパイロット：『南雲ハジメ』は大いに叫んだのだった。

ガンプラバトル。

『機動戦士ガンダム』シリーズに登場するメカ『モビルスーツ』のプラモデルである通称『ガンプラ』を実際に操作して対戦するシステム。

かつてはプラネットコーティングと呼ばれる特殊な技術をガンプラに浸透させて現実のガンプラを操る『GPデュエル』が主流となっていたが、ガンプラそのものの破損などの問題を解決するために仮想空間にガンプラを出現させ、自分のガンプラを本来のモビルスーツの

大きさにして乗り込むことができる『ガン普拉バトル・ネクサス・オンライン』：通称『GBN』がガン普拉バトルにおける主流となった。しかし：ネットゲームというやや閉鎖的な環境になっていることが新規プレイヤー達の確保を難しくしてしまうといった問題も同時に発生してしまう。

それを解決するべく、かつてのGPDのように多くの人達にガン普拉バトルを知ってほしいという願いから作られたもの：それが双方の長所をとった『ガン普拉バトルVR』だった。

優勝の証とも言えるメダルと、ガン普拉をしまうケースを持ちながら歩くハジメ。

「ふう…まさか優勝できるなんてね…：ありがと、インパルス」
相棒に声をかけ、家まで帰るべく歩むが…

「あの、南雲ハジメ君…：ですよね？」

「は、はい？」

後ろから声をかけると、一人の少女が立っていた。

長い艶のある黒髪に少し垂れ気味の優しげな瞳。

まだ幼さが残るため第一印象は『可愛らしい』だが、数年もすれば美しいという印象が強くなるであろう少女がそこにいた。

見る限り自分と同じ中学生のようだが、着ている制服は少なくともハジメの通う学校ではない。

「えつと…：僕のこと、知ってるんですか？」

ハジメはこの少女と面識は無く、突然のことに困惑してしまう。

「あ…：す、すみません！私、自己紹介もまだで…：…えつと…：名前は『白崎香織』です」

黒髪の少女…：香織は挨拶を交わす。

「そっか…：こないだのあれ、見てたんだね…：うわあ…：…！！」

ハジメは近くの喫茶店で香織と改めて話をして、そこで彼女が自分を知るまでの経緯を聞くと顔を覆った。

数日前、香織は修羅場とも言える場所に遭遇した。

ある老婆とその孫と思わしき子供が不良に絡まれており、周囲は手を出せずにいたのだ。

その原因は子供が不良とぶつかった際に服を汚してしまい、それに対して激怒した不良が恐喝まがいの行動を子供と老婆に行っていた。

香織はその剣幕に怯えてしまい、動けなかったが：

偶然そこにいたハジメが『土下座』で不良達を止め、いたたまれなくなつた不良達は大人しく帰っていったのだ。

「それは…お見苦しいところでした……………」

ハジメにとつて、美少女（しかも好みドストライク）に自分の土下座を見られてしまうという今すぐにも月光蝶で消し去りたいクラスノ黒歴史に悶絶していると…

「ううん。あの時の南雲君の行動を見て私、むしろ凄いと思つたよ」

「え…？」

香織は真剣な顔になって語る。

「私の幼馴染に、こういうトラブルに首を突っ込んでいく人が二人いるんだけどね…私、あの二人ほど喧嘩できるわけじゃないから、正直止めなきゃと思つても自分に言い訳してた。『どうせ誰かが解決してくれる』って…」

でも…と一度言葉を区切る。

「南雲君は喧嘩とか得意じゃない…そうでしょ？」

「う、うん…」

「それでも、見知らぬ人のためにちゃんと行動できた南雲君を見て、私は自分が恥ずかしくなつた。言い訳をして逃げるんじゃない、何があつてもすぐ行動したいって思えるようになったんだ」

コーヒーカップを一度テーブルに置く香織。

「それを気づかせてくれた南雲君とお話したくて…でも、名前も何もわからなかったからね。それで、思い出したんだ…南雲君が『THE GANDAM BASE』の袋とガンプラの箱を持ってたこと」

そう。あの日ハジメがああ現場に遭遇したのは行きつけの模型店で入荷したばかりの最新ガンプラ『HGCE バスターガンダム』を購入するためだった。

「それで次の日にお店行ったら、南雲君の顔写真が今日のトーナメントの参加メンバーにあって…」

「それで、終わるまで待っててくれた…ってこと?」

香織は小さく頷く。

「あと…凄い綺麗だったよ。南雲君の…えっと、インパルス…だっけ?」

「う、うん…」

ハジメはケースをテーブルに置くと、そのロックを外して中に入っていたインパルスガンダムを見せる。

「これ…僕が最初に買った二つのガンプラのうちの一個なんだ…だから、勝ちたくて…色も塗り替えたり、色々工夫して…本当、勝ってよかった」

「うん…私、プラモのことはわからないけど、一つだけわかることがある」

香織はインパルスを壊れないようそつと手に取る。

「南雲君が、このガンプラにあつたかい思いを込めたってことだけは…素人の私にも何となくわかる。それくらい綺麗にできてるよ」

その言葉にハジメは嬉しくもあり、そしてその優しい笑顔に胸の奥が一瞬だが強く鼓動を刻んだ気がした…

その夜。

ハジメは両親の用意してくれた祝勝会の料理を食べ終わったあと
も上の空だった。

『南雲君が、このガン普拉にあったかい思いを込めたってことだけは
…素人の私にも何となくわかる』

あの時の言葉も、笑顔も、ずっとハジメの頭から離れない。

「…白崎…香織さんか」

自分のスマホに表示された連絡先を見て、ハジメは呟いた…

すると、メッセージアプリから通知が鳴ってハジメは驚きからスマホ
を落としそうになる。

「うわっ!?!…って、白崎さんから?」

恐る恐るメッセージを確認すると…

『夜遅くにごめんね。良かったら今週の金曜日、私にも南雲君のやつ
てるガン普拉について教えてくれない?』

「え……………」

突然の連絡に驚くハジメだが、ガン普拉に興味を持ってくれた女の子
ができたこと、そして出会ったばかりでこうして誘ってくれた香織
にハジメは少しだけ嬉しく感じていた…………

第1話 ガンプラを探そう

金曜日の放課後、ハジメはいつもの制服のまま模型店『THE GANDAM BASE』を訪れていた。

このお店はGPDが流行りだした頃に日本のあちこちに展開された『ガンプラ専門店』で、それぞれのお店や系列店に実物大ガンダム立像が飾っており、ハジメの通うこの店には彼がインパルスと並んで推している『デステイニーガンダム』の立像があった。

そのためこのあたりに住んでいる人達の待ち合わせスポットにもなっており、地元民は『デステイニー前』と言えば伝わる…らしい。(まあデステイニーの外見ならば見た人は一発で特徴覚えるだろうし…)

ハジメは立像前のベンチに座りながらそんな事を考える。何せデステイニーガンダムはその風貌からしてインパクトが凄まじいのだ。

従来のガンダムらしいトリコロールカラーでありながら、悪魔を思わせる赤と黒の翼。

そして何より、血涙を流したようなその顔つきは一度見たら覚える人も多い。

「南雲君！」

すると、小走りで香織が駆け寄ってくる。

「お待たせ。もしかして結構待たせちゃった？」

「ううん。僕も今きたところだよ」

少しだけ息を切らせた香織は、ハジメ同様中学の制服姿だった。

「じゃあ、案内よろしくお願いします♪」

いたずらっぽい笑みに思わず見とれそうになったハジメだった…

ガンプラコーナーに入ると、香織はキョロキョロと辺りを見回す。「ガンプラって一言で言っても、たくさんあるね…どういふ種類があるの？」

「うーん…大まかに分けると『1／144』、『1／100』、『1／60』、『SDガンダム』の四つかな？もつと上の『1／48』なんて大きさもあるけど、それは今回省くとして…」

そう言うとハジメは、一つの箱を手取る。

「これが1／144スケールのガンプラで一番メジャーな『HG』ことハイグレード。物によってはしっかりした塗装とかが必要なものもあるけど、この『機動戦士ガンダム00』以降のガンプラは割と塗装無しでも設定に近い色合いになってるんだ」

ハジメが手に取ったのはガンダム00の第1シーズン主役機体『ガンダムエクシア』と第2シーズン主役機体『ダブルオーガンダム』のプラモ。

「で、同じスケールでより細かいのがこの『RG』ことリアルグレード。値段も少し割高で組立難易度も一気に跳ね上がるから初心者の白崎さんにはオススメしないけど、ある程度慣れたら簡単なものからチャレンジしてみるといいよ」

今回手に取ったのはハジメの使っているガンプラの原型機『フォースインパルスガンダム』のRGガンプラ。

「…てことは、私が組むとしたらこのHGモデルがいいのかな？」

「うん。これより大きいスケールは初心者にはまだ向かないから、HG以外で組むとしたら…このSDガンダムかな？」

ハジメが見せたのは、SDシリーズの一つ『SD EXスタンダード008 ダブルオーガンダム』。

「このシリーズはSDの中でも組みやすい上、パーツや武装をそのままHGモデルと合体させられるから僕もよく購入してるんだ」

「ふーん……………こうして見ると結構色々あるね……………ん？」

あちこち観察していた香織が目をつけたのは、HGガンプラの中で異彩を放つ可愛いガンプラ。

「…ねえハジメ君。これって…？」

「……………ああ、これは『プチッガイ』だよ」

香織が手に取ったのは可愛いクマの外見をしたガンプラ。

「プチッガイって名前で、元は水陸両用機体『アッガイ』を改造したクマ型ガンプラ『ベアッガイ』のサポート用として発売されたガンプラなんだ」

ハジメはスマホでプチッガイの画像を見せると、香織の目がキラキラと輝く。

「…これ、雫ちゃんにプレゼントしたら喜んでくれるかな…」

……………それから30分。

ハジメと様々なガンプラを見て回った香織が選んだ機体は……………

「…まさか、白崎さんが『エクシア』と『ダブルオー』を選ぶなんてね」
「うん。最初にハジメ君が教えてくれた機体だから気になって手に取ったんだけど…」

香織は大事そうにエクシアとダブルオーの箱を持ち歩いており、二人は現在店内の組立コーナー『ビルドゾーン』に訪れていた。

因みに、工具類は既にハジメがレンタルしており制作の準備は万端

だったりする。

「じゃあ、開けるね…」

香織は緊張した面持ちでエクシアの箱を開け…その内部パーツに驚く。

「とりあえず説明書通りに組み立ててみようか。最初に教えたけど組み立のコツは…」

「うん! 『二度切り』、『ヤスリがけ』だね?」

「そうそう。それさえ覚えていればとりあえずいいものは完成するから」

そうやってハジメも一緒に購入した『HGCE イージスガンダム』を開封しながら一緒に組み立てる。

そして……………

数時間後。

机の上には青いスタイリッシュなガンプラ…『ガンダムエクシア』が完成していた。

「やったあ!」

苦勞して組み上げたただけあつてか、香織は楽しそうにエクシアを手取る。

「どうする白崎さん? とりあえずこのエクシアで操縦してみる?」

「え?」

キョトンとする香織に対し、ハジメは三角形の端末…『ダイバーギ

ア』を取り出した。

ダイバーギア。

GBNにログインするためのアカウントを保存する端末だが、ガン
プラバトルVRにおいてもプレイヤー用の起動端末として使える。

香織は今回、お店からレンタルしたゲストアカウントを使いログイン
することに。

「えつと……このスペースに差し込むの？」

「うん。あとは前に置いてあるVRヘッドセットをかけると自動的に
使い方を教えてくれるんだ」

横の筐体に同じように乗り込むハジメ。

二人のヘッドセットに説明が表示され、ダイバーギアに香織はエク
シア、ハジメはイージスを置くとガンプラとダイバーギアは自動的に
筐体内部に固定された状態に格納され、ガンプラの詳細データを得る
ためのスキャニング作業が行われる。

20秒ほどでスキャニングが終わり、画面に『complete』の
文字が表示されると、続けてミッションセレクト画面に移行。

「今回は白崎さんが楽しんでもらえるように、バトル無しのフリー
ミッションを選ぶ？」

「じゃあ……そうするね。えつと……この『フリーミッション・星を巡る
旅』でいいのかな」

香織がミッションを受注すると、画面が切り替わり彼女の視界はガ
ンダムお馴染みの『カタパルト』に移動していた。

「これって……」

「そう。VRガンプラバトルもこのカタパルトから自分のタイミング
で出発できるんだ」

ハジメは香織に通信して、そこで彼の服装が違うことに気が付く。

「あれ？南雲君、その服装……」

ハジメの服装は制服ではなく、赤をメインにしたパイロットスーツ
姿になっている。

「あー…このゲーム、設定いじらない限りベース機体のパイロットスーツになるんだよね…まあインパルス使うときもこの服装だから気にしてなかったけど…」

余談だがハジメが着ているのは『機動戦士ガンダムSEED』のザフト軍のパイロットスーツ（赤）で、香織が着ていたのは『機動戦士ガンダムOO』の主人公、『刹那・F・セイエイ』のパイロットスーツを女性用に作り直されたスーツだったりする。

「じゃあ改めて…南雲ハジメ！イージスガンダム、出る！」

ハジメが操縦桿を操作するとイージスはカタパルトから射出され、香織もすうつと息を吸い、操縦桿を握り…

「エクシア、白崎香織！飛びます！」

勢いよく青い戦士と共に青空へ舞い上がった…

その日の夕方。

香織はハジメと途中で別れて家路まで歩いていた。

（凄い景色だったな…）

空を飛ぶという不思議な感覚は香織にとって胸躍る体験だったと言えた。

尤も、争いごとについて苦手意識があった彼女のためにハジメがわざわざバトルのないミッションを選んだことについてはありがたさと少しばかりの申し訳なさがあった。

（…でも、不思議だな。あの時の決勝戦…）

あの時、百式・ジェットと戦うセイバーインパルスの姿を見て争いへの嫌悪感などわかず、胸に浮かんだ言葉は…

「綺麗な色……………」

いつか、あんな風に自分も一緒に飛んでみたいと香織も密かに願っていた…

「あれ？おーい、香織!!」

だが、この時香織は知らなかった…
これから先、自分が選んだこの道が…

『自分も大切な人も傷つける』などと…

「っ…光輝…君？」

第2話 進む道

香織と出会い、一緒にガンプラを買ってから二日後。

GBN内部でハジメ：ダイバーネーム『サウス』は知り合いのダイバーと共にミッションに挑んでいた。

「うああああ!!」

今回挑んでいたミッションは機動戦士ガンダムSEEDのフリーダムガンダム初戦闘エピソードを模した特別イベント『舞い降りる戦士』。

アラスカを舞台に地球連合軍、ザフト軍の両陣営を制圧して制限時間以内に味方の戦艦『アークエンジェル』を戦闘区域内から脱出させることでミッション成功となる。

因みに高評価でのクリアをすることでフリーダムガンダムなどザフト製モビルスーツ向けのカスタマイズパーツが報酬に貰えるらしいが、参加条件は『ガンダムSEEDの機体をベースにする、あるいはパーツの3割がSEED系機体のガンプラに限る』というものであった。

「このっ!!」

インパルスは本来の姿とも言える『フォースインパルスガンダム』の姿でミッションに望み、その状態からビームライフルでザフトのモビルスーツ達を撃墜。

「サウス！あんまり前に出るな！」

そう叫ぶのは、金色の大型の盾にビームガン内蔵のランスを持った騎士のような外見のガンプラ。

『ガンダムイージスナイト』

『ガンダムSEED DESTINY』の主要機体の一つであるインフィニットジャスティスガンダムのHGモデルのフレームを使い、イージスガンダムの変形ギミックなどをベースアイデアとして超防御型の機体である。

「今日はどうしたんだよ！少し熱くなりすぎだぞ！」

イージスナイトのパイロットであるダイバー『カザミ』が通信して

くる。

「…ごめん。少し暴走した」

サウスは息を吐くと、次の手に出る。

「カザミ！そろそろ敵が俺達に集中砲火するはずだ！そこを防いでくれ！」

「おうよ！ならオフエンスは任せるぞ！」

やがてインパルスとイージスナイトを狙い、今ミッションのボスとも言える敵『デュエルガンダム・アサルトシユラウド』がビームライフルを放ち、さらに背後にいた敵が一斉に射撃武器やバズーカなどを放ってくる。

「させるかよー！」

イージスナイトはその名前の通り堅牢な盾で攻撃を受け止めて…

「もらった!!」

インパルスのビームサーベルがデュエルのボディを貫き、ミッションを突破した。

「はあ…」

お店を後にするハジメは、小さなため息をつきながら帰路を歩く。
(カザミに悪いことしたな…折角フォースを休んで手伝ってもらったのに…)

思えば、今日の自分は盛大にやらかした。

他のミッションに付き合ってくれたカザミを無視して片っ端から敵を狩り、その都度彼の足を引っ張ってばかり。

何故ハジメがここまで荒れているのか…それは昨日の帰りの出来事が理由である。

香織と一緒にガンプラバトルVRを体験した翌日。

インパルスの改造を続けるべく家まで歩いてきたハジメは、なんと

家の近くで待っていた香織と鉢合わせした。

「白崎さん? どうして…?!」

声をかけたハジメは思わず驚いてしまう。

香織はなんと泣いていたのか目を腫らしていたからだ。

「な…南雲君…!」

ハジメの顔を見たたん、さらに泣き出してしまう香織。

「ええ!? ちよ、何があったの!」

さらに香織はハジメに飛び込み、彼の腕の中で泣き続けた。

そしてハジメは気が付く。

香織が持っていたのはアンテナなどがひどく破損したエクシアのガンプラだということに…

ハジメの家。

不幸中の幸いというか、両親はそれぞれ用事があった家におらず、

ハジメは自室で香織が落ち着くようにとコーヒーを淹れた。

「…で、何があったの?」

幾分か落ち着いた香織はゆっくりと語りだす。

「あのね…南雲君には言ってなかったけど…:…:エクシアを壊したのは、私の…:幼馴染なんだ」

エクシアを組んだ日の夕方。

香織は家の近くで偶然にも幼馴染の『天之河光輝』と顔を合わせた。

「香織！珍しいな、君がこの時間まで外で遊んでるなんて」

爽やかな笑顔のイケメン。

勉強もスポーツも完璧な彼だが、ある理由から香織は少しばかり警戒してしまった。

「…そ、そう…かな？ちよつと私、用事があつて遅くなつただけ…」

香織はそそくさと家に戻り、まだ組んでいなかったダブルオーの制作をしようとしたが…

「ん？香織、それは…」

光輝は気がついたのだ。

香織が大事そうに握っていた『エクシア』に…

「おい香織。それって…どうしたんだい？そんな人形なんて」

「…ちよつと、ね？たまたまこういうの売ってるお店に立ち寄って、親切な人からいろいろ教えてもらったんだ」

確かに香織のような美少女とこのエクシアのプラモデルはぱつと

見た限りミスマッチとも思えるだろう。

だが、香織にとってそんなことは関係なかった。

「香織…君にそんな『オタクの使うようなもの』は似合わないよ？もつとこう、かわいいのが…」

その言葉を聞いて、香織の中で『何か』が引つかかった。

「……………そんなの、光輝君に関係ないよ。あなたがなにを言おうと、このエクシアは私にとって宝物なんだから」

それだけ言うと、香織は家まで帰ろうと光輝を素通りする。

だが、光輝はその手を掴んだのだ。

「…離してくれないかな？」

「いや…それはできない。香織にそんなものは似合わないよ」

『オタクの使うようなもの』

『そんなもの』

ハジメと一緒に組んで、一緒に仮想空間で空を飛んで…

たった一日、数時間でも十分すぎるほどの思い出がつまったものを

『そんなもの』呼ばわりされて香織の心に黒いものが浮かぶ。

「そんなものって何!? 光輝君がどうして私の好きなものも決めるの！」

『あの時』だってそうじゃない!」

「お、落ち着け香織! 俺は君のために…」

香織は光輝の手を振り払おうとするが、光輝もしっかりと香織の手を掴んで離さず…

やがて香織の手からエクシアが離れ、アスファルトに叩きつけられる形で衝突した。

「あ……………っ！」

激突し、あちこちが破損したエクシア。

それを見たたん、香織は光輝の手を振りほどいてエクシアを拾うと走って家まで戻った。

「お、おい！香織、どこに…」

光輝が後ろから叫ぶが、香織はもう聞いていない。

家に戻り、部屋に入ると彼女の手にはボロボロになったエクシアがあつた：

その後、しばらく香織は泣き続けており落ち着く頃にはすっかり日が落ちていた。

「…やっぱり風当たり強いよなあ」

ガン普拉バトルというのは突き詰めれば『ただの遊び』。

GVR（ガン普拉バトルVR）の発達によってアニメ『ガンダムビルドファイターズトライ』のように学生のガン普拉バトル大会が開かれるようになって、まだコンテンツとしては発展途上。

聞く所によると天之河光輝は中学でもそこその成績を残すほどの剣道少年らしく、スポーツマンである彼からしたら確かにガンプラはオタクのお遊びかもしれない。

でも…それが香織からガン普拉バトルを取り上げたり否定したりする理由にはならない。

「ふーん。それでお姉さんの所に相談に来たってわけ？」

「はい…:すみませんマギーさん」

ハジメが香織を家に送り届けたあと相談に来たのはGBNで色々教えてくれたダイバー『マギー』がリアルで経営しているバー。

「いいのよ、あのサウスちゃんが女の子のことで相談があるって言うてくれたからお姉さん感激しちゃったけど」

因みにこんな口調だがマギーは長身の男性である。

『男性』である。

「でもまあ極端な話よね…:ガンプラ女子なんて今時珍しくないし、ましてやその香織ちゃんが選んだのってエクシアでしょ？女の子人気高いSEEDやダブルオーのガンプラを可愛い女の子が持ってたって何の違和感も無いとお姉さん思うんだけどね」

「まあそうなんですけどね…:僕もマギーさんもSEED機体使ってるわけですし、男女の区別なんていらなとは思うんですけど…:問題はそこじゃないんですよ」

そう。

光輝と香織は『幼馴染』である以上彼と香織の接触はそうそう避けられない。

引き離すのは難しいが、この場合できることと言ったら…:

「そうね…:ならいつそ、その少年君が文句を言えないくらいに活躍でもしてみたら？サウス君、たしかもうすぐ受験だし…:高校生になったらその香織ちゃんと一緒にGVRの大会に出て成績残せばいいのよ！」

「うーん…:それは確かに魅力的ですが…:…:実は問題がひとつありまして」

翌日の昼。

香織は親友の『八重樫雫』と一緒に昼食を食べていた。

「大丈夫、香織？まあ光輝のやらかしはキツイものがあつただろうけど…辛い時は私に言いなよ？」

「うん、ありがとう雫ちゃん…」

今日、香織は一度たりとも光輝と会話するどころか目を合わせてすらいない。

それほどまでに今回の出来事は香織にとって辛かったのだ。

すると、香織のメッセージアプリに通知が来る。

「え…南雲君？」

「南雲君って、たしか香織とガンプラ組んだって言う？」

「うん…でも、どうしたんだらう？」

香織がアプリを開くと、そこにあつたメッセージは…

『白崎さん！勉強教えてくださいお願いします!!』
のメッセージが表示されていた…

第3話 このセカイを飛んで

放課後。

香織と雫はハジメから送られた地図の場所…小さなバーまでたどり着き、緊張しながら扉を開ける。

「あら〜、いらつしや〜い！可愛い子が二人も来るなんて、もしかしてあなたがサウス…いえ、ハジメ君のお友達？」

出迎えてきたのは長身のそこそこ筋肉質なオカマ口調の男性。

初めて出会うタイプの人間に多少困惑するも、香織は頷く。

「は、はい！私、南雲君の友達の白崎香織といます！こちらは私の友達の八重樫雫ちゃんです！」

「よ、よろしくお願ひします！」

「はいよろしく！お姉さんはマジー。GBNでサウス君…いえ、ハジメ君とはフレンドなのよ。で、あなた達の事情は大体聞いてるから他の人の横槍が入らないうちのお店を用意してあげたってわけ」
後ろを見るとカウンター席にハジメが座っていた。

「ごめんね、いきなり知らないお店に連れてくるようなことになって」

「ううん。で…あのメッセージのことなんだけど…」

香織が聞くと、ハジメは説明する。

「白崎さんと…八重樫さんだっけ？二人とも進学する高校はもう決まってるんだよね？」

「うん。地元の『南陽高校』のつもりだけど…南雲君も？」

南陽高校。

この辺りでは比較的大きな高校であり、様々なスポーツに力を入れているという話もある高校。

なお、どうやらこの地区では数少ない『模型部』が存在しており、その上GVR大会でもそこそこの結果を出しているとの話。

「僕も南陽を受けるつもりなんだけど……成績面が微妙で」

「ああ……そういうこと」

二人ともハッキリとは言わないものの大体察してくれた。

本当、こういう時察してくれるのはありがたいとハジメは少しばかり思った…

「それで私たちに勉強を…？」

「うん。二人も受験とかあるから無理には言わないけど…」

ハジメの真剣な顔に、香織は質問した。

「どうして…そこまで？」

「……」

スマホの画面を見せるハジメ。

そこには、彼の目指すもの…『全国ガン普拉バトルVR大会・高校生部』についての概要が掲載されていた。

「こないだの一件もだけど…僕はもつと周りの人にちゃんと知ってほしいんだ」

「ガン普拉バトルは遊びだけど…ただ単に中途半端で遊ぶだけじゃないって。『本気のバトル』をもつともつと知って欲しいって思えたんだ」

『オタクのお遊び』なんかではなく、皆が負けたくないという気持ちで戦うもの。

その存在を知ってほしいからこそ、実力のある南陽への進学を考えていた。

「だから…力を貸してください」

そういうと、ハジメは深々と頭を下げた…

その翌日から、ハジメと香織、雫の『勉強会』がスタートすること

になる。

まず目標は来る1ヶ月後の期末テストで、まずはそこで結果を出すのが彼なりの目標でもあった。

香織達にとつて意外だったのは、ハジメは全体の成績が悪いというわけではなくむしろ理数系については香織達より数段上をいくレベルだったということ。

今のところ苦手な分野は古典や世界史が少々といったところだ。

因みに：香織は数学が、雫は英語がやや苦手でありそこをお互いに教え合いながらハジメ達の勉強会は1ヶ月にも渡り、やがて彼らにとつての結果を示す一大イベント：『期末テスト』が開催されることに。

(大丈夫：大丈夫だ。あれだけ勉強したんだから)

これまでなら特にそこそこの成績さえとればいいかと考え、さほど集中していなかったハジメ。

だが、今回は違う。

(この日のために勉強して、GBNからもGVRからも離れてたんだ…ここできちんと結果を出す！そして…)

ハジメは、テストが終わったら取り掛かろうと考えていた『課題』を

思い出し、一度気持ちを落ち着かせるため深呼吸し……………

(……………よし)

恐らくGBNのダイバー達が彼の姿を見たら、誰もが思っただろう。

(目の光が消えてる…)と

そして時は流れてテスト開始から1週間が経過し…

マギーのお店でハジメが来るのを待っている香織と雫。

因みに二人とも学校が終わり次第そそくさと帰り支度をして光輝に会う前に下校していた。

「ふむ…そうか。では二人ともまだログインに使うガンプラを持ってないんだな？」

「ええ…でも、『メイ』さんは不思議よね？まさか自分の体でGBNにログインできるなんて…」

「まあ、その代わりにコックピットの操縦ができないからこのままではGVRができないのは私の悩み所だがな」

雫達と会話をしているのは、HGガンプラと同じサイズの長い黒髪の女性。

彼女の名は『メイ』。

GBN内部で様々なデータが寄り集まってできた電子生命体『ELダイバー』であり、現実世界ではある人物達の制作したガンプラと同じボディに自身のデータを移して行動している。

クールな印象に反して赤いリボンと緑、黒を基調としたドレス姿の可愛さと美しさに雫が心を打ち抜かれ、しばらくメイに会いに来るためにこの店に出入りしていたのは秘密である。

「二人とも、テストとやらが終わったらGBNに来ないか？ガンプラ

が無くともログインは可能だし、ゲスト用アカウントを店から借りれば二人も来れるはずだ。まあ：ハ口のボディで固定されるがな」

その言葉に雫が迷うが、香織は表情が暗くなる。

「ごめんなさい、メイさん……私、やっぱりログインするのなら、あのエクシアがいいって思ってた……」

香織のエクシアはあの後ハジメに預けており、未だに帰ってきていない。

「そうか……だがハジメのことだ。恐らく——」

メイが言い切る前に扉が開き、何やら小さいケースを持ったハジメが来店した。

「噂をすれば、だな」

ハジメはテストに確かな手応えを感じ、終わってからは睡眠時間を削って『ある作業』に没頭していた。

そして……

「お待ちせ、白崎さん……これ、持ってきたよ」

ハジメは小さいケースを香織に手渡し、香織はそのケースを開くと

……

「これ………エクシア？」

そこには多少形が変わっていたものの、香織のエクシアのガンプラが入っていた。

スリムだった上半身の装甲が多少追加されてはいるものの、折れた角に補修の跡が僅かながら残っていることからこれが自分のエクシアだと香織はすぐわかったのだ。

「エクシアの強化系に『アヴァランチエクシア』ってガンプラがあつたから、それを流用してみたんだ。後で白崎さんが自由に武装とかを付け加えられるようにね」

上半身に装甲のようなものが追加され、肩に青い飛行機の翼のようなパーツが付いていたエクシアの新しい姿。

その名前はケースの内部にしっかりと刻まれていた。

『『ガンダムエクシア・フリーユージェル』………』

新しいエクシア『フリーユージェル』を手にとった香織は今まで我慢していたものが抑えられなくなり、涙を流す。

「南雲君、ありがとう………私、絶対大事にするから………」

その翌日。

GBNのロビーで誰かを待っていたハジメ……サウス。すると、誰かが走ってくる。

「サウスくん！ごめん、お待たせ!!」

走ってきたのは、修道女にも見えるライトグリーンのだいバールツ

クをした香織。

因みにダイバーネームはリアルと同じく『カオリ』だったりする。

「えっと…『カオリ』さんでいいよね？呼び方…」

「うん…あと…『シズク』ちゃんも一緒にログインしてるよ！」

香織は抱いていたピンクのハロ…ゲストアバターの姿をした雫を前に出す。

「まさか本当にハロになるなんて…でも、これはこれで面白い体験よね」

それから雑談こそしたが、サウスはカオリとシズクを連れてミツシヨンに向かうべく準備をする。

「とりあえずカオリさんは初心者だし、シズクさんはガンプラを持ってきてないから…今日はチュートリアルだね。色々わからないことがあつたら僕も同行するから、遠慮なく質問していいよ」

「うん！」

格納庫内部に転移したサウス達はそれぞれの機体に取り込み、カタパルトに乗る。

「じゃあ付いて来て…：…サウス！コアスプレnder、いきます！」

その掛け声とともに青い戦闘機『コアスプレnder』が射出。

続けてインパルスガンダムの上半身を構成する『チェストフライヤー』と下半身を構成する『レッグフライヤー』、さらにフォースシルエットが接続された『シルエットフライヤー』の三つが射出。

変形したコアスプレnderとチェストフライヤーがドッキングし、さらにレッグフライヤーも合体。

最後にシルエットフライヤーからフォースシルエットが分離し、空中で合体すると左腕のシールドが展開し、『フォースインパルスガン

ダム』が完成。

「…よし！シズクちゃん、捕まってる！」

「ええ、カオリも思いつきりね！」

頷いたカオリは操縦桿を握り、叫ぶ。

「カオリ！ガンダムエクシア・フリーユージェル、発進します！」

カタパルトから射出されたガンダムエクシア・フリーユージェル。

あれから香織がハジメ指導のもと全体のカラーリングをメタリックグリーンに塗装し、名実ともにカオリ専用機となった新たなガンダムがGBNの天空を美しく舞ったのだった…

第4話 エルドラという世界

香織が本格的にGBNを初めて数日。

彼女とハジメ、雫はTHE GANDAM BASEのカフェスペースでたわいもない会話をしていた。

だが、今日は彼らにとって重要ともいえる出来事があったのだ。

「で、ハジメ君の友達ってそろそろ着くの?」

「うん…最近まで入院とかいろいろあったから、本人は『すっかりなまった腕を取り戻す』とか言ってるよ」

ハジメはかつての友人との待ち合わせもかねて、香織達と顔を合わせるべくこの店で待ち合わせをしていた。

「ねえ…南雲君の友達って、どういう人?」

「うん…僕がGBNを始めたときから一緒にやってたんだけどね…少し前の『アルス襲撃事件』のあと、怪我をして入院しちゃって」

「どうやらようやく退院出来たらしく、今日からGBNにも本格参戦するつもりらしい。」

「……………アルス襲撃事件?」

「あー……………一応表向きにはGBNの大規模イベントって扱いなんだけど…」

数ヶ月前。

ハジメ達はマギーの誘いであるコロニーに集められ、そこでメイ達『BUILD DIVERS』が挑む『ストーリーミッション』のためのリハーサルの手相手として招待されていた。

「いや、あの時は本当に相手が可哀想だったな…うん」

何せ自分が中堅どころか足元にも及ばないと思える程の上位ダイバー達が相手だったのだ。

フォース2位の『第七機甲師団』のリーダーでもあるロンメル隊長。チャンピオンのクジヨウ・キョウヤ率いる最強フォース『アヴァロン』。

実力者ばかりで貪欲なバトルグルメのオーガがボスの『百鬼』。

そして、実力を二年でメキメキ伸ばした『BUILD DIVERS S』。

彼らを筆頭に一筋縄ではいかない精鋭が集められていたのだ。

それでもなお、『BUILD DIVERS』は40回にも及ぶチャレンジの末、見事にロータスチャレンジを突破。

そして…

「あの戦いの数日後、エルドラからアルスがハッキングをしかけてこっちの世界に来たんだ。僕達はアルスの存在も、エルドラという世界がゲームのステージじゃなくリアルの世界だってことも知ってたけど…でも当時のGBNダイバー達は単なるイベントだと思ってる戦いに加勢してくれたんだ…」

戦場を駆け巡るのは、サウスの操る『バーストインパルスガンダム』と、ハジメの親友であったダイバー『リュウ』の操る『俺式パーフェクトストライクガンダム』。

かつてGBNを震撼させた『ブレイクデカル事件』の首謀者の愛機と同型のバックパックを装備したインパルスはオールレンジ武装『ブレイドドラグーン』と小型武装『GATファンネル』を同時に飛ばし、周囲に迫る敵『エルドラウインダム』を撃破していく。

それに負けじと脚部に仕込んだビームウィップで纏めて敵『エルド

「ラアーミー」をなぎ払う俺式パーフェクトストライク。

『纏めて、消し飛ばす!』

インパルスはバックパックを砲撃型に変形させ、肩に装着していたブースターをライフル形態に変形。

バックパックとドッキングさせ、3門の銃口を持ったビームランチャーへと変形させる。

『くらえ!』

引き金が引かれると、極太のビームが10体ほどのエルドラウインダムを纏めて吹き飛ばした…

「あの後アルスはメイやヒロト…・BUILD DIVERSのエアス達によって消え、生まれ変わったって話。でも…そのすぐ後だよ。リュウが…大翔が交通事故で入院したのは」

「そこまで語ると香織と雫は暗い顔になり…

「おい、ハジメ〜!!」

突然聞こえてきた声に顔を上げる3人。

走ってきたのは活発そうな笑顔の似合う好青年。
癖のない茶髪が特徴的な青年はハジメと固い握手をする。

「えっと…南雲君？その人がもしかして…」

「うん。僕をGBNに誘ってくれた…」

「えっと、はじめまして…俺は『龍峰大翔』。ハジメの相棒やってます」

「じゃあ、龍峰君も南雲君達と同じ学校を？」

「ああ。俺も南陽でハジメとコンビ組むつもりんだけど…もしかして八重樫さんと白崎さんもガンプラバトルやるの？」

その言葉に香織は頷いてエクシア・フリーユージェルを机に置くが、雫は少しバツの悪そうな顔をする。

「実は…まだ私、ガンプラのベースが決まらなくて…今日も南雲君に相談をしようと思ったんだけどね」

そんな彼女の表情を見て、大翔は小さく手を挙げる。

「あー…なら、俺でよければベース機探すの手伝おうか？カラーリング変えるとかそういうのもよければ相談に乗るけど…」

「ほ、本当!？」

雫は『希望を見つけた!』とばかりに身を乗り出す。

「機体の色は塗装さえすれば好きな色に変更できるし、とりあえず機動力重視とか火力重視とか、極端な話気に入ったガンプラをベースにすれば大丈夫だよ」

雫と共に席を立つ大翔。

その際、大翔はハジメに対し合図を出していた。

(大翔…もしかして気づいてた?)

香織と二人つきりになって会話が極端に少なくなるハジメ。

しばし無言の空気が続いたが、ハジメは思い出したように新しいガンプラの収まったケースを取り出す。

「南雲君……これって？」

「これはね……僕の『新しいガンプラ』だよ。要所要所での換装で最適な能力を使うのがインパルスなら……」

ハジメはケースを開く。

「どんな状況においても臨機応変に対応できる万能型だね。まあまだ完成してないけど……」

ケースの中に入っていたのは、『デステイニーガンダム』のガンプラが収められていた……

ハジメと香織、雫……そして大翔。

4人が出会い、そして共に腕を磨いていき……時は流れる。

GBNの青い空の下、それぞれの機体に取り込むサウス、カオリ、シズク。そしてリュウ。

「じゃあ出発だ！今日でシズクのダイバーランクをDに引き上げて、フォースを結成するよ！サウス！コアスプレンダー、いきますー！」

コアスプレンダーが射出され、空中でフォースインパルスに合体。「なら私も気合入れるよ！カオリ！ガンダムエクシア・フリーユージェル、

発進します！」

カオリも出撃し、リュウはシズクに通信する。

「まだ慣れない？」

「…いいえ。流石に慣れてきたわ」

「…そっか。ならついてきなよ！」

操縦桿をしっかりと握ったリュウは新たな相棒の名を叫んだ。

「リュウ！ストライク mark II、いきます！」

胸部にマシンキャノンが追加され、脚部にブースター、シールドもウインダムのものに酷似した装備になったストライクガンダム。

特徴的なのは腰に装備された2門のレールカノン。

「みんな出たのね…なら、私も！」

シズクは小さく笑いながら、リュウと共に完成させた己の愛機と共に動き出す。

「シズク！フリーダム・ブレードマスター！羽ばたく！」

ブルーの部分が全てピンクになり、左右非対称のリアスカートとなったフリーダムガンダム。

シズクの手によってカスタマイズされた新たなガンプラが翼を広げ、腰に提げられた刀の鞘が黒く輝くのだった…

登場人物紹介&ガン普拉バトルVR・公式ルールの一部紹介

①南雲ハジメ（15歳） ↑序章の年齢

本作の主人公で、GBNのダイバーネームは『サウス』。

改造を施したインパルスガンダムが相棒のガンプラで、基本はソロか『ある友人』とのタッグを組んで行動。因みにフォース（GBNにおけるギルド）は結成していないが、後にカオリ達と共にフォース『ミネルヴァ』を結成。

多くの人にガン普拉バトルを知ってもらうため、香織達とともにGBN全国大会を目指すべく勉強もガン普拉バトルも磨き続けている。

使用機体

インパルスガンダム（換装形態 フォース・セイバー・バースト）
???（原型機 デステイニーガンダム）

②白崎香織（15）

本作のヒロインで、GBNのダイバーネームは『カオリ』。

自らの手で組み上げたガンダムエクシアを使っていたが、幼馴染の天之河光輝とのいざこざで破損してしまう。

その後、ハジメの手で改修され外伝作品のガンダムエクシアアヴァランチなどのパーツを流用し、香織によってメインカラーをメタリックグリーンに変更された『ガンダムエクシア・フリーユージェル』へと生まれ変わる。

自らの腕っ節の弱さを言い訳にすることなく誰かを守るために行動したハジメに半ば一目惚れに近い思いを抱き、そのまま彼と仲良くなった。

原典で争いが苦手ではあったが、お互いの想いを機体に乗せて戦うガン普拉バトルをするハジメとインパルスガンダムの姿に魅せられた少女。

使用機体

ガンダムエクシア・フリーユージェル

③八重樫雫

剣道少女で香織の幼馴染であり、一番の友達。GBNのダイバーネームは『シズク』。

凛々しい姿に後輩女子の追っかけが多いが、好きなものは可愛い動物ぬいぐるみなど香織以上に可愛いものに目がない。

GBNに香織共々参戦したものの、何を作るのか迷う日々が続いていたがハジメの友達である『龍峰大翔』の新機体と一緒に制作。

大翔が『ストライクガンダム』をベースにしたので、雫は『フリーダムガンダム』をベースに新型を完成させた。

周囲に振り回されることが多くストレスを溜め込みがちだった彼女だが、大翔と友達になってからはよく話し相手になってもらったことで幾分か心に余裕ができています。

使用機体

フリーダム・ブレードマスター

④龍峰大翔（15）

読み方は『たつみねやまと』。ハジメの友人でダイバーネームはリュウ。

ハジメと共にGBNをスタートし、かつては『ロータスチャレンジ・versionエルドラ』や『アルス襲撃事件』にも参加していた。

しかし襲撃事件から数日後に交通事故でしばらくの間GBNに参加できなくなってしまう、さらにこの一件で愛用の『俺式パーフェクトストライクガンダム』も破損。改修を余儀なくされる。

後に雫と出会い、一緒に新型の構想を考え雫のフリーダムのルールカノンを譲り受けたことで『ストライクmarkII』が完成した。

お互いの親友の恋の進展について語り合ううちに仲を深めていく
…

名前から連想して『キラ』とダイバーネームを付けようとし、ハジ

めに止められたのは良い思い出だったりする。

使用機体

俺式パーフェクトストライクガンダム（エールストライクガンダム＋砲撃装備、近接装備のミキシングビルドとのことだが、詳細は不明）
ストライクガンダムMark II（ストライクガンダムとウイングダムのミキシングに加え、腰にはフリーダムのレールカノンを装備）

ガン普拉バトルVR 公式ルール一部紹介

①学生大会は5対5のチーム戦。

勝利条件は制限時間20分以内に残ったモビルスーツの多いチームが勝ち。

また、制限時間をオーバーして同数が残った場合はお互いの代表同士でのサドンデスになる。

②各チームは試合前に大会委員に予め『戦艦』を申請可能。

『戦艦』は各チームの予備武装や換装用バックパックなどを搭載するための母艦であり、中破までのダメージを受けた機体なら戦艦内部で数分間『応急処置』を受けることである程度の修復も可能。

使用可能な戦艦は歴代ガンダムシリーズに登場した戦艦を選べる他、事前に1/1700スケールで自作した戦艦を登録することも可能。

控え選手は予め『クルー』として申請をすることでモビルスーツの搭乗をせずとも戦闘への参加は可能となる。

③選手の服装は基本的に制服だが、ガンダム作品に因んだ衣装は予め公式審判員による審査が通った場合のみ着用可能。

一定の肌の露出が多い場合や体のシルエットが目立つものは要審査。

④分離・合体機構を持つモビルスーツは基本的に一人で操縦し、1

つのモビルスーツを2人で操縦した場合は参加可能なモビルスーツは最大4体になる。

また、ビッグザムやサイコガンダムなどの大型モビルアーマーは最低3人での操縦となる。

因みにサイコミュ高機動型試験用ザクやガンダム試作3号機・デンドロビウム等は分類上モビルスーツとなり、一人乗りが可能。

⑤戦艦の搭載装備は予備のライフルやサーベルの他、ストライカーパックやGウエアなどの換装装備の他、控え選手のモビルスーツが扱う武装なども搭載可能。

ただし控え選手の武装は1つの機体につき1つだけ。

また、クルーが搭乗している場合のみ戦艦に搭載された武装を使いモビルスーツを援護することが可能。ただし、戦艦が撃墜された場合搭載している武装はその試合中全て使用不可になる。

また、一度換装や武器の交換を行った場合は換装前の装備などを再利用することは不可。

第5話 運命の前日（前編）

南雲ハジメと白崎香織。

本来の運命より早く出会えたこの二人によって、世界は大きく変わろうとしていた。

2人が出会ってから2年の月日が流れ…

6月某日。

市内のアリーナまで走る一組の夫婦がいた。

「おーい！白崎さん、こっちですよ！」

会場内部に入ると既に席についていた顔見知りの男性が声をかけてくる。

「すみません、南雲さん…仕事が急に入ったもんでして」

「いやあ、そればかりは仕方ありませんよ」

走ってきたのは白崎智一と白崎薫子。

香織の両親である。

「で、もう試合は始まったんですか？」

「いや、ちょうど今からパイロットとクルーの発表がされるとこです」

智一に答えたのはハジメの父、南雲愁。その横にはハジメの母である南雲董もいた。

そう。ここは『全国ガン普拉バトルVR選手権都大会』の決勝戦の舞台。

その決勝カードはハジメ率いる南陽高校模型部ことチーム『ビルドデステイニー』と浜ヶ丘高校模型部、チーム『ワンサイドアイズ』。

《ただいまより、第五回全国ガン普拉バトルVR選手権、都大会決勝を始めます。それでは、各チームのパイロットとクルーを発表いたします》

チーム・ビルドデステイニー

隊長 南雲ハジメ 使用機体『バーストインパルスガンダム』

副隊長 白崎香織 使用機体『ガンダムエクシア・フリーユージェル』

三番手 龍峰大翔 使用機体『ストライクMark・II』

四番手 遠藤浩介 使用機体『アビスゲートガンダム』

五番手 八重樫雫 使用機体『フリーダム・ブレードマスター』

クルー

園部優花

清水幸利

選択した戦艦

惑星強襲揚陸艦 ミネルバ（機動戦士ガンダムSEED DESTINY）

IN Y）

チーム・ワンサイドアイズ

隊長 十城紫苑 使用機体『ゼクドライ』

副隊長 矢沢敬武 使用機体『ハンブラビ』

三番手 氷川燐 使用機体『サイコミュ高機動試験用ザク』

四番手 松長新 使用機体『リック・ドム』

五番手 神栖三晴 使用機体『ケンプファー』

クルー

無し

選択した戦艦

グワジン（機動戦士ガンダム）

「相手はモノアイのモビルスーツで統一しているようすな…しかし、ゼクドライとはまた…」

感心したような口調の愁に、後ろにいた男が聞いてくる。

「南雲さん。あのゼクドライとは？ 私もそれなりにガンダムシリーズ

は嗜んでいるのですが…」

そう聞いてきたのはハジメ達のチームメイトである園部優花の父親、園部博之。

彼の横には優花の弟、園部優翔が気に入りのガンプラである『ガンダムAGE―2ダブルバレット』を握りながら今か今かと試合を楽しみにしている。

「園部さんが知らないのも無理はないです。私も実物を見たことはありませんから」

「あのゼクドライというモビルスーツ、設定上存在こそしますがこれまでメカニックデザインが明かされていない機体なんですよ。彼のガンプラは恐らく…元ネタのゼクアインをベースに自分のイメージで作り上げたスクラッチモデルだ」

基本装備はスマートガン、ビームサーベルが2つ、腕部のグレネードランチャーなどと見たが…

わざわざ設定の不明瞭な機体をスクラッチしたなら、恐らく隠し玉の一つや二つはあると愁は睨む。

(この決勝…ハジメ達はどう動くかな?)

選手控え室。

そこで各々が『ユニフォーム』に着替え終わったハジメ達は最後の準備を整える。

「えつとね…とりあえず、まさかこんなに早く決勝まで来れると思わないから、少し困惑してるってのが本音です、はい…」

お気に入りの『ザフトレッド』の軍服に袖を通したハジメが苦笑いすると、そんな彼に声をかける少女が。

「もう、ハジメ君は私達の隊長なんだからこういう時くらい格好良く決めてよ!」

ガンダム00の『フェルト・グレイス』と同様の服装をした香織がハジメの背中を押す。

「まあ、決勝戦まで来ただけでラッキー…何て言うような奴はこのチームにはいないよな？」

不敵に笑うのは、『オーブ連合首長国』の軍服を着た大翔。
「少なくとも…ここまで来たら勝ちたいと私は思ってるけど」

髪をポニーテールにくくるのは、『ラクス・クライン』のエターナル搭乗時の服装をした雫。

「そうね…私と清水は今回クルーに回るけど、ミネルバの装備は私達で何とか運用する。初心者私の支援じゃ不安かもしれないけど…」

ガンダムAGEの『ナトラ・エイナス』と同様の艦長の制服を着た優花が少しばかり自信なさげに答える。

「てか、俺をパイロットから外したんだ…南雲。ちゃんと勝って全国進むぞ」

口数は少ないながらも静かな闘志を燃やしていたのは『ゼクス・マーキス』の軍服を着た清水幸利。

「…おし！もうすぐ試合だ、気合入れようぜ！」

大きな声で自分を鼓舞するのは、『ザフトグリーン』の制服を着た遠藤浩介。

「…：…：…遠藤（君）、いたの!?!」

「いやいたよ！控え室入る前からいただろ！」

「…え？みんな本当に遠藤君に気づいてなかったの？」

自身の弱点でもある『影の薄さ』から気づかれなかった遠藤が叫び、ハジメは皆が遠藤の存在に気づいてなかったことに驚いていた…

それから10分後。

ハジメ達が入場すると声援が巻き起こり、お互いに強く頷いて会場に設置されたコックピットにパイロット達は座り込み、クルーとして参加した清水と園部は専用の特別コックピットに入り込む。

そしてそれぞれのダイバーギアをコックピット内のスキヤナーにセットすると、ガンプラを置いてスキヤニングが開始。

ハジメ達はその間にVRヘッドセットを被って仮想空間のコックピットに入り込んだ。

《今回のフィールドは宇宙。スペースコロニーがフィールドにあり、そちらでの戦闘も可能です》

アナウンスを聞いたハジメ達は操縦桿をぐつと握り…

「南雲ハジメ！バーストインパルスガンダム！」

「白崎香織！ガンダムエクシア・フリーユージェル！」

「龍峰大翔！ストライクMark・II！」

「八重樫雫！フリーダム・ブレードマスター！」

「遠藤浩介！アビスゲートガンダム！」

「十城紫苑！ゼクドライ！」

「矢沢敬武！ハンブラビ！」

「氷川燐！高速機動型ザク！」

「松長新！リック・ドム！」

「神栖三晴！ケンプファー！」

「チーム・ビルドデステイニー！運命を切り開く！」

「チーム・ワンサイドアイズ！ターゲツトを蹂躪する！」

ミネルバからビルドデステイニー、グワジンからワンサイドアイズの機体が出撃。

ついに決勝戦が幕を開けた。

「もう、『龍太郎』君がいつまでも自主トレばっかしてるから遅くなつたじゃん！」

「悪いって『鈴』！でもまだ始まったばかりなんだし、大丈夫だろ！」

GVR会場まで数十分前の白崎夫妻のように走っているのは雫と香織の幼馴染の一人でもある巨体の少年、『坂上龍太郎』と、香織達の

友達であるツインテールの少女『谷口鈴』。

香織達から決勝戦をやるという誘いを受けて観戦に行こうとしていた鈴達だったが、空手部としての活躍がメインであった龍太郎が自主トレに熱を入れすぎて遅刻をしてしまうというミスをやらかしていたのだ。

「あー…よかった、まだどっちも撃墜されては……………ん？」

鈴と龍太郎が会場に入ると、そこでは…

「んんっ！やっぱり、この機体…速い！」

（トランザムは…いや、まだこのタイミングで使うべきじゃない！）

エクシアフリーユージェルは現在、宇宙空間でハンブラビと交戦を繰り返している。

「はっ…可愛い顔してやるじゃねえか…よっ！」

エクシアはメイン武器の一つでもある『GNショートブレイド』で斬りかかるが、ハンブラビは腕部クローで受け止め、はじかれてしまう。

「お返しだよ！」

矢沢が吠えると、ハンブラビは高圧電流を流すワイヤー『海へビ』でエクシアを捕縛。

モビルアーマーの姿に変形すると、電流を流しながら移動を開始してエクシアを周囲のデブリに叩きつけていく。

「きやあああ!!」

「香織!…くっ!!邪魔を…するなあ!!」

雫のフリーダム・ブレードマスターは専用の刀『ムラクモ』を引き抜いて戦っていたケンプファーを攻撃し、腰に提げていた『ルプス・ビームライフル改』でケンプファーの足を破壊。

それでもなお追いかけようとするケンプファーと援護に来たリツク・ドムだが…

「ナイトハルト、撃てえ!!」

少女の叫び声が聞こえると、ミサイルが5発ケンプファー達に向かってくる。

「ナイス、優花!」

「とりあえず時間は稼ぐわ! 雫は香織の方をお願い!」

ケンプファー達を攻撃したのは園部達がクルーとして操縦している『ミネルバ』だった。

「ちっ! 船使ってたんだっとな、そういえば!」

邪魔と感じたのか、リック・ドムがバズーカ砲『ジャイアントバズ』を放つも、ミネルバは『40mmCIWS』で迎撃し、砲弾を打ち落とす。

「悪いな…ぶっ壊そうとするなら、抵抗くらいするってもんだ!」

クルー用コックピットで、清水は不敵に笑った。

各々がそれぞれの戦いをする中、苦戦を強いられていたのはハジメと大翔の二人。

「このっ!」

ストライクMark IIはビームライフルを放つも、高速機動型ザクは下半身そのものがバーニアになっていて利点を生かした超加速でビームライフルをかわしていく。

「あの赤い彗星、シヤア・アズナブルも言ってたろ…『当たらなければどうということはない』ってな!」

高速機動型ザクは唯一の武装である有線式五連装メガ粒子砲を使い、ストライクMark IIのビームライフルを破壊。

一瞬無防備になったストライクに強烈なタックルをする。

「いけーブレイドドラグーン！GATファンネル！」

バーストインパルスから大型のドラグーンが2機、小型ファンネルが2機分離してゼクドライを襲うが…

「…なら、俺もこいつでいく」

インコムコンテナがバックパックから出てきて、出現したインコムとドラグーンが火花を散らす。

「あの機体…それに、これまでのワンサイドアイズの戦闘を振り返ると…！」

インパルスはスタビライザーに装着していたミサイルコンテナから6発のミサイルを放ち、さらに肩に装着していた大型ビームライフルを二つとも外し、連射する。

だが…

「いいっ!?!」

ゼクドライは両肩の6連ミサイルポッドと足のスラスターに内蔵された3連ミサイルをお返しにばかりと放ってくる。

(まずい…こつちと向こうじゃ武装の数も火力も桁違いすぎる！換装するか？いや…いつものようにシルエットごとに武装全交換じゃ多分通用しない…)

ミサイルの雨をくぐり抜けながら思考を巡らせるハジメ。

(これまでのデータを参照する限り、この機体は他の換装パターンもあるはずだ。それもおそらくはヒロトのコアガンダムのように自由度の高い換装が…)

素早く他のメンバーの状況を確認するため味方機体と敵機体の位置情報を調べるハジメ。

(香織さんはハンブラビと交戦して八重樫さんが助けに…大翔はザクを相手してる……園部さんと清水君がリック・ドムとケンプファアを相手してるから……ん?)

その中で『あること』に気がついたハジメは、すぐに味方の一人に秘匿通信を行う。

『ねえ、今って……うん。これから僕が合図をする。そしたら…

そこから僕たちの反撃だ!!』

第6話 運命の前日（中編）

ハンブラビの激しい動きに振り回され続けていた香織のエクシア・フリーゲルはどうかハンブラビの海へビから逃れようと、肩に手を伸ばし…

「香織!!」

叫び声が聞こえ、雫のフリーダム・ブレードマスターがムラクモでハンブラビに斬りかかってきた。

「ちいっ！もうあいつらから抜け出しやがったか！」

モバイルスーツ形態に戻ったハンブラビは武装であるビームサーベルを2本使って攻撃するが、フリーダムもムラクモの他に備えていたビームサーベルを引き抜いてこれに対抗。

「香織を離しなさい…じゃなきや、ここで墜とす！」

「いいねえ、その鬼気迫る雰囲気！やっぱガンプラバトルはこうじゃなくつつちなあ!!」

矢沢は嬉しそうな顔をしながら攻撃を行い、雫のフリーダムはまるで獣のようなハンブラビの攻撃を流すことに手一杯であった…

「ああ…香織、大丈夫なのか…？」

客席では不安を隠しきれない智一がそわそわしていたが、愁がそれをやんわりと諫める。

「落ち着いてください、白崎さん…香織ちゃんのエクシアなら、まだ戦えます」

愁は冷静にハジメ達の状況を観察している中で、『ある事』に気がついていた。

「……………そういえば、ハジメ達はどのようにして『4人』で戦っているんだ？」

ゼクドライの猛攻をしのいでいたインパルスだが、相手はビームスマートガンを腕部に接続。

(っ！まずい、メガランチャーだ！)

GATファンネルを使って目くらましを行い、一気に離れると同時にメガランチャーからビームが放たれ、インパルスがさつきまで立っていたデブリを消し飛ばしていた。

「あの威力…武装の総合的火力じゃバーストでも敵わないけど、メガ粒子砲なら！」

反撃に出るため、ハジメはミネルバに向けて通信する。

「園部さん、清水君！どっちでもいい、ジャミング弾を僕達に向けて撃って！」

「ジャミング!?でも、私はこいつらの相手で…！」

ケンプフアールとリック・ドムを相手に奮闘していた優花が叫ぶが、清水は自身のコンソールを操作する。

「園部！ミサイル系の操作を5秒だけ俺にくれ！俺がジャミングを使う！」

「わかった！キッチリ5秒で決めなさいよ！」

清水のモニターにミネルバのミサイル装備のコントローल権が一時的に譲渡され、彼はインパルスとゼクドライの中間目掛けてジャミングを放つ。

「受け取れ、南雲!!」

「…あれは、ミネルバのジャミング弾？」

飛んできたミサイルが爆発すると、レーダーの精度が目に見えて低下する。

「使えるのは1分…だったら、その間に」

ハジメはバーストインパルスの砲撃とは異なるもう一つの切り札を使う。

「いくよ……『ナイトロシステム』、起動!!」

ナイトロシステム。

正式名称『n | i | t | r | o (nEWTIPE iNJECTI
ON tRACE rEFOMED oLDTYPE)』。

ニュータイプ能力を持たない一般兵士に対して擬似的なニュータイプ能力を付加するサイコミュシシステムの一種であり、ニュータイプの適正を持たないパイロットですら本物のニュータイプと互角以上の戦闘ができるようになり、さらにはファンネルなどのニュータイプ専用武器も運用できるようになる。

本来は使用者の精神に多大な負荷をかける代物だが、ガンプラバトルにおいてはフィールドの空間解析情報をパイロットにフィードバックし、反応時間を短縮させる能力へと変わっている。

ハジメはこのナイトロシステムを使い、ジャミングとデブリの飛び散る空間の中で正確にゼクトドライの姿を捉えながら移動。

(今だ、砲撃形態に移行!)

バックパックを砲撃形態に変形させ、空中で正確に狙いをつける。

「これで……!」

接続されたライフルと機体から放たれたメガ粒子砲がゼクトドライのミサイルポッド内蔵スラスタを破壊し、爆発を起こした。

一方、高機動型ザクと戦闘を行っていたストライクMark・IIは

…

「くっ！ハアアアアッ！」

右手のビームサーベルと左腕のシールドでメガ粒子砲の直撃を何とか避けながらザクと戦っていた。

(フェイズシフト装甲もビーム主体のこのモビルスーツ相手じゃ不利だ…エネルギーの問題もある。一瞬でも隙を作って、そこを一気に畳み掛けるしかない！)

ストライクは腰のレールカノンを展開し、ザクのサイコミュ兵器を落とそうと攻撃をするがよけられる。

「なら、ついてきな！」

エールストライカーからバーニアを吹かし、コロニー付近まで加速。

ザクもまたそれを追いかけていく。

(まだまだ…あと少し………)

ザクとの距離。コロニーとの距離。

それらを慎重に見極めたストライクは…

「今だ!!」

縦に旋回し、追いかけてきたザクの背後を取る。

「悪いな！場所を変えるぞー！」

シールドをザクに突き立て、内部に仕込まれていた2発のミサイルを発射。

左腕ごとシールドが大破するが、ストライクはそのままザクにタツクルをして、コロニー内部へと落ちていく。

「まさか、シールドごと吹き飛ばしてサイコミュ兵器を封じるとはー！」「はっ！さっきのタツクルのお返しだよ!!」

コロニーの重力に逆らおうとバーニアを使い動こうとするザクだが、ストライクはレールカノンを使いバーニアを破壊。

「だったら、お前だけでも倒してやるー！」

分離をさせず、直接腕に繋いだ状態のメガ粒子砲が10発放たれるがストライクは意に介することなくまっすぐ突撃していく。

エールストライカーが壊され、左肩が破壊され、レールカノンは使え物にならず、ビームサーベルも砕けてしまう。

それでもなお、ストライクは頭部バルカンのイーゲルシュテルンと胸部マシンキャノンでメガ粒子砲に攻撃を仕掛け…

「奥の手は、最後の最後まで取っておくものだよー！」

ウインダムと同様の脚部に増設されたスラスタから、元のストライクがよく使っていた『対装甲コンバットナイフ アーマーシュナイダー』を取り出して…

アーマーシュナイダーがザクのコックピットに突き刺さり、ストライク諸共大爆発を起こした。

『サイコミュ高機動試験用ザク、ストライクMark II。撃墜』

「なっ?! 燐さんが負けた!?!」

突然双方に告げられた撃墜メッセージに、リック・ドムのパイロットである松長とケンプファアのパイロットである神栖が驚いた。

「だが、龍峰を墜としたんだ。それで十bー」

すると、突然ケンプファアが真つ二つにされて爆散。

「…え?」

『ケンプファア 撃墜』

突如破壊されたケンプファアに驚きを隠せない松長。

だが、気が付くとジャイアントバズに何かが被弾して爆発。

「ど、どこにいる!?!」

周囲を警戒していると…

「覚えておくがいい! 我は深淵の闇より現れし、己が宿命のままにキサマらを屠りしもの!」

漆黒のモビルスーツが現れ、その鋭い剣を突き刺した。

『リック・ドム 撃墜』

「我が名は、コウスケ・E・アビスゲート! そして我が愛機…『アビスゲートガンダム』也!!」

荒々しい戦いをするハンブラビに苦戦を強いられるフリーダム・ブ

レードマスター。

だが…

「ハハハっ！まだまだ…っ!?」

ハンブラビの背部に設置されていたビームライフルが突如暴発し、ダメージを受ける。

振り返ると、そこには傷だらけながらも海へビのダメージから再起したエクシア・フリーユージェルの姿があった。

「どうやって…！そうか、ビームダガー…！」

エクシアは自身の装備でもある小型ビームサーベル『GNビームダガー』で海へビを断ち、脱出を果たしていた。

「雲ちゃん！」

「香織…！いつは私が引き受けるから、今のうちに南雲君のほうに…！」

雲はミネルバに通信を繋ぐ。

「優花！格納武器から貴女の『ビームサーベル』を！」

「オツケー！私の武器、受け取って！」

ミネルバのカタパルトからコンテナが射出され、2本のビームサーベルがコンテナから発射。

それをフリーダムが掴むと、長い刃渡りのサーベルが形成される。

「これで決着をつける！」

「ふん…かかってこいよお!!」

フリーダムのビームサーベルとハンブラビのビームサーベルがぶつかり、火花が散りながらもお互い一步も譲ることがない。

「はあっ…この『浜ヶ丘のヤザン』相手にここまで戦えるとはやるなあ

!!

「お褒めに預かって光荣…ねっ!」

ハイマツトモードに移行したフリーダムにもくらくつくスピードに雫は改めてこの強敵に対する闘志を燃やす。

「せやああ!!」

フリーダムの右手ビームサーベルがハンブラビの頭部を破壊するが、同時にハンブラビのビームサーベルがフリーダムの左足を切断。「くっ…それでも!」

ビームサーベルを相手に突き刺し、フリーダムは翼に隠していた武装…『M100バラエーナプラズマ収束ビーム砲』を展開し…

そこから発せられた『ビーム刃』がハンブラビを貫いた。

「なっ…:…:…:そんな隠し玉が…」

「言つたでしょ…:このフリーダムは『ブレードマスター』だつて…」

『ハンブラビ 機能停止』

コックピット破壊によつて動かなくなったハンブラビだが、雫はフリーダムのダメージを確認する。

「…あああ。流石に完成してないバラエーナ使うところなっちゃうか」

脚部破損だけでなく、もはや内部のエネルギーを受け止めるだけの力も残っていないフリーダム。

「香織…:しっかりやりなさいよ」

『フリーダム・ブレードマスター 機能停止』

ミサイルポッドを破壊されたゼクドライは膨大なミノフスキー粒子を散布したことでインパルスの追跡を逃れ、母艦であるグワジンで

換装を行っていた。

(…まさかヤザンまで負けるとはな…だが、向こうもダメージは大きい)

修復までの時間稼ぎのため、紫苑はグワジンの武装である『155mm連装機関砲』と『連装メガ粒子砲』を使ってインパルスを攻撃し続けていた。

「…よし。ゼクドライ、再出撃する！」

肩に大型スラスタ、左腕のハードポイントにアンカーグレイブを装備。

さらにバックパックにクレイ・バズーカをマウントしたウエポックを持つた姿となってインパルスの前に現れる。

「どうやら…向こうも換装をしてきたみたいだね」

インパルスも脚部ミサイルポッドはそのままだが、バックパックはセイバーインパルスのものへと変更されており、ゼクドライ目掛けて切り込む。

「はああ!!」

シロガネを振り下ろすインパルスだが、ゼクドライはビームサーベルで応戦。

「うちのメンバー全滅させるなんて、やっぱり決勝の相手は一味違うねえ！」

「まあね！でも…僕の仲間をむしろここからだよ！」

すると、背後から襲ってくる黒い影に隠し腕のビームサーベルを使って応戦したゼクドライ。

背後にいつの間にかいたのは、『黒いガンダム』。

アビスガンダムの頭部と肩に、ボディはブリッツガンダム。

両手足はガンダムAGE-1・スパローのGウエアになっており、全身が黒で統一されたモビルスーツ。

「よくぞ気がついたな！我が存在に気づくとは…貴様、褒めてつかわそう！」

遠藤が操る『アビスゲートガンダム』は初見で自分の存在が気づかれた事に驚くが、ハジメの援護にまわる。

「なるほどなあ！二人倒されたのは、お前の仕業ってことか！」

正直、浜ヶ丘にとって遠藤浩介という存在はノーマークだった。

何故なら、これまでの戦いのビデオにおいて彼のアビスゲートガンダムがハッキリ映ったことはほぼ無かったためにデータが取れなかったのだ。

その上、ハジメ達のように中心で大暴れするようなことも無かったため彼らは『遠藤浩介』という存在そのものを忘れていたと言える。

しかし…遠藤の戦績自体はハジメ達の中でも目立たないながらもトップクラス。

誰も気がつかないうちに相手の戦艦を破壊して補給ができないようにしたり、敵陣営のモビルスーツをいつの間にか暗殺していたりと決して目立つ活躍はないが、影で彼らをいつも支えていたのは紛れもなく遠藤なのである。

「遠藤君！君はミラージュコロイドの攪乱モードを使いながらゼクドライを牽制！その間に僕がケリをつける！」

アビスゲートがステルス能力『ミラージュコロイド』を応用して自身の輪郭をぶれさせながら攻撃し、インパルスもビームライフルで少しずつダメージを与えようと試みる。

しかし…

「…そこおー！」

シングルブレイドを使ったアビスゲートが攻撃を当てようとする一瞬の隙を突いて、アビスゲートを直接掴んで動きを封じるゼクドレイ。

「ぐっ!?!」

「幾ら姿が見えづらくても…実体さえあれば掴めるってな!」

投げつけられたアビスゲートがインパルスと衝突し、怯むハジメと遠藤。

ビームサーベルを突き刺そうと接近してくるゼクドライだが…

「ハアアアアアア!!」

その瞬間、エクシア・フリーユージェルがインパルスを庇う形で間に入り込み、間一髪のところまで救われた。

「香織さん!」

「ハジメ…君……………」

右肩のコードを斬られたものの、今だ健在なエクシア。

香織とハジメは通信越しにお互い頷き合う。

「遠藤君、あとは私達に!」

「ここからは…僕達が決める!」

アビスゲートガンダムはシングルブレードを投擲すると、ボロボロになった状態でミネルバに戻る。

「あとは…任せろぞ！」

ミノフスキー粒子が濃くなり、レーダーがマトモに機能しなくなったこの空間。

その中で激しく戦い続けていたのは換装を終えたフォースインプルス、エクシア・フリーユージェル、ゼクトドライの3機。

その中でレーザー通信を使い、インパルスはミネルバと連絡を取る。

「向こうは僕たちを潰すはずだ！だからこの作戦で終わらせるよ！」

ハジメがミネルバに頼んだのは、『煙幕弾』と『とっておきの格納武器』。

「清水…武装はアンタが飛ばして。元々、アンタの武器なんだし」

「わーつてるよ。煙幕のタイミング、しくじんなよ…園部」

隠し腕の攻撃に対抗するため、GNビームダガーで防ぐエクシア。

マシンキャノンでバズーカを破壊し、距離を取るインパルス。

インパルスが距離を取ると、ミネルバから煙幕弾が発射され、同時に香織も叫ぶ。

「エクシア！GN粒子、最大散布!!」

エクシアの太陽炉がブースト状態になり、香織もまた最後の切り札

を切る。

「行こう、エクシア……………」

『トランザム』っ!!』

香織の言葉でエクシアの切り札が作動し、その機体は真紅の光を帯びた。

『トランザムシステム』

エクシア達の持つ太陽炉（GNドライヴ）に組み込まれているシステムであり、ガンダムの内部に蓄積されていた高濃度圧縮粒子を全面開放することにより機体が赤く発光し、一定時間ガンダムのスペックを三倍まで引き上げられる。

ただし、大量のGN粒子を消費するため使用後は粒子の再充填まで機体性能が大幅に落ちるといふ弱点もある。

そのため、この能力は香織にとってまさに賭け時に使うものだった。

「セヤアアアア！」

右手のGNソード、左手のGNビームサーベルを駆使してゼクドレイに攻撃をするエクシア。

煙幕弾が破裂すると同時に煙幕の圏内からエクシアは離脱した。

「煙幕…ミノフスキー粒子とGN粒子をばら撒かれたら、流石のこつちも探知ができないか…」

紫苑は下手に動けば煙の動きからハジメ達に捕捉されると考え、周囲を警戒しながらも大きく動こうとはしなかった。

(だが、向こうもこっちが見えてるわけじゃない…だったら、煙幕が晴れしだい行動を……………)

その時、煙幕を突き破って極太のビームがゼクドライの下半身を破壊。

「なっ!?!」

(馬鹿な…インパルスの武装にあんな広範囲を焼ける大火力のビーム兵器は無い……………近接型のエクシアも…だったら…?)

煙幕が晴れていく中で紫苑がみたもの。

それは…黒い『バスターライフル』を持ったフォースインパルスの姿。

「そう…か。清水幸利の…」

清水の使っていたモビルスーツの名前は『クロウガンダム』

TV版ウイングガンダムをカラスのようなカラーリングにし、武装の追加や細かな改修を施したのが特徴のガンプラで、当然ながらウイングガンダムの主装備もそのまま運用が可能だった。

「これで…」

「僕達の…勝ちだ！」

インパルスはビームサーベルを背部のフォースシルエットから引き抜いて、エクシアはGNソードを構えて共に加速し……

緑色の天使と青い騎士。

天空から加速した2人の影が×字にゼクドライを切り裂いた。

「いつかまた…戦おう、ビルドデステイニー!!」

『ゼクドライ 撃墜』

『勝利チーム』

南陽高校模型部 『ビルドデステイニー』

この瞬間、ハジメ達の悲願が達成されることとなった…

第7話 運命の前日（後編）

南陽高校模型部の優勝が決まった夜。

優花の実家でもある洋食屋『ウイステリア』でハジメ達と南雲家、白崎家、八重樫家と遠藤の妹である真実、そして模型部顧問の『三木宗一（通称、ロックオン先生）』が集まっていた。

「え、では！我が南陽高校模型部、『ビルドデステイニー』の都大会優勝を祝って：乾杯！」

『乾杯!!』

宗一の合図とともにグラスの音が鳴る。

「しかし、まさかお前たちが優勝するとはな：俺もたまげたよ」

宗一がドリンク片手に頷く。

結成からわずか一年で都大会を制覇するなど、去年の彼らからしたら予想もできなかったであろうことは想像に難くない。

「ロックオン先生だけじゃないです：テイエリア先輩やアレルヤ先輩達がちよくちよく様子見に来てくれましたし：」

卒業した翌日からトレーニングに付き合ってくれた二人の先輩を思い出し、ハジメ達も笑う。

「でも、ソーマ先輩ちよつと拗ねてたっていうか：あんまり変わり映えしないって言ってたよ？アレルヤ先輩がしよつちゆう部室に寄るからって」

同性としてよくお世話になっていた先輩のことを思い出しながら渡されたりんごジュースを飲む香織。

思えば、入学してからの一年は様々な出来事があった。

雫の入部にまつわる剣道部との大騒動から始まり、そのことで雫と親しかったハジメと大翔は雫の義妹を名乗る追っかけ集団『ソウルシスターズ』から狙われ：

「うう…あの時は本当にすみません…」

申し訳なさそうにハジメ達に小声で謝るのは真実。

彼女もまた当時のソウルシスターズの副リーダーを努めており、兄と交友関係のあったハジメ達の行動パターンを逐一報告していた。

「ああ…もう大丈夫だつて。雫もあれで話を終わりにしたんだし…な？」

「うん…でも、南雲君の新型はあれで壊れちゃったわけだし、正直あの一件はね…」

複雑そうに話す雫。

かつてソウルシスターズに襲われた際、ハジメの大会用に調整していた新型機が壊れてしまい、結局決勝戦にも間に合わなかったのだ。

「でも9割方完成してるから、全国大会までには問題なく使えるよ！ほら！」

そう言つてハジメが取り出したのは…

「これが…ハジメ君の全国大会用のガンプラ」

「ふむ…南雲君のベースはデステイニーガンダムかい？」

智一はハジメの新しいガンプラを観察する。

「はい。デステイニーガンダムの弱点を改修して、腰部に大剣アロンダイトとビームライフルを装備できるようにしたんですよ」

デステイニーの腰部にはかつて背負っていたはずの大剣『アロンダイト』が納刀されたような形になり、さらに背部にはメイン武器の『高エネルギー長射程ビーム砲』の他、ガンダムXの代名詞『サテライトキャノン』が装備されていた。

「さ、サテライトキャノン!?でも、リフレクターは？それに、サテライトではバトルステージに月が出ていないと使用できないんじゃない？」

機動新世紀ガンダムXの大ファンでもあった智一がくらいつくが、ハジメは一個ずつ説明する。

「リフレクターに相当するパーツは、デステイニーの翼ですよ。内部にリフレクターを組み込んでいるんです」

翼を開くと、本来赤かったはずのデステイニーの翼が金色に染まっている。

「それと、マイクロウェーブが受け取れないことを想定してデステイニーのアンチビームシールドに、『アブソーブシステム』を導入しました。これさえあれば、敵のビームを吸収することでわずかではありませんが、サテライトキャノンに出力を回せます。それに…威力を調整すれば機体の膨大なエネルギーをサテライトキャノンとビーム砲に回すことができますから」

サテライトキャノンは破壊力に優れる代わりにチャージに隙がある、威力が強すぎて味方を巻き込みかねないという弱点も抱えていた。

「なるほど…ビーム砲と合わせてあえて威力を弱めているということか…」

「はい。リミッターを解除することで元のビーム砲もサテライトキャノン並の出力になりますし、擬似的なツインサテライトキャノンもできるってわけです」

その上、デステイニーの課題でもあった『手を使わずに使用できる武装』の問題もこれでほぼ解決できる。

「この機体の名前は…『デステイニーガンダム・リザレクション』。かつて敗北に沈んだデステイニーと、僕達が全国大会の強豪たちに今度こそ勝ちたいという願いを込めた名前です」

いずれぶつかる、全国という厚い壁。

それを乗り越えるべく作られた新しい力は、静かに輝いていた。

その後、ハジメ達は夜遅くなったということで祝勝会は解散。

帰りにハジメ達に手を振っていたのはちょうど誕生日を迎えていた優翔だった。

その手にはハジメ達からのプレゼントでもある二つのガンプラの

箱が：

ひとつは、ハジメ達模型部からの贈り物である『マスターグレード
ガンダムAGE―2 ダークハウンド』。

そして：激レアプラモである『ガンダムAGE―2 特務隊仕様』
のHGモデル。

その箱には、優翔の憧れでもある伝説のGBN最強ダイバーからの
メッセージカードが入っていた。

『これから先、ガンプラを愛する少年へ。そのまっすぐな思いをいつ
か僕に届けてくれ。君の大好きなAGE―2で、いつか僕とバトルを
しよう！』

クジヨウ・キョウヤ』

夜。インパルスとデステイニー・リザレクションの手入れをしてい
たハジメは、机の上に立てかけていた写真をふと見る。

そこには今年の春、部員全員で撮影したときの写真があった。

(…ロックオン先生、遠藤君、清水君、園部さん、八重樫さん、大翔：
それに…………)

「香織…さん」

多少照れくさかったが、香織はハジメと手をつないだ状態で写真に
写っている。

(…いつまでも曖昧にしたほうが、きっと良くない)

香織と一緒にガンプラバトルに取り組んできたこの2年で、ハジメ
は自分が香織に恋していると自覚はしていた。

情けない姿を見せてしまったことが始まりだったが、そこから偶然にも繋がっていった『道』。

もちろん、いいことばかりではない。

高校に入ってから、僻みや妬みで何度傷つけられたかはわからないし、さらにはハジメを『オタク』として敵視している香織の『幼馴染』の存在もある。

それらのせいで何度も傷を負い、一度は香織との縁も切れていたかもしれない事件もあった。

それでも、ハジメは何があっても退くことは無かった。

(ようやくここまで来た…でも、大変なのはむしろここから…)

最初の目標だった全国大会への出場。それを果たした今、ハジメは自身の想いを香織に告げることだとして出来ると思えた。

「…よし！明日の部活前に、きっちり伝えよう………」

覚悟を決めたハジメはインパルスとデステイニーをそれぞれケースにしまい込み、作業用の補修パーツや工具などを全て纏めるとベツドに入る。

この時、ハジメは予想していなかった。

否、ハジメだけでなく他の誰も予想なんて出来るはずがなかったのだ。

『自分達の日常が、今日まで』だということなど………

「我らが主より神託を授かった」

白いローブを着込んだ者達が密集する空間で、一人の老人が低い声で告げる。

「備えよ…『勇者』はまもなく現れる」

第1章 異界の機人

第8話 異世界の扉

地球ほど発達した文明を持たない世界。
そこで様々な人型兵器が凌ぎを削っていた。

砲身を背負ったモビルスーツ『ザク・キャノン』の砲撃を避けているのは漆黒のボディを持った『ガイアガンダム』。

ガイアは素早く四足歩行の『モビルアーマー形態』に変形すると、背部のビームブレイドでザク・キャノンを両断。

迫り来る『ティエレン地上型』の軍勢に挑むのは、鳥に似た姿のモビルスーツ『キュベレイ』。

ティエレンを撃墜させるべく、遠隔誘導兵器『ファンネル』を10基展開すると、次々とファンネルがティエレンを破壊していく。

石造りの町で続く激しい激闘。

やがて崩壊した町に降り立ったのは…

白いボディに赤く光る内部フレームが露出した『ユニコーンガンダム』と、他のモビルスーツを超える巨体の『Ξガンダム』がぶつかり…

多くのモビルスーツが互いを壊し合う中、中央に降り立った白いガンダムは…

『蝶のような美しい光の翼』を広げていった…

月曜日。

大抵の人は憂鬱な気分を抱えながら学校や職場に向かうと言われているこの日だが、ハジメは少し早起きして気合を入れるように髪型

などの乱れがないか確認していた。

「…よし」

「は、ハジメが身だしなみを気にしているだ?!」

「ちよつと2人とも普段の僕をどう見ているのかその一言だけで嫌と
いうほど伝わったよ」

大分失礼なことを言う愁と董に対して冷静にツツコミを入れるハジメ。

「まあわかってるよ。ようやく香織ちゃんに告白するんだろ?」

「…うん。とりあえず部活もあるから、いつもの時間には帰ってくるつもり」

カバンに筆記用具をつめ、インパルスとデステイニーをそれぞれのケースに入れたハジメは『部活用』の予備の小さいカバンに入れて家を出る。

ハジメの移動手段は大翔と一緒に選んだバイク通学であり、ヘルメットにはこだわりなのか小さくザフトのエンブレムが入っている。

約10分の道を走って学校の駐輪スペースに停めたハジメ。

直後、同じデザインのバイクが横に停車し、オーブのマークが入ったヘルメットを外した大翔が挨拶をする。

「おはようさん、ハジメ」

「大翔もおはよう。行こうか」

部室が遠いため朝に荷物を置くことはできず、ハジメと大翔は二つのカバンを持ちながら教室に向かう。

「おはよう、ハジメ君!」

「香織さん!おはよう」

校舎に入るとちよつと登校してきた香織がハジメに声をかけてきた。

「雫も一緒か」

「ええ。今日は珍しく香織のほうが朝早くてね…」

…
雫と大翔も朝の会話をしながら教室に向かい、教室の扉を開けるが

(…ああ、またか)

教室の男子生徒の大半から舌打ちや睨みを受け、ハジメは内心小さくため息をつく。

その対象はハジメだけでなく大翔にも向けられており、慣れた顔でスルーした。

香織達も不安な顔になるものの、本人達が『何言っても気にすることない』と言い切っているため、彼女達もそれほど強く出られないのだ。

「やあ、香織、雫。おはよう、また二人の面倒を見ているのか？」

4人が教室に入るなり、一人の男子が香織と雫に『だけ』挨拶をする。

「…おはよう」

「おはよう、天之河君」

一瞬無表情になる雫と、愛想笑いをしながら挨拶をする香織。

そう…話しかけてきた人物は『天之河光輝』。

180センチほどある高身長に完璧とも言える整った顔。そして剣道部の実力者ということもあってか、細身ながら引き締まった体躯。

まさに容姿端麗、文武両道を地で行く完璧超人だった。

だが…

「龍太郎から聞いたけど、まだ模型部なんかで活動していたのか。雫：そろそろ剣道部にちゃんと顔を出してくれないか？ずっとここまですべて続けていたのに、高校に入ってからプラモデルなんかに手を出さなくて雫らしくもない」

雫を剣道部員として扱っているように語っているが、彼女は別に掛け持ちでもなんでもなく、所属は模型部のみである。

「それに香織も：前のように俺達の試合を応援に来てくれないか？もしマネージャーとかになりたいのなら、キチンと俺が顧問の先生に掛け合う。そうだ、そっちのほうが絶対楽しいに決まっている」

子供を諭すかのように語っているが、それは要するに模型部を辞めさせて二人を剣道部に：的確に表すなら自分の傍に置いておきたいという願望がにじみ出ている。

「悪いけど：私が何をしようが、あなたが決めていいことじゃないと思うけど？少なくとも模型部は昨日のGVR大会で全国に進んだわけだし、香織はその模型部の副部長よ。剣道部に行くつもりはないし、高校で剣道はやらないって、去年しっかり伝えたはずよね？」

光輝は去年、雫が入学した頃からずっと雫を剣道部に勧誘しているが、彼女はその都度それを拒否し続けていた。

「やれやれ：雫も香織も優しいのはわかっていたけど、それにつけてんで二人に興味のないガンプラバトルを押し付けるのはどうなんだ？南雲、龍峰」

雫の頑なな対応を今度はハジメ達に気を遣ったものと思ひ込んだ光輝の矛先はハジメと大翔に向けられる。

「いや：僕達一度も強制したことないよ。それに、2人のやりたいことは本人が決めるべきだよ。間違っても、僕達や君が勝手に決めていいものじゃない」

「ああ：てか、お前一度でも雫達のバトル見たことあるの？あいつらの『本気』、見たことないのに難癖つけんなよ」

ハジメはハッキリと言い返し、大翔も少しだけ声を低くする。

「それにさ……お前、家族がハジメに『あんなこと』しでかして、それでもまだハジメのこと見下してんの？」

「っ……あ、あれは美月がー」

その瞬間、チャイムが鳴る。

「……さて、優等生さんも早いところ着席したらどうだ？」

「……っ」

その日の昼間。

ハジメと香織、雫と大翔がいつものように空き教室に移動して昼食を食べ終えたあと……

「南雲……これ、今朝返しそびれたやつだ！」

ハジメに紙袋を渡したのは、龍太郎と鈴の二人。

その中に入っていたのはハジメが龍太郎に貸していた漫画『機動武闘外伝ガンダムファイト7ten』と『超級！機動武闘伝Gガンダム』。龍太郎の琴線に触れるかもとハジメが布教した漫画であり、龍太郎も練習試合などの助っ人でGVRに参加するときは『ゴッドガンダム』や『マスターガンダム』をチョイスすることからハジメが選んでいた。

「坂上君……どうだった？」

「そりゃもう……最っ高！」

どうやら龍太郎にとって熱い漢達の心がぶつかり合うGガンダムはモロ好みだったらしく、しばし二人は語り合うのだが……

「もう……私達がいつまでもいたらカオリン達のお邪魔でしょ！」

鈴に引っ張られ、龍太郎は教室から出て行ってしまった……

放課後。

最後の授業である6限の世界史が終わり、ハジメ達はそれぞれ荷物を纏めながら部室に行く準備をしていたが…

(…伝えるなら、この後か)

前から計画していた香織への告白を実行に移すためハジメは香織に声を掛けようとする。

「お〜い、南雲〜?」

教室のドアから声が聞こえ、振り返るとそこには宗一がいた。

「ロック…三木先生」

「おう。お前と園部にお客さんだ」

ニヒルに笑う宗一の後ろから小さい影がひよこつと出てくる。

「あ、優翔! どうしたのよわざわぎー!」

宗一の後ろに隠れていた優翔は優花にしがみつく。

「うう…ごめんさい、お姉ちゃん…今日、ハジメお兄ちゃんに手伝って欲しいことがあって…」

「あ…そういえば約束してたね。この後ダブルバレットの塗装手伝うって」

数日前、優翔のお気に入りガンプラである『ガンダムAGE―2
ダブルバレット』の塗装などを手伝うと約束しており、学校が終わった優翔は一度家に帰ってからガンプラを持ってわざわざ来たという。
「えつと…先生。今日美術室つて、何時まで使えます?」
「ん? そうだな…6時までならいけるはずだぞ。ま、早めの帰宅もオススメだがな」
そんな会話をする中…

「え…?」

「なんだ? これ…」

ふいに教室の中から声が聞こえてくる。

見ると、光輝の足元には純白に光り輝く円環と幾何学模様が出現し、それは『魔法陣』へと形を変える。

魔法陣はあつという間に輝きを増し、教室の床全体に広がっていった。

「っ!」

直感的にハジメも、宗一も悟った。

——あれは『危険』だ。このままだと大変なことになる。

「お前ら、早く教室から出る!!」

宗一が叫び、何人かの生徒が出ようとするが『扉が空いているにも関わらず、壁にぶつかつたように弾かれる』。

「な、何だよこれ!」

「出られねえ!」

クラスメイトが叫ぶ中、ハジメは香織のもとに駆け寄る。

「香織さん!」

「ハジメ君! これって…?」

「わからない…でも、なんか嫌な予感がするんだ」

数十秒ほど脈動するように点滅を繰り返した魔法陣は、やがて強烈

な光を発していく。

「くっ！」

それは直感だったのだろうか

ハジメは自分達の身に何が起きるのかわからないながら、咄嗟に自分のカバンを掴み：

その日、南陽高校2年2組の生徒全員と社会科教師、数学教師、そして生徒の弟である小学生1人が教室から忽然と姿を消した。

この行方不明事件はやがて全国的に報道されていくが…それはまた別の話。

溢れていた光が消え、ハジメはゆっくりと目を開ける。

横には座り込んでいた香織がいて、周囲を見回すとクラスメイト達もいる。

(香織さん…八重樫さん、大翔、清水君、園部さんも…)

「ロックオン先生も優翔君も巻き込まれたのか……遠藤君は……うん、ちゃんという」

とりあえずいつもの面々が揃っていたことを確認したハジメは今どこにいるのかを確認しようとして、壁画を見つめる。

10メートルはあろうかという巨大な壁画には後光を背負った中性的な人物が大きく描かれていた。

長い金髪が輝いており、天使にも見えるその人物の両腕の中には草原や山々が描かれており、その中には人間や動物なども存在する。

一見すると描かれている存在が世界に存在するものを慈しんでいる。と取れるかもしれない。

だが、その顔を見た途端ハジメは言いようのない悪寒に襲われた。目を逸らしたハジメは自分達が巨大な広間にいることを知った。

大理石のような素材が使われ、美しい光沢を放つ白い石造りの建造物のようで、これまた美しい彫刻が掘られた巨大な柱に支えられ、天井はドーム状になっている。

(まるで海外の大聖堂だ……)

ハジメ達がいたのは、その最奥にある台座のような場所の上。

そしてハジメ達を囲むように30人近い人々が跪いていた。

まるで祈りを捧げるかのように両手を胸の前で組んだ姿で……

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎いたしますぞ。私は聖教教会にて教皇の地位に就いております、イシユタル・ランゴバルドと申す者」

現れたのはおおよそ70は超えているであろう老人。

だがそのまわっている覇気が強く、見た目の特徴が薄ければ20は若く見えていたかもしれない。

そんなイシユタルと名乗った老人は、好々爺とした笑みを浮かべるのだった……

第9話 トータスという世界

ハジメ達は場所を移し、大きなテーブルがいくつも並んだ大広間でイシユタルの話を聞いていた。

上座には愛子と宗一、そして光輝と龍太郎といったクラスカースト上位が座り、優花は友達である宮崎奈々、菅原妙子と一緒にテーブルに。因みに優翔は優花の隣に座っており、不安からなのか優花の手を離そうとしない。

ハジメ達は最後方のテーブルにつきながら、イシユタルの話を聞いて自分達なりに状況を理解しようとしていた。

ここに案内されるまで大騒ぎにならなかったのはまだ全員がこの現実を追いついていないことと、カリスマ度の高い光輝や宗一が落ち着かせたのが理由だ。なお、同じ教師の宗一どころか生徒の光輝に役割を奪われた愛子が涙目だったのはご愛嬌である。

因みに飲み物などを配膳しているのは男子の夢を体現したような美女、美少女メイド達で思春期男子達は己の探究心と欲望の赴くままメイドさん達を凝視し、女子達に白い目で見られていた…（ハジメ達模型部員男子は普段から香織達女子部員のおかげで動じることもなかった。なお遠藤は一度完全にスルーされかけて若干落ち込んだのは余談である）

そしてイシユタルの話を大雑把に纏めると…

1 この世界は『トータス』と呼ばれており、大きく分けて『人間族』『魔人族』『亜人族』の3種族が存在する。

人間族は北一帯、魔人族は南一帯をそれぞれ支配しており、あ人族は東にある『ハルツィナ樹海』と呼ばれる場所で複数の亜人が纏めて暮らしているらしい。

2 人間族と魔人族は長きにかけて戦争をしており、魔人族は各々が持つ魔法の技量で、人間族は兵力で拮抗しており、その戦局は大きく動くことはなかった。

だが、魔人族は『魔物』と呼ばれる魔力を取り入れて野生動物が変異した生物を大量に使役できるようになったことで人間族における『数の優位』が崩れてきたのだ。

3 魔物の存在によって人間族が滅びの危機を迎えた時、エヒトと呼ばれる神がこの世界に救い：即ち、上位世界である地球から『勇者』とその仲間達を召喚し、呼ばれたのがあの時教室にいた全員だった。

「あなた方を召喚したのは『エヒト様』です。我々人間族が崇める守護神：聖教教会の唯一神にして、この世界を創られた至上の神。おそらく、エヒト様は悟られたのでしょう。このままでは人間族は滅ぶと：それを回避するために貴方達を召喚してください」

「召喚が行われる少し前、私にエヒト様から神託があったのですよ。あなた方という『救い』を送ると。あなた方には是非ともその力で、エヒト様のご意志のもと、魔人族を打倒し我々人間族を救っていただきたい」

恍惚とした表情で語るイシュタルに警戒心をより強めるハジメ。どうやら人間族の9割以上がこの聖教教会の信徒らしく、全員が同じくエヒト神を崇めている。

(神の意思：…か。なんていうか：嫌な予感しかしない)

神の意思という不確かなものを疑うことなく、それどころか嬉々として従っている

この世界に言いようのない違和感と危機感を覚えていると、机を強く叩いて猛然と抗議する人が現れた。

その人物は、直前まで授業を行っていた畑山愛子先生だった。

「ちよつと待ってください！それって、この子達に戦争をさせようと

いうことでしょ！そんなの許しません！私達をはやく返して下さい！きつとこの子達の御家族も心配しているはずです！貴方達の上にいることはただの誘拐ですよ！」

愛子先生が叫び、ロックオン先生が横から宥める。

基本的に真面目でまっすぐな性格をしている愛子先生だが、外見が生徒達より幼く見える（流石に7歳の優翔よりは年上だが、どう見ても成人に見えない）ため、生徒達から『愛ちゃん先生』という親しみを込めた呼び名で呼ばれていた。

そんな彼女を落ち着かせようとしているロックオン先生を見ると、本当に年齢が1つしか違わないのか疑問に思うほどだ。

だが、そんな彼女の訴えも無駄になってしまう。

「お気持ちはお察しします…ですが…あなた方の帰還は現状では不可能です」

その言葉にほとんどの生徒と愛子先生も凍りついた。

「ど、どういうことですか!?!不可能って…呼べたのならその逆だってできるはずですよ!」

「先ほど言ったように、我々ではなくエヒト様があなた方を召喚したのです。我々人間族に異世界、それも上位世界に干渉するような魔法は使えませんので…あなたの方が帰還できるかどうか、エヒト様のご意志次第ということですね」

よほどショックだったのか、力なく座り込む愛子先生。

それと同時に、周りの生徒たちも一斉に騒いだ。

「嘘だろ…帰れないってどういうことだよ!?!」

「いやあ!お願いだから帰してよお!」

「お姉ちゃん……………」

「大丈夫…お姉ちゃんがいるから落ち着いて、優翔…」

生徒達が叫び、不安を募らせた優翔を落ち着かせるべく優花は擦り寄ってきた彼を抱きしめる。

パニック状態になる中、ハジメは横に座っていた香織が不安そうに自分の手を握っていたのに気がつき、落ち着けるために手を握り返し

た。

(まずい……ここで相手の機嫌を損ねたらどうなるか……)

この手の創作物についてそこそこの知識を持っていたハジメはすぐさまどうするべきか思考を巡らせていく。

幸い、自分達の扱いは『勇者』……いわば国賓待遇になる可能性が高い。

だが、下手に戦争参加を拒絶してしまえばどうなるか……

すると、愛子先生の時とは比べ物にならないほど強くテーブルを叩く音が聞こえた。

生徒達が注目する中、張本人……光輝がおもむろに話し始める。

「みんな、ここでイシユタルさんに文句を言っても意味がない。俺にだってどうしようもないんだ……だから、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだし、それを知った以上放っておくなんて、俺にはできない。それに……人間族を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。そうですね？ イシユタルさん……」

「そうですね……エヒト様も救世主の願いを無下にはしませんすまい」

「俺たちには大きな力があるって言ってみましたよね？ ここに来てから、妙に力が漲っている感覚があります！」

「ええ、そうですね。ざっとこの世界のものと比べて数倍から数十倍の力を持っていると考えるといいでしょうな」

その言葉を聞いた光輝は力強く頷く。

「なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように、俺が世界も皆も救ってみせる!!」

爽やかに宣言する光輝を見て、不安感を抱いていた生徒達の目には希望の光が灯る。

何せ光輝は普段から文武両道のイケメンとしてカリスマ性がある。そのため、生徒達は光輝に便乗する形で次々と元気を取り戻していっ

た。

「はいちよーつと待った」

ほぼ全員が戦争参加を決めようとする中、宗一が立ち上がる。

「盛り上がつてるところ悪いけど、即決するのはちよつといただけないな」

「三木先生…なぜ止めるんですか？」

不機嫌そうな顔をする光輝に対し、宗一は真剣な顔で語る。

「お前さ…これは『戦争』だ。人の命がかかって、だれかの命が簡単に消えるもの…それなのに頼まれたからって『はい、戦います』なんて言つて…その中でクラスメイト達が死ぬかも知れないリスクを背負えるのか？。少なくとも、俺としてはお前ら生徒にそんな危険なことさせたくないってのが本音だ」

「だけど先生！俺達がやらなければ、この世界の人々が滅びるんですよ?!先生はそれでも、彼らを見捨てるつもりですか!?!」

掴みかからんばかりの勢いで詰め寄る光輝。

その不転の目と態度に、宗一はしばし唖ると…

「……………しやーない。なら、参加においていくつかの条件を付ける」

その条件は

1 戦争においてある程度の訓練を積んだ後は志願制を採用し、戦いにおける適正が無いと判断された場合…または本人が前線での戦いを望まないと答えた場合前線から外す。

2 前線で子供達が戦わざるを得ない場合、必ず自分もしくは今後子供達の教育に携わるであろうこの世界の人間のうち、自分達の信頼が置ける大人が監督役として戦いを行う生徒達を守る。

「この二つが教会やこの世界で関係する者達が守れないのなら、天之河が何と言おうと、俺も畑山先生もお前たちが戦うことを認めない」

宗一の言葉にイシユタルは暫し無言を貫くが…

「……………良いでしょう。その条件を呑みます」

その日の夜中。

ハジメ達一同は教会のあった『神山』から麓にあった『ハイリヒ王国』に移動し、そこで翌日から訓練を受けることとなるらしい。

歓迎会とも言える王国主催のパーティーを終わらせ、それぞれが与えられた二人部屋に入るハジメ達。

因みに部屋割りとしては香織と雫、ハジメと大翔、清水と遠藤、優花と優翔といったようになっていた。

「あゝ………完っ全にタイミング逃した〜!!」

荷物のカバンをベッドの上に置くとハジメはベッドに倒れこみ、唸る。

「は、ハジメ？いきなりどした？」

親友の奇行に戸惑う大翔。

因みにハジメだけでなく彼ら模型部員は全員が手荷物としてカバンを持っており、しばしメイドさんに預けていた。

ハジメの行動に若干引きながらも大翔はカバンの中身に異常がないか確認している。

「……………今日、部活前に香織さんと呼んでさ…告白するつもりだったんだよ」

「……………え？てかお前らマジでまだ付き合ってたの？」

一瞬石化するハジメ。

「そうだよお…2年も一緒にいたのに付き合うどころか告白すらしてない臆病者だよお…」

「マジか…去年部室でコケた白崎さんの巨乳を鷲掴みするというシン・アスカ並のラッキースケベかましてるくらいだから進展あったのかと思っただぞ」

「うああああ!!それを蒸し返すなあああ!!」

幸せと恥辱の黒歴史を穿り返されてますます唸るハジメに、大翔も少しばかり悪いことしたと思っただ。

「まあ…確かにこんな異世界召喚なんて起きたら告白どころじゃないよな」

「はあ……………もうどうにでもなれって気分」

明日から訓練開始というのに告白するのも何か違うと思っってしまったハジメは、妙案が思い浮かばないままベッドで横になり、気が付くと夢の世界へ旅立っていった…

第10話 ステータス

翌朝。

朝食を終えたハジメ達は訓練場に集められ、そこに2人の男性が歩いてくる。

一人は色黒の逞しいガタイの中年の男性で、もう一人は鎧に加えて兜まで被っているため素顔は見えないが、長く白っぽい金髪をした色白の青年。

「はじめまして、だな。俺はメルド・ロギンス。ハイリヒ王国の騎士団長をしている」

騎士団長が新兵の訓練につきつきりになるのはどうかと思われたが、対外的にも対内的にも『勇者様一行』を半端な人間に預けるわけにはいかないらしい。

むしろメルドは『雑事を副長に押し付ける理由ができて助かった！』と笑いながら語り、ハジメ達は内心その副長にエールを送った。

「団長…私も挨拶を」

「お、そうだったな！一応お前達が接しやすいように我らの騎士団で腕の立つ若い騎士を1人教育係として連れてきた！歳は18だから、お前達と近いはずだ」

そう言われ男は兜を脱ぎ…

ハジメ達模型部員と宗一は思わずギョツとした。

「はじめまして。俺はこのハイリヒ王国騎士団に所属する――

『レイ・ザ・バレル』だ。年齢はさほど変わらないはずだから、気軽に接してもらえると助かる」

そこにいたのは、『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』に登場するレジエンドガンダムのパイロット、レイ・ザ・バレルと全く同じ顔、声の青年だったからだ。

十二センチ×七センチほどの銀色のプレートを配られるハジメ達。先程のレイの挨拶に衝撃を受けたものの、特に大きな反応をしなかったためかその後はスムーズに進んでいた。

「よし、全員に配り終えたな？これはステータスプレートと呼ばれる道具で、文字通り自分の客観的な能力を数値化して示してくれるものだ。登録者しか数値化したステータスと名前を開けないから、信頼度の高い身分証としても扱われている。これがあれば迷子になっても平気だから失くすなよ？」

フランクな語り方をするメルド。

続いて、レイが説明を行う。

「プレートの裏に魔法陣が刻まれている。そこに一緒に渡した針を

使って指に小さな傷を作り、魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それ以降は『ステータスオープン』という言葉が発せば自分のステータスを開けるようになる。因みにこれは俺たちがこの世に生まれる遙か前から存在した魔法技術による道具『アーティファクト』だ」

「アーティファクト…？」

光輝がレイの言葉を復唱する。

「アーティファクトっていうのはな、レイの説明したとおり、俺達が誕生する前に存在した神代の魔法道具だ。現在の俺達では再現できないもので、まだ地上に神やその眷属達がいた頃作られたものがほとんどだ」

どうやらアーティファクトは国宝扱いがほとんどだが、ステータスプレートは複製に使えるアーティファクトがいくつ也存在するため、例外として国民に多く広まっているとのこと。

ハジメも大翔もしかめっ面をしながら針で小さな傷を指に作り、血をプレートに垂らすと…

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：1

天職：錬成師

筋力：10

体力：10

耐性：10

敏捷：10

魔力：10

魔耐：10

技能：錬成・S・E・E・D・●●ウ●●ー・言語理解

龍峰大翔 17歳 男 レベル：1

天職：調整者

筋力：30

体力：60
耐性：100
敏捷：110
魔力：20
魔耐：10

技能：身体強化・空間認識・S・E・E・D・毒耐性・衝撃耐性・
言語理解

「これが…僕のステータスか」

ハジメ達の登録が終わったのを見計らい、レイが説明を再開した。「全員、名前、年齢、性別の項目が事実と異なっている場合は拳手を……いないなら話を続ける。まず、『レベル』という項目についてだ。レベルはそれぞれのステータス向上に応じて引き上げられ、上限は100。それが本人の潜在能力を全て発揮させたということになるが…まあそこまでたどり着けた人間はまず存在しない」

どうやら、レベルアップ＝ステータスの上昇というわけではなく、ステータスの上限値をレベルが表しているらしい。

「ステータスは自分の技能を磨き上げる、日々の鍛錬で上昇するし、魔法や所謂魔道具で一時的に上昇させることも可能だ。また、魔力が高い者ほど身体能力も上がりやすい傾向にあるらしい。あと…仮に今ステータスが低くても、それはあくまで『スタート地点』でしかないということをお忘れな」

おそらくだが、全員がレベル1なのは自分達がこの世界の魔法に触れたばかり…つまり、この世界に来たばかりだからレベルが低くなっているのかと推測したハジメ。

「次は『天職』だ。それはいわば本人が持つ最も濃い『才能』だ。基本的に天職と技能は結びついていて、それに関係する技能について『天才』とも呼べる能力を目覚めさせる。基本的にこの世界では天職無しが多く、次に多いのが戦いに対して大きなアドバンテージを持たないとされる非戦闘系天職、そして最も少ないのが戦闘系天職で、こつち

は千人に1人、数万人に1人の割合でしか見つからない場合もある」
ここでメルドが説明が変わる。

「あと、各ステータスは見たままだな。大体レベル1の平均は10くらいだ。まあ、お前達ならその数倍から数十倍は高いだろうがな！全く羨ましい限りだ！あ、ステータスプレートの内容は報告してくれ。訓練内容を決める参考にするからな！」

その言葉を聞いて、ハジメがリリースする。

(…え？僕の数値、オール10…)

そう。ハジメのステータスはまさに平均のオール10ピッタリだったのだ。

ショックを受けるハジメだが、続けて光輝が自身のステータスを明かす。

天之河光輝 17歳 男 レベル：1

天職：勇者

筋力：100

体力：100

耐性：100

敏捷：100

魔力：100

魔耐：100

技能：全属性適正・全属性耐性・物理耐性・複合魔法・剣術・剛力・

縮地・先読・高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解

ハジメの10倍ものスペックに、所有する技能の数も全員が共通で持っているという言語理解を除けば12種とかなりのチートぶりを披露していた。

「ほお、さすがは勇者様だな。レベル1の時点で既にステータスがオール100とは…技能も普通なら二つか三つなんだがな…：…規格外な奴め、頼もしい限りだ！」

メルドの賞賛に照れたように頭を掻く光輝。

なお、メルドのレベルが現在62でステータス平均は300前後。レイのレベルは11で魔力が低いものの、そのステータスは平均値が大体200と少し。

だがそれに次ぐスペックの高さを光輝はレベル1の段階から叩きだしており、それが彼の規格外さをより顕著にしていた。

それから次々と生徒達がステータスを明かしていくが、もれなく全員が高いスペックを持っていたことが判明。

香織は治癒魔法のスペシャリストである『治癒師』で、雫は剣術に優れた『剣士』。

優花は投げナイフなどの投擲武器の扱いに才能があった『投擲師』で清水は対象の精神に強く感応する閻属性魔法の天才、『閻術師』（なお魔力関連に限って見ればこのクラスの誰よりも高い才能を見せたが、その分運動方面にやや問題が残っていた）、遠藤は気配遮断などによって対象に気付かれず攻撃を行う『暗殺者』。

優翔に至っては平均値が光輝に次ぐオール90という驚異的なスペックを叩き出していた。因みに彼の天職は『戦士』だった。

（嘘でしょ…：僕、一番下…：？）

「なるほど…：調整者とはまた珍しい天職だな」

「そうなんですか？」

ハジメが悩む一方、大翔は自身の天職についてメルド達から聞いていた。

「ああ。調整者の最大の特徴は身体能力を引き上げることによって優れているという…技能を見る限り、様々な病などに強い性質を持っているのかもしれないな」

大体のことを説明し、最後…ハジメがステータスプレートを見せる番になった。

すると、これまで嬉しそうだったメルドの顔が固まり、見間違いか？というようにプレートをコツコツと叩いたり光にかざしたりする。やがて、物凄く微妙な表情になってプレートをハジメに返却した。「ああ、その…なんだ。錬成師というのは、言ってみれば鍛冶職のことだ。金属を変化させ、加工させるのに便利な能力だが…」

歯切れが悪そうに天職を説明するメルド。

それを聞いて、ハジメをある理由から目の敵にしていた生徒の代表格でもあった『檜山 大介』がニヤニヤしながら声を張り上げてきた。

「おいおい南雲、お前もしかして非戦闘系か？鍛冶職なんかでどうやって戦うんだよ？メルドさん、その錬成師って珍しいんすか？」

「……………いや、鍛冶職の十人に一人は持っている。国お抱えの職人は全員が錬成師だ」

「ぎゃははっ！おいおい南雲君よく、お前そんなんでまともに戦えるわけ？」

檜山の性格は一言で言えば『小者』。

香織に片思いしており、彼女と常に一緒にいたハジメを目の敵にしている。

実際、1年前には彼とハジメの間はかなり大きな騒ぎが起きており、その時点で香織からの評価は0を通り越してマイナスに突入しているが本人は幸か不幸かそれを知らない。

だが、そんな檜山の態度に周囲は嫌な顔をするどころか模型部員やハジメと交流のある人物以外ほとんどがニヤニヤと嘲るような視線を向けている。

「さあ…一応できなくはないと思うけど…」

「じゃあさ、ちよつとステータス見せてみるよ？天職がシヨボイ分、ス

「テータスは高いんだろうしなく？」

メルドの表情から内容を察していただろうにわざわざ執拗に聞き、ハジメからプレートを掠め取る檜山。

光輝のように様々な面で強い力を持つ者には徹底的に媚び、弱いと認識した存在には威圧的に出てくる小者感満載の行動はあろうことか檜山が恋慕している香織からの評価を著しく下げていることを彼は気づいていない。

「ひやははははは！なんだこれ、完全に一般人以下じゃねえかよ！」

檜山が笑い転げ、よくつるんでいる友人達にハジメのプレートを見せびらかしていた。

「お前、オール10ってだっせえ！そこらの子供にも負けんじゃね？」
「くそ雑魚で戦いに役立たずとか、もうお前必要ねえじゃん！肉壁にもならねえよ！」

ゲラゲラと笑う檜山達に連れられ、他のクラスメイト達も何人かが笑い出し、場の空気が悪くなりかけるが…

「全く、頭が働かない癖に才能だけ持った馬鹿はこれだから扱いに困る」

レイがいつの間にか檜山の手からプレートと奪い取り、ハジメに返す。

「…え？あれ？」

「どうした？お前の探しているものならもうとっくに持ち主に返しておいたぞ？」

檜山はいきなり手元からプレートが消えた事に驚いていたが、レイは気にせずメルドに話しかける。

「メルド団長。幾ら規格外な連中が揃ったからといえど、流石にあの態度は騎士団として…いや、同じ誇りを持った人間として恥ずかしいと私は思います。確かに彼らは戦うためにこの世界に呼び出された存在ですが…戦争をする上で指揮を執るあなたが、彼のように戦いを支える後方支援の存在を軽視する愚か者を叱責、教育するのが当然の摂理でしょう？まさか、雑事をやりたくないがためにこの重要な仕事をしたわけでは…無いですよね？」

淡々と事務的にメルドに語るレイ・ザ・バレル。

その姿に直接言われたわけでもないはずなのに多くの生徒達は彼に叱られたと思えるほど黙り込んでいた。

「うむ…すまなかったな、レイ」

「いえ。謝罪するのは私ではなく南雲少年だと思われませんが？」

「ああ…すまなかった。基本的に教育は戦闘天職のものしか考えていなくてな…俺の知り合いに錬成師の教育に最適な場所がある。良かったらそこに…」

だが、そんなメルドをレイが止めてこう言った。

「いや…少し彼を試してみたい。メルド、ちよつと彼を連れて行くぞ」
そう言うとレイはハジメの服を掴むと、あつという間にどこかに連れて行ってしまった。

「お、おいレイ！お前何勝手に……………行っちゃまった」

レイはハジメを自室に連れて行き、机に座らせた。

「えつと…どうして僕を？」

「すまないな。このことはメルドにも秘密なんだが…お前の錬成師としての才能をキチンと見極めておきたかった」

壁に掛けていた絵を外すと、その裏に何やら箱が埋まっている。それを取り出したレイは机の上に箱を置いた。

「この世界の神、エヒトは幾度かお前たちの世界に干渉してきたと言われている。多くのものはそれを迷うことなく信じていたが…これは、その干渉が行われていた紛れもない証拠だ」

その箱を見たたん、ハジメは息を飲んだ。

「トータスではこのような精密な武器を創れる錬成師はいない。だが、別世界から来たお前ならあるいは…」

『それ』を見たハジメは、ゆっくりと手を伸ばし…

「これって……………アサルトライフル…ですよね？」

魔法文化が発展しているこの世界に余りにも不釣り合いな武器をしつかりと手に取っていた…

「南雲ハジメ。その武器を解析、複製…もしくは類似した装備を錬成

「できるか？」

第11話 鋼鉄の魂

深夜。王宮内部にある小さな工房の一室でハジメはレイから渡されたライフルの構造を研究していた。

「…このライフル、地球で使われている技術ばかり…間違いない地球の武器なのは間違いないけど…」

家族の仕事の手伝いをする傍ら、ハジメは幾度となく銃器に関する資料に目を通していたこともあつてか素人ながら解析はある程度出来ていた。

(何とか記憶から絞り出した『これ』を使えば、僕だつて…)

アサルトライフルの構造を書き写したノート(カバン内部に入れていたガンプラ改造案のスケッチブック)のページをめくると、そこにはハジメが必死に思い出し、幾度も書き直していた『リボルバー拳銃の設計図』が描かれていた。

ステータス開示からおよそ二週間が経過し、その間クラスメイト達はそれぞれの技能や戦い方を学び続けていた。なお最年少の優翔はまだ幼すぎることもあつて戦いには参加させない方向に決まっていた(それに関して勇者に次ぐ素質を持っていたことから教会があまり良い顔をしなかったものの、いい大人が7才の子供を無理矢理戦場に出させるのは恥ずかしくないのか?というロックオン先生の一言で教会の人間や国の重鎮達は黙った)。

因みにハジメの現在のステータスはというと…

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：3

天職：錬成師

筋力：15
体力：17
耐性：15
敏捷：15
魔力：20
魔耐：15

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」・S・E・E・D・●●
ウ●●―・言語理解

未だにハッキリ見えない技能があるものの、錬成の項目にはその場で鉱石の詳細を知ることのできる『鉱物系鑑定』とより細かい錬成がしやすくなる『精密錬成』の派生技能が開放された。

なお、この技能が覚醒したきっかけは解析に行き詰まっていた時に香織から頼まれていた彼女用の近接装備開発だったりする。

この派生技能は元からあった技能が所謂『壁を越えた』ことで習得する技能。

これまで苦勞してきた技術のコツを掴み、一気にできるようになるというものだ。

因みにこの二つは王宮お抱えの職人でもそうそう目覚める技能ではないらしく、その点を踏まえるとハジメもやはり地球から来た影響を受けていると言えるだろう。

(多分この二つは錬成の勉強と並行してライフルの解析をしてたから手に入った…のかな?)

翌朝、久しぶりにレイや大翔と戦闘訓練を行うため訓練場に向かうハジメはプレートに表示された技能を見ながら考える。

因みにレイの話によると今のところ派生技能を覚醒させたのは今のところハジメだけらしい。

どうやら他と違いハジメの技能でハッキリ使い方が分かっているのは錬成だけであり、その分錬成一つに訓練できるためと推測してい

る。

「でも…この『S・E・E・D』って…」

現在目覚めている技能『S・E・E・D』。その名前にハジメは覚えがある。

(ガンダムSEEDに出てきたキラ・ヤマトやシン・アスカが目覚めさせた能力……まさかね?)

そんなことを考えていると、背後から突然衝撃が来てハジメは転倒する。

「っ…!?!」

手首を捻ったのか痛み顔に顔をしかめるハジメ。

その後ろにいたのはいやらしい笑みを浮かべる檜山と、彼の取り巻きである近藤礼一、中野信治、斎藤良樹の4人だった。

同じ頃。レイから合同訓練を行うと連絡を受けた香織は近接用装備を試すべく自室から一式を身につけて急いでいた。

「ハジメ君、無理してないといいけど…」

自身の技能にハジメが悩んでいたのは香織とて知っている。

自分のせいでハジメがクラスの殆どから疎まれていたことを香織は分かっており、それがこの世界でより悪化していたと理解していたからだ。

(私なんかが……ううん。それだけは考えちゃダメだよね…)

『誰がなんと言つても、僕は今、白崎さんと一緒にいられるこの時間が幸せで、大好きなんだよ…だから、サヨナラなんて言つてほしくない

…!』

かつて後悔の念に苛まれた香織を救ってくれた言葉。それを思い出し、香織は自分の頭に浮かんだ嫌な考えを振り払う。

しかし…

「ほら、早く立てよう？楽しい楽しい訓練の途中だろ？」

「ガアッ!？」

「ゴロゴロこつちでまで寝てんじゃねえよ？ほらほら、焦げたくなかったら立って逃げろよ？」『ここに焼撃を望む——“火球”』

『ここに風撃を望む——“風級”』

いくつかの物音が聞こえ、香織が見たもの。

それは檜山達の魔法や武器による攻撃を受けて傷だらけになったハジメと、彼を囲む加害者4人。そしてハジメのことを快く思っていないクラスメイト達による嘲笑の視線だった。

それを見た瞬間…

「何…してるのかな？」

気が付くとハジメを槍の棒部分で殴打していた近藤の首元に特異な形状のバスターソードが添えられている。

「し、白崎さん!？」

香織の登場に焦る檜山達は気が付いていなかった。

香織の眼が金色に輝いていたことに…

傷ついたハジメの前に立つ香織は、ハジメが作り上げたバスターソード…『再現版GNソード』を突きつける。

「ハジメ君のこと、色々とやってくれたみたいだけど…：…：何なら、接近戦苦手な私にも『訓練』つけてくれる？」

優しい笑みを浮かべる香織だが、その目は全くと言っていいほど笑っていない。

その様子にゾツとした檜山達だったが、香織はGNソードで檜山の目の前の地面をえぐるように破壊する。

「なっ!？」

「白崎香織、目標を駆逐する…なんてね？」

香織はGNソードの刀身を一度折りたたむと、斎藤目掛けて内部に隠された銃口を向けてトリガーを引く。

すると、ハジメが作った『非殺傷土塊弾』が放たれて彼の額に直撃。小さな痛みと砕けた土が目に入り視界を奪う。

「痛っ…こ、こいつ!!」

「なめんじゃねえー!」

近藤が槍で攻撃し、中野が魔法を使おうとするが香織は槍による攻撃をGNソードのバックラー部分で受け止め、左腰にマウントしていた『擬似GNショートブレイド』のグリップに刻まれた魔法陣に触れ、小さく呪文を唱える。

「天駆ける奇跡の光を我が身に。『神脚』、『神速』」

二つの身体強化系魔法を唱え、香織のスピードが一時的に上昇。

一瞬にして魔法系天職の中野と斎藤は鎧ごと服『だけ』を貫かれ、うつすらと皮膚が切れていたことに気づき腰を抜かす。

「ひっ…うああああ!!」

近藤が鬼気迫る香織の姿に恐怖を抱いて逃げるが、香織は右腰にマウントしていた『擬似GNロングブレイド』を投げつけ、それが近藤のふくらはぎを切ったことで近藤は痛みと恐怖から転倒。

檜山は逃げようとするが…

「おっとお。オイタが過ぎる生徒は生活指導の時間だな?」

騒ぎを聞きつけた宗一に取り押さえられた。

「う……………」

自室で目覚めたハジメは傷の痛みがないことに疑問を持っていたが…

「…そっか」

ハジメのベッドの横には、彼の手を握ったまま眠る香織の姿があった。

どうやら、あの後香織が治癒してくれたのだろうと推測するハジメ。

すると、扉が開いてレイと大翔が入ってくる。

「レイさん…大翔も」

「南雲、痛みはないか?」

「はい…ところでレイさん、あの後、何があったんですか?」

レイは椅子に腰掛けると説明する。

「檜山大介達4人による暴行を受けたお前は体のあちこちに打撲、裂傷、火傷などを負っていてな。お前を探していた白崎香織が4人を制

匠、全員三木宗一による説教を受け、しばらくはメルドだけでなく他の騎士達による訓練中の監視が付くことになった」

神聖なイメージを持つ『神の使徒』らしからぬ凶行にメルド達も流石に無視できず、檜山達は自由な行動を制限されるらしいことが説明される。

「お前と白崎に伝言だ。明日からこの王都を離れて宿場町ホルアドに向かい、そこにある『オルクス大迷宮』で魔物達との戦闘訓練を行う。因みに現地でのメンテナンス要員としてお前、そして見学という形ながら園部優翔にも同行させることが決まった」

「ええっ!？」

流石に優翔が来るというのは聞いてなかったのか、ハジメだけでなく一緒にいた大翔ですら驚いている。

「メルドも反対したんだがな…方が一魔族との突発的な戦闘が起きた時のために最低限の身を守る術くらいは覚えたほうがいいともっともらしいことを言っていたよ」

そう言うときレイは部屋を出ていき、部屋にはハジメと大翔、そして眠ったままの香織が残される。

「…ねえ、大翔。さっきの香織さんが檜山君達を止めたって…」

「マジだよ。白崎さんの武器…お前が創ったやつだろ？あのGNソードみたいなやつとか」

頷くハジメを見て納得した顔になる大翔。

「白崎さん、お前が戦う力を持っていないって悩んでたの知ってるんだぜ？だからお前に何かあった時のために坂上とか雫に頼み込んで二週間、自分の技能を磨くのと並行して格闘とか剣の扱いを学んでたんだ」

だからこそ、香織はハジメに近接戦の武器を暇があったときでいいから創ってほしいと頼んだのだ。

ハジメが得た力は決して役立たずではないと、身を持って証明する

ために。

「俺らはお前達の事情も知ってるんだ。俺だけじゃなく、模型部員とロックオン先生もな。だからさ…白崎さんもお前も、無理しないで俺らに相談しろよ。俺達『ビルドステイニー』はこんな時でもチームなんだからさ」

そう言つて、見舞いの果物を置いた大翔は出て行く。

それから1時間ほど経過したとき、香織はようやく目を覚ます。

最初は寝起きで意識がはつきりしていなかったが、自分がずつとハジメの手を握っていたことに気が付くと慌てて手を離し、そっぽを向いてしまう。

「えっと…そんな気にしなくてもいいんだよ？むしろ僕的には嫌だとは思ってないし………」

言わずもがな、香織は嫌だったからそっぽを向いているわけではない。

(うわあああああ！どうしようどうしよう！私ずっとハジメ君の手を握りながら寝てたってこと!?!しかも………寝顔見られたああ!!!)

想い人の手を握りながら横で熟睡するという乙女的に恥ずかしすぎる行動をしていたことを思い出し、撃墜状態だった香織はハジメに悟られないように悶え、その後雫が様子を見に来るまでこの無言の間は続いていたという…

第12話 月下の誓い

『オルクス大迷宮』

全百階層からなると言われている大迷宮であり、この世界の秘境『七大迷宮』の一つで、数少ない正確に場所が判明している迷宮でもある。

その特徴は階層が深くなるにつれて現れる魔物の種類が増えたり、強力になっていく点だ。

この性質故か、階層によつて挑戦者の実力を把握できることから冒険者や傭兵、新兵の訓練や魔物から採れる武器、防具の素材回収に最適と言われている。

その上地上で暴れている魔物より体内器官の『魔石（魔物と野生動物の明確な違いと言える器官で、魔物の持つ魔力の結晶体）』が良質になっており、それ目当てで迷宮に挑むものも後を絶たない。

この魔石は主に砕いて魔法陣を描くときなどに使うと魔法の威力が引き上げられるなどの効果が見込まれ、当然ながら良質な魔石ほど効果が強くなるがその分魔物の強さも上がっている。

魔物を侮つてはいけない一番の理由は、奴らが持つ『固有魔法』だ。魔法陣を書く事も詠唱もできない魔物だが、奴らは1種類につき1つだけ詠唱無しで扱える魔法として固有魔法を持っており、それぞれが魔物の脅威として伝えられている。

翌日からハジメ達は迷宮に潜つての訓練を行うらしく、今回は一流かどうかを見極めるボーダーライン扱いの20層までの挑戦となる。それくらいなら先頭能力の低いハジメや幼い優翔でも騎士達のサポートがあれば問題なく終えられると言う。

なお今回不参加なのは農業関連のチートに覚醒した愛子先生のみで、彼女は農地開拓に駆り出され王都にすらない。

現在、ハジメと大翔は同室にいた。

今彼らがいるのはホルアドにある王国直営の宿屋であり、全員が二人一部屋に宿泊している。

王宮の豪華すぎる宿に正直違和感を覚えていたハジメ達からしたら普通の宿のベッドは落ち着いたらしく、ハジメは装備の最終確認を終えると日課でもあったインパルスガンダムの手入れと各種シルエットの点検をしていた。

「なあハジメ。お前の武器ってどこまでできたんだ？」

「うーん…とりあえずライフルの解析は移動中の馬車で終わったけど、今のハイリヒ王国の錬成技術じゃこれの量産は不可能ってわかったかな？魔法文化のせいか、王宮の錬成師達の技能、練度がかなりバラバラみたいなんだよ」

アサルトライフルの解析は移動中に終えたものの、問題はそのままの精密さだ。

ハジメのような『精密錬成』を持つ錬成師は王都でも極少数で、あれほどの精密な部品を錬成できる者は限られている。

ハジメも何とかしようともっと簡単な構造をしたりボルバー拳銃や軽量化したクロスボウを開発したものの、弾丸に必要な強度の鉱石や火薬が足りず、弾丸もわずか7発が限界となっていた。

そのため、ハジメは錬成の過程でできた矢を数十本持っていく、明日の迷宮訓練ではこちらを使うつもりとのこと。

「そうだ…大翔もスポンジヤスリ使う？」

「マジで？いや、助かるわ」

インパルスの手入れを終えたらしいハジメは余っていたスポンジヤスリを一つ、大翔に渡す。

ヤスリを渡したハジメは続けてデステイニーリザレクションを箱から取り出し、さらにカバンの中から別のパーツを取り出していた。

「ハジメ。デステイニーに武装増やすの？」

「うん…ビーム砲もサテライトキャノンも手に持たず撃てるように改

良こそしたけど、使ってるサテライトがガンダムXのだからね。実際のところ手で持ったほうが安定するんだよ。だからもう少しだけ武装を増やそうと思って…」

ハジメが取り出したのは赤、青、緑の3種類のビット。

「これって…ドラグーン?」

「そ。まだ構想の途中だから没になるかもだけど…時間はまだあるからね。じっくり決めるよ」

そんなやり取りをしていると、部屋の扉がノックされる。

「えっと…どちら様?」

因みに今は深夜であり、普通に考えてこの時間に来る人間など限られている。

「ハジメ君、起きてる?」

「か、香織さん!?!」

扉の向こうから聞こえてきた声に驚いたハジメは上着を着ると、大翔が訓練用のロングソードを持った。

「どうやらお客さんみたいだな?ほら、早く開けてやれ」

ハジメが扉を開けると…

純白のネグリジエにカーディガンを羽織った、そこそこ刺激的な格好の香織が待っていた。

「……………」

「へえ…♪随分と大胆な御訪問だね」

そう言うで大翔は剣を持ったまま部屋から出ていく。

「お二人さん、明日の訓練に支障が出ない程度にしとけよな?」

少し楽しそうな笑みを浮かべ、大翔は出て行ってしまった……………

二人つきりになり、お互い沈黙が支配する空間だったがハジメが話を切り出す。

「えっと…ちよつと待ってて。お茶淹れるから…」

そう言うとはジメはカバンの中にあつた幾つかのティーパックを取り出し、紅茶を淹れる。

「ごめんね、こんな夜中に」

「いや、僕も眠れなくて…さつきまでほら」

紅茶を一口飲み、ハジメは作業机に視線を向ける。

香織が見ると、そこには完璧に手入れがされたインパルスとデステイニーが箱の中に入っていた。

「そつか…そうだよね。もうすぐ大会…だったもんね」

ようやく掴んだ全国大会進出のことを思い出した香織が少し俯くが、香織はハジメに視線を送って告げる。

「いきなりで驚くかもしれないけど……ハジメ君、明日はここで待ってほしい」

いきなり告げられた言葉にハジメは一瞬思考が回らなかった。

「メルドさんやレイさん達、それにクラスのみんなには私が必ず説得するから…だからお願い！」

「ちよ、ちよつとどうしたの香織さん!?いきなりそんなこと言って…何があつたのさ?」

顔色が悪くなりながらハジメに懇願してくる香織。

その様子にただならぬものを感じたハジメは香織の言葉を遮る。

「…ごめん。私、ちよつとおかしくなってるのかな…?」

「……まあ、僕が弱くて皆の足手まといつてのは否定しないけど」

香織は小さく首を振り、ポツリと語る。

「この町に来てから、ずっと嫌な予感がするの…さつきまで寝てたんだけど、夢を見ちゃって…」

自分の手を強く握る香織は涙声になりながら語る。

「夢の中でハジメ君が、どこかに走って行って…声をかけても振り向かなくて…いくら追いかけても、最後は…：…っ！」

体を震わせる香織が見ていられず、ハジメは彼女の肩に手を伸ばす。

「もうそれ以上無理に言わなくていいよ。香織さん、さつきから震えてるよ?」

香織の嫌な予感はい当てた。それは学校にいた時からそうだった。

だが、所詮は夢。それが理由で自分だけ待機など許されるはずもない。

ましてや今回は強制的とはいえ優翔も参加するのだ。それなのに自分だけが残るなど、どうして言えるだろうか。

「大丈夫だよ。今回はメルドさん達もいるし、うちのクラスはみんな強いんだ。それに僕だって、いつまでもこのままでいるつもりはない」

ハジメの錬成師としての実力が今もまだ成長を続けているのを知っているのは香織だ。彼女の装備のいくつかもハジメが創り、手直しを続けていたことでこの数日の間で装備の性能も引き上げられている。

「…もし、それでも不安が拭えないなら…今回だけでいい。僕のことを助けてくれると嬉しい」

「…え?」

正直、想いを寄せる少女に『自分を助けてほしい』と頼むのが男のプライド的に厳しい自覚はある。

それでも、その言葉で香織の笑顔が取り戻せるのなら安いものだ。

「僕がまた無茶して怪我をしたら治してほしい。それだけで、僕は安心できるから」

香織の手を握りながらハジメは答える。

その後、香織はようやく落ち着いたようですすっかり温くなった紅茶に口をつける。

「…やっぱり、ハジメ君は変わらないね。あの日から」

香織はそう言うと言ってきたケースからエクシア・フリーユージェルを取り出す。

「エクシア…」

「実はね…不安な時、いつもこのエクシアをケースに入れて運んでたんだ。これさえあれば、ハジメ君の勇気を少しだけ分けてもらえる気がして」

香織は少し迷うが、エクシア・フリーユージェルをハジメに渡す。

「え？」

「お守り。明日の訓練、もし私が間に合わなくても、ハジメ君が無事に帰ってこれるように…」

香織はこのエクシアにある願いを込めていた。

「この子がいれば、きつと頑張れる。だから…ハジメ君にもらった勇気分、今度は私の祈りをこの子に込めてハジメ君に預けることにしたんだ」

香織から受け取ったエクシアを手に、ハジメは小さく笑う。

「…ありがとう。香織さん」

すると、香織はハジメに顔を近づけて…

「そろそろ寝るけど…最後に私からのおまじない…」

次の瞬間、ハジメの頬に一瞬だが暖かい感触が伝わり：
香織の唇が自分の頬に触れたということをややく理解。

「じゃ、また明日ね！」

「そう言い残して香織は部屋から出る。」

「……………はあああああ!?!」

ようやく理解が追いついたハジメの絶叫が部屋いっぱい響き渡った…

その後。

「うわあ………帰り際にほっぺにチュウつて…香織、あなたその格好してるせいかだんだん行動が過激になってない?」

「あああああ!!言わないで雫ちやああああん!!」

夜風に当たったことで正気に戻った香織が部屋で枕に顔を埋めながら悶えているのを雫は呆れ顔で見ている。

「だって耐えられないよお…肩掴まれて手を握られて…ハジメ君があんなに頼ってくれること自体少なかったんだし…」

「なんでそこまでして南雲君と付き合っていないのか、疑問しか浮かばないわ…」

その雫の言葉に香織は小さな声で反撃する。

「…龍峰君と一緒に私のこと応援して逆にくつつきそうなのに、未だ進展のない雫ちゃんにだけは言われたくない」

「なあっ!?!」

カウンターを受け、雫までもが真っ赤になったのだった…

ハジメも香織も、この時は気がつかなかった。

香織がハジメの部屋から出ていったとき、その様子を遠目から見

いた人物のことを。

そして…その人物の心の中にドス黒い感情が渦巻いていたことを。

かくして、運命の日は幕を開けるのだった…

第13話 迷宮冒険

朝のオルクス大迷宮前。

そこは予想と反して多くの出店が連なっている雑多とした空間が広がっていた。

「あ、これ旨いぞ」

「ホントだ…ていうか、この世界にも唐揚げってあるんだ…」

クラスメイト達は訓練開始まで自由時間だったため、ハジメと大翔は近くの出店を回っている。

国から支給された小遣いで念のためいくつか揚げ物やらパンを購入したハジメはそれをポーチの中にしまっている。

「お前のポーチ、満杯じゃん…何入れてんの？」

「えっと…さっき買った食糧に現地で必要になりそうな鉱石をいくつか…後は武器のクロスボウ二挺と、お守り？」

ハジメが取り出したのは厳重なケースに入ったインパルスとエクシア・フリーゲルのガンプラ。

因みに近接用にと王国から支給されたナイフと彼の『秘密兵器』は着ているジャケットの裏に収納されている。

「……………なんか、お祭りみたいだね」

「ああ…何ていうか…緊張感が薄れてるっつーか…」

装備であるナイフの刃こぼれなどがないか点検していたハジメだが、その途端背後から嫌な視線を感じて振り返る。

「……………気のせい…？」

洞窟の中は表の喧騒とは裏腹に静かな空間となっていた。

縦横およそ5メートルの通路が続いており、壁が淡く光って明かりの役割を果たしている。

その正体は魔力を蓄積して発光する性質を持つ『緑光石』と呼ばれる鉱石であり、この迷宮は緑光石の鉱脈沿いに作られているという話

だ。

通路を歩くのは先頭が騎士団のメルド達で、それぞれのパーティーを組みながら移動している。

一番前は光輝や龍太郎、そして最前線に配置された香織と雫を含む勇者パーティーと顧問として宗一がおり、戦闘能力の低いハジメや子供の優翔は最後尾でレイが護衛についている。

それから10分もすると大広間のような空間に出て、最初の魔物と光輝達の闘いが始まる。

「あの魔物は…ラットマンか」

「うう…気持ち悪い…」

顔を引きつらせているのはハジメだけでなく、クラスメイトのほとんどだった。

なにせ、ラットマンの外見は筋肉質で二足歩行するネズミ。普通想像するだけでも鳥肌が立ちそうな姿である。

そんな彼らの様子を見ることなく、光輝達は戦闘を開始する。

「せああっ！」

光輝は王国から支給されたアーティファクト『聖剣』で次々とラットマンを両断。

この聖剣、王国でも謎の多いアーティファクトらしく、その真の力を引き出せたものは未だ存在しないとされている。

判明している能力は光属性の性質が付与されていること、そして光を常に放っており、その光源に入った敵の能力を弱体化させ自身の身体能力を自動的に強化するという力を持つ。

さらに光輝が入手した時に彼が正式な持ち主と剣に認められ、彼の言葉一つで自動的に手元に飛んでくる機能まで判明した。

「ふっ！てやあっ！オオラアアッ！」

光輝をサポートするように天職が拳士である龍太郎が強力な拳や蹴りでラットマンを吹き飛ばす。

彼のアーティファクトは衝撃波を放つ籠手と脛当て、自動修復機能

でもあるのか壊れることはないらしい。

「——っ！」

さらに雫も王国から渡されたシャムシールのような剣で次々と攻撃をしているが、その様子を見たハジメ達は表情を曇らせる。

（やっぱり…動きと剣が合っていないのかいつもの八重樫さんと比べて攻撃のキレが悪い）

（それだけじゃねえ…あいつ、やっぱり無理してる…）

元々『命を奪う』ことに否定的な思考を持っていた雫は、魔物とはいえ生物に刃を突き立てる行為に多少なりともダメージを受けているようだ。

やがて前衛3人が時間を稼いでいる間に、後衛の魔法組が詠唱を完了させる。

「暗き炎渦巻いて、敵の尽く焼き払わん、灰となりて大地へ帰れ——

——『螺旋』——

香織、鈴、そして鈴の友達の『中村恵理』が同時に唱えた炎魔法が残ったラットマン達を消し炭に変える。

「あー…あれじゃ魔石まで消し飛ばしたね」

流星にやりすぎだったらしく、メルド団長から指摘されて肩を落とす香織達。

こうして階層を進みながら次々とメンバーを入れ替え、やがてハジメ、優翔、大翔の3人の出番になる。

「さて、気合い入れろよ、ハジメ？」

大翔は獲物である細身のロングソードを2本抜き、優翔も身の丈に合ったナイフを取り出す。

そしてハジメはメイン武器として持ってきたクロスボウをポーチから取り出し、ベルト部分のケースから矢を取り出して装填。

迫ってくる魔物に対し、大翔が『エールストライクガンダム』のように素早い動きで敵を両断し…

「うう…はあああ!!」

高いステータスに振り回されながらも優翔は2本のナイフだけでなく、強力な蹴りで魔物を昏倒。

「ふっー！」

ハジメは腰に差していた矢を装填しては的確に魔物の脳天を貫き、それでも接近されてしまえば…

「錬成っ！っ！」

地面に手を触れ、錬成を使って相手の足場を崩しつつ固定。

動きを封じると持っていたナイフで相手の頭を刺し、確実に仕留めていた。

「ほお…」

「あいつ…あの射撃能力は大したものだ」

高いステータスで大暴れする大翔と優翔に皆の目はいつているが、ハジメはどの矢も的確にターゲットのヘッドショットを決めており、動く標的への射撃能力にメルドとレイは感心していた。

それから進み続けること、あつという間に20階層の入口に到着。休憩を挟み、ハジメは弾薬の数を確認する。

「…矢はあと30本。途中で回収できたものも含めたらあと40発は使えるか…薬はあと2個、食糧は未だ手付かず。お守りは…うん。大丈夫だ」

ポーチの中身を確認し終えて蓋をすると、香織が話しかけてくる。

「お疲れ様、ハジメ君」

「香織さんも…最前線で疲れてない？」

首を振る香織に少し安心するハジメ。

もうまもなく訓練も終わりに近づき、帰ったら今日はそのまま自由時間となっている。

そのことを思い出したハジメは香織に提案する。

「香織さん…今日訓練終わったら、時間空いてる…かな？」

「え？う、うん…」

ハジメは意を決したように香織に告げた。

「終わったら、少し話があるんだ。もちろん、香織さんが良ければだけど……………」

少しだけ無言になるが、香織は…

「わかったーじゃあ、訓練終わりにね！」

満面の笑顔で最前線にいる雫と、彼女のケアに向かっていた大翔の所へ走っていく。

「……………はあ」

昨日告白しておけばよかったと一晩中後悔していたハジメは、これ以上後回しにしないようにと訓練が終わり次第香織に想いを伝えることにしていたのだ。

「っ!?!」

今朝感じた視線にハジメは辺りを見回す。

「…どした?」

遠藤の言葉に「何でもない」と返すハジメ。

(勘違いなんかじゃない…でも何だ?あの嫌な雰囲気……………)

20階層で待ち構えていたのは擬態能力を持つて壁や岩に潜むゴリラ型の魔物『ロックマウント』。

擬態という厄介な能力の他、この20階層の特徴とも言える鍾乳洞のような複雑な地形で横列が組めず、後方からの援護も難しい中で勇者パーティーが戦い続けていた。

ロックマウントはその豪腕で光輝達を蹴散らそうとするが、龍太郎が壁のように立ち塞がることで突破できないと判断したのか後ろに大きく仰け反ると息を吸う。

「っ!固有魔法だ!」

「グウガガアアアアア!!」

ハジメが叫ぶが、ロックマウントは間髪入れず固有魔法である咆哮『威圧の咆哮』で前衛達を一瞬硬直させる。

さらにロックマウントはサイドステップをして傍らにあつた岩を持ち上げ、香織達後衛の魔法チームに投げつけてきた。

迎撃のために杖を構えて魔法を唱えようとする香織達だが…

「ええっ!?!」

投げられた岩も擬態したロックマウントで、なんと空中で見事としか言いようのない一回転を決めるとルパ○ダイブのような状態で香織達に飛びかかる。

「白崎さん、伏せてっ!」

「一辺叩き潰す!」

ドパンツ!という音が響くとロックマウントの頭を何か貫き、身体強化によって腕力を引き上げた大翔の振るう剣がロックマウントの両手を切り落とした。

「こいつら…!」

光輝は驚いたことがあるものの、それより先に香織達を怯えさせた(実際は気持ち悪い笑顔のロックマウントに引いただけ)ロックマウントに対して怒りを爆発させ…

「万翔羽ばたき、天へと至れ——『天翔閃』!!」

「あ、こら馬鹿者!」

メルドの静止が聞こえず、光輝は特異な光魔法の斬撃を飛ばしロツクマウンドを『壁ごと』吹き飛ばした。

パラパラと部屋の壁が崩れ、光輝はふうつ。と息を吐いてイケメンスマイルで香織達に振り向く。

『もう大丈夫だ!』と声を掛けようとする光輝だが、メルドにゲンコツをくらう。

「へぶっ!?!」

「こんの馬鹿者があ! 気持ちわかるがこんな狭いところで使う技じゃないだろうが! 崩落でもしたら俺達全員生き埋めだぞ!」

流石に自分が悪いと反省したのか謝る光輝だが、そんな彼らのやりとりに注目している者はいない。

何故なら、先ほどロツクマウンドの頭を貫いたもの——ハジメが手に持っていた拳銃にみんなの視線が行き着いていたからだ。

「な、南雲...お前、それ...」

「ああ...クロスボウの開発はついでで、元はこっちがメインだったんだ...結局、威力は想定より弱いし弾丸もそんなに作れなかったけど、取り回しならこっちのほうが良かったから本当に非常用の武器なんだけどね」

そう言うとはジメは地面に落ちた空葉莢を拾う。

クロスボウで魔物を仕留めたことに驚いていたクラスメイト達だが、その上でさらに地球の兵器を(一つだけとはいえ)完成させてい

たハジメにクラスメイト達は嫉妬や苛立ちなどの複雑な感情が溢れていた…

だが、そんな中で香織があるものを見かける。

「あれ、何かな…キラキラしてる…」

「え……………あれって、『グランツ鉱石』？」

ハジメはこの世界について調べていたことからその鉱石の正体を見抜く。

「間違いないな。他の鉱石のような特殊な能力こそ存在しないが、その輝きからプロポーズなどに送られる指輪とかの材料になる。売ればそこそこの値段になるはずだ」

レイが香織達に説明する中、香織はそれを見つめ、チラチラとハジメを横目で見ていた。

(あれ、お前に指輪作って欲しいってことじゃね?)

(ええ…?でも、あの石おかしくない?)

大翔が囁くが、ハジメは少し微妙な顔になる。

(おかしいって何だよ?)

(だってさ……………あのグランツ鉱石、なんで表面に傷一つ無いの?特殊な力はない鉱石なのに、あの天之河君の魔法の余波を受けたなら表面に多少のキズやひび割れがあってもおかしくないのに)

そう…錬成師としてそこそこの経験をしてきたハジメはその鉱石の違和感に一人だけ気づいていた。

既にステータスが人類トップクラスのメルドに匹敵しているはずの光輝が放った本気の魔法により、この階層の壁は多少だが崩落している。

にも関わらず、埋まっていたグランツ鉱石は傷一つなく、インディコライトが内包されたような美しい水晶のような輝きを保っているのだ。

「レイさん、もしかしてあの鉱石…」

「わかった。メルド、フェアスコープを」

レイはメルドから迷宮内部の魔法トラップを感知するアーティファクト『フェアスコープ』を借りようとするが…

「だったら俺らで回収しようぜ！」

香織にいい所を見せようと檜山が動き出し、壁を登りだす。

「おい、勝手なことをするな！安全確認もまだなんだぞ！」

メルドが呼びかかるが、檜山は聞こえないふりをして登り続け…

「メルド！やはりあれはトラップだ！」

フェアスコープを使ったレイが叫び、メルドが止めようと叫ぶ。

「南雲！威嚇射撃でいい！」

「え？」

「いいから撃て！あいつを止めるんだ！」

レイが叫ぶがハジメが拳銃を抜くより先に檜山が鉱石に触れ――

鉱石を中心に20階層全体に魔法陣が広がる。

「これって、あの時の！」

あの日。教室からこの世界に転移されたことを思い出すハジメ達。

「お前ら、早く逃げろ！」

宗一が叫び、クラスメイト達は急いで撤退しようとするが、彼らの姿は20階層から消えた…

空気が変わり、ハジメ達は地面に叩きつけられる。

「イテテ……そうだ、みんなは!？」

大翔とハジメは周囲を確認するが、クラスメイト全員は揃っていない。

すでに光輝達や宗一、メルド、レイといった騎士達は立ち上がり臨戦体制になっていた。

どうやら先ほどの魔法は現代で失われた転移系魔法だったらしい。現代では不可能な長距離を一瞬で移動するといったことをやっているあたり、神代の魔法の規格外さが伺える。

ハジメ達がいたのは巨大な石造りの橋の上で、広さはおよそ100メートル以上。天井も20メートルほどあり、ハジメは一瞬(宇宙世紀後半のモビルスーツなら戦えそう)だなとどうでもいいことがよぎるが、すぐに頭から離れていく。

橋には縁石などもなく、橋の下は川が流れているような音も聞こえず真つ暗な闇が広がっていた。

「お前達、すぐに立ち上がってあの階段まで急げ！」

メルドが上の階に繋がる階段を差し、指示を出す。階段の前に魔法陣が出現し、そこから骨でできた騎士のような魔物が無数に現れる。

「あれって……トラウムソルジャー!？」

ハジメが王宮で読んでいた魔物に関する図鑑にいた、危険な魔物の

カテゴリに属していた存在。

38階層に出現する魔物で、クラスメイト達の力を持つてすれば余裕なほどの力しかないもののその異常な数に圧倒される。

「まずいな…南雲！クロスボウはあるか？」

「は、はいーもう一挺あります！」

ハジメは予備のクロスボウを宗一に渡すと、続けて矢を半分渡す。だが、悪いことは続き…

通路側に巨大な魔法陣が出現すると、そこから恐竜のような外見の魔物が現れメルドは息を呑む。

「まさか——ベヒモス…!？」

その怪物を見たときのメルドの瞳に籠っていた感情は——絶望だった。

第14話 死闘と裏切り

トリケラトプスのような魔物、ベヒモスと無数の骸骨のような魔物、トラウムソルジャーとの戦闘が始まって数分。戦場は泥沼の様相を作り出していた。

「く、来るなあああ!!」

生徒の一人が我武者羅に剣を振るい、剣はトラウムソルジャーではなく生徒を援護しようとしていた騎士の体に傷を付ける。

ただでさえ不気味な姿のトラウムソルジャーは、実力的にはまだ下とはいえ先程まで戦っていたロックマウントよりは格上だ。

その上、ベヒモスが大暴れする度に橋が大きく揺さぶられ、転倒する生徒も出てパニックが広がっていく。

宗一が率先してトラウムソルジャーを倒しながら落ち着くよう叫ぶも、ほとんどの生徒の耳には入らない。

そのうち、優花が後ろから突き飛ばされて転倒。

優翔が慌てて駆け寄るが、二人の前に剣を振りかぶったトラウムソルジャーがいた。

「あ……………」

優花は弟を庇おうと動くが…

ドパンツ!

発砲音が聞こえ、トラウムソルジャーの頭が碎ける。

2人が後ろを振り向くと、そこには拳銃を構えたハジメが立っていた。

「南雲……!」

「ハジメ兄ちゃん!」

続けてハジメは両手に錬成の魔法陣が刻まれた手袋を着けて、橋の淵にいたトラウムソルジャーの足元を錬成。

その意図を瞬時に理解した騎士の1人がトラウムソルジャーに体当たりをすると、その1体を中心に複数のトラウムソルジャーが巻き込まれ、奈落の底へと消えていく。

「園部さん、君は遠藤君や清水君と協力してみんなを逃がして欲しい」「南雲は、どうするつもりなの?」

ハジメの視線の先にはベヒモスのそばにいる香織と雫、大翔、そして光輝達がいた。

「突破口をこじ開けてくる…!」

そう言うと、ハジメはクロスボウと拳銃を両手に持ちながら光輝達のところへと走り出した…

ベヒモスはメルド達の張っていた障壁、最高クラスの防御魔法『聖絶』に体当たりを繰り返していた。

いくら最強クラスの防御魔法とはいえ、使える時間も限りがある。

その上、橋がベヒモスの攻撃によって亀裂が入っており、そう遠くないうちにこの橋が崩落する危険も出てきていた。

「ええい、くそ!もうもたん、光輝!早く撤退しろ!」

「嫌です!メルドさん達を置いていくわけには行きません!絶対…絶対みんなで生き残るんです!」

「こんな時にワガママを…!」

光輝の言葉にメルドが苦々しい顔になる。

この限定された空間で一直線に体当たりしてくるベヒモスの攻撃を避けることは不可能に近い。それ故、逃げるためには障壁を張って被害を抑え、押し出されるように撤退するのがベストだ。

だがその技術は幾度の戦闘経験を重ねたベテランにしかできない技であり、まだ魔法に触れて2週間しか経っていない上に防御魔法などを殆どが習得していない光輝達にその技を求めるのは余りにも酷

な話だった。

無論その事情もかい摘んで話すレイやメルドだが、光輝にとっては彼らを『置いていく』ことが納得できないらしく、さらに異世界から来た自分達ならどうにかできると思っているのか明らかに攻撃的な顔だ。

まずは褒めて伸ばす教え方が裏目に出たかと内心思っていたメルド。

「光輝！団長さんの言うとおりの撤退しなさい！そうすれば皆も逃げられるの！」

「こればかりはそう簡単に倒せる相手じゃねえ！お前だってわかってんだろ！」

雫と大翔が光輝を諫めようとする。

「へっ！光輝の無茶は今に始まったことじゃねえ…とことん付き合ってやるよ！」

「龍太郎…助かる」

「状況に酔ってんじゃないわよ、この脳筋馬鹿ども！」

声を荒げる雫に不安そうな顔になる香織。

その時、ベヒモスの右目が破裂して血が流れ、続けて矢がベヒモスの体に浅く刺さる。

「な、何だ!?!」

「天之河君！」

走ってきたのは、硝煙が出ている拳銃を握っていたハジメ。

「ハジメ君!?!」

「南雲！なぜ君がこんな——！」

光輝がハジメに何か言おうとしたが、ハジメは彼の胸ぐらをつか

む。

「いつまで自分に酔ってるんだよ！天之河君がやるべきことはあの魔物を倒すことなの!？」

ハジメの強気な口調に光輝だけでなくいつも一緒にいた香織までもがギョツとする。

「あれを見てよ！まだロックオン先生や騎士の人達が戦ってるから死人は出てないけど、みんなリーダーがいなくてパニックになってるんだ！」

「みんなが君のレベルの規格外な強さを持つてるわけじゃない！みんなを戦争に巻き込んで、守るって言うなら前の敵だけじゃなく後ろの味方もちゃんと見てよ！それができるのはリーダーの役目を持った君なんだ！」

ハジメの言葉にようやく自分のやるべきことを思い出した光輝だが、次の瞬間障壁が碎ける。

「っ、香織さん！」

「うん！守護の光は重なりて、意思ある限り蘇る！『天絶』！」

「『錬成』っ!!」

香織が創った5枚ほどの光のシールドと、その前にハジメが錬成した石の壁がベヒモスの突進を受ける。

石の壁で多少なりとも威力は軽減され、シールドで止められたもののその衝撃から香織は吹き飛ばされ、ハジメが彼女を庇う形で倒れる。

「……………これじゃ、皆が逃げるだけの時間も稼げない」

大翔は自分たちの危機に焦りを募らせるが…

「……………メルドさん、レイさん。少なくとも前衛組と騎士の皆さんを確実に逃せる方法があります」

ハジメは思いついた作戦を話す。

それは、あまりにも無謀すぎる計画だった。

これを行えば確かに光輝達は救えるだろう。

だが、そのリスクを背負うのはたった一人だけ。

「…いいのか？」

「はい。僕に命を預けるのは不安かもしれませんが…」

だが、確かな勝算があると語るハジメの目をメルドは信じることにした。

「まさかお前に命を預けることになるとはな……………必ず助ける。だから…任せるぞ！」

「はい！」

ハジメは持っていた弾丸を詰められる限り拳銃に装填し、動き出す。

——この時、ハジメのステータスプレートに表示された技能の一つが増えていたことを彼は知る由もない。

技能：Xラウンダー

ベヒモスが再び角を赤熱化させて突撃し、メルドはギリギリまで引きつけながら呪文を詠唱。

「吹き散らせ——『風壁』」

風の初級防御魔法を唱えながらバックステップし、ベヒモスの攻撃

が空振りに終わるとその巨体が橋に激突。

すかさずハジメは魔法イメージを固めるべく両手を強く叩くように合わせる、足元に手を触れ、自身の唯一使える魔法を唱える。

「錬成っ!!」

ベヒモスの前足から頭部の接している空間を錬成し、石造りの橋をまるで泥のように錬成することで相手の動きを封じる。

想定以上にベヒモスは力があり、少しでも他のことに気を取られてしまうとすぐにでも抜け出されそうなパワーにハジメは全神経を集中させながら錬成を行っていた。

(残りの薬はあと5本…弾丸はあと4発。一つたりとも無駄にできない!)

足を抜けられたら再び足元を。

頭部を赤熱化させようとしたら頭付近を錬成してベヒモスの動きを封じていくハジメ。

その上、橋の崩落を防ぐために慎重に行わなければならないため想定以上の精神的負荷が彼にかかっていた。

その瞬間、ハジメは『本能的に』背後から迫るトラウムソルジャーを感知して拳銃を向け、そのトリガーを引いて撃退。

だが、これが大きな隙となってしまう。

「っ、まづいー!」

一瞬だがトラウムソルジャーに向けてしまった集中。その隙を突いてベヒモスが錬成による拘束から脱出。

飛んできた瓦礫がハジメの左肩を掠めてしまう。

「そんな…これじゃあ…!」

恐らく、数秒もしないうちにベヒモスはハジメを蹴散らして、香織達にその破壊の角を向けるだろう。

(そんな…こと…)

「させない…香織さん達は、傷つけさせやしない！」

ハジメが再び立ち上がる瞬間……………

彼の頭の中で『種』が弾けた――

光輝の圧倒的な力もあつてトラウムソルジャーの方位を突破した生徒達。

だがメルドの指示により出口の直前で止められる。

「待つて皆！まだハジメ君が一人でベヒモスを抑えてるの！」

香織の言葉に疑問符を浮かべる生徒達。

彼らの中でハジメは唯一戦闘に適さず魔法適性もない『無能』という存在になっていたため、そんな彼が光輝ですら倒せなかつたベヒモスを足止めなど出来るわけがないと思っていた。

だが…

「あれ…ベヒモスを橋に埋めてる？」

誰かの言葉通り、ハジメの錬成によってベヒモスの上半身はほぼ橋に埋まっていた。

「そうだ！坊主が一人でベヒモスを抑えていたから俺達がここまで脱出できた！あとは俺達であいつを助けるぞ！」

死ぬような思いをした生徒達はチラチラと階段の方に視線を向けるが、メルドの一喝によつて慌てて魔法攻撃の準備をする。

その中で一人だけ、今にも逃げ出したいと思っていた人物が居る。

(くそ…くそくそくそ!!なんでこうなったんだよ!?)

『彼』が思い出したのは昨晚のこと。

迷宮に入る前日、中々寝付けなかつた彼は外の風を浴びに行つた。そんな中で彼は偶然にもハジメの部屋の近くを通りかかり、そこでネグリジエ姿の香織が出て行つたのを見かけてしまったのだ。

彼は1年前、初めて出会つた時から香織に片思いをしていた。

だが、すでにその頃からハジメが香織とずっと一緒にいたことが疎ましく感じていた。

香織の幼馴染でありクラス一の優等生である光輝と香織だったら住む世界が違ふと諦めがついたのだが、自分より劣る(と考える)模型部員のインドアオタクであるハジメが香織のそばにいるのはおかしいと自分勝手な理屈を頭の中で導き出し、1年前に仲間達と罵倒をしながらハジメを痛めつけた。

だが、その後二人の仲は急接近してしまい、しかも自分の行動が知られたのか香織の親友である雫とハジメの親友の大翔が睨みを効かせたため、容易に二人に接近できなくなつてしまつたのだ。

(…いや。今なら…)

その時、彼の心の中の悪魔が囁く。

みんなはハジメを援護するため、彼の背後を狙うベヒモス目掛けて無数の魔法を放っている。

「…そうだ。全部…白崎のため…」

彼…『檜山大介』は自身の適性である風魔法ではなく、炎属性の魔

法を詠唱。

放たれた火球はベヒモス目掛けて飛び…

「南雲君、逃げて!!」

数分前。

(頭の中が冴えてる…これなら!)

『目の光が消えた』ハジメは、今まで以上に冴え渡った頭を駆使して両手だけでなく、近くの石を靴で踏みながら振り返ることなく感覚だけで寸分の狂いもない錬成の魔法陣を橋に削って描き、魔法陣を踏みつけることで両手、右足を使った3つの錬成を同時に行うという離れ技を披露。

橋を崩落させないようにギリギリの強度が保てるよう計算しながらベヒモスの上半身、下半身、そして背後から迫るトラウムソルジャーを全て錬成だけで対応していた。

「あと…一本!」

最後の魔力回復薬を飲み干し、ハジメは自身の魔力を全て注ぎ込む気持ちで錬成を続ける。

「坊主、準備が出来た！戻ってこい！」

メルドの声が聞こえ、ハジメは立ち上がると同時にベヒモスの左目に銃弾を放つ。

「グウウウオオオオオ!!」

視界が真っ暗になり、激痛で暴れだすベヒモス。

すぐさまハジメは走り出し、100メートルほどある橋を全力で駆け抜けていく。

その頭上を飛ぶ致死性の魔法が次々とベヒモスを襲い、視界を奪われながらもなお執念で追いかけてくる魔物の足を止め続けていた。

(これなら、帰れる…)

「南雲君、逃げて!!」

突如として聞こえてきた雫の声。

「え…?」

気が付くと火球が一発ハジメの方に飛び…

彼の左目は外の世界を映すことは二度となくなつた。

「あゝあゝ アアアアアアアア!?」

ベヒモスから突如逸れた一発の魔法。

それは逃げようとしていたハジメの顔面に直撃し、彼の左目を潰してしまふ。

「ハジメ君!!」

「ハジメえ!!」

香織と大翔は慌ててハジメを助けようと走るが、なんと大きな揺れとともに橋が崩落を開始した。

錬成によつて大きく削られ、さらにベヒモスという巨体が暴れたことや魔法によるダメージがついに橋の耐久値を上回ってしまったのだ。

それでもなおハジメを助けようと動く香織と大翔だったが…

「く……………来るな!!!」

ハジメの強い口調に思わず止まってしまふ二人。

もうどうあがいても間に合わない。

仮に助けに来たとしても、そのまま二人も崩落する橋に巻き込まれてしまうのはハジメが一番わかっていた。

だから、ハジメは痛みにも苦しみながらも香織達が来ないよう叫んだのだ。

(ED あんなに一緒だったのに)

『今日から同じ学校だね！よろしく、南雲君！』

あの日、桜が舞う空の下で初めて一緒に登校した日。

『そういえば、部活の課題やってきた？自分なりに新作の模型を作れて…私？私はね…このSDのインパルスとエクシア！』

楽しい日々は1年生の間だけでも数え切れなかった。

『ごめんね…私、やっぱり一緒にはいられない…………』

『離して…私がいると、南雲君が傷ついちゃう…それが、私は一番嫌なの！』

幸せな思い出だけじゃない。

彼女の涙を見たとき、自分自身が許せなかった。

この世の何より、自分が憎く思えた。

(ああ……………ごめん)

崩落する橋に巻き込まれ、視界から消える直前に見えた彼女の顔は

…

彼が一番嫌だと感じた、泣いている姿だった。

(ごめん…香織さん………僕、また君を泣かせて…)

意識が途切れ、ハジメの体は奈落の底に消えていく。

橋から落ちたハジメに手を伸ばし、香織は目の前の現実に声を失い

…

「ハジメくうううううん!!!」

オルクス大迷宮に少女の悲痛な叫びが木霊するのだった………

第15話 決意、固めて

気が付くと香織はベッドの上…ホルアドの宿ではなく、王宮で割り当てられた部屋にいることに気がついた。

「香織…目が覚めたの!?!」

横には泣きそうな表情の雫がいる。

「雫ちゃん…? 私…」

寝ぼけているのか、香織は自分がなぜここにいるのか思い出そうとする。

ホルアドの町で訓練のため泊まり…

オルクス大迷宮で戦い…

その中でトラップにより65層に飛ばされ、ベヒモスを足止めするためハジメが戦い……

「——っ! ハジメ…君…!」

思い出した。

誰かの放った魔法がハジメの左目を潰し、彼はそのまま自分達を助けた代償として橋の崩落に巻き込まれ…

奈落の底に消えてしまったことを。

「放して! ハジメ君が! ハジメ君がああ!!」

奈落の底に飛び降りんばかりに叫ぶ香織を龍太郎と大翔が抑える

が、力自慢の男子二人がかりでも抑えきれなかった。

「落ち着け香織！南雲はもう無理だ！ここは撤退しよう！」

それは光輝なりに彼女を気遣ったつもりの言葉。

だが、それを聞いて香織はますます暴れだす。

「無理って何？ハジメ君を早く助けないと！！私が助けるって！約束したの！！」

そんな中、突如として香織の意識が途絶える。

後ろを見ると、宗一が手刀で気絶させていた。

倒れる香織を大翔が支え、光輝は宗一を睨むが険しい顔になった宗一に怯む。

「こうでもしないと白崎はマジで飛び降りかねないだろ。文句言うヒマがあるならさっさと撤退しろ！」

宗一の強く握り締めた手からは血が流れており、光輝はこれ以上何も言えなくなる。

だが…

「…どうして……どうしてお前が！」

雫の怒りを押し殺したような声に全員が彼女のほうを向く。

彼女の視線はたった一人：ハジメを攻撃した魔法を放った男に向けられてた。

「檜山！！どうして……どうして南雲君に攻撃したの！」

雫は剣を檜山の喉元に向け、その殺気に周囲の騎士達でさえ怯む。

「な、何言ってるんだ！どうして俺が撃つたつて言えるんだよ！」

「この目で見たからに決まってるからじゃない！私だけじゃない、大翔も遠藤君も清水君も優花も、皆がお前の違和感に気づいてるの！」
ハジメを援護するべく放たれた魔法は早く撃つことを考え、一番適性の高い魔法を選んでいた。

にも関わらず檜山の詠唱は一人だけ2節長く、そこから彼が本来の適性である風属性ではなく、火属性の魔法を撃つことに気づいたのだ。

「前々から南雲君に暴力ばかり振るってるから、私達はみんな目をつけてたのよ！」

なおも詰め寄る雫に対し、光輝が割って入る。

「ま、待ってくれ雫！檜山が南雲を攻撃なんてする訳無いだろ！俺達は仲間なんだ。どうして仲間同士でそんなことする必要がある!?あれはどう見たつて檜山の魔法が暴走した事故だろ！」

光輝は雫の証言すらも間違いだと否定する。彼にとつて『仲間割れ』など現実には自分たちの周りで起こるわけがないものであり、仲間割れをするのはいつも『悪』だからだ。

それでもなお言い争いがヒートアップするなか、レイが光輝と雫の一触即発の空気を止めるべく間に入り込む。

「お前達、言い争いはそれくらいにしろ！こいつの処遇は生きて返してから決める！」

有無を言わせない迫力に2人が押し黙ると、メルドを先頭に彼らは上層へと歩き始めた：

「その…助かりました、レイさん…」

「いや…俺達は蔑まれこそすれ感謝されるようなことなどしてない」

そう言いながら歩くレイに、大翔は何も言えなかった…

「じゃあ…あれから5日も経ってるの…?」

「ええ。南雲君が死んだことと、貴女が目を覚まさないことを考えて昨日の昼に私達はホルアドから王都に戻ったわ…」

そこまで聞いて、香織はあることに気が付く。

「…ねえ、雫ちゃん…檜山君が、ハジメ君を攻撃した犯人なんだよね…?」

小さく頷く雫。

「…なら、それについて明確な罰は下ったんだ」

その言葉を聞いた瞬間、雫は唇から血が滲むほど強く噛み締めた。

「……………雫ちゃん?」

「残念だけど…檜山はまだ無事よ。だって……………光輝と教会、それにこの国が許したんだもの」

「…え?」

雫の言葉に香織が顔を上げる。

昨日の昼。

騎士団によって監視されていた檜山は一度クラスメイト達と顔を合わせた時に土下座をしたのだ。

「すまねえ!俺のせいで南雲が死んじゃって……………でも、あいつを狙ったわけじゃないんだ!頼む、信じてくれ!!」

額に頭を擦りつけるように土下座をする檜山だが、香織とハジメを除いた模型部員からの視線は厳しい。

他のクラスメイト達はどうしていいか分からずにいたが、そこに光輝が入ってきた。

「檜山…本当に南雲を狙ったわけじゃないんだな？」

「あ、ああ！」

「なら、どうして火の魔法なんて使った？」

光輝の質問の答え次第では彼も流石に光輝を欺くことは不可能だろう。

わざわざ適性の高い魔法を選ばずに行動したことで光輝にまで疑いをかけられてしまったら檜山はどうあがいても無実を勝ち取ることなぞできない。

「…あの時、ベヒモスの目が潰れて発狂してるのを見たら…今なら強い威力の魔法をぶち当てれば倒せると思ったんだ。だから…威力の強そうな火の魔法を飛ばした」

だが、そこから帰ってきたのはあまりにもおざなりな返答。

「すまねえ八重樫！俺、あの時慢心してた！これなら倒せるかもなんて勘違いして…」

『慢心』『勘違い』

あの危機的状況の中で誰もそんな余裕などあるわけがない。

それに緊急時に適性魔法を使うことは二週間の訓練でみっちりと教え込まれており、その理由も合理性も身を持って誰もが実感していた。

しかし、その苦しい言い訳は人の心の善性を無条件に信じている彼にとって信用に足る理由となってしまうのだ。

「檜山……よく、自分から話してくれた」

光輝は檜山を『許した』のだ。

謝罪をした。ただそれだけで一人の人間を殺め、一度は逃げようとした男を。

「お前は取り返しのつかないことをした。もう南雲は戻ってこない。その結果を引き起こしたとお前は理解しているな？」

「ああ……ああ……」

涙を流して頷く檜山を見て、光輝は立ち上がる。

「みんな！やっちゃってしまったことは仕方がない。思うところはあるかもしれないが、いつまでも一つの失敗を咎めるべきじゃないんだ！そんなこと、死んだ南雲も望んじやない」

「今俺達が為すべきことは、これ以上の悲劇を起こさないため檜山の失敗を許し、南雲が繋いでくれた命を精一杯生かすことだ！そうだろう！？」

光輝の語る美談に多くのクラスメイトが仕方なく受け入れようとする中、それを大翔が遮る。

「ちよ、ちよつと待てよ天之河！いくらなんでもおかしいだろそれ！大体、適性に関してあれだけ勉強しておきながらそんな言い訳通るはず……」

「おかしいのは君だ、龍峰！もう檜山は失敗を認めただ！友達を失って辛い気持ちはわかるが、これ以上不必要に責め立てる必要などない！」

だが、光輝は土下座までした檜山の行動を見て彼が本気で罪を認めたと思ったのか大翔を逆に責め立てた。

なお、檜山が土下座をしたのはちょうど自分を警戒していたレイ、メルド、宗一が留守のタイミングだったりする。

「お前…本気で仲間だと思ってるなら、こんな程度で許していいはずねえだろうが!!」

光輝にのしかかり、殴りつける大翔。

だが、それを遮るかのように騎士団とは異なる鎧を纏った集団：『神殿騎士』達が大翔を押さえ込む。

「な、なんだよお前ら!!」

「黙りなさい。勇者様に危害を加えるなど、見過ごせるわけがない!」

やがて大翔は部屋から連れ去られ、牢に数日感拘留されることとなってしまう…

「そんな…じゃあ、檜山君は未だに野放しってこと!?!」

「それだけじゃない…今後共勇者の仲間として迷宮探索の最前線に立つことになったわ…光輝いわく、それが償いですって…」

その答えに香織はベッドに倒れ込み、雫は何もできない悔しさから拳を握る。

「……………今、みんなは?」

「…今のところ、迷宮に再挑戦する意思を固めたのは光輝達のチームと檜山達のチーム、そして遠藤君の友達の永山君達くらいね。ほとんどの生徒はもう戦いたくないって引きこもってるわ」

それに…と雫は続ける。

「大翔は今回の一件のせいで私達のパーティーから外されて、今後は教会の騎士達の監視下に置かれる。遠藤君は永山君達のほうが心配だから迷宮組に加わるみたい…優花は、しばらく立ち直れそうに

ないわ。そして……………清水君はこの王宮を出て行くって」

数時間前の清水とのやりとりを雫は思い出す。

「本当に出て行くの…?」

「ああ。もう天之河にもこの国にもついていけねえよ。それに…」

荷物をカバンに詰め込んだ清水は雫のほうを向く。

「俺がああのクラスにいたのは、南雲への恩もあつたからだよ。あいつを殺しておきながらヘラヘラ言い訳するあのクズにも、それをいい話風にして許したあの馬鹿勇者にもそれを許容した連中にもウンザリだ」

そう言う清水の目は本気であり、彼の考えがわかった雫は何も言わない。

「…これから、どうするつもり?」

「んー……………とりあえず王都で冒険者登録したら、今回の冒険でちよろまかした素材だの魔石を売り払うよ。メルドさんから侘び料も貰えたし、そこそこ立派な宿に泊まっても当面生活に困ることはないだろうからさ」

そう言う清水はベルトにガンプらの入ったケース…チーム結成の記念に皆で揃えたものを通すとカバンを肩にかける。

「じゃあな、八重樫。一年半、世話になった」

「うん…清水君も、体に気をつけて」

軽く手を振ると、清水は部屋を出ていき…主を失った部屋にただ一

人、雫だけが残された。

「…………ビルドステイニー、すっかりバラバラになっちゃったわね」

雫から事のあらましを聞いた香織は、やがて覚悟を決めたように顔を上げる。

「…………雫ちゃん。私、これからやるべきことがわかった気がする」

「私、もう一度大迷宮に戻ってみる。ハジメ君を探すために」

「香織…南雲君はもう——」

『死んだ』。そう言おうとしても躊躇ってしまう。

そんな雫の考えを察してか、香織は小さく首を振る。

「私、信じたくないだけかもしれない。まだ生きてるなんて…そんなの、奇跡でも起こらない限りありえないって。それでも…私はハジメ君を探す」

「もしハジメ君が死んでたとしても…私はあの真つ暗な迷宮の中で一人ぼっちになんてさせたくない。どんな形であれちゃんとハジメ君を、愁さんや董さんの待っている場所に連れて行ってあげたいから」

その瞳に宿ったのは、ただ泣き崩れるだけの少女ではあり得なかつ

た強い決意。

「だから…力を貸してください、雫ちゃん…」

「そんなの…当たり前でしょ」

雫は香織の手を掴み、香織は立ち上がる。

冷静に考えれば、香織の言うことは妄言と切り捨てられるかもしれない。

なにせハジメのステータスはこのクラスメイトの中で一番低く、さらにあの時戦っていたのはこれまで到達者が全くいなかった65層。

そこから落ちた以上、仮に無事であっても光輝達ですら苦戦した魔物以上の存在がうろつく場所で生きているなど考えられない。

それでも、香織はそのあまりにも小さすぎる希望に賭けて再び立ち上がろうとしている。

「香織にそこまで頼まれて、首を振るほど私は薄情じゃないわよ？それに……もし皆が揃ってたら、きっと同じことをする」

バラバラになってしまったビルドデステイニー。

だが、香織も雫ももう一度信じてみようと思った。

いつかまた、皆で揃えるようになる日が来ることを…

「今は二人しかないけど…『あれ』、やるわよ！」

「うん！」

ハジメがかつてやっていたように、香織と雫はお互いの手を重ねる。

「白崎香織！ガンダムエクシア・フリーユージェル！」

「八重樫雫！フリーダム・ブレードマスター！」

「チーム・ビルドデステイニー！」

「運命を切り開く!!」

決意を新たに、少女は再び戦う意志を示した…

一方、牢獄に入っていた大翔は…

「すまないね…彼らは少々頭が固いんだ」

暴行を受けたのか顔に痛々しい傷を残す大翔は声を掛けてきた騎士を見ようとせず、小さく舌打ちをする。

「全く…少しばかり話を聞いて欲しいものだ」

君もまた『モビルスーツのパイロット』なら、同じように戦ったものの話くらい聞いてくれてもいいんじゃないか?」

その言葉を聞いて、大翔は顔を上げて絶句。

「なんで……………どうして、あんたがこの世界にいるんだ…？」

「さあ？だがね…私の目的は決まっている。この窮屈で狭い世界から、自由を得る……………そのために」

騎士は大翔にある『石』を渡す。

「これは…？」

「アーティファクトさ。ただ…その使い方はまだ秘密だ。もしその使い方を知る人間と出会えなければ、いずれ私が教える」

そう言うと、騎士は鍵を外す。

「君の身柄を預かるのは我々ではなく、君の恩師の畑山愛子になった。他の騎士の監視はつくが、そっちのほうが自由に動きやすいだろう」
そう言うと騎士は牢獄の扉を開け、大翔とともに外に出る。

「あんた…どうして俺に力を貸す？」

「そうだな……………私は、いずれ『私の悪魔』を取り戻す。そのために…」

騎士……………『マクギリス・ファリド』は静かに笑うのだった…

そして…『真オルクス大迷宮・第1層』では…

「くっ……………ああ……………」

左目に包帯を巻き、骨が見えるほど抉られた左腕を抑えたハジメが虫の息で倒れていた。

「死んで…たまるか…!!」

第16話 魂が軋む時

「ぐっ……あ……」

真つ暗な空間。他に生者の気配がない暗闇の中で南雲ハジメは完全に見えなくなつた左目の痛みと骨がむき出しになつた左腕の痛みに呻きながら倒れていた。

(どうして……)

全ては、数時間前に遡る……

橋の崩落の中でハジメは地面に叩きつけられるより先に、横穴から吹き出していた水の流れに飲み込まれた。

本来ならば地面に激突して転落死するはずが、その水流によってウォーターライダーの要領で流され、気が付くと真つ暗な川の中で目を覚ましたのだ。

「僕は……生きてるのか……?」

何とか川から出たハジメは体の節々の痛みと左目の激痛に顔をしかめながらも焚き火をして服を乾かし、衣服の一部を破いて左目部分に眼帯のように巻きつけるなどの応急処置を行い、脱出経路を探していた。

しかし……そこはハジメが想像していたよりも遥かに危険な魔境。

ハジメは偶然にも出会ってしまった白いウサギのような魔物(ただし、その大きさは中型犬並であり太い脚がその異常な脚力を現している)の襲撃を受け、左腕を骨折。

だが、彼の悲劇はこれだけに留まらなかった。

「っ……!!」

自分を圧倒したウサギの魔物『蹴りウサギ』が一瞬にして肉塊になり、眼前に現れた白い毛皮の怪物……この階層のボスである『爪熊』に

よって捕食。

ハジメはすぐに逃げようとするが、一瞬だけ脳内に『左腕を切断される未来』が見え、咄嗟に右に跳ぶ。

「ぐう………あああああ!?!」

切断こそされなかったものの、ハジメの左腕は二の腕部分の骨が剥き出しになっており、ハジメは過去に味わったことのない激痛にパニック状態になる。

「く、来るな！来るなああああ!!!」

ハジメは無我夢中で拳銃を取り出し、残った2発の弾丸を放つも爪熊の皮膚に小さな傷を与える程度で大したダメージにはならない。

「う………うわああああああ!?!」

咄嗟にハジメは近くの岩壁に手を当て、逃げ道を作るべく錬成を発動。

「れ、錬成!!」

頼みの綱の武器のうちクロスボウは流されてしまい、拳銃も弾丸を全て撃ち尽くした。

残されたのは唯一まともに使える魔法ただ一つ。

「錬成！・錬成！・錬成！」

ひたすらに魔法を使い、ハジメは奥深くまで穴を作りながら後ろに壁を作り、逃げ続ける。

今彼の頭の中にあっただのは、あの恐ろしい咆哮をあげる爪熊から逃げることだけ。

それだけを必死に考え………やがて魔力が尽きたのか、ハジメの意識は闇に消えた…

それからどれほどの時が経ったのか…

痛みに呻くハジメは気が付くと腕の痛みと出血が止まったことに気が付く。

「僕……生きてるの……？」

ハジメは辺りを見回して、ギョツとする。

何故なら、周囲には自分の血がベツタリと付着しておりどう考えても致死量の出血だったからだ。

どうして自分が生きているのか考えるハジメは、ここでもう一つの違和感に気が付いた。

「腕の傷が……治ってる」

骨が見えるほどの深い傷が跡も残らず治っていたのだ。

どうしてなのか気になったハジメは周囲を見ると、天井から垂れてくる小さな水滴に注目した。

「これが……？」

水源を調べようとハジメは錬成をかけ続け……そこから出てきたのはある二つの鉱石。

一つはサッカーボールより一回り大きいサイズの水晶のように透き通った鉱石で、どうやら水の出処はこの鉱石らしい。

「鑑定にも感知しない……でもこれ、前に凶鑑で見た……」

ハジメの脳裏によぎったのは幻の鉱石と言われる『神結晶』。

歴史的に見ても最大級とされる秘宝で、自然界の魔力が数千年に及ぶ魔力を蓄積して誕生する鉱石。

その力は魔力貯蔵であり、その魔力が長い時間をかけて自然に液体化して流れる。

ハジメが先程から口にしていた水こそその魔力の液体であり、『神水』と呼ばれている。欠損部位を再生することはできないが、これを飲めば怪我も病も治癒出来る上、飢え死にすることも無いと言われるものだ。

「でも……この鉱石は……？」

もう一つの鉱石はビー玉ほどの大きさしかないが、その石から溢れる底知れない力にハジメは引き寄せられていた。

しかし、ハジメの知識を持ってしてもこの鉱石の正体はわからず、彼はその鉱石を一度保管することにした……

その時

『グウウウルルル……』

「っ!？」

穴の向こうから聞こえる獣の唸り声。

あの爪熊が外にいる以上、ハジメはこの空間から出ることができなくなっていた。

(外に出たら……今度こそ殺される!)

あの時はなんとなく動きがわかったから切断こそされなかったが、次は腕一本で済むとは思えない。

あの魔物から感じた自分を『餌』としてしか見ていない目を思い出し、ハジメは壁に寄りかかって座る。

もはや、彼に戦う意思など残っていなかった。

(誰か………助けて……)

口にすら出す気力がない。

ハジメの思いは誰にも届くことはなかった。

あれから7日。

ハジメが持ち込んでいた食糧はどうに底を尽き、神水を飲むことで命を繋いでいた。

しかし、あくまでも神水の効果は服用したものの命を繋ぐだけで、空腹感を満たす力はない。死なない分、彼が感じる苦痛もより長く辛

いものになっていた。

(どうして……どうして僕がこんな目に……?)

誰とも会話をする事のない空間で過ぎつていた疑問。

『このヲタ野郎が！お前なんか学校来たって何の意味もねえ癖によ
！』

神水の力で鮮明になった頭が、より辛い過去を思い出させる。

『南雲。君が無理に香織達を模型部に勧誘なんかするから2人とも迷
惑しているんだ！』

(うるさい……君に何の関係もないじゃないか)

過去の記憶の幻影に苛立ちの籠った視線を向けるハジメ。

そんな状態を抜けようと、ハジメは神水の服用をやめて死のうとす
る。

(もういい……こんなことなら、死んだほうが……)

それから三日。

飢餓感と目の傷の疼きに心を削られ続けてなお死ねないハジメ。
発狂すらできない苦しさに彼は必死にもがき苦しんでいた。

(まだ……死ねない……早く……死にたい……死にたく……な
い……?)

死を望む心と望まない心。

その二つがハジメの心の中でせめぎ合い、彼の考えもはや普通で
はありえないものになっていく。

ハジメが奈落に落ちてから12日。

死にたいと思いながらも微々たる量の神水を口にしていたハジメだが、それでも到底効果が見込めないほどの量しか飲んでいない。だが、その中でハジメの心に変化が訪れる。

生と死。二つを望む矛盾した心の中に真つ暗な感情が湧き上がってきた。

(なんで…なんで僕がこんなところで死ななきゃならない…?)

(神は…エヒトは僕達を理不尽に誘拐した)

(ウサギは僕を殺そうとした…)

(熊は僕を食おうとした…)

(…クラスメイトは、僕を裏切った…見捨てた…)

(やったのは誰だ……きつと、あいつしかいない…)

多くの憎しみの感情が止まることなく溢れ、ハジメの心をどんどん漆黒に染め上げる。

13日目。

(誰も来てくれない…)

(助けなんて求めても無駄だ…なら、どうする?)

(痛みも苦しみも、どうすれば消える?)

苦痛から解放されたいと望む思いが、全ての感情を壊していく。

憎悪に心を支配しているより、生き残ることを…それ以外のものを削ぎ落そうと考えるようになる。

「…『俺』はなにを望んでる?」

——俺は生きること望む——

「それを邪魔するのは…誰?」

——それは敵。俺にとって邪魔をする存在——

「邪魔者…敵…理不尽を押し付ける全て…」

——なら、俺は何をするべきだ?——

「僕は…俺は…」

—「そんなの、決まっている」—

14日。

ハジメの心から余計な感情が消えていく。

神の理不尽に対する怒りも——クラスメイトや魔物への憎悪も

…

一緒に笑い合っていた仲間の顔も…

大切に思っていたはずの誰かの笑顔も…もう、どうでもいい。

俺は…生きたい。生きて元の世界に戻る。

それを邪魔する奴らは全て敵だ。

「敵は…：…：…全て殺す」

敵は殺す。

その明確な意思がハジメの頭を支配しようとしたとき——

ハジメのカバンから落ちたのは、小さな二つのケース。

何らかの拍子に落ちたのか、そのケースに視線を送ったハジメの脳裏に『あの日の記憶』が蘇る。

『不安な時、いつもこのエクシアをケースに入れて運んでたんだ。これさえあれば、ハジメ君の勇気を少しだけ分けてもらえる気がして』
月光の光に照らされた少女の笑顔が彼の記憶の中から蘇る。

「……………あ……………」

ハジメは無意識にケースを掴み、その中身を開いていた。

『お守り。明日の訓練、もし私が間に合わなくても、ハジメ君が無事に帰ってこれるように…』

「エクシア…フリーユージェル…」

それは、少女との約束の証。

二人の絆のきっかけでもあった。

その中でハジメはケースの中から一通の手紙が落ちたことに気が付く。

「ハジメ君。この手紙に気づいてくれたかな？ 実は……………直前まで

ハジメ君が迷宮に行くのを止めようかずっと迷ってました」

「それでも、きつと君は戦うと思う：普段は大人しいけど、ハジメ君は一度決めたことは貫き通すってわかってるから」

そこに綴られていたのは、香織からのメッセージ。

「正直に書きますと、私はハジメ君のことがずっと前、最初に出会った時から気になってました。誰かの為に頑張れる、その強い心は私の憧れで：インパルスと空を飛ぶ姿が綺麗で、一緒にいるうちに、本当の気持ちに気づきました」

「文字にするだけじゃありません。何度だって言います。」

私は、あなたが好きです。この世で一番、南雲ハジメ君が大好きです。もしこの手紙を読んだら、その返事は直接あなたの口から聞きたい……」

「いつだって待っています。この手紙に気づいて、あなたの本当の気持ちを聞ける日まで：私はいつまでも待っています」

最初に出会った時、思えば既に好きになっていたのかもしれない。

一緒に学校に通うようになり、彼女の天然な性格に振り回されることもあった。

それでも、彼女と一緒に学校生活や部活をする日々は充実していた。きつと、あの日に会話をしなければこんな関係にはならなかったと思う。

「これ………」

ハジメは自分のケースの中に入れていた写真を取り出す。

去年、3年生が引退して新チームを結成したとき。

皆で撮った写真だった。

「大翔…」

小学生の頃からの友人。

GBNの世界に自分を連れ出してくれた、大切な親友。

「清水君…」

出会いはお世辞にも良いとは言えず、何度もぶつかりそうになった。

でも、今では大切な友達だと胸を張って言える。

「遠藤君…」

クラスの端で落ち込んでいた。

GVRでは正直やりすぎなくらい暴れて、でもそれが彼らしいと思えた。

「園部さん…」

弟のガンπρα作りを手伝って欲しいというところから始まった関係。

いつの間にか彼女もまた、仲間になっていた。

「八重樫さん…」

大翔が好きになった少女で、彼女の世話に何度なっただろうか？
その恩をまだ返せていない。

「香織…さん…」

写真の中の自分と腕を組むのは、誰より大切に思っている相手。

彼女の笑顔は何よりも力になり、彼女の悲しい涙はどんな痛みより辛かった。

気が付くとハジメの意識は真つ暗な空間の中にあつた。

そして、目の前には鋭い目つきをした瓜二つの存在…もう一人の自分がいる。

『お前…正気か？なんで俺を受け入れない？敵は殺す。それが出来な

きやお前は破滅するだけだ』

もう一人の自分の言葉をハジメは真つ向から否定する。

「違う！例えそうしても、その先に何かがあるんだ！目の前の全てを壊して…大切な誰かの命も壊すだけだ！」

『それが甘いんだよ。その感情は必要か？情に絆されて戦う意思を切り捨てる…馬鹿のやることだ。この奈落で生き残るために俺を受け入れる。それが必要な変化だ』

もう一人の自分…まるで『魔王』のような雰囲気すら醸し出す自分に怯みながらもハジメは一步も退かない意志を示す。

「そうかもしれない…でも、それで僕達は本当に幸せになれるのか？怒りも、苦しみも、喜びも、誰かを大切に思う心も！それを捨てて力だけ強くなるのなら、そんな力なんていらぬ…！」

「僕は…大翔や香織さん、みんなと一緒に地球に帰りたいんだ!!」

「うううああああああ!!」

ハジメは岩壁に頭を打ち付け、正気を取り戻す。

「そうだよ…忘れちゃいけない…」

思い出すのは、香織の最後の顔。

「泣かせたままで…いいはずないだろう！」

大切な少女の笑顔を見たい。

ただそれだけの思いが、少年の崩壊しかけた心をより強く、より強靱に、そしてより優しく造り変えた。

「僕は…必ずこの迷宮から脱出してやる！そして………」

ハジメは近くの岩壁に触れ、そこから一本の剣を錬成。

「もう一度…君のもとへ…！」

第17話 力と種

「あゝ……どうしよう」

精神の崩壊という最悪の事態を乗り越えたハジメだったが、現在彼は一番の悩み……『空腹』に頭を悩ませていた。

「食料はもう食べきったし……この階層に食用の植物なんてあるわけないし……」

（こうなったらもう魔物を食べるしか……でも、魔物を食べたなら……）

もし魔物肉を喰らえば、肉の内部の魔力によって肉体が崩壊して死に至る。

「………そうだ。あれなら」

ハジメが思い出したのは、あらゆる傷を癒せる神水の存在。

肉体の崩壊が起きても神水を飲むことでその崩壊を食い止められるかもしれないとハジメは考えた。

「………だったら、やるしかないよね」

どうせこのままだと飢えるだけであり、神水を服用してもこの苦しみが続くのみ。

ハジメは覚悟を決め、錬成した剣と幾つかの武器を準備して再び隠れ家から出ていった……

それからおよそ一時間後。

ハジメは錬成で仕掛けた罠を張って魔物……雷を飛ばす狼型の魔物を3体ほど罠に仕掛け、剣やドリル状の槍などの武器を使い仕留める。

この際、新たに仕掛けた罠の場所で狼の血抜きを行っていた。

万が一他の魔物が近づいても血の臭いを一箇所に集めておくためのハジメなりの仕掛けである。

「お、重い……………」

どうにか苦勞して魔物の死体を隠れ家に連れて行ったハジメは、ナイフを使って狼を捌き、近くで削り出した鉱石を使い火を起こす。

ハジメが着火に使ったのは拳銃の弾丸の材料として以前使っていた希少鉱石の一つ、『燃燒石』。

王都にいた頃はこの鉱石の特性を利用して火薬の代わりを果たせるよう粉末状にするなどして弾丸を作り、拳銃完成に大きく貢献していた（なおあまりに少なかつたため弾丸の威力が落ちる理由の一つになつてしまったことを追記する）。

この奈落だと頻繁に見つかるため、ハジメはこれ幸いと言わんばかりに燃燒石を使い着火剤として使っている。

火をしっかりと目に炙つて色が変わるくらいまで待つこと数分。

大丈夫と判断したハジメはおよそ二週間ぶりの食事を行う。

肉は筋っぽく、お世辞にも美味しいとは言えないもの。

焼いた時に嫌な臭いがして顔をしかめたものの、生肉を齧っていたらと思うと悪寒がしたハジメは一心不乱に目の前の肉を食べていく。

そして……………」

「はあ…食べ………………っ!?ぐ、あああああああ!?!」

突如として全身に痛みが走り、声を上げるハジメ。

内部から体が崩れ、違う何かに侵食されていく感覚に絶叫しながらもハジメは用意していた神水を飲むが…

「な、なおらな…ぐううう!?!」

修復されるそばから肉体が崩れていき、ハジメは自身を襲う痛み回転げ回りながら叫ぶばかり。

どれほどの時間が過ぎたのか、ハジメは痛みが引いたことでようやく脱力する。

「ああ…死ぬかと思った…」

落ち着いたハジメは自身の腕を見ると、魔物のように赤黒い線が浮かび上がっている。

「うわ…これって魔物の特徴じゃ……………」

「って、なんじゃこりやあああああああ!?!」

顔を上げたハジメは神結晶に映っていた自分の姿を見て叫んでし

まう。

それもそのはず、日本人特有の黒髪は色素を失った銀髪にも白髪にも見えるカラーになっており、全身の筋肉も明らかに発達。右目も黒目から鮮やかな赤目になっており、腹筋も昔龍太郎を見て憧れた見事なシックスパックになっていて、ただでなく身長も10センチほど伸びているのか服が少しキツく感じた。

「これってもしかして…魔物肉の副作用？というかここまで肉体が変質したってことは…」

ハジメはポケットに入れていたステータスプレートを見て、現在の自分の状態を確認する。

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：8

天職：錬成師

筋力：110

体力：300

耐性：100

敏捷：200

魔力：320

魔耐：320

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+高速錬成」・S・E・

E・D・Xラウンダー・魔力操作・胃酸強化・纏雷・言語理解

「マジか…え？こんなにステータス上がってるの？それに…僕いつの間にXラウンダーに覚醒したの…？」

以前と比べて明らかにステータスの成長率が高い。と言うか異常なレベルだ。

技能も新たに追加され、しかもまだレベルは8。他のクラスメイト達の成長度よりこれでもまだ低い事を考えると、ハジメの成長限界も

どうやらかなり引き上げられたようだ。

「魔力操作：たしか、人間は魔力を扱うために魔法陣と詠唱が不可欠だったはず。ってことは…」

ハジメは体内に意識を集中させると、全身の赤黒い線が浮かび上がる。

そしてイメージを右手に集めると集まってきた魔力がハジメの装着しているグローブの錬成用魔法陣に集まったのか、魔法陣が光を帯びる。

試しにさっきの戦いで刃こぼれした剣の刀身に触れると、錬成が発動して新品同然のデザインに変わる。

「…やっぱり。魔物の肉を食べてその特性まで手に入れたってことなんだ」

その他に手に入れた能力について、『纏雷』は狼の固有魔法である電気を纏って飛ばすという技をある程度劣化させた魔法だということが判明。雷を纏うという特徴こそ変わらないが電撃を飛ばすことはできないものの、近接戦闘で使える技と考える。

そして胃酸強化だが、狼の肉を引き続き食べてもさっきのような変化が起こらないことから文字通り胃酸：どころか胃袋そのものが強くなったと解釈するハジメ。

その過程でハジメは自身の肉体に起きた変化をあらかた覚えていく。

1. 身長、体格ともに急成長を遂げる。
2. 髪色や瞳の色が変化し、さらに魔力操作の影響か肉体に赤黒い線が浮かぶように。
3. 食らった魔物の固有魔法及び魔力操作の技能、魔物肉への耐性を取得。
4. 魔物の魔力による影響か、自身の魔力光が空色から炎のような赤色に変化。

魔物の肉の影響で肉体が強化されたとはいえ、脱出の肝となるのはやはり自身が一番信頼を寄せる技能：錬成だ。

この数日の間でハジメはひたすらに周囲の鉱石を採取し続け、最終的に集まったのは洞窟の明かりとなる緑光石、火薬のような使い方ができる燃焼石、そしてこの階層で最高の硬度と靱性を持つタウル鉱石を発見。

「これなら…いけるー！」

ハジメは自身の武器である拳銃を、この階層の鉱石を使い大幅な改造を行った。

銃身には熱を持つほどに頑丈さを増すタウル鉱石を使い、弾丸も同様の鉱石を使う。

さらに弾丸には以前と違い惜しみなく注ぎ込んだ粉末状燃焼石を使うことでその破壊力と頑丈性、威力は桁違いなものになる。

ハジメにとって嬉しい誤算だったのは、すでに拳銃自体は完成させていたことだろう。不眠不休とはいえ、ノウハウ自体は既に体が覚えていたハジメはおよそ一日半で拳銃の改造を完了させ、実戦として後に魔物の蹴りウサギ相手に使用し、魔物の頭部を一撃で消し飛ばすという途方もない威力に過剰すぎたかと自分でも思ってしまった。

二日後。

ハジメは現在、蹴りウサギから得た新たな技能『天歩』と派生技能『空力』・『縮地』の練習を行いながらこの階層のターゲットを探していた。

(…この技能のおかげで空中戦もある程度可能になった。こういう時ガンプラバトルで空中戦やっておいて良かった…)

そんなことを考えながら拳銃：改造の末、ハジメによってドイツ語で『雷』を意味する『ドンナー』と名付けられた新しい相棒を握りながら走り続けていた。

「狼もウサギも、一度食べてステータスと技能を得たらそれ以上の大幅パワーアップは望めなかった：つまり、ここから考えるとより強い魔物を食べることでその技能を得て、変異した魔力の影響でステータスや成長限界が引き上げられるって仮説でほぼ間違いない」

そして、この階層では狼やウサギを除けば出てくる魔物はあと1種類。

すなわち…

「あとは、お前だ!!」

ハジメはドンナーと自身の纏雷を合成した『レールガンモード』で弾丸を放ち、こここの階層の主：以前ハジメの腕を食い千切ろうとした爪熊にリベンジマツチを挑む。

「お前を倒して…僕はその先に進む!」

S. E. E. Dが発動し、目の光が消えるハジメ。

ハジメの強い意思。

それに反応するかのように彼が首にかけていた青い宝石が淡く輝いていた…

第18話 その光、ガンダム

戦いが始まり、まず接近してきたのは爪熊。

その豪腕は魔物肉で二度の強化をしたハジメでもまず受け止められないほどの馬鹿力だった。

「これで！」

S・E・E・Dを発動させたハジメはドンナーを撃つが、爪熊は空中で身を捻りながらそれを躲す。

「こいつ…デカイ割に動きが素早い！」

爪熊が自身の自慢の爪を振りぬこうとし、それに対して反射的にハジメのXラウンダーの力が発動。

『あの時』同様避けるべく動く、距離をとったはずのハジメの腕に浅い切り傷が出来ていた。

「そうか…あいつの固有魔法は風の爪。それを自由に飛ばせるってことは…！」

ここでハジメは爪熊の固有魔法が風魔法を爪に宿してリーチを伸ばすものと推理。

ハジメは空中で足場を形成する蹴りウサギの固有魔法『空力』を発動。足場を空中に作り急激に方向転換しながらドンナーを撃つが、明らかに慣性を無視したとんでもない動きで弾丸を避けていく。

（やっぱりだ！あの風の爪を応用することで自身の動きをアシストしている！）

足元に爪の斬撃跡があったことから爪熊の能力、そして戦い方を推測していくハジメ。

想像よりも知性が高い強敵に警戒心を高めていくハジメはドンナーに素早く弾丸を再装填。

しかし、その一瞬の隙を狙った爪熊は刃をなんと飛ばしてくる。

「うわっ!？」

咄嗟にドンナーの反動で避けるものの、後ろの岩壁は鉄格子のように細かく刻まれており、一步遅かったら同じ末路を辿っていたと如実に物語っている。

(あの魔法、飛び道具にもなるのか…ほんとに隙がないな、この熊…)
豪腕だけでなく、俊敏で知恵も働く。

さらに固有魔法は近接戦だけでなく中距離でもかなり活躍する。
流石にこの階層の主と言うだけのことはあるのだろう。

「なら…これで！」

ハジメは小さな石ころを取り出し、爪熊の足元に投げつけるとさすがにドнна―で破壊。

すると石は大爆発を起こし、爪熊が怯んだ。

「よー！」

ハジメが使ったのは薄く錬成した鉱石に粉末状の燃焼石をギリギリまで詰めた簡易爆弾。

威力はそこまで高くないものの、相手を怯ませるには十分な威力があった。

「はあああああ!!」

叫ぶハジメはドнна―を発砲。

さすがに怯んだ状態で避けることは叶わず、足に掠ってダメージを受けた爪熊。

だが、爪熊はそれでもお構いなしにハジメにタツクルをしかけ、その直撃を受けたハジメは大きく転がる。

「がああっ!?!」

ドнна―を落とし、受け止めようと眼前でクロスした両腕に言いようのない鈍い感触が響いて激痛が走る。

両腕を骨折したハジメは壁に激突し、倒れてしまった…

「し、しまった…ドンナーが…！」

武器を落とし、倒れ伏すハジメ。

神水を飲むにも、そんな隙を爪熊が与えてくれるはずもなく爪熊の斬撃から致命傷を避けるべく走って逃げるのが精一杯だった。

(失敗した…！こんな所でミスするなんて…)

錬成で神水用の器を作るなり歯に仕込むなりするべきだったと考えるハジメだが、既に遅い。

爪熊の斬撃はやがてハジメの脚にも深い傷を与え、倒れてしまう。

(こんなにあっさり…終わるのか……いや！)

「まだだ…まだ終わって、たまるか!!」

繋いだ命を消したくない。もう一度、『彼女』達と再会するまで死ねない。

…
そんな彼の思いに共鳴するかのようには、『鉱石』は輝きを増していき

(BGM 崖つぷちのヒーロー)

「うおおおおお!!!」

ハジメは無我夢中で痛みが走る右腕を動かして抵抗しようとして…

その腕が『白い機械的な腕』に変化し、爪熊を殴りつける。

「グウウオオオオオ!」

殴り飛ばされる爪熊だが、ハジメは自身の両腕の変化に驚きを隠せない。

「この腕……インパルス?!」

その白い腕は、自身の使うインパルスガンダムと同じ形をしていたのだから…

だが、考える前に爪熊が再び怒りを頭にした顔で襲いかかってくる。

「くっ!これはどういう…」

攻撃を避けながら必死に考えるハジメは、自分の首に掛けていたペンダント…正確には神結晶と一緒に見つけた謎の鉱石を思い出す。

首元にかけていたペンダントの石は、どんどん輝いていく。

「輝いてる…もしかして、これが?」

わからないが、今考えられる可能性はこれしかない。

ハジメはインパルスの力…使い慣れた『武器』を咄嗟にイメージすると右手に武器が実体化する。

(魔力が持つていかれる感覚が固有魔法の比じゃない…ここで決めないと、多分負ける…)

ハジメは実体化させた武器『ヴァジュラ・ビームサーベル』を握るとビームの刀身が作られ…

「グウウオオオオ!!」

「はああああああ!!」

爪熊の放つ風の爪をギリギリで躲そうとして頬を掠め、ハジメはヴァジユラ・ビームサーベルを突き出して…

ビームサーベルの先端は、見事に爪熊の心臓を貫いていた。

「はあ……はあ……」

息を切らし、爪熊の死と共に座り込むハジメ。

気が抜けたのかインパルスの腕は元に戻り、ビームサーベルは消滅。

その直後、体を酷いダルさが襲う。

「これ……こんな魔力削るんだ……」

倦怠感に顔をしかめながらもハジメは体を引きずって近くに置いていたポーチを拾い、中にあつた神水を飲む。

魔力と体力を急速に回復させたハジメは爪熊の毛皮を剥いで肉の一部を食用として持つていこうと作業する中、先ほどの現象について思考を巡らせる。

(どうして…僕のガンプラの装甲が腕に…それに、イメージしたビームサーベルまで…)

「ビーム兵器なんてこの世界じゃ到底作れないはず…なのに、この石を身につけたことでそれを現実のものにした…」

ハジメはペンダントにそつと手を伸ばし、今の現象について思考を巡らせる。

「……………この石、もしかしてとんでもない代物…?」

青く美しい輝きを見せていたその石は、先ほどと異なり金属質の輝きを持つようになった…

一方、宿場町ホルアド。

光輝や香織達といったオルクス大迷宮に再びチャレンジするため集まった神の使徒達は以前と同じ宿に宿泊し、明日からの迷宮での訓練に備え眠りについていた。

だが…

「……………わざわざこんな夜中に呼び出さなくてもいいだろ」

不満げな表情を見せ、裏路地に顔を出してきた檜山。

その前には黒いローブを被った『クラスメイト』がいる。

「いや、だって僕と檜山君が一緒にいたら変な疑いかけられちゃうでしょ? 君、光輝君や君のお仲間の信用は得てるけど他のみんなからの信頼度は地に落ちてるわけだし」

そう言われ苛立ちの表情を見せるが、檜山は相手に対して強く出ることができない。

何せこの黒ローブのクラスからの信頼は高い。もしコイツがあらぬ疑いを自分にかけてきたら、間違いなく今度はただで済まない。

なにせ、今度は光輝を納得させられる『生贄』^{ハジメ}がないのだから…

「そんな怖い顔しないでほしいんだけどね…まあ暫くはあいつらと一緒に行動すれば大丈夫だよ。今回は余計なことしないようにって釘刺しに来ただけ」

そう言つて黒ローブは帰って行く。

「……………クソがつ!!」

檜山はイライラが募つて近くの箱を蹴り飛ばす。

元々檜山にとってあの黒ローブの存在は誤算だった。

なにせ、ハジメを狙つたところを黒ローブはハッキリと見ていたのだから。

光輝のおかげで事故という扱いにできたものの、黒ローブがもし『故意だったことを聞いたけど脅迫されて言えなかった』など吹き込めば、今度は自分が光輝にとっての『悪』にされる。

そのリスクを考え、檜山は黒ローブに従い続けていた。

(…でも、ようやくここまで来た)

だが、檜山にとって黒ローブに知られたことはデメリットばかりではない。

なにせ、黒ローブは自分の計画の報酬に『香織を自分のものにさせてくれる』と言つたのだから。

ハジメの生存をまだ信じて行動する香織がもしハジメの死の証拠を掴んで傷心したとき、黒ローブの協力で香織の自分への好感度を高めさせて香織の心も体も自分のものにする。

そんな下劣な欲望を抱き、檜山は黒ローブと手を組んでいた。

(南雲…頼むから死んでくれよ…俺が白崎を助けるために…)

月光に照らされた檜山の顔。それはあまりにも醜く歪んでいたのだった…

第19話 月虹の吸血姫

ハジメが爪熊との戦いに勝利してから三週間が経過。

あの後、ハジメがいくら探しても上層への階段は見つからず、見つかったのは下層につながる階段だけだった。

他に進む場所もないため、ハジメは下層へと足を向けたのだが…

「やつぱり…ここは地上に伝わるオルクス大迷宮じゃないのかもしれない」

当初、爪熊達と戦った場所はオルクス大迷宮の下層…90階層クラスだとばかり思い込んでいた。

ベヒモス達と戦ったのは恐らく65層。そこからハジメは落ちていた事を考えるとかなりゴールに近い場所と推理していた。

だが、それもハジメが最初に目を覚ました階層から数えて36層目に到達したことでハジメの仮説は否定されることとなる。

「オルクスは全100層と言ってたけど…目覚めた場所から35層を超えてなおゴールが見えない。ってことは…」

考えられる可能性は二つ。

1つは、オルクス大迷宮が100層という言葉がそもそも嘘だったということ。

そしてもう一つは、自分の目覚めた場所がオルクス大迷宮と異なる未知の迷宮だという可能性。

「…でもまあ、進むしかないんだよね」

ハジメは爪熊の毛皮を羽織ると、移動用に創った巨大リュック（外見はもはや背負う棚だが）を背負って、突き進んでいく。

ハジメが目覚めた場所から50層目。

その後も幾度となく魔物と戦い、その都度肉を食らうことでハジメの肉体は成長を続け、さらに引き上げられた魔力を使い錬成で銃弾の作成に勤しんだことでハジメの技能の数も格闘技術も地上にいたときとは比べ物にならないほど成長していた。

そんな彼が見つけたものは…

「………こんな模様見たことないぞ……？」

眼前には巨大な扉があり、その中心には二つの丸い窪みが入った魔法陣が刻まれている。

因みにハジメは地上にいた頃、王宮の図書館にある魔法に関する書を寝る間も惜しんで見ていたのだがそんな彼でもこの陣は初見だった。

「相当昔の魔法陣かも………今のところ仕掛けらしいものは…」

ハジメは扉の左右に並ぶ1つ目の怪物の石像に目をやり、大体の仕掛けが予想できた。

「…なら、時間がもつたない」

癖でもある両手を合わせる動作を行い、ハジメは扉に錬成をかける。

しかし、その途端『バチイツ!!』という音が扉から鳴り、ハジメの手に痛みが走る。

「…魔力を感知して起動するってことか！」

両端から聞こえる咆哮にハジメは素早くドンナーを抜いて戦闘準備に入る。

やがて、1つ目の魔物：『サイクロプス』の片方は完全に石化が解けるとどこからか取り出した大剣を持ってハジメに襲いかかる。

「っ！見た目通りのパワー自慢…」

なお、ハジメがここまで空気を読んでサイクロプスの復活を待ったのは『万が一完全復活前に倒してしまえば扉の開放条件が満たされないのでは?』とわずかながら懸念を持ったからだということを追記する。

「ふっ!!」

ドパンツ!ドパンツ!とドンナーから弾丸が2発撃たれるが、サイクロプスは風を起こしてドンナーの弾道を逸らす。

「うっそお…熊といい巨人といい、風魔法好きすぎるでしょ!」

ハジメは直撃させることが難しいと判断し、サイクロプスの攻撃を空力で回避しながら発明武器の1つ『炸裂ナイフ』を取り出し、サイクロプスに投げつける。

だが、またしても風魔法『風幕』によってナイフは見当違いの方向に突き刺さると内部の燃焼石が衝撃を起こして爆発。

(やっばやるなら近接戦か…だったら!)

「来い、インパルス!」

ハジメは爪熊との戦いを思い出し、『宝石』に魔力を流すと…

その姿は『セイバーインパルスガンダム』に変化する。

爪熊との戦いで『宝石』が自らの体にガンプラの装甲を纏わせたことを思い出したハジメは、以降時間を見つけては『宝石』がどのようなことまでできるのか徹底的に検証を行っていた。

そのうちでわかったのは

1. 実体化を行えるのはインパルスガンダム、及びその武装のみ(香織から預かっていたエクシア・フリーユージェルや装備しているGNソードなどの実体化ができなかったため)。

2. 部分的な展開も可能。ただし完全展開したほうがスペックが向上するものの、それに比例して消費する魔力も増える。

3. インパルスガンダムの特性でもある分離、合体機構は再現できない。恐らく扱的にモビルスーツに『乗る』のではなく『鎧を纏う』感覚に近いと思われる。

4. 装甲がダメージを受けると多少緩和されるがガンプラそのものにも汚れ等の形でダメージが現れる。
といったことがわかった。

だが、流石に10メートル少ししかない高さでインパルスを完全なモビルスーツとして実体化できるかは試せなかったため『ガンプラをモビルスーツとして実体化できるのか?』ということはまだ実験していない。

ハジメはセイバーインパルスの装甲を纏い、サイクロプスの攻撃を回避しながら武装の一つである『シロガネ』を抜いて攻撃し、サイクロプスの皮膚にダメージを与える。

『グウウオオオオ!!』

サイクロプスの豪腕を躲したインパルスは装備の一つである『フォールディングレイザー対装甲ナイフ』を使い、サイクロプスの脚の腱を切つて転倒させる。

「これで……!」

インパルスはビームライフルを取り出すと正確にサイクロプスの目を狙撃。

サイクロプスは物言わぬ死体となり、もう一体のサイクロプス（以下、サイクロプス2）が襲いかかる。

「これ以上時間かけたくない……一気に決める!」

インパルスの背中からセイバーシルエツトが消え、代わりにフォースシルエツトが出現。

フォースインパルスとなり、ビームライフルでサイクロプス2の腕を集中的に攻撃すると、左手にビームサーベルを装備。

素早くビームサーベルでサイクロプス2の首を切断し、ビームで血が吹き出る前に焼いて塞がったサイクロプス2の死体はそのまま倒れる。

「……………この魔物、やっぱり変だな」

インパルスの装甲を解いて神水を飲んだハジメはこれまでと毛色

の違う魔物に疑問を抱きながら2体の肉を剥ぐと、ある答えにたどり着く。

「2体の魔物…それに、まるで門番のように……………ん？」

もしやと思ったハジメは扉の前に立つと、そこには『丸い窪みが二つ』。

「二つの窪み…2体の門番……………そうか！」

仕掛けの真の意味に気づいたハジメはサイクロプス達から魔石を採取すると、その魔石は綺麗な丸い形となっている。

試しに窪みに二つの魔石をはめ込むと…

大きな音を立てて扉が開いた。

「この空間…まるで聖教教会の…」

転移させられた時のことを思い出すハジメだが、この迷宮の中にし
ては明らかに綺麗すぎる外見に違和感を覚えて進む。

「……………だれ？」

突如、部屋の奥から小さな声が聞こえてきた。

(…人?)

部屋の中には巨大な立方体の石が設置されており、その表面には一人の『少女』が半分埋まっていた。

上半身から下と両手を立方体に埋められたまま、『少女』は顔だけを出している。

垂れ下がっている長い金髪の隙間からは低高度の月を思わせる美しい紅色の瞳が見え、疲労からかやつれてこそいるが、恐らく外見的には12から13歳ほどとハジメは推測する。

「ちよ、大丈夫!」

ハジメは罨の可能性を警戒しドンナーを片手に握りながらも少女の方に走っていく。

「お願い……………たす、け…て」

どれほど長いあいだ幽閉されていたのか、少女は目の前の希望を離すまいと懇願し話がなかなか通じそうにない。

(……………どうしてこんな場所に女の子が…?)

少しだけ冷静になったハジメは少女の存在に関して考える。

この階層は間違いなく表向き誰も到達したことのない階層だ。にも関わらず、こんな危険が蔓延る空間で彼女はまるで封印でもされていたかのように閉じ込められている。

一瞬、『彼女の存在が何らかの罨ではないか』と推測するが…

(……………あーもう!一々考えるもの面倒くさい!)

元来の性格なのか、少女を見捨てるという考えをすぐさま捨て去ったハジメ。

もし罨だとしたら、その時にどうにか対処すればいいだけのことだと頭を切り替え、少女から話を聞く。

「君は…どうしてここに封印されているの?せめて理由だけでも教え

て欲しいんだ」

そんな彼の顔に少女はゆっくりと説明をする。

「私、先祖返りの吸血鬼……すごい力持ってた……だから、国のみんなのために戦って……でも、家臣のみんなが、いきなり……もう、私は必要ないって……おじ様が……自分が王になるって……私、それでもよかった……でも、私、すごい力があるせいで危ないって……殺せないから封印するって……ずっと、ここに閉じ込められて……」

そこから、ハジメは少女に様々な話を聞いた。

どうやら彼女は300年前に滅んだ亜人『吸血鬼族』の女王だったらしく、後天的に吸血鬼の中でも伝説的と言われる『自動再生』の技能を手に入れたらしい。

いわく、魔力さえ残っていれば首を落とされようが心臓を破壊されようが自動的に治るといふとんでもない代物。

「…他には、何かある？」

「ん……魔力、直接操れる。陣もいらぬ。あと……全部の属性に適性がある」

ハジメは魔物肉を喰らい彼女と同様の魔力操作技能を手に入れたが、ハジメ自身適性が無いためか運用できる魔法は錬成と魔物の固有魔法だけであり、クラスメイト達のように属性魔法が運用できるわけではない。

だが少女は全部の属性に適性があるという。

同様の力を持つのはハジメが知る限り『勇者』である天之河光輝だけであり、さらには少女の場合魔力操作があることから詠唱の手間を省いてイメージだけで様々な属性の魔法を容易く操れることになる。彼女が言うには身体能力はそこまで高くないとのことだが、『身体強化』系技能を使えば十二分にそれを補える。

「……………たすけて……」

少女はそこまで話すと、絞り出すような声で懇願する。

「……………わかった。そのかわり、他にも色々聞きたいことがあるから……あとで教えて欲しい」

そう言うとハジメは両手を合わせ、『錬成』を発動させる。

(正直……この子の言葉が真実だなんて確証は欠片もない。それでも……………)

奈落の底で封印され、絶望の中で狂うこともできずにいた少女。

希望を見つけたと言わんばかりのあの必死な顔を見て切り捨てるほど、ハジメは薄情者ではなかった。

「ぐっ!?うあああああ!?!」

錬成の魔力が立方体に流れ込むが、これまでの鉱物と違いまるで抵抗するかのよう形状を維持。

さらにいつも以上に魔力が持つて行かれ、ハジメは膝をつきそうになる。

「抵抗が強い……それに、普段より魔力が……」

負けじとハジメは魔力を立方体に流し込んでいく。以前ならば決してできなかった膨大な魔力を持つていくほどの抵抗に苦しみながらもハジメは歯を食いしばり、立方体と戦っていく。

「持つていけばいい……だけど、その前に僕が勝つ!!」

ハジメの魔力光によつて部屋全体が真紅の輝きに包まれ……

ハジメの魔力が尽きると同時に、立方体は液体のように溶けて崩壊。

少女はハジメの腕の中で倒れる。

「ハア…………ハア…………ほんっと、ギリギリ…」

神水のボトルを取り出して一気に飲むハジメは倦怠感が抜けていく感覚を味わいながら少女を気遣う。

「……………ありがとう…」

表情こそ変わらないものの、その目には彼女の素直な気持ちが映っていた。

「ううん……………とりあえず、助けられて良かった」

何とかハジメが立ち上がると、少女は質問をしてくる。

「…名前、まだ聞いてない」

「あ、そっか……………僕は南雲ハジメ。まあ訳ありでここに迷い込んだんだけど……………ところで、君は？」

小さくハジメの名前を復唱する少女に尋ねるが、少女は小さく首を振る。

「…名前、付けて」

「え……………もしかして、封印の影響が？」

少女の言葉に封印の思わぬ影響を心配したハジメだが、少女は首を振った。

「前の名前は…王族の名前はいらない。新しい名前、ハジメが付けて」

「ああ…えつと、名前、名前か……………」

中々に難しい頼みが来た。

彼女にとっては辛い過去との決別を意味するために必要なことだが、他者の名前を決めるといっのはハジメにとってかなりハードルが高い行為である。

(特徴…綺麗な金色の髪…吸血鬼…………ううん、しつくりこない……………あとは…)

「…『紅い目』…金色……………」

そんな中、ふと最初に出会った時の光景と彼が聞いたことのあるフレーズが偶然にも重なった。

『月は出ているか』

「…月。そうだ、『ユエ』…なんてどうかな？」

それは、ハジメがいた世界で月を表す言葉の1つ。

「ユ…エ…？」

「うん。僕達の世界では吸血鬼の世界は夜…その中で夜の世界を照らしているのはいくつもの星と…一際大きな月の光なんだ」

ハジメは何も纏っていない少女…ユエに以前爪熊から創った毛皮のコートを羽織らせる。

「最初に出会った時…その髪と瞳が月の光を思い出させてくれたから思いついたんだけど…どう？」

「……………ん。今日から私はユエ。ありがとう…！」

少しだけユエは笑って、ハジメの手を握る。

「とりあえず…一旦ここから出よう。近くに隠れ家を作ってからゆっくり…!？」

その瞬間、ハジメは頭上から強烈な殺気を感じてユエの手を引いてジャンプ。

先程まで自分達がいた場所にはいくつものトゲが突き刺さっていた。

「気配感知に引っかからなかったのに…まさか、ユエさんを助けると自動的に目覚めるのか!？」

ハジメ達の前に立ちはだかったのは体長5メートルは超える巨体の、蠍に似た魔物。

4本の長い腕と巨大なハサミ、そして8本の脚と鋭い針を備えた2本の尻尾を持つ怪物は、ハジメを排除しようとして襲って来る。

「ユエさん、しっかり掴まってー！」

ハジメは慣れた手つきでドンナーを取り出し、銃口を蠍の魔物に向けてる。

「悪いけど…通させてもらおうよ!!」

第20話 刻が動く

蠍の魔物が放つ無数の針をジャンプして回避するハジメ。

ドンナーの引き金を引くが、固い装甲は直撃を受けても怯むことがない。

「装甲の強度はこれまでの魔物より上か…だったらー！」

続けて取り出したのは以前爪熊戦で使った爆弾の改良型『グレネード』。

精密さを増した錬成によって破壊力が桁違いになったそれを敵の足元に投擲し、大爆発を起こすと蠍は転倒。

動きを封じた上で口や腹などの装甲が柔らかい、もしくは無い部分を狙おうとするが…

「っー！」

蠍は先程より多くの針を飛ばし、ハジメは2本ほど刺さったものものどうにか回避。

「耐衝撃…だったら次は焼夷グレネードを使った熱攻撃を試すしか…」

戦い方を模索していくハジメだが、そこにユエが質問してくる。

「どうして…」

「えっ？」

「どうして…逃げないの？あの魔物…私を…」

背負われているユエからの質問にハジメは振り返ることなく答える。

「決まってるよ…僕がこの部屋に入ったのは、君が助けを求めてたか

らだ」

焼夷グレネードを取り出したハジメは『空力』を発動させて回避を続けながら語る。

「君が助けを求めて、僕がそれに答えた。それ以外に：理由なんていない。それに………ここで君を見捨てたら、僕は二度と仲間の顔を見ることなんてできないからね!!」

そう言うハジメは焼夷グレネードを投擲し、摂氏3000度の炎が蠍を包んでいく。

炎が収まると、そこにはまだ活動出来るだけの力を持った蠍が立っている。

「いよいよこれも通じないとなると………またインパルスを使うしかないか?」

すると、ハジメにユエが抱きついてくる。

「ゆ、ユエさん?」

「………信じて」

そう言うユエはハジメの首筋にそっと噛み付き、ハジメは自身の血を吸われる感覚に陥る。

(…そういうえば、吸血鬼族の固有能力って…)

「…わかった。時間は僕が稼ぐ」

過去の文献を思い出したハジメはユエを強く掴みながら再び空力を使う。

「効くかはわからないけど…くらえ！」

ハジメは『宝石』を使ってインパルスのビームライフルを創りだすと、蠍目掛けて発砲。

高速移動の弊害が当たるとはほぼ無かったが、その攻撃を防ぐためか蠍はもうひとつの能力である『溶解液』を撒き散らし、ハジメの接近を妨害していく。

(5秒…10秒…15秒…もう少し…！)

ビームライフルを消したハジメは錬成を使って蠍と自分の間に壁を作り出して攻撃を防ぎながらユエの吸血が終わるのを待ち…

「…ん。いぢそうさま」

ハジメの首筋から口を離れたユエは、先程までのどこかやつれた雰囲気 が失せており、幼いながらも妖艶な雰囲気を持つようになる。

その雰囲気にはハジメは少しだけ目をそらす、ユエはハジメから離れると蠍に対してそつと指をさす。

すると、たちまち彼女の周囲に膨大な魔力が集まっていく。

「この魔力…これが、ユエさんの力…」

彼女の周囲にはユエの魔力光であろう金色の光が集まり…

「…『蒼天』」

たった一言で蠍の頭上に直径6、7メートルほどの青白い炎の球体が現れ、一瞬のうちに蠍を飲み込んでいった。

「……………」

圧倒的。まさにそれに尽きるとハジメは言葉も出さず思えた。

その破壊力はこれまで見てきた魔物どころか、人間族最強の『勇者』すらも凌駕するであろうとんでもない攻撃魔法。

それを彼女はたった一言で行使したのだから無理もない。

「ハジメ。あとは…お願い」

ユエは魔力を使い切ったのか、その場に座り込んでしまう。

「…わかった。あとは任せて!」

直撃を受けたことで装甲が赤熱化し、それでもなお動こうとする蠍。

だが、ハジメは装甲の隙間に密着するとゼロ距離でドンナーを撃ち込み蠍に致命傷を与える。

「これで…終わりだ!」

今度はフォースインパルスのビームサーベルを実体化させ、内部に突き刺すついに蠍はその生命活動を停止させるのだった…

それから数十分。

ハジメはユエと共に部屋から出ると拠点を作り、サイクロプスと蠍の肉や素材となるであろう部分をいくつか採取。

そこでユエから彼女が何故あの場所に封じられていたのかを聞いていた。

「…え?じゃあユエさんって……………300歳以上?」

「それを聞くのは…マナー違反」

ジト目で見られ、流石に失礼すぎたかとハジメは素直にユエに謝

る。

「地上で色々ところの世界について調べてたけど…吸血鬼族は300年前に滅んだって文献にはあった。ユエさん達の種族はそこまで長生きするの?」

ハジメの質問にユエは首を横に振る。

「…違う。私が特別。『再生』の技能のせいで成長も老化もない」

ユエの話によると、彼女は12歳の時後天的に『再生』の固有魔法が覚醒したらしく、さらにハジメ同様魔力操作まで使えるようになったという。

二つの技能が目覚めたことでユエはわずか数年で種族最強格にまで成長し、17歳で王位に就いた。

「…………でも、23歳になったとき。突然叔父様が王位に就くことになって…私の地位も、功績も…『シナンジュ』も全て奪われて、私は化け物として封印された」

「そっか……………」

…………え?」

ユエの言葉を聞いていたハジメは、彼女の発した単語に反応する。

「ユエさん…………今、シナンジュって…?」

「ん。吸血鬼族に伝わっていた『機人』。膨大な魔力を蓄積して、私の意思で自由に動かせるゴーレム…」

ハジメはもしかかしてと思い、錬成で作り出した石版を手にとるとそ

の表面に錬成をかけ、ある『絵』を完成させる。

「もしかして、こういう形？それと…色は真つ赤だったり…？」

ハジメから受け取ったそれを見たユエは驚愕に目を見開く。

「…どうして、ハジメがシナンジュのことを？」

そこに描かれていたのは、多少デフォルメされてはいたがハジメが知る『シナンジュ』の絵。

「……………これは、僕達の世界で物語の存在なんだ。

モビルスーツ、シナンジュ……………」

この世界にはかつて『モビルスーツ』が存在していた。

その事実を知ったハジメは『宝石』がガンプラを実体化させられるこの能力に何かしらの意味を感じずにはいられなかった…

「…ユエさん。シナンジュはどうして吸血鬼族が？」

「……………私も、よくわからない。私が生まれるずっと前からあれは吸血鬼族が管理していた。でも……………」

ユエの説明によるとシナンジュを操作できたのは彼女だけであり、次に彼女の従姉がかるうじて使えた程度だという。

（…モビルスーツがこの世界に存在した。だとしたら、どうして現在はあの文明レベルなんだ？）

拳銃すらオーバーテクノロジーになったこの世界で、どうしてあの兵器が存在し得たのか。

その答えはハジメの頭で導き出すことはできなかった…

それからどれだけの時間が過ぎただろうか。

ハジメが1枚の写真を取り出したのを見て、ユエが聞いてくる。

「…ハジメ。それ、何？」

「ん？えっとね…僕の仲間達…かな？」

以前模型部員で撮影した写真。これが今の自分の支えなのだとハジメは語る。

「奈落の底に叩き落とされて、目を潰されて…それでも、大切な思い出が僕を支えてくれた。だから…絶対に戻るんだ。みんなと一緒に」

そんなハジメの言葉を聞いて、ユエは顔を俯かせる。

「…私には、もう…帰る場所、ない」

その言葉にはどれだけの気持ちが入められていたのか。

泣きそうになるユエだが、ハジメは小さな声で提案する。

「…だったら、僕たちと一緒に来る？」

ハジメの提案にユエは顔を上げる。

「僕達の世界…戸籍関連とか色々窮屈だし、魔法の存在もない…きつと、ユエさんには住みにくいかもしれないけど…ユエさんならきつと、香織さんや八重樫さん達ともすぐに友達になれる気がするから」

放っておけるはずなどない。

帰る場所もなく、未来を奪われてしまった少女をそのままにしているのかとハジメは考える。

「もし一緒に来るなら…僕達が精一杯力になる。…なんて、たかが高校生の僕に何ができるのかって話だけどね？」

ハジメはそつと手を伸ばす。

「ユエさんがここから脱出するまではもちろん一緒にいるし、地上に出てからどう生きるかは僕じゃなくユエさんが決めることだ。それでも僕達と一緒に行くのなら…」

「……………そんなの、決まってる」

ユエは嬉しそうに微笑むと、ハジメの手をそつと握った。

「…私は、ハジメに救われた。だから…ハジメと一緒にいる」
奈落の底で孤独な戦いを続けていたハジメ。

この日、新しい光が彼の行く末を照らしだした…

一方、地上では…

「ハア……ハア……くっそーなんで『あれ』がこっちにいるんだよー」

真つ暗な草原を走り回る黒いローブを被った少年、清水幸利。

王都を出ていき冒険者として生計を立てていた彼は立ち寄った村である話を聞いた。

それは、王宮が神敵を討つために寄越すという『紅い機人』の噂。

『巨大な鋼のゴーレムが神敵と定めた村や町を滅ぼす』という、普通なら戯言と言われそうな噂。

だが、清水はその『機人』を見てしまった。

《オラオラー！神様に逆らう悪い敵にはお仕置きつてなあ！》

清水はその『機人』に見覚えがあった。

そして、機人から聞こえた『声』にも。

《なんだよ…拳銃すらねえ、魔法とやらで反撃すらできねえ…こんなの、俺がやりてえ戦争じゃないってのによお。ま、これもお偉方からのお仕事だからな。恨むんじゃねえぞ！》

機人……『アルケーガンダム』はその巨体でひとつの村を焼き払った。

「なんで……なんでアイツがこの世界にいるんだよ!？」

アルケーガンダムが飛び去ったあと、清水は震えながらその場に蹲る。

「なんでいるんだよ……アリー・アル・サーシエス!？」

第21話 奈落の底のヒュドラ

ハジメがユエと出会い、迷宮の探索を再開してから約2週間が経過。

いくつかのアクシデントこそあったものの、新たな武器を開発したハジメやけた違いの魔法センスを持つユエという二人の前に大迷宮の魔物達もほぼ為すすべもなく蹴散らされ、気が付けばハジメが落ちた場所から100層目に到達していた。

「…間違いなく、ここが終点だよね」

無数の巨大な柱に支えられた広大な空間となっている100層目。降りるときの階段が長く感じたが、高さだけで40メートルはありそう。

「…ん。あの扉」

「うん…あの先がゴールだとしたら…」

すると、ハジメ達の前にこれまでとは比べ物にならないほど巨大な召喚の魔法陣が展開されていく。

「っ、ユエさん！戦闘準備！」

ハジメが叫ぶと、魔法陣から6つの首を持つドラゴン…オルクス大迷宮のボスである『ヒュドラ』が現れ、咆哮する。

ヒュドラの咆哮に気圧されることなく、ハジメは敵の分析を開始する。

（6つの首…おそらく、それぞれが特殊な能力を有している。まずは攻撃力と耐久力を測って…！）

ドンナーを電磁加速モードで撃つと、あっさりと赤い文様を持った頭を粉碎。

「よし！耐久力は並の魔物と変わらない…っ！」

だが、白い文様の頭が叫ぶと赤い頭が光に包まれ、再生される。

続けてユエが炎魔法で青い頭を破壊するが、同様の再生を行われてしまった。

「白が回復役か…なら、まずはそこから潰せば！」

ハジメとユエの攻撃が白頭を狙うが、今度は黄色い文様の頭が頭部を一気に肥大化させ、攻撃を受け止めてしまう。

「黄色はタンクか！」

続けざまに緑から風魔法、青から氷魔法、赤から炎魔法が続けざまに飛んでくる。

「ハジメ！」

「ユエさん、離れるよ！」

天歩を使うことで距離を取るハジメは相手の能力を分析していた。(攻撃は3つの首がそれぞれの属性魔法で担当して、ダメージを負ったら白が回復…一番攻撃を受けてはいけない白は黄色が防御している…確かに、バランスが取れた厄介な敵だ)

「でも、能力さえわかれば!!」

ハジメは焼夷グレネードをヒュドラの頭上に投げて爆発させ、全体にダメージを与える。

「ユエさん、黄色を引きつけて！」

「ん！『緋槍』！」

全体攻撃で白が回復を行おうとするあいだ、ユエが魔法で黄色に攻撃をして足止めをする間にハジメが攻撃をするというフォーメーション。

本来ならばバーストインパルスのオールレンジ攻撃を使い黄色の死角を取るか、ユエの最上級魔法『蒼天』で一気に黄色ごと貫くのが簡単だが、双方共に消費が大きいのもあって今回は選択しなかった。

狙い通りにユエが黄色を引きつけ、ハジメはその隙に白を狙うが…

「いやああああああ!？」

「っ!」

ユエの悲鳴が聞こえ、振り返ると頭を抱えて怯えているユエの姿が。

見ると、唯一能力が不明だった黒い文様の頭がユエを見つめていた。

「まさか、闇魔法!？」

友人である清水の使っていた魔法の特性に似たこの力からハジメは敵の能力を見抜き、急いでユエを連れその場から離れ、柱の影に隠れる。

「ユエさん!ユエさん、しっかりして!!」

ユエは青ざめた表情で震えており、ハジメは正気を取り戻させるためごく微弱な纏雷を使い、ユエの意識を戻す。

「……ハジメ?」

「そうだよ…一体、何が?」

隠れながらハジメが聞くと、ユエが小さく震えて答える。

「…………見捨てられたかと、思った……………また、あの暗闇に…」

「やっぱり…闇魔法でトラウマを刺激してきたんだ」

だが、これで敵の全能力が判明した。

「3色の属性魔法…防御、回復、そしてデバフ…確かにバランスはいいけど、完璧じゃない」

「……………」

未だに不安なのか、泣きそうな顔のユエ。

そんな彼女の手を握ったハジメは優しく語りかける。

「大丈夫…ユエさんが怖いなら、僕がその分戦うから。だって…この奈落で出会えた友達なんだから」

ハジメとて鈍感ではない。

この2週間で彼女からの視線が持つ本当の意味に気づいているが、今の自分はその真意に答えることなどできない。

…だからこそ、今彼女のために出来ることはこれしかなかった。

『クルウウアアアアアア!!』

ヒュドラの叫びが聞こえると、ハジメは背負っていた『奥の手』を準備して再びヒュドラと向かい合う。

「…ユエさん、もし戦えるようになったら言つて。そしたら…一気に勝負をかける!」

「…んー!」

ハジメの手の温もりから落ち着いたのか、ユエはしっかりと立ち上がる。

「…ハジメ、もしかして『シユラーゲン』を?」

「ああ…勝負は一回。それで決めてみせる!」

ハジメが取り出したのは凡そ150センチほどの巨大な対物ライフル『シユラーゲン』。

以前から蠍の魔物など強固な防御力を持つ敵との戦いでドンナーが通らなかつたことを危惧していたハジメは武装の強化を考えていたが、使える炸薬や電磁加速が既に限界に来ていたドンナーの強化が不可能と結論を下し、破壊力重視の新装備を開発することにした。

アサルトライフルの解析でライフル銃のコピー自体はできたが、より強力な一撃を撃てるようにするため口径と銃身を大きくするべく改良を重ね、ついに完成させたのがこのシユラーゲン。

装弾数は僅か1発で持ち運びに不便するという弱点こそあるが、威力はドンナーの十倍にまで跳ね上がっている。

なお、銃身の素材は蠍の魔物の体を構成していた特殊な鉱石『シユタル鉱石』である。

魔力を込めれば硬化出来る上に錬成による加工が容易、そしてタウル鉱石以上の硬度を持っていたこの鉱石を使うことでシユラーゲンは完成していたのだ。

「『緋槍』！ 『砲皇』！ 『凍雨』！」

炎の槍、真空の刃を纏った竜巻、そして鋭く尖った氷の雨が次々とヒュドラを攻撃していき、ハジメはその隙にシユラーゲンに弾丸を装填。

「ユエさん、白頭を狙うー！」

ハジメはシユラーゲンを構え、スコープを覗くと…

「……………狙い撃つぜ!!」

恩師の決め台詞を借りて自信を奮い立たせ、弾丸は白頭と黄色頭を纏めて貫通。

その一瞬でユエもまた強力な魔法を放つ。

「『天灼』」

残った4つの頭の上に放電する雷球が6つ現れると、それぞれが放電して一つにまとまり、残る4つの頭を黒焦げにした。

一方…香織達は数日かけて再びオルクス大迷宮の探索を続けた。

檜山の無罪が確定してからすぐに志願者と宗一、そして騎士達は訓練のためオルクス大迷宮の探査に再び趣いていた。

光輝達にとっては実戦に慣れるための訓練だが、香織と雫、そして遠藤にとってはまた別の意味を持つ…

「…それにしても、龍太郎君どこ行っちゃったんだろう?」

64層から降りる階段を進みながら鈴がふと呟く。

龍太郎は数日前、『師と出会いました。これより己を見直すため修行に出てきます。何とか数日で戻るので心配しないでください』という書置きを宗一の部屋の前に置いて姿を消していたのだ。

「ま、まあ龍太郎だし、すぐに帰ってくるわよ……きつと」

微妙に自信のない励ましの言葉を口にする雫だが、正直一人でないのならどうにか生きて帰ってくるだろうとみんな心のどこかで思っていた。

「ぬおおおおおおおおお!!」

化物しかないときれる死の谷、ライセン大峽谷。

そこで龍太郎は巨大な岩を背負いながら無数の魔物を素手でなぎ払っていた。

「どうした、小童!その程度の獣、さっさと倒さんかこの馬鹿弟子があ!!」

「押忍!!」

ある男性からの厳しい叱責に元気よく返事をした龍太郎は身体強

化などの能力を一切使わず、己の肉体のみで魔物との戦いを続けた。

(南雲……………俺、絶対にお前に救われた命、無駄にはしねえ！)

「師匠！もつと岩を増やしてください！」

紫の服を着たやや年のいった男…『師匠』は不敵に笑うと、そこらの岩を着替えであろう『股引』で切断するとそれを龍太郎に投げるのだった…

65層に到達した香織達は、かつての惨劇の場所に似たその場所に思わず息を呑む。

「……………必ず、見つけるから」

ハジメが作ってくれた擬似GNロングブレイドをそつと握る香織と、彼女の思いを察した雫。

だが、光輝はその様子から香織が不安になったのだろうと考えて歩み寄る。

「……………香織。心配しなくてもいい。俺がそばにいる…俺は絶対に香織を置いて死んだりするようなことはない」

「もう二度と誰も死なせない。南雲が最後に守ってくれた香織の命は、俺が絶対に守りぬくから」

その言葉に香織は言いようのない不快感を感じるが、それを顔に出すようなことはしない。

檜山をただ許した事を知ってから香織はだんだんと光輝に対して恐怖心すら覚えるようになったのだ。

(……………どうして、君は彼の死をそうあっさりと受け入れられるの？
どうして……………ハジメ君のことを『仕方の無いこと』とあっさり切り捨てられるの?)

『俺がああクラスにいたのは、南雲への恩もあつたからだよ。あいつ

を殺しておきながらヘラヘラ言い訳するあのクズにも、それをいい話風にして許したあの馬鹿勇者にもそれを許容した連中にももうウンザリだ』

雫から聞いた清水の言葉が頭をよぎる。

「……………そう、だよね」

彼も他の皆も、ハジメのことを仲間などとこれっぽっちも思っていないなかったのだろう。

だからこそ清水はクラスメイトを見限ったのだと香織はこの時嫌というほど理解した。

「ちよつと光輝…いい加減にしなさいよ」

雫は黙っていてくれ！例え厳しくても、幼馴染である俺が言わなければいけない……………雫。君も言ってくれ。雫が乗り越えられたように絶対南雲の死を乗り越えて強くなれると！」

そんなやり取りが我慢できなくなったのか、香織はGNソードを近くの壁に突き立てる。

「……………少し静かにしてくれないかな？私達が何を考えて、どうやって進もうが天之河君には関係ないよね……………」

その鬼気迫る顔に圧倒されるクラスメイト達だが、宗一が手を叩く。

「天之河が言いたいこともわかるけど…お前だってわかるだろ？南雲はずつと白崎達と一緒にいたんだ。接点が薄かった奴らと違って、簡単に割り切るなんて無理なんだよ…」

「三木先生…」

「こいつらの戦い方や生き方は他の誰かが決めていいものじゃない。それに…ここはまだ迷宮だ。こんな所で会話してたら、危なっかしいだろ？」

そう言われると否定できないのか光輝が押し黙る。

そんな宗一に香織と雫が小さく礼を言うと、宗一は気にするなとばかりに小さく手を振る。

65層の橋に到達し、メルドが叫ぶ。

「気をつけろー！ここのマップは不完全で何が起きるかわからん！」

光輝達は警戒しながら進むと、橋の中央にあの時の魔法陣が浮かんだ。

「ま、まさか…アイツなのか!?!」

クラスメイトの誰かが叫ぶ。

「嘘だろ…アイツは南雲が倒したじゃないか！」

遠藤が剣を握りながら叫ぶが、レイが説明する。

「迷宮の魔物は定期的に蘇る。原因は解明されてないが、一度倒した魔物との遭遇も普通に起きるんだ。お前達、退路の確保を忘れるな！」

レイの言葉に不機嫌そうな声色の光輝が言い返す。

「レイさん！俺たちはもうあの時とは違う。何倍も強くなったんだ！」

聖剣を構える光輝に、クラスメイト達も武器を取り出す。

「…仕方ない。光輝が指揮を取れ！」

メルドが指示を出し、宗一もまた武器であるクロスボウを取り出した。

「香織…行けるわね？」

「うん…！もう誰も奪わせない。あなたを倒して、私達は未来を切り開く！」

GNソードを展開した香織は力強く宣言するのだった…

第22話 ガンダム、迷宮に立つ！

ユエの魔法によって撃破されたように見えたヒュドラ。

だが、その内部から皮膚を突き破って『7つ目の首』が出現したのをハジメは見逃さなかった。

「っ、ユエさん、危ない!!」

ハジメはシュラーゲンと自身の体を盾にしてユエを庇い…その体が強烈な光に飲み込まれてしまった。

一方、ベヒモスと激闘を繰り広げていた勇者パーティーはというと

「ぐっ!?ハ、ハ、こいつ…!!」

ベヒモスの突進をタンク役の永山重吾が受け止めながら膂力を強化する魔法『剛力』を使うも、その威力を抑えきれずにいた。

「全てを切り裂く至上の一閃『絶断』!」

僅かな隙を突いて殺傷力を増した剣で雫が攻撃し、檜山達パーティーのうち前衛の檜山、近藤がベヒモスの死角を攻撃。

「行きますよ、メルド!」

「任せろ!粉砕せよ、破砕せよ、爆砕せよ、『豪激』!」

雫の攻撃によってひび割れていた角の一本にメルドが剣を叩きつけ、レイの使う細身のサーベルがベヒモスの目を抉り取る。

『グウウウアアアアアア!!』

雄叫びを上げて暴れだすベヒモスだが、香織が二つの魔法を同時に行使。

「天恵よ、遍く子らに癒しを!『回天』!悪しきを縛り、封じ込めよ!

『縛光鎖』!」

遠隔で複数人を同時に回復させる『回天』と、光の鎖で相手を捕縛

する光魔法『縛光鎖』の同時運用で吹き飛ばされた味方の回復を行いつつベヒモスの動きを鈍らせていく香織。

本来ならば龍太郎と永山の二人で抑えられたベヒモスだが、龍太郎が不在のため香織は回復役兼遊撃の役割を行っていた。

仲間達が回復している間、光輝はベヒモスの角の傷に聖剣を突き立てると既に詠唱済みの魔法を発動させるため魔法名を叫ぶ。

「『光爆』！」

蓄えられた魔力が爆発し、ベヒモスの角を片方吹き飛ばした。

「ガアアアアア!!」

魔法の反動で動きが鈍る光輝を激痛から叫ぶベヒモスが爪で吹き飛ばそうとするが、その攻撃が思わぬ場所から阻害される。

「悪しきを貫け、『縛光刃』！」

香織が使ったのはハジメ作の近接装備セットの一つである『柄だけのナイフ』。

光の攻撃魔法である『縛光刃』の刃をナイフに纏わせ、エクシアのビームダガーのようにしてベヒモスに投擲し妨害を行った。

「後衛組、魔法頼む！」

「任せて、光輝君！」

光輝の言葉に後衛組リーダーの恵理が応え、詠唱を素早く行うと騎士とクラスメイト達の使う最上級炎魔法が炸裂。

「『炎天』！」

超高熱の球体に飲み込まれ、大爆発に巻き込まれるベヒモス。

しかし……………

「グウルアガアアアアアアア!!」
これまで以上の絶叫が響き、爆発の中から傷だらけで殺気をむき出しにしたベヒモスがなおも迫ってきたのだ。

「こいつ…まだ倒れないのか!?!」
最上級魔法をモロにうけてもなお迫ってくるベヒモスの姿に、光輝達は思わず後ずさりそうになる。

そんな中で動いたのは香織。

「ここは神域なりて、神敵を通さず! 『聖絶』!」
最上級結界魔法を咄嗟に行使するが、やはり万全の状態で使ったわけでないことと適性が鈴ほどではないためか、数秒経たずに破壊。
ベヒモスの攻撃を真正面から受け、香織は地面に叩きつけられてしまった…

「……………」

激痛で身動きすら取れない中、ハジメは眼前の光景を見ていた。

ドンナーを手にハジメからヒュドラを遠ざけようと一人戦うユエ。既にヒュドラの攻撃でむき出しの腕や足に痛々しい傷が付けられ、その都度自動再生で回復している。

(ユエ…さん…)

ドンナーの直撃に傷1つつかないデタラメな防御力の魔物に、ユエは必死に走りながら勝ち目の薄い戦いを続けていた。

「ハジメを…守る…絶対に！」

(僕は…何やってるんだろう…)

傷ついて倒れ、動けないままただ目の前で助けた少女が傷つくのを見ているしかできない歯がゆさ。

悔しさと歯を食いしばるハジメだが、この場所より遥か上からの強い思念をXラウンダー能力が感知。

(この光景……香織…さん?)

目の前で頭から血を流しながらも雫や鈴に支えられ、なおもベヒモスに挑もうとしている香織の姿が見えたのだ。

「何…してるんだよ…そんな体で戦ったら…！」

それでも香織はハジメとの再会を求めて戦い続ける。

ユエはハジメの命を守るためにどれだけ傷ついても歩みを止めない。

「何してるんだよ…こんな所で……倒れてる場合じゃないだろ!!」
(あの時誓ったじゃないか!泣かせたまままで…いいはずないって!)

右腕の感覚が無い。恐らく神経がダメになっている。

血を流しすぎた。今にも意識が途切れそうだ。

酷い火傷で左目付近が焼け爛れている。

それがどうした。今ここで立ち上がらなければ、何一つ取り戻すことなどできないのだ。

「…絶対……………諦めない……！」

ハジメは予備の神水を飲んで少しだけ回復力を上げ、柱に寄りかかりながら立ち上がる。

「必ず…もう一度会うために……！」

GNソードを展開して香織は歩き出す。

「何度だって、進むために!!!」

遠く離れながらも再会を願う
そんな二人の思いが重なり…

ハジメの『宝石』がオレンジ色の強い光を放った。

「これは……？」

宝玉から光が溢れると、大迷宮一帯を水色の粒子が包み込んだ。

「な、何だ!？」

突然大迷宮を包み込む水色の粒子に驚愕する光輝達。

だが、香織はその粒子の影響なのか瞳が金色に変化していく。

「この雰囲気………下？」

足元から人の気配を感じた香織は、一瞬だがある人物の思念を感じ取った。

「………やっぱり、信じててよかった……！」

最愛の人の思念を感じ取った香織は先ほどよりしっかりと立ち上がると、GNソードを構えた。

「雫ちゃん……鈴ちゃん……恵理ちゃん………お願い。力を貸して」
揺るぎない彼女の目を見て、3人は強く頷いたのだった……

「この粒子………それに、この輝きは……！」

ハジメはステータスプレートを取り出すと宝石に『鉱物鑑定』をかける。

…
以前は鑑定してもわからなかったこの宝石だが、再度鑑定を行うと

アリスタ

トータスとは異なる異世界『アリアン』の願いを叶える宝石に全ての神代魔法の力を付与させた鉱石。持ち主の意思に反応し世界の法則すら超越するが、使用には相応の魔力を消費する。

「アリスタ……やっぱり、そうだったんだ！」

ハジメ達が物心つく前、当時のガン普拉バトルの根幹を担っていると言われていた宝石、アリスタ。

ガン普拉を自在に動かせる『プラフスキー粒子』の結晶で、人の願望を叶える力があると言われていた石がこの世界で進化したもの。

「だったら……今できることは！」

ヒュドラと戦うユエを守るため、ハジメはアリスタに強く願いを込める。

「お願い……僕に力を貸してくれ!!」

ヒュドラの攻撃を受け、ユエは血を吐いて倒れる。

「…まだ…」

既に魔力が枯渇しかけているのか、再生もうまく働かない。
それでも、ユエはヒュドラから目を逸らさず…

「ハアアアアアアアアア!!!」

聴き慣れた声が聞こえ、ユエとヒュドラの前に『巨人』が現れる。
メタリックブルーのボディに、赤と黒、そして紫の巨大なウイング
ユニットを装備し、その中でも目立つのは黄色とメタリックブルーの
4本角。

「あれ…は…」

ユエは何度か見せてもらった。

ハジメが心から大切にしていた『宝物』。

彼の支えでもあった…

「インパルス…………ガンダム!!」

(BGM ニブノイチ)

ビームサーベルを抜いた『フォースインパルスガンダム』がユエを守るためにヒュドラの前に現れ、ヒュドラのボディの一部をサーベルで切り裂く。

《ユエさん、インパルスに触って!》

「ん!」

ユエがインパルスの足に触れると、彼女の体は不思議な空間…GV R方式のコックピットに転移されていた。

「ハジメ!」

「ありがとう、ユエさん…あとは、僕がやる!」

65層ではベヒモスの突進を鈴が結界で受け止めていた。

「これが鈴ちゃん本気の聖絶だああ!!」

鈴は障壁を逸らすことでベヒモスの体勢を崩すことに成功するが、その衝撃で小柄な彼女は吹き飛ばされる。

「鈴!……お前え!鈴に何してくれてんだよ!!」

怒りからか口調が荒っぽくなった恵理の炎魔法がベヒモスの傷を焼き、さらにベヒモスの前足に火球を撃ち込む。

「ナイスだ中村!遠藤、俺が道を開く!」

「お願いします、ロックオン先生!」

宗一は魔物に対して有効な猛毒の矢をクロスボウに装填し、恵理がつけた足の傷目掛けて矢を放つ。

「狙い撃つぜ!」

矢が突き刺さり、毒によってどんどん足の肉が溶けていき苦しむべ

ヒモス。

さらに遠藤がサーベルでベヒモスのもう片方の目を潰し、雫の剣が弱点となった角にダメージを与える。

「香織！フィニッシュは任せるわ！」

「ありがとう雫ちゃん！」

再び6つの首を再生させ、攻撃の数を増やしていくヒュドラ。

だが、ハジメは動揺することなくインパルスを操縦して攻撃をかわしていく。

「くらえ！」

ビームライフルで旋回しながら再生した頭のうち2つを破壊し、武装の一つ『機動防盾』を投げつけると、そこにビームを放ち軌道を変更。

角度を変えたビームはヒュドラの頭を一つ破壊した。

「攻撃極振りなら、さっきまでの厄介な能力も無い！」

ハジメは続けてアリスタの力を使い、バーストインパルスの武装であるGATファンネルでヒュドラの頭上を破壊。

（くっ!?体が重く……でも！）

なおも再生を続けるヒュドラは再び首を生やし、ビームライフルがかき消されるほどの光を飛ばしてくる。

「ユエさん！残り魔力はどれくらい？」

「蒼天」があと一回……それ以上は……」

操縦桿を握り、ハジメは計画を決める。

「今から10秒後、その魔法を敵めがけて放ってほしい。今からイン

パルスを分離させて、ユエさんが攻撃できるようにするから！」

「わかった！」

ハジメは目の前に現れた投影モニターを操作すると、合体解除操作を行う。

「インパルス…分離！」

その言葉と操作によってインパルスはチェストフライヤー、レッグフライヤー、フォースシルエット、コアスプレンドーの4機に分離。

コアスプレンドーのコックピットが一時的に開き、ユエがヒュドラめがけて魔法を発動。

「蒼天”っ!!”

いつもより強く叫び、蒼い炎がヒュドラの肉体を焼くが悪あがきとばかりにヒュドラは反撃をしてくる。

だが…

「これで……………」

空中でコアスプレンドーとレッグフライヤーが合体し、続けてチェストフライヤーがドッキング。

さらにフォースシルエットが装着され、再びインパルスガンダムに戻るとビームサーベルを抜き…

香織もまた同じタイミングでGNソードを構え、詠唱を行う。

「人の願いよ、思いの光よ！この一撃で願いの導を切り開け！ 神威・革新斬”！」

光輝の最大魔法を自己流にアレンジした香織最強の攻撃魔法が光の剣となり、ベヒモスの首を切断して勝利を作る。

「終わりだああああ!!」

インパルスのビームサーベルがヒュドラの7つ目の頭を貫き、今度こそヒュドラは完全に息の根が止まるのだった…

ベヒモスが倒れ、数秒後。

「勝った…のか？」

誰かのその言葉がきっかけとなり、クラスメイト達から歓喜の聲が上がる。

『やったあああああ!!』

クラスメイト同士がお互いの勝利を称え合うなか、魔力を使い果たした香織はその場で眠りについてしまった。

(ハジメ…君。生きてて……よか…)

一方、インパルスのコックピットでは…

「ハジメ…やった…!」

ヒュドラに勝利したことで喜ぶユエだが、ハジメが返事をしない。

「…ごめん、ユエさん……流石に、無理……しすぎた…」

そう言うといんパルスがガンプラに戻り、戦場の跡にハジメは倒れるのだった…

第23話 反逆者の正体

「ん……ここは……？」

気が付くとハジメはヒュドラと戦った広間ではなく、清潔感のあるベッドで眠っていた。

(ここは大迷宮のはず……まさか、あのあと転移されたとか……いや、それは流石に無いか)

未だに頭が回らない中で周囲を見回そうとすると……掌に妙な柔らかい感触が伝わった。

「……………んん？」

記憶の彼方に封じたかった『あの黒歴史』を思い出させるような感覚にハジメの頭の中は一気にクリアになり……

「……んにゅ……」

「ゆ……………ユエさああああああん!？」

ハジメの叫び声が響き渡るのであった。

それから5分後。

一糸纏わぬ状態で眠っていたユエはハジメに叩き起こされ、どこからか調達したシャツを着る。

「ん……ハジメの着替え」

「あ、ありがとう………とところで、僕が気絶してから何があったの？」
新品のシャツと着替え一式を着終えたハジメが問うと、ユエが語りだす。

「あの後、扉が開いてこの部屋を見つけた。そして……ハジメをベッドに寝かせて……」

「てことは……ここがオルクス大迷宮のゴール地点ってことか。それはそうと………なんで僕全裸になってたわけ？」

ハジメの言葉にユエは無言で目を逸らすだけだった…

「……………それより、ハジメが寝てる間に色々調べてみた」

露骨に話を変えられて苦い顔になるハジメだが、ユエの情報を聞くのが優先だと己を納得させる。

「…まずわかったのは、ここは明るいけどまだ迷宮の中」

ユエと共にベッドから出たハジメは自分がいる空間の空に浮かぶものを見て驚愕する。

「これって…擬似的に太陽を模したもの…人工太陽？」

「人工…？わかんないけど、夜になると星空みたいになる」

ハジメは色々と気になったのか周囲を歩いているうちにわかったことがある。

この空間の広さは恐らくあのヒュドラと戦った広間とほぼ同等であり、外見的には地下迷宮とは思えないような庭園となっていること。

天井近くの壁から大量の水が流れ落ち、川に合流して奥の洞窟へと流れていく。

さらによく見ると川の中には魚も泳いでおり、地上と繋がっていることが見て取れた。

さらに川の近くには何も植えられていない畑だけでなく、牛などが何頭も入れそうな家畜小屋まである。

「野菜や果物、それに家畜を連れてくればこの空間だけで自給自足が可能になっているのか…仮に揃わなくても魚を食べることが可能になっている。ここの住人はどうしてこんな設計に…？」

そんなことを考えながらハジメ達は先ほど目覚めたベッドルームに隣接していた大きな建物へと歩を進める。

その外見は建築したというより、岩壁を加工して家にしたような外観となっていた。

「…ハジメが寝てる時、調べてみたけどほとんどの部屋に鍵がかかってた」

「わかった…一応、警戒だけは怠らないでね」

三階建ての石造りとなっている建物の中で殆どに鍵が掛かっており、その部屋の全てに不思議な紋章が描かれていた。

試しに錬成をかけてみてもプロテクトがかかっているらしく、この部屋を空けるには何か専用の方法があると考えたハジメは一度部屋の探索をやめ、最上階に進む。

「これ…」

「ああ…魔法陣と、骸骨？」

三階には一部屋しかなく、直径7、8メートルのこれまで見たことのないほど緻密で繊細な魔法陣が部屋の中央に刻まれている。

そして、その先には豪華な椅子に座り黒に金の刺繍を施したローブを羽織った白骨死体があった。

「これって…」

ハジメは気になることがあったが、その中で魔法陣を調べてみようかと中央まで進み、陣が強く輝く。

「っ！」

眩い光に思わず目を覆うハジメとユエ。

直後、頭の中を何かに覗かれるような言いようのない感覚に陥る。

(この、感覚は…!?)

やがて光が弱まると、ハジメ達の前に半透明の姿でメガネをかけた黒衣の青年が現れる。

『試練を乗り越えよくだどり着いた。私の名はオスカー・オルクス。この迷宮を創った者だ。君達には『反逆者』と言えば伝わるかな?』

「あなたが…この迷宮を？」

突然現れたオスカーだが、彼はハジメの言葉に反応することなく続ける。

『ああ、質問は許して欲しい。これはただの記録映像のようなものでね。残念ながら君の質問には答えられない。だがこの場所に辿り着いた者に世界の真実を知る者として、我々が何のために戦ったのかメッセージを残したくてね』

そこから語られたのは、ハジメが地上で教会から教えられた話とは全く異なる真実の歴史だった。

神代の少し後の時代、世界は常に争いで満ち溢れていた。

人間と魔人、そして多種多様の亜人が常にお互いを傷つけ合い、殺し合いを続ける世界。彼らの戦う理由は様々だったが、その中でも大きかったのはお互いが『神敵』だから。

人間族、魔人族、亜人族と大雑把に分けられていた現代と異なり、種族も国もより細かく分かれてそれぞれが異なる神を祀っており、各種族はその神からの神託を理由に争い続けていた。

だが、そんな歴史を終わらせようと戦いに終止符を討つべく結成されたのが、オスカー達を筆頭とした『解放者』。

中心となった7人は神代から続く神々の直系の子孫であり、解放者のリーダーはある時偶然にも神の真意を知ることとなる。

神エヒトは人々を駒に遊び目的で戦争を促していたという悍ましい真実を知ったリーダーは志を同じくするものを集めて戦力を整え、エヒトのいる本拠地『神域』と呼ばれる異空間を突き止め、後一步で決着をつけられるはずだった。

しかし、神は人々を巧みに操ることで解放者達こそが世界の敵だと認識させることで戦わずして彼らは敗北。

守るべき相手に力を振るうことができず、彼らは世界を滅ぼそうとした『反逆者』として次々と処刑されることとなる。

生き残ったのは僅かなメンバーと中心の7人だけであり、彼らはもはや自分達の手で神を討つことができないと悟る。

そして、お互いバラバラになると大陸のどこかに迷宮を創り潜伏して、迷宮にそれぞれ異なる『試練』を準備した。

いつの日か、試練を突破できた存在に自らの力を託すことで神の残酷な遊戯を終わらせるために…

『君が何者で、何の目的でここに辿り着いたのかはわからない。君に神殺しを強要するつもりもない。ただ…知って欲しかった。我々が何故戦ったのかを』

『君に私の力を授ける。どう使うかは君の自由だ。だが、願わくば悪しき心を満たすためには振るわないで欲しい。それと………』

突然、オスカーの映像が一瞬乱れる。

『この映像を見ているということは、君は『モビルスーツ』の存在を知っている…そうだね？』

「え…!？」

オスカーの口から放たれた言葉にハジメとユエは息を呑む。

『僕の魔法だけではない…君達が使えるか分からないが、僕は君達に『異界の機人』に纏わる僕の研究を全て託そう』

『君のこれからは、自由な意思の下にあらんことを』

そう告げるとオスカーの映像は消え、ハジメとユエの脳裏に何かが入り込む。

「これって…」

「ん。オスカー・オルクスの持っていた魔法」

ハジメとユエはオスカーから刷り込まれた記憶をたどり、一階に戻りながら会話をする。

「神の真実か……色々と衝撃的だけど……でも、冷静に考えればこれまでハッキリしなかった違和感がいくつか解消されたんだ」

「違和感……？」

ハジメはユエにこれまで抱いていた違和感について説明する。

「一つは、この世界の宗教。僕達の国でもメジャーな宗教があるけど、その内部ではいくつもの宗派が存在する。小さな宗教ならともかく、人間族全てに浸透するほどの大規模な宗教なのに全員が同じ神、そして同じ考えを持って信仰するなんて明らかにおかしいんだよ」

普通、大規模になれば教義も些細な違いが出て、そこから異なる宗派になることは珍しくない。

だが、トータスでは全員が聖教教会の信徒でありエヒトを信仰している。

「……もしかして、神は人々を操りやすくするために？」

「その可能性が一番高い。人々の意見を統一化しなきゃ、誰も彼もがオスカーさん達の敵になるなんて普通起きようがない」

洗脳などの手段を使ったのか、それとも本気で人々の心を掴んだのか……今となっては定かではないがハジメは自分達をこの世界に連れてきた存在について嫌な寒気を感じていた。

「……それと、『神が人々の意思を統一化できた』という仮説を見つけたことでユエさんに関しての謎がわずかだけど解けたんだ」

「え……？」

ハジメはユエの『傷一つ残っていない肌』を見る。

「ユエさん……ヒュドラとの戦いで結構ボロボロだったよね？でも、『自動再生』の技能は魔力さえあれば傷一つ残さず治療する。それこそ……首が落ちようともね」

「…ん。それが？」

足を止めたハジメはユエと出会った時のことを思い出した。

「僕達が出会ったあの日…ユエさんは魔力が枯渇してあの蠍に攻撃されたら間違いなく死んでいた。長い年月を得て飢えさせ、生命維持に魔力を消費させればユエさんを殺すのは不可能ではなかったのに…どうしてユエさんの叔父さんは『魔力が枯渇するまでの飽和攻撃』という手段を選ばなかったんだろう？自動再生は吸血鬼族の先祖返りの技能だということは、少なからずこの技能の長所も短所も知っていたはずなのに」

そう言われてユエも気づいた。

ハジメ以上にユエはこの能力の弱点も理解している。そして、この能力についてユエに説明したのは…

「……………確かに、変。私の技能を詳しく教えてくれたの……………叔父様」
そしてよく考えると不可解なポイントがある。

あの蠍の魔物は魔物肉で強靱な肉体を得たハジメも苦戦していた相手。

封印が可能なレベルまで弱体化したユエを300年前に殺すことなど容易だったはずなのだ。

「……………叔父様は私を殺すつもりは無かった…？じゃあ、どうして……………」

「……………ここからは完全な仮説だけど、一応伝えるよ。多分…君をこの大迷宮に閉じ込めることが叔父さんにとって必要だったんじゃないかな？オスカーさんが終の住処にして、神の干渉を一切受けなくて済む数少ない場所…そこに君を封印すれば、恐らく神にとって何らかの不都合が起きたのかもしれない」

この話はあくまで仮説であり、ハジメ自身確証があるわけではない。

だが、ユエのように異質な力を持った存在がエヒトに狙われていたと推測すればおのずとある程度の答えが出てくる。

「……………ハジメ。今の私には、叔父様の真意はわからない。でも……………もう少しだけ、叔父様を信じてみる」

確かな証拠など無くても、ユエは大切な人との思い出を胸にもう一度信じる気持ちを持つことにした……………

一階に降りたハジメ達は地下室に繋がる扉の前で先ほどオスカアの骸が着けていた指輪（映像が途切れたあと、意味ありげに光っていたので回収したもの）をかざすとロックが解除され、二人は地下に繋がる『エレベーター』に乗り込む。

「エレベーターって…やけに近代的だな」

内部にあった小さい魔法陣に触れるとエレベーターのドアが閉まり、ゆっくりと降下していく。

「これが……………オルクス大迷宮の地下深くに存在していたなんて…」
ハジメ達が目撃したのは、地下深くに広がっていた高さ500メートルほどの空間。

だが、その内部はコンクリートなどに似た素材で作られており、ま

るで巨大な『格納庫』のような空間となっていた。

やがてエレベーターが止まるとドアが開き、ハジメ達は格納庫に降りる。

「すごい……これ、全部地上じゃ手に入りにくい希少鉱石ばかりだ！」

格納庫内部には大量の鉱石が木箱に入った状態で積みまれており、その中身は地上で入手困難なタウル鉱石やフラム鉱石、さらにはシユタル鉱石にこの世界最強硬度を誇る合金『アザンチウム』のインゴットまでビツシリと積み重ねられていた。

「……………ハジメ。まだ部屋がある」

「うっ…」

つい夢中になりすぎたハジメはユエと共に格納庫の奥にある扉の前まで歩いていく。

「この扉……………インパルスが余裕で通れそうな大きさだ」

「ん…確かに、大きい扉」

その扉は20メートルを超える巨大な扉となっており、ハジメは近くの魔法陣にオスカーの指輪をかざす。

すると、『プシュー』という空気の抜けるような音が聞こえて扉がゆっくりと開いていき、ハジメ達は真っ暗な部屋に進む。

やがてある程度歩を進めると明かりが点灯し……………

2体の『機人』が彼らを出迎えた。

「なっ……………!?これが、どうして……………!?」

「ん…ハジメ、これも……………『ガンダム』…?」

ユエの間に、ハジメは小さく頷く。

「ああ……………間違いない、確かに片方はガンダムだ…」

薄茶色のボディを持った『ガンダム』と、真紅のボディの一回り大きいモビルスーツ。

片や『悪魔の名を冠したガンダム』。片や『伝説の男が最後に乗ったモビルスーツ』。

「なんで…グシオンとサザビーがトータスに!?!」

ハジメは震え声を上げ、『ガンダムグシオンリベイク』と『サザビー』を見上げるのだった…

しばらく驚いていたハジメだが、すぐにグシオンリベイクまでジャ

ンプしてコックピットハッチを開き、内部に入り込む。

「…これもよし、ガンプラの実体化とかじゃなく本物のモビルスーツだとしたら………」

内部を見たハジメはコックピットの内装がGVRのものとは明らかに異なる…背もたれの部分に空いた穴とコードを見て『それ』の正体に気が付くとグシオンのコックピットから出ていき、続けてサザビーの頭部コックピットに入り込む。

「…やっぱり、コックピットが全天周囲モニターだ。だとしたら、これはシャア・アズナブルの使っていたサザビー……？」

サザビーから降りたハジメをユエが出迎えてくる。

「ハジメ…あのガンダム達、動かせそう？」

ユエの問いかけに唸っていたハジメは小さく首を振る。

「…今の僕じゃ難しいかな。ガンダムグシオンのコックピットには阿頼耶識が搭載されてたし、サザビーは宇宙世紀の技術そのままだ。なんの知識もない以上、インパルスのように操縦はできない」

「あ、アラヤシキ？」

首をかしげるユエにハジメは説明をする。

阿頼耶識システム。『機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ』に登場した有機デバイスシステムで、人間の脊髄にナノマシンを注入して『ピラス』と呼ばれる接続用インプラント機器を埋め込み、ピラスを経由してナノマシンを操作しモビルスーツの端子を接続することでモビルスーツをまるで自らの体のように操る技術。

「でも…専用の設備も機器も無いし何より17歳の僕じゃ阿頼耶識のナノマシンは定着しない。それに阿頼耶識はリスクの方が圧倒的に高いから、グシオンは今の僕達じゃ使えない」

さらにハジメはサザビーに視線を送る。

「サザビーの方がまだ動かせそうだけど…何せ、あっちの操縦方法を僕は知らないからね。ファンネルを搭載してるけど、重力下だとまともに使えないだろうから今すぐこの2体が必要になるとは思えない」

その言葉に落胆するユエだが、ハジメはこの状況でどうするべきかを冷静に考えていた。

「……………ユエさん。物は相談なんだけど」

「ん？」

ハジメはグシオンとサザビーを見上げながら語る。

「外の世界までもうすぐだけど…僕はここに残って、準備をしようと思う。生成魔法を使いこなすための特訓もだけど、他の技能をできる限り磨いて……………あとは、インパルスの力を制御すること。そして…」

さらに、ハジメは格納庫内部に積み上げられた木箱の山に視線を送る。

「これだけの鉱石があれば、僕がインパルスを運用するうえで必要だと思ったものが完成できると思う。一階や二階の部屋も開けられると思うし、万全を期してから出ても遅くはない…と思うんだけど」

ハジメの言葉を聞いたユエは小さく頷いた。

「…ハジメが選んだ道。なら、私はどこまでもついていく」

そう言うとユエはハジメの手を掴んで、エレベーターまで走り出す。

「行こう、ハジメ！私も…一緒に頑張るから！」

第24話 旅立ちの朝

ハジメとユエが奈落の底：オルクス大迷宮の最深部に到達してから凡そ2ヶ月。

その間にハジメ達がこなしてきたことについていくつか分けて説明をすると：

①技能を使いこなすための修練、及びオスカーの遺したロストテクノロジーの解析

オスカー・オルクスの遺体をハジメ達は回収し、屋敷の外に創り出した立派な墓地に埋葬（ハジメの錬成によってオスカーの名前とオルクスの指輪の紋章を墓石に刻みつけた）し、彼が遺していた錬成師にとって宝とも言えるアーティファクトの数々を解析したハジメはそれを自分にとって使いやすくなるよう現代風に改良を加え、最初に自身の失った左目を補うための義眼型アーティファクト『魔眼石』を制作。

これまでの魔物との戦いで会得した気配感知系魔法を神水を作る力を失った神結晶の欠片に付与させ、彼の新しい『目』として完成したのだ。

だが、アーティファクトを作るにはその魔法を会得していることが条件だと気がついたハジメはこれまで取り込んできた技能をできる限り磨いて新しいアーティファクト開発のために使うべくユエと共に激しい特訓を幾度となく行っていた。

その結果、ハジメは1階層で蹴りウサギから得た『天歩』の最終派生技能である『瞬光』を会得。一時的に全感覚を研ぎ澄まし周囲の間が遅く感じるほど速く動けるこの技能を手に入れたことでハジメは生身での戦闘力もより引き上げられることとなる。

②戦闘スタイルの確立、及び基本装備の完成

生身でのハジメの戦闘スタイルはやはりドンナーを主力とした戦いが基本だったが、サブウェポンとしてドンナーと同型の拳銃『シユラーク』を開発。

さらに『纏雷』などの近接戦闘向け技能を宿したナイフ型アーティファクト『フォールディングレイザー』を創り、近接戦では主にこちらを使うようになる。

また、防御装備やいくつかの特殊ギミックを秘めた籠手『リユストウング』を普段は両手に装備しており、これによってハジメの戦いの引き出しが増えた。

③モビルスーツ関連の技術

ハジメにとつて驚きだったのが、オルクスの屋敷にはグシオンやサザビーといったこの屋敷で発見されたモビルスーツに関する詳細なデータが本として記録されていたのだ。

無論暗号化されていたが、言語理解の技能を持つハジメにとつて解析など容易く、ハジメはその中でグシオンやサザビーの出処を突き止めることに成功する。

『●月○日 これでの機械人形が見つかるのは何日目だろうか…？』

かなり損壊が酷いが、幸いなことにいくつかの情報を読み取つてみるとこの薄茶色の機械人形には損壊を負うより以前の姿があったというところを知ることができた。これなら、私の錬成を使えば十分に修復は可能だ。

………改修前の姿になるという意味では修理失敗とも言えるかもしれないが、今はこの力も必要だ』

「……………改修…そういうことだったんだ」

書齋でオスカーの日記を読んだハジメは日記帳を閉じると小さく息を吐く。

「ハジメ…どういうこと？」

「ああ…僕が知っている限りあのガンダム…グシオンはあの姿より一段上の姿『ガンダムグシオンリベイクフルシテイ』が存在して、最後の戦いではそのフルシテイの状態で破壊されたんだ。なのにどうしてか、トータスではリベイクの状態で発見された」

「だけど、一度完全に壊された状態からオスカーさんが復元したんだとしたら色々納得だよ。損壊が酷すぎてフルシテイに戻せなかったんだ」

ハジメはそう言いながらこれまでこの世界に現れたモビルスーツ達のことを思い出す。

(地下で見つけたグシオン、サザビー…それに、ユエさんが乗っていたというシナンジュ。これらに共通するのは……いずれも本来の歴史で破壊されたモビルスーツ?)

だが、その仮説が浮かぶとハジメは嫌な予感がどうしても拭えなかった。

(壊されたモビルスーツなんてそれこそ山ほどある…もしそれがこの世界に流れ着いていたとしたら…そもそも、モビルスーツを呼び寄せているのがエヒトだとしたら…)

モヤモヤした考えを振り払おうとハジメはオスカーの研究書物の一つ…『擬似神経接続』の魔法に関する本を何度も読み返していた。

「は…」

夜になり、ハジメとユエは釣った魚で料理を食べ終えたあと自由時間になりユエは地下へ、ハジメは風呂で汗を流していた。

(…ここに来てからもうすぐ2ヶ月。生成魔法の使い方もだいぶわかったし、それにもう魔物を食べてもステータスが上がらなくなった)

ここに到着してすぐハジメはヒュドラを食らったが、最初に二尾狼を食べたとき以来の激痛がハジメの体を襲い、ハジメのステータスは

平均10000をオーバーするほどに成長。

その上ヒュドラから会得できたのは光輝の切り札でもあった『限界突破』の技能であり、ハジメの得た力はこの世界から見て異質という言葉で収まらないレベルになってしまった。

「武装も移動手段もほぼ完成したし、あとは『あれ』が完成するか制作が進まなくなったらそろそろ地上に上がるべき…だね」

そう言いながらハジメは風呂から出ようとするが…

「……………ん。ハジメ、一緒に入る？」

「ユエさん……………基本的に一人ずつって約束だよな？」

タオル一枚のユエがハジメの隣に腰を降ろす。

初日こそ思春期男子らしくパニックになったハジメだが、何度も繰り返されると流石になれたのか、やんわりと距離を取ってそそくさと退散するようになっていた。

「…離してくれませんか？」

「…いや」

「あの…色々当たってるんですが」

「当ててんのよ」

「ねえそれどこで知ったの？僕少なくともユエさんの前でそんなセリフ言った覚えがないよな!？」

地球出身でなければわからないようなネタに思わず叫ぶハジメだが、ユエはそれでもなおハジメから離れようとしなない。

「…ハジメ。私じゃ、ダメ…？」

いつになく落ち込んだ表情のユエ。

それを見て、ハジメは少し考える。

(……………流石にこればかりはもう誤魔化すわけにはいかない)

この2ヶ月で何度か逃走する形で答えを出さなかったハジメだが、これ以上ユエを悩ませるわけにはいかないと思い、彼女の横に座る。

「……………ユエさんの思いにはずっと前から気づいてたよ。正直言うと嬉しい…だって、僕はこんなだからユエさんみたいな可愛い子に好かれて嫌な気分になってならない。それでも…僕は好きな相手がいる」
ハジメは左目につけた眼帯に触れ、言葉を続ける。

「白崎香織さん。僕が2年前に出会って、幾度となく僕を支えてくれた。奈落に落ちて飢えと痛みでおかしくなりそうになった時、彼女の手紙と言葉…それに友達との思い出があったから僕は僕でいられた」
「……………」

「もう人間かすらも怪しいけど、僕はきちんと彼女に伝えたいと思ってる。あの日伝えられなかった『君が好きだ』ってキチンと伝えたくて…僕はこれまで足掻いていられた。だから……………ユエさんの想いに応えることはできない」

ずっと抱いていた気持ちを伝えたくて、ハジメは戦い続けている。だからこそ、ユエの好意に応えられないとハジメは伝えた。

「……………わかった」

ユエは風呂から上がるとそのまま脱衣所へと歩き…

「……………でも、私は諦めない。カオリって女がハジメの『特別』だとしても……………ハジメの心をいつか掴む」

妖艶に微笑んだユエはすぐに着替え、複雑な感情を香織に抱く。

(……………悔しいけど、ハジメの心をカオリが守っているのはホントの

こと。でも…この程度で私は諦めたりしない)

小さくまだ見ぬライバルへの闘志を燃やすのだった…

「ハア……………へッキシイ!!」

風呂場での出来事から5日。

ハジメは地上で活動するための服が完成したとユエから聞いて、新しい服に早速袖を通していた。

「ユエさんが裁縫得意って聞いたときはびっくりしたけど…まさかここまでこのクオリティだなんて」

オスカーの屋敷で見つけた靴などを組み合わせたハジメの服装は赤いズボンに白いブーツを履いており、上はワイシャツにネクタイ、黒いベストを着ている。

だが、その中で一番目立つのは何といってもクリムゾンレッドのロングコートである。

丁度いい長さの黒いロングコートだったがハジメがアーティファクトへと改造したついでに色を赤に変更し、一部デザインはユエが担当したことで『ザフトレッド』の制服によく似たデザインのロングコートへと変わったのだ。

「ん…よく似合ってる」

ユエは白いブラウスを着用しており、ニーソックスとハジメのものより小さいブーツを履いている。

因みに上着はザフト制服に似たデザインだが真っ白なコートになっており、彼女の小柄な容姿に大人らしさをプラスしていた。

「あとは……………」

ハジメ達は着替えを済ませ、地下へのエレベーターに乗る。

地下へと降りていくエレベーター。
だが、地下には2ヶ月前に存在しなかった巨大な物が鎮座していた。

「これが……………」

「そう。強襲揚陸艦『ミネルバ』。何とか僕の記憶から掘り起こして作ったけど……………いやあ、多分これの制作が一番大変だったね」

全長350メートルの巨大な船。それは『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』にて主人公達が乗っていた戦艦『ミネルバ』をハジメが錬成や生成魔法で再現したものだだった。

装甲はいくつもの鉱石を重ねがけして作り出しており、全体に希少鉱石だったアザンチウムをコーティングすることで防御性能は文句なし。

内部システムにアーティファクトの技術を使うことで通信などのシステムも問題なく使えるようになっていた。

武装面においては感知系技能を付与させたミサイルと機銃、さらには魔力操作の技能を応用した高出力の魔力砲を開発し、搭載している。

エンジンだけはハジメが創れなかったものの、オスカーの日記に記されていた『魔導炉』がそれを解決。

魔導炉はオスカー達が過去に創ったエンジンであり、大気中の魔力

や人の魔力を集め、増幅させるというアーティファクトで今のハジメでも制作ができないほどのもの。

どうやら解析したところ、グシオンのエンジンである『エイハブ・リアクター』のうち片方がこの魔導炉に交換されており、さらにエイハブ・リアクターに近い出力が出るようチューニングされていた。

さらにサザビーにもこのエンジンが使われていたと知り、ハジメはこの魔導炉ならば戦艦を動かすのに必要なエネルギーを確保できるのでは？と考え、地下で厳重に管理されていた3つ目の魔導炉を使いミネルバのエンジンとして組み込んだのだ。

「これを使えばモビルスーツやインパルスの発進…それに、僕達の拠点としても使える。地上でも動けるようにガンダムXのフリーデンのシステムを再現したから場所を問わず動けるように…！」

熱く語るハジメだが、ユエが袖を引っ張る。

「ハジメ……………私達、二人。どうやって動かす？」

「……………あ」

完成させたことで有頂天だったハジメだが、冷静に考えればこれほどの戦艦を自分とユエの二人で運用できるはずがない。

「…それに、ここまで大きいと…長時間飛ばすのも難しい」

「ああ…そうだった…！」

……結局、今はまだ運用できないと結論が出てミネルバは地下に置いていくことになってしまった。

その後。

未だ肩を落とすハジメの頭をユエが撫でる。

「…気にしなくていい。『宝物庫』があればまたここにすぐ来れる」

ハジメが手に入れたオスカーの指輪。

その正体は『宝物庫』と呼ばれるアーティファクトであり、同時にこの屋敷へと通じる『鍵』の役割も担っていた。

宝物庫とは巨大な亜空間へのゲートを作るアーティファクトであり、指輪内部の亜空間に物などを収納できる。

さらに半径10メートル以内に収納した物を出現させることも可能であり、ハジメはこの宝物庫によって戦術を組み立てるが…それはまた別の話。

『鍵』は空間転移型アーティファクトの一種で、どこにいようと指輪に魔力を流すことでこの屋敷にレポートが可能だという。

ただし、屋敷に転移した場合その直前に転移した場所にしか飛ぶことができないという制約もある。

「ハジメ、準備は？」

「いつでもいいよ」

腰のホルスターにドンナーとシユラクをセットし、コートの内側にフォルディングレイザーをしまいこんだハジメは『宝物庫』を右手につけるとブレスレットの形に加工したアリストを左手に装着。

インパルスのケースをコートの内側に入れ、最後に眼帯がしっかりと着いているかを確認。

「じゃあこれからの確認だね。優先は大迷宮の攻略で他の神代魔法を会得し、この世界からの脱出方法を探る」

「ん。そして…最終目標はエヒトの討伐とハジメの世界に戻ることに」

「ああ。それと、これだけは覚えてほしい。僕達の武器や力は地上で

は異端。聖教教会や各国の人々が黙っているとは思えない」

「…ん。モビルスーツの存在も多分求める人はいる」

「創ったアーティファクトを要求されたり、モビルスーツを使って戦争参加を強要される可能性も高い」

「教会や国、そしてこの世界を支配するエヒトともいわずれ戦う。最悪の場合はオスカーさん達のように反逆者として全てを敵に回す可能性がある命がいくつあっても足りない旅」

「…今更」

「…………でも、僕達は戦わなきゃいけない。僕は故郷に帰るため」

「私は、『あの日』の真実を知るため」

ハジメが手を差し出し、ユエが手を重ねる。

彼らにとって自身を奮い立たせる誓いの言葉。

それをハジメとユエは叫ぶ。

「南雲ハジメ！インパルスガンダム！」

「ユエ、『サザビー』！」

「チーム・ビルドデステイニー！」

「運命を切り開く!!」

新しい世界に進むべく、ハジメとユエは転移の魔法陣に飛び込むのだった…

龍太郎が修行していたライセン大峽谷からほど近い町。

無数の異形のモビルスーツ『ガガ』が全身を赤く光らせて町に迫ろうとしていたが、それらは『たった1機のモビルスーツ』によって人々が視認する前に全て破壊されていた。

量産機が1体のモビルスーツに無双されるというのはおかしい話ではない。

だが、それは1体が『ガンダム』などのワンオフ機であればの話である。

『おいおいおいおい！話がちげえぞ！』

遠目から見ていたアルケーガンダムの中でサーシエスが毒づく。

それもその筈、ガガを一掃していたのはガンダムタイプではなく

A・G世界の量産モビルスーツ『アデル』1機だけなのだから。

『君達に問う。もしこれ以上この町に襲撃をするのなら……』

『私がこの場で君達を撃墜する』

声の主は若い男だったが、内に秘められた凄みはサーシエスすらも圧倒するほど

『戦いの経験』に満ちたものだった。

(……………こりや迂闊に手を出すのは面倒だな。大将もなんでこんなので連れてきたんだか)

『お前ら…ここは撤退するぞ』

アルケアの指示に従い、ガガ部隊は去っていった。

「…はあ」

アデルが町外れに着陸すると、パイロットの青年が降りてくる。

「また、戦いが……………でも」

青年はパイロットスーツから仕事着に着替え、町に走る。

(もう誰も奪わせない……………こうして拾った命、今度こそ……！)

誓いを新たに、青年……『フリット・アスノ』は大切な人達が待っている場所に急ぐのだった……

特別編第1話 帝国の傭兵

時間はハジメ達がオスカーの屋敷で訓練を始めてから少し経った頃に遡る。

ベヒモスを打ち倒した勇者一行は1週間後、一度迷宮攻略を中断してハイリヒ王国に戻っていた。

65層までならかうじて道がわかっていたものの、これから先が完全な探索攻略になることが推測されその予感の中。情報が無い魔物や道の階層探索のため攻略スピードは目に見えて落ち、そのため一度王国に戻り休養を取るべきという結論に至った。

だが王国に戻されたのはもう一つの理由がある。それは『ヘルシャー帝国』からの使者が訪れるというのが理由だ。

「なるほど…私達がベヒモスを倒したって情報が帝国に来たから向こうもようやく私達を見に来ることにね…」

元々『神託』から光輝達の召喚までさほど間がなく、同盟国であった帝国に勇者召喚の連絡が遅れ、顔合わせが間に合わなかった。

その上帝国は建国したのが傭兵ということもあってか腕っ節がものを言う完全実力主義の国。いきなり現れた光輝達を『勇者』として迎え入れると言われてもそう簡単に受け入れられるはずもなかったのだ。

だが今回の一件で最高記録の65層突破とベヒモスの討伐というニュースが伝わり、帝国も重い腰を上げることとなった…

馬車が入り全員が降車すると、一人の子供が走ってきた。

「香織！よく帰った！待ちわびたぞ！」

金髪の少年の名は『ランデル・S・B・ハイリヒ』。ハイリヒ王国の王子にして次期国王となる少年である。

因みにランデルは無意識に香織だけに声をかけているという点で彼がどのような感情を抱いているかは語るまでもない。

だが…

「…ランデル殿下。お久しぶりです」

少し表情がこわばったが、香織は作り笑顔でランデルを受け流す。

実はランデル、かつてハジメが奈落に消えた際に香織の前で彼を愚弄したことにより嫌悪の感情を持たれているが、ランデルはその事に気づいていない。

『あのような役立たずが身代わりになって香織が助かったのなら、あいつも本望だろ』とハジメの死を侮蔑する貴族と共に発言したことで年の近かった優翔にも嫌われ、香織も距離を取るようになってしまった。

「ランデル。香織達は疲れているのですから、あまりしつこく声をかけるのは頂けませんことよ?」

香織に対してアプローチを続けるランデルを窘めたのはリリアーナ王女。

流石に姉には敵わないと悟ったのかランデルは急いでその場から離れることになる。

「お疲れ様です、皆様。無事のご帰還、心から嬉しく思いますわ」

雫や香織にも負けじと輝く美しさを持つリリアーナに男子メンバーだけでなく女子達ですら頬を薄ら染めている。

異世界の本物お姫様についてこの前まで一般学生だった彼らが普通に接するというのがそもそも難しいのだ。

「ありがとう、リリイ。君の笑顔で疲れも吹っ飛んだよ。俺もまた、君に会えて嬉しいよ」

口説いているのかと思うようなキザなセリフで返す光輝。

だがリリアーナは…

「……………ありがとうございます、光輝様」

一瞬だけ暗い顔になるが、すぐに笑顔で接する。

「…リリイ、もしかしてまだあのことを？」

「まあ、南雲君のことで責任感じてたからねえ…」

「ったく。あの場にいなかった姫さんが責任感じる必要ねえのに」

香織、鈴、龍太郎がそんな会話を後ろでして……………

「……………龍太郎君!？」

「ん?よっ!」

いつの間にか後ろに居た龍太郎に香織達だけでなくクラスメイト

全員が驚いていた。

「りゅ、龍太郎!? お前いつ帰ってきたんだ?」

「えっと…1分前? ちょうど姫さんが王子を追い返した時に扉から普通に入ってきたけど?」

よく見ると頭に包帯を巻いており、あちこち服が破れている他小さな擦り傷が見えている龍太郎。

「いや、一昨日までライセン大峡谷で修行しててさ。師匠から『今教えられることは全て教えた。あとはお前が道を開け!』って言われてここまで戻ってきたんだよ。王宮には昨日の夜着いて、今朝素材換金したらお前らが帰ってきたっていうから」

「うん、ちよつと待つて情報濃すぎさっぱり頭に入らない!」

あまりにも濃い情報に雫がとうとうストップをかけた。

「ま、まあお疲れのようですし今日はごゆっくりしてください!」

その日の夜。

夕飯を食べ終えた香織と雫は優花や遠藤と共に香織達の部屋に集まり、香織は今回の戦いで得た情報を伝えていた。

「香織、それ本当なの!? 南雲が生きてるって…」

「ハッキリとした証拠があるわけじゃない。でも…あの時」

ベヒモスとの戦いで足元…いや、もつと地下からハジメの気配を感じ取ることができた。

「私の技能…『革新者』がもしダブルオーのイノベーターと近い意味合いを持つとしたら…ハジメ君の気配が何らかの形で感じ取れたのかも」

普通に考えれば不可能に近いが、香織が見たものが幻だと断定はできない。

「……………だとしたら、あいつは迷宮に残っているか…もしくは脱出した可能性も出てきたってことか?」

遠藤の言葉にその場の全員が考え込む。

もしハジメが脱出していた場合、彼の行方を探ることが困難になってしまうためだ。

「……………だったら、地上は私が調べてみる」

「優花、貴女……」

顔を上げたのは優花。その目にはこれまで無かった光が宿っていた。

「あれからずっと考えてた……私、怖くて引きこもって……南雲が落ちて、自分が死ぬかとも思ったら体がすくんで……優翔を守るためだって自分に言い訳してた。でも……………」

脳裏によぎったのはあの絶望的な状況で抗うことをやめなかったハジメの姿。

「逃げてても始まらない。待つてるだけじゃ何にもならない。迷宮で戦うのは怖いけど……私も、逃げずに動こうと思う」

「でも……地上の方はどうやって調べるつもり？」

「愛ちゃん先生の護衛……というかあちこちの農地を助ける仕事があるから、そつちに同行するつもり。聞いた話だと大翔の今の監督責任者は先生だから、上手くいけば大翔の手も借りられるはず」

その後、迷宮の探索は引き続き香織、雫、遠藤が中心となって行う形となり地上は優花と大翔が情報集めをすることになった。

「それと香織。今トータスの現状について詳しい奴に心当たりがあるから、あいつも探して協力できないか聞いてみる」

「それって……清水君だね？」

旅に出た清水ともし出会えれば、何らかの有力情報を掴んでいる可能性もある。

仮に情報がなくても、話をして協力を頼めば心強い味方となるのは確実だった。

それから三日後。

帝国の使者との謁見が行われたのだがその内容はクラスメイト達の予想を遥かに超える出来事の連続となる。

まず、ベヒモスとの戦いに関して『香織達』が倒したという話から勇者の実力がイマイチ把握できなかったため、帝国が雇った傭兵と光輝が模擬戦をしてその実力を測るという形となった。

「貴女が…俺と手合わせを？」

「ピンポーン…大正解！」

光輝の前に立っていたのは赤髪をツインテールにした美少女で、その外見は戦いができるとは到底思えない。

…が、香織達は驚いた顔をしていた。

「…ネーナ・トリニティ。レイさんが本人かはわからないけど、あの言動と後ろにいる二人は…」

「疑いようもなく本人よね」

『ネーナ・トリニティ』。

ソレスタルビーイングのセカンドチーム『チーム・トリニティ』のメンバーであり可愛らしい外見とは裏腹に気紛れで命を奪う残酷な面も見せる少女。

「あれ、流石に止めた方がいいような…」

香織がそう思ったが、光輝はネーナに対して質問する。

「えつと……本当に君が？」

チラツと後ろを見るが、彼女の兄らしき2人の男性は見ているだけで動こうとしない。

「ダイジョーブだって！ 兄^{ニイニイ}兄^{ニイニイ}ズが出るまでもなくアタシだけで勝っちゃうから！」

そう言うとネーナは細身の片手剣を抜き、着ていたコートポケットに左手をしまうという変わった状態で構える。

「…だったらー！」

とりあえず剣を叩き落として後ろにいる兄らしき相手と仕切りなおしてもらおうと考えた光輝だが…

「ふふっ」

ネーナは剣ではなく左手に忍ばせていたもう一つの『武器』を向け、その瞬間乾いた音が会場に響いた。

「なっ…!?それは…！」

ネーナが持っていた武器：『リボルバー拳銃』に光輝だけでなくその場にいた全員が驚いていた。

「あれ、やっぱこの武器知ってるんだ？」

「どうして…この世界に銃は…っ！」

この世界に銃は存在しない。

だが、光輝はただ一つだけ『例外』を思い出した。

「この武器はね…王宮が売り払ったガラクタの中に設計図が紛れてたの。なんでも『神の使徒に紛れてた役立たず』の持ち物が処分されるだとかで、ヨハン兄が買い取ったんだ」

光輝が視線を送るのは、トリニティ兄妹の長男である『ヨハン・トリニティ』。

「でもまさかこんな掘り出し物ばかりだとは思わなかったな…
……………」

『拳銃一つ』 あればあんたなんてただの雑魚なわけだし」

ネーナは嘲笑しながら再び拳銃を向け、弾丸は光輝の頬を掠める。

「くっ…！」

聖剣を構える光輝だが、ネーナの目に僅かながら体がすくむ。

「油断するんじゃないわよ！」

そう言うのとネーナは持っていた剣で光輝に斬りかかってくる。

「ま、待て！これは模擬……」

「戦いで手加減したら死ぬでしょ！勇者サマならもつとかつこよく戦いなさい！」

女相手に本気が出せなかった光輝だが、ネーナは容赦なく剣を振るう。

「……なんかガツカリ。顔『だけ』はいい男んだけど……」

ネーナは冷たい目で光輝を見据え、拳銃を光輝の額に向ける。

「雰囲気も覚悟も……刹那と比べたら数段落ちるわね」

相手の命を容赦なく奪う兵器。

殺しに躊躇いを見せない少女。

光輝はこの時ようやく『死の恐怖』の片鱗に触れるが……

「ちよつと待ったああああ!!」

空中から龍太郎が飛んできて、その右手を黄金に光らせる。

「っ!!」

ネーナは弾丸を龍太郎めがけて放つが、彼は止まることなく……

「ひいひいっさっ！シャイニング……フィンガアアアアアアアア!!!」

黄金に輝く右手が銃弾を消し飛ばし、ネーナの拳銃を握りつぶし

た。

「キヤアアアアツ!？」

ネーナが転倒し、龍太郎が光輝の前に立つ。

「流石に殺しまでは見てられねえからな。文句ねえだろ、皇帝さんよ！」

龍太郎が叫ぶと帝国の使者の護衛だった男の一人が小さくため息をつく。

「ったく。俺が化けてるってどうしてわかったんだか」

男はアーティファクトらしきイヤリングをはずすと、本来の姿…ヘルシャー帝国皇帝『ガハルド・D・ヘルシャー』に戻った。

「が、ガハルド皇帝!?これは一体…」

国王が驚く中、皇帝が説明する。

「こうやって隠れてたほうが相手の本音とか見つけやすいと踏んだんだよ。あと、傭兵相手にどれだけやれるか確認しときたくてな…」

ガハルドの興味は光輝ではなく先ほどの技を見せた龍太郎に向くが…

「……………ま、今日はやめとくよ。『あの男』の弟子とぶっつけで戦うのはどうも気が乗らねえ」

そう言うがハルドは大人しく下がるのだった…

その後。

勇者全員の手でベヒモスを倒したという話が伝わったことで皇帝は公式の場で勇者達を認めると発言。

ともかく今回の訪問の目的こそ達成された。

だが帰り道で部下に本音を聞かれたガハルドは小さくため息をつく。

「ありやダメだな。単なるガキだ。理想とか正義とか、そんな類をなんの疑いもなく信じる口だ。なまじ実力とカリスマが半端にあるからこそタチが悪い。理想で周囲を振り回して殺す、指導者には向かないタイプだ。まあ神の使徒である以上蔑ろにはできねえ。とりあえず合わせて上手くやるしかねえだろ」

「それで、あの傭兵を使つて殺すつもりだったと?」

「ああ? 違えよ。トリニティは確かに俺らに匹敵する歴戦の傭兵だがあの中で一番弱いネーナに負ければ多少なりとも腑抜けた根性を叩き治せると思っただけさ。ネーナがああ武器を使おうがああゴツイ坊主が助けに入ろうが、ああ勇者君は教皇が邪魔して殺せなかっただろうしな」

流石に少し前まで単なる学生だった光輝では皇帝の興味を引くような結果にはならなかったらしい。

(だが、収穫はあった。『流派東方不敗』を習得したアイツと、ベヒモス戦で活躍した女2人:それに、ネーナが使っていた武器を設計したっていう『死亡扱いの神の使徒』か:)

翌朝。

香織と雫、そして遠藤と優花が早朝訓練を行っていたときのこと。

「ほう:朝練とは関心だな」

後ろにはガハルドが立っており、武器や鎧などは身につけていない。

「ガハルド皇帝陛下、おはようございます」

「おはようございます」

香織達が挨拶をする中、ガハルドはそれに軽く手を挙げる形で応える。

「一通り見せてもらったが:お前ら面白いな」

「その坊主、お前の気配を消す技術は間違いなく帝国の暗殺者に匹敵するレベルだ。あとは一撃で相手を仕留められる腕前と弱点を見抜く観察眼を磨き上げれば誰もお前を止められない」

遠藤の存在に一発で気がついた皇帝は彼にアドバイスをする。

「そつちのお嬢さんは投擲師か…だが、天職の能力だけ磨いて勝てるほど戦争は甘くない。メルドか誰かにナイフ術くらいは教わるべきだな。今のお前さんのナイフは悪い意味で我流だ。そんな太刀筋じゃすぐに見抜かれるぞ」

「つ…やっぱり、実力があるとわかりますか」

優花はあの日以来殆ど訓練をしておらず、ナイフを使った戦闘もGVRで使っていた機体の戦法を自分なりに再現したもの。

当然ながらまともな剣術を習っていない彼女の太刀筋の甘さを見抜かれた。

「あとは…そつちの治癒師か。随分変わった武器を持つてるが…その剣、お前達の仲間が創ったものだろ？デザインは見たことがないからなんとなく察しはつくが…」

「…ええ。あの銃の設計者が創った武器ですよ。王国が見捨てた…ね」

香織の冷たい言葉に多少なりともたじろぐガハルド。

「…で、お前はシズクだったな。随分変わった太刀筋だが…お前の剣術と武器、合っていないんじゃないか？」

彼女の振り方から雫本来の戦い方を見抜いたガハルド。

「お前さんの戦い方は斬ることのみ特化した剣を扱うもの…少なくとも切れ味が劣る剣で使う流派じゃないな」

一切の疑念を持たず答えるガハルドの観察眼に内心舌を巻く雫。

「…で、結局皇帝さんは何のためにこちらに？」

「俺が聞きたかったのは一つ。あの武器…銃を創った奴についてだ」
香織が拳を強く握り、周囲の空気も重くなる。

「…なら覚えててください。彼は南雲ハジメ君。ステータスが平均で天職は錬成師。戦い向けの技能を持っていなかったために周囲

から馬鹿にされ、みんなの命を守るために戦った挙句裏切られて奈落の底に突き落とされた」

香織が顔を上げ、叫ぶ。

「あなたたちの戦いに巻き込まれて、王国から切り捨てられた私達の仲間です！」

その剣幕に雫達が止めに入る。

「…すいません、皇帝陛下。香織にとって南雲君は…」

「わかったよ。今日のところは引く。俺もそろそろ帝国に帰らねえといけねえしな」

帰り道でガハルドは一人考え込む。

(南雲ハジメ。錬成師で能力は平均の『無能』か………)

「全く、イシユタルのジジイも国王も見ろ目がねえな」

ネーナが使っていたあの武器。それを彼が設計したとなれば…

(あれはアーティファクトじゃねえ。だがその破壊力はトリニティが証明してる………つまり、アーティファクトと違いあの武器は技術と材料が揃っていれば量産が可能)

兵力の消耗を最小限にできるとんでもない武器を王国は『処分』し、結果的にそれが傭兵の手に渡った。

つまり、今後あの設計図が王国に戻る可能性は極めて低くなったということだ。

「ま、どうなるか知ったことじゃねえか」

一方その頃…

「ふっ！はっ！せああああっ!!」

聖剣を振りながら光輝は心の中のモヤモヤを払うかのように練習していた。

「へえ、中々いい太刀筋じゃねえか、勇者の兄ちゃんよ！」

突然の来訪者に光輝が振り向くと、そこには赤い髪が目立つ中年男性がいた。

「あなたは…？」

「俺か？俺はちよいとここの使用人に荷物を届けに来ただけの冒険者だよ。帰りに噂の勇者の兄ちゃんが練習してたから声をかけただけさ」

フランクに話しかける男に光輝は彼が悪い人間ではないと感じ、練習の手を止める。

「だったら、自己紹介ですね…俺は天之河光輝です」

「光輝か…俺はビアツジ。『ゲイリー・ビアツジ』だ」

光輝に対しビアツジ……否、『アリー・アル・サーシエス』は答えるのだった。

特別編2話 目覚める者たち

神山、聖教教会本部。

そこでイシユタルは聖堂で祈りを捧げていた。

「……………ただいま、エヒト様からお告げがくだされた」

イシユタルの言葉に周囲が騒々しくなる。

「エヒト様の眷属がこの世に生まれ落ち……………我らに仇なす異教徒を滅ぼすべく動き出す!!」

そう叫んだイシユタルは聖堂に設置された鏡を見て…

その中には単眼のモビルスーツが数十体立っていた。

それから二日後。

香織、雫、遠藤、優花、優翔、鈴、龍太郎はリアーナに頼んで用意してもらった部屋でそれぞれのガンプラの整備をしながら龍太郎からこれまでの経緯を聞いていた。

「つまり…龍太郎君は前にホルアドで師匠と出会って…」

「しかもその人、あの『東方不敗』だったってこと?」

香織はハジメに預けたエクシアとは異なるもう一体のガンプラ：『ダブルオーライザー』を磨き、雫はフリーダム・ブレードマスターのメンテナンスをしていた。

「ああ。すっかりあの人に出会った時は驚いたけどさ…レイさんといイトリニティ兄妹といいこの世界にはガンダム世界で死んだ人が流れ着いてるのかもしれないねえ」

龍太郎は自身の愛機『ゴッドガンダム魂』をテーブルに置いてこれまでのことを思い出したのか遠い目をする。

「……………」

「龍太郎君?」

何か考えているような龍太郎に鈴が声をかけたが、龍太郎は小さく首を振る。

「…いや、まだ伝えられるようなものはねえよ」
そう言うのと龍太郎は黙って外に出て行く。

(…………師匠。あんたの言ってたことが本当なら…………俺たちがここに
いる意味って…)

あの日。ライセン大峽谷で修行をしていた龍太郎は東方不敗から
あることを聞かされた。

この世界の『七大迷宮』。そこで得られる神代魔法。
そして…………

「あんなの…誰に相談しろってんだよ…!」

「よお。久しぶりだな、坂上」

後ろから声をかけられ、龍太郎は咄嗟に振り向く。

「清水…!」

黒いローブを被ってこそいるが、その顔はかつて何度かガン普拉バ
トルで共闘した清水だった。

「マスターアジアの弟子になったって聞いてな…少しばかりお前の力
を借りたい」

「お前、それをどこで…!」

龍太郎に有無を言わせず清水は彼の手を掴むと路地裏へと引つ
張っていく。

「ちよ、お前どうして…」

「グズグズ説明してる暇はないんだよ！今回はお前の…いや、『お前とシャイニングガンダム』の手を借りておきたい」

「っ！」

清水の口から告げられた名前に龍太郎は何も言えなくなるが、清水はポケットから宝石を取り出す。

「いいか。今から役30分後にシユネー雪原付近にある中立域の村を教会の手先が襲う。中立とは言っても正確には教会に反目する人間族と魔人族が共存した集落だがな」

近くの建物に入った清水は慣れた手つきで建物の地下室に入り、暗いトンネルにたどり着く。

「な、なあ清水…お前、一体今はなにしてんだ…？」

数ヶ月前とは異なった雰囲気清水に龍太郎が問うが…

「今は…この戦争を終わらせるために戦ってる。とだけ言わせてもらう」

場所は変わって、ここはシユネー雪原と隣接する小さな名も無き集落。

一部では『中立域』と呼ばれているこの土地の民を殺そうと単眼の悪魔…『デスアーミー』が30体迫っていた。

「女子供を先に逃がせ！この際家畜も置いていくしかないだろ！」

「だ、だがそれでは…」

魔人族の兵士らしき男が人間族の老人にさげふ。

「今ここで死んだら元も子もないだろ！」

老人を連れて脱出しようとする兵士だが、すでに集落の前に3体のデスアーミーが接近。

「伏せろ、2人とも！」

突如空から聞こえてきた声に咄嗟に従うと、デスアーミーの1体がボデイを撃ち抜かれて大爆発。

「あ、あれは……………」

「黒い巨人……………！『黒翼の機人』だ！」

黒い翼を広げ、大きなビームライフルを持って現れたのは魔人族に最近広まってきた噂。

黒、赤を基調としたボデイの機人…否、『クロウガンダム』。

「清水幸利、クロウガンダム。対象を殲滅する！」

クロウはメイン武器である『バスターライフル』に仕込んだ実体刃を出現させ、それをデスアーミーに投擲。

メインカメラの頭を粉碎してバスターライフルは地面に刺さり、クロウはシールドからビームサーベルを引き抜くと戦闘を開始した。

「あれは…デスアーミー…一体誰があんなの…！」

清水に連れてこられた龍太郎はその現場を見て啞然としている。

だが、戦いの現場を見て彼は自分が今やるべきことを考え…そして、一つの結論に達した。

『いいか龍太郎。人は誰しも過ちを犯す。それはお前が知つてのとおりこのワシもだ』

それは、かつてライセンスで師から告げられた言葉。

『だが、お前に信頼できる者がいるのならお前は迷わずに自分の信じた道を進め。お前がもし多くの者を傷つける誤った道に進みそうに

なれば、信頼できる友がきつと止めてくれる』

「……………つたく、もう見てるだけじゃ意味ねえよなあ！」

龍太郎は右手を天にかざし……………

「ガンツダアアアアアアアアム!!!」

指を鳴らして力強く叫んだ。

「な、なんだ!？」

兵士達は突然の地響きに驚くが…地面を突き破って何かが出現し、龍太郎の後ろに立つ。

龍太郎は走ってきたホバリング車…『コアランダー』に乗り込むと、内部からナノマシンを含んだラバースーツが龍太郎の体を包んでいく。

「ぐっ…うううあああ！」

激しい苦痛に苦悶の声を上げる龍太郎だが、その苦しみに耐え抜き…

「うっしやああ!!」

完全にファイティングスーツが装着され、コアランダーが本体…『シャイニングガンダム』に合体すると、ついに伝説のモビルファイターが復活を果たした…!

「オオラアアアア！」

デスアーミーの軍勢と戦っていたクロウガンダムだが、そこにシャイニングガンダムが現れて援護をしてきた。

「坂上…!」

「清水、今回は俺も手助けするぜ！」

龍太郎がコックピットで拳を叩くと、シャイニングガンダムも同じ

行動を取る。

「さて、残り27体…」

「どつちが多く倒せるか…」

そう言うときクロウはビームサーベルを構え、シャイニングは拳や蹴りでデスアーミーを粉砕していく。

「とっておき…くらいな！」

クロウの腕についていた爪…ウイングガンダムのパーツを一回り大きくした新装備『ヒート・ネイル』によってデスアーミーが2体切り裂かれていく。

「だったら、俺も！」

シャイニングは2本のビームサーベルを引き抜き、デスアーミーを立て続けに4体切り裂く。

（俺には光輝や雫みてえな剣の才能は無いけど…でもこのサーベルなら関係ねえ！）

ビームサーベルが次々と敵を葬り、3本の光が死を呼ぶ兵士を次々と切り裂いていき…

残った5体のデスアーミーが突如として機械的な翼を出現させ、飛び去ろうとする。

「デスアーミーがその場で変形って…そんなのアリかよ!？」

「それより、逃すわけにはいかねえだろ！」

そう言うときクロウはバスターライフルを拾い、シールドとライフルを真上に放り投げる。

すると二つの武器が連結し、さらにクロウは自身のボディを変形させてシールド&ライフルと合体。

ウイングガンダムの『バード形態』に相当する『レイヴンモード』に姿を変え、清水は叫ぶ。

「坂上、クロウの手に掴まれ！」

クロウガンダムの腕を掴み、共に空を飛ぶシャイニング。

逃げようとする5体のうち、3体にクロウは狙いを定め：

「消えな」

清水がトリガーを引くとバスターライフルからビームが放たれ、3体のウイングデスアーミーを消滅させる。

「清水、あとは任せろー！」

龍太郎の言葉にクロウはスピードを上げ、放り投げるように残った2体にめがけてシャイニングを飛ばし、空中でシャイニングはフェイスカバーとアームカバーが展開。

『両手』の各関節が展開し、そこから液体金属が放出されエネルギーを纏い緑色に輝いていく。

「俺の両手が光って唸る!!お前を倒せと輝き叫ぶ!!」

そのまま空中でウイングデスアーミー2体の頭を掴み取り、一気にエネルギーを流し込む。

「必殺!!ツインシャイニングウ……フィンツガアアアアアアアアアアア
!!!」

シャイニングガンダムの必殺技が炸裂し、とうとうデスアーミー軍団は全滅することとなった：

その後。

クロウに乗った清水は何も言わず龍太郎の前から飛び去ってしまい、飛行能力に乏しかったシャイニングはというと……

「……………しゃーねえ。走って帰るっきゃねえか」

人の足なら数ヶ月かかる距離を走るしかないと諦め、内心『清水の奴、今度会ったら今回の一件について埋め合わせさせてやる』と思いながら王都を目指していった。

：なお、10日間かけてシャイニングガンダムを使い帰ってきたときにはもう光輝達はホルアドでの訓練を再開しており、龍太郎はまたも走る事になったのは余談である。

「俺は…マラソンランナーじゃねえんだぞ!!」

一方、清水は…

「おう、チビ共。任務完了だ」

魔人族領地のある小さな村でクロウガンダムから降りた清水は、ガンプラに戻ったクロウを回収。

周囲にいた子供達に囲まれながらもみんなに声をかけていく。

「おつかれさん、清水」

その声をかけてきたのは赤い髪をした浅黒い肌の女性。

「カトレアさんも…怪我、治ったんですね？」

「まあな。いつまでもひよっ子共やあんたとミハイルにばかり押し付ける訳にはいかないだろう？……まあ、アタシのガンダムはまだ修理に時間かかるらしいけど」

カトレアと呼ばれた女性が苦笑いする中、清水は小さくため息をつく。

「俺とミハイルさんだけじゃないでしょ？シエルやダーゴだっているわけだし…無茶しないで今はゆっくりしててくださいいよ」

「はあ…わかったよ。なら代替機の準備が出来るまでフリード様に休憩でも申請しておこうかねえ…」

そう言っただけカトレアは去っていき、清水は自身のガンプラを見つめる。

「……………しかし、これからどうなるもんかねえ」

清水のつぶやきは誰に届くでもなく、虚しく痩せこけた大地に響いていった…

第2章 集う戦士

第1話 ウサギと電撃

ユエと共にハジメはオルクス大迷宮から外に繋がる魔法陣の光に飛び込み、気が付くと…

まだ洞窟の中にいた。

「あ、あれえ…？」

「…秘密の通路。隠すのが普通」

ユエのさり気ないツツコミにハジメは苦い顔をする。

「あ、ああ…そうだよね…うん」

知らずのうちに舞い上がっていたと悟ったハジメが少し反省していると、ハジメの指の『宝物庫』から何かが出現。

『ハジメ、セツカチ！ハジメ、セツカチ!!』

『キヲヌクナ！キヲヌクナ!』

オレンジと緑の丸いロボットがハジメに叫んでくる。

『『ハロ』にまで言われるなんて…』

ハジメ達の周囲を飛び回っていたのはガンダムシリーズではお馴染みのマスコットロボ『ハロ』。

どうやらモビルスーツのデータを採取していた頃のオスカー達が創ったらしく、内部は回路ではなく魔法陣などが幾重にも張り巡らされた一種のアーティファクトとして存在しているらしい。

1週間前にハジメが偶然発見したハロはハジメとユエを『マスター』として登録し、計15機が確認されたがそれぞれサイズも機能も異なっており、今2人の周囲を飛び回っているのはその中でもモビルスーツの操縦が可能な『パイロット型』と呼ばれるタイプである。

なお、ミネルバ完成までにハジメのサポートをしてくれたのはこのハロ達だったりするが…それはまた別の話。

ハジメ達は道なりに洞窟を進み、途中のトラップや扉の封印は宝物庫に描かれたオルクスの紋章が反応して自動的に解除される。

やがて最後の扉を開くと、強い光がハジメ達の視界を包み…

「……………帰ってきたね」

「ん……………」

そこに広がっていたのは『外の世界』。

ハジメにとつては3ヶ月、ユエにとつては300年ぶりとなる外界の空気に触れて…

「……………いいいいやったあああああ!!! ついに! ついに帰ってきたあああ!!!」

「んー!!!」

ハジメはいつになくハイテンションになり、ユエとハイタッチを交わす。

長きに渡り迷宮に閉じ込められていた彼らにとつて外に出られたという事実だけでも十分すぎるほど幸せだった。

……………そう。例え『地獄と呼ばれる』場所に出てきたとしても。

「……………なんか、嫌なお出迎えだけど」

「……………もうちよつと嬉しさに浸りたかった」

迫ってくる魔物に対しハジメはドンナーとシユラークを取り出し、ユエもまた戦闘準備に入る。

「ユエさん。……………確か『ライセン大峡谷』だから……………魔法は使えないんじゃない?」

ハジメ達が出てきたのはトータス屈指の危険地帯として知られるライセン大峡谷。

放出された魔法が分解されるため、身体強化などの体内に魔力を循環させるタイプの魔法以外がほぼ使えなくなる死の谷である。

「……………魔力効率はだいたい10倍。でも力づくでいける」

「いや、それは流石に効率悪いよ……ここは僕がどうにかする。適材適所ってやつだよ」

ハジメが前に立つといささか不満そうな顔をするユエ。

だが、ハジメは拳銃を構えると魔物の群れへと走っていった。

オークのような姿の魔物が棍棒を振り下ろしてくるが、ハジメはそれを素早く避けてドンナーの引き金を引く。

弾丸は一撃でオークの頭を貫通し、ハジメはシユラークの弾丸を撃ち尽くすとシユラークをホルスターに戻し、左手はフォールディングレーザーに持ち替える。

フォールディングレーザーはオークの棍棒を一撃で切断し、ハジメはオークの首を刈り取るとドンナーの弾丸を撃ち尽くし、葉莖を排出。

ハジメは弾丸を撃ち尽くしたドンナーのシリンダーを露出させ、宝物庫から弾丸を6発出現させてガンスピンの要領で弾丸を再装填。

そのまま再びドンナーが火を吹き、次々と魔物を蹴散らしていくのだった…

ハジメが魔物を殲滅するのに3分もかからず、彼は敵がないのを確認するとドンナーをホルスターにしまい込む。

「なるほど…宝物庫からの転送にやや魔力消費が多くなって、リロード時の『瞬光』は変わらないか」

『瞬光』はハジメが習得した蹴りウサギの技能『天歩』の最終派生技能で、一時的に自身の感覚を限界まで研ぎ澄ませて高速移動に思考を追いつかせることが可能になりこれまでの限界を超えたスピードを出せるようになる。

ハジメはこの技能を応用することで精密な銃のコントロールが出来る空中リロードの成功率を99%まで引き上げることに成功したのだ。

「…なんか、案外あっさり倒せたね。本当にここがライセン大峽谷なのかな…？」

「……………単にハジメが化け物級に強いだけ」

座学をしていた頃に『ライセン大峽谷は処刑場として恐れられるほど強い魔物がいる』という情報を得ていただけに拍子抜けだったハジメだが、思えばこれまで自分がいた奈落が世界トップレベルに危険な場所だったのだろう。

「化け物って……………いやまあ、確かにオスカーさんの日記とか見る限り奈落は他の迷宮を全部攻略すること前提だったみたいなの難易度だったけどさあ」

『ハジメ、ツヨスギ！ハジメ、ツヨスギ！』

ハロからの言葉に小さく苦笑いするハジメはこれまでのことを思い出す。

オスカーの日記などを調べる限り、どうやら真オルクス大迷宮は他の神代魔法を全て会得して使いこなした上で挑むことを前提にしていたらしい。

そう考えるとあの異常な強さの魔物達や途中にあつた理不尽な罠（フロア全体が毒で包まれているなど）、そしてあのヒュドラのデータメなスペックも納得がいくとハジメは考えていた。

「とりあえず、ライセンに出てこれたのはある意味ラッキーだね。ここは七大迷宮があると言い伝えが存在してたし、探索しながら今は東

にある『ハルツイナ樹海』に向かおう」

「…西の砂漠にも大迷宮があるのには？」

「いきなり砂漠の横断をするには食糧とかの問題があるからね。東の樹海で万が一迷宮が見つからなくても、確か樹海から少し離れた場所に町があるから、一度ここか樹海の探索を途中で切り上げて町で休もうとも思う」

そんな会話をしながらハジメは奈落で開発した移動手段のバイク『シユタイプ』を宝物庫から取り出し、跨る。

魔力の消耗が少し大きいものの、あらかじめ内部に蓄えさせていた魔力を使いシユタイプは問題なく大峡谷を走行している。

そんな中でハジメとユエは遠目から走ってくる二つの頭を持つ恐竜の様なものを目撃するが…

「あれ…誰かを追いかけてる？」

魔物に追いかけていたのはウサギの耳をもった少女…この先の樹海に住んでいるはずの亜人族の一種、兎人族の少女だった。

「妙だな…亜人は基本的にハルツイナ樹海で暮らすか人間族の奴隷として街中で住んでいるのに…んん!!」

よく見ると兎人族の少女だけでなく人間族の少女とハジメの服に似た赤いコートを着た人間族の少年まで一緒に逃げていた。

「ああ、あ、ああ!! やつと見つけた!! 助けてくださいああ!!!」

うさ耳の少女が泣き叫びながらハジメのもとへ走ってくる。

「っ！伏せて、三人とも!!」

ハジメは咄嗟にドンナーを魔物に向け、二つの頭を同時に撃ち抜くと魔物は一瞬で絶命。

「嘘…ダイノヘドアが一撃で…」

ハジメがバイクを停車させて2人とも降りると、うさ耳少女がハジメに向かって飛んできた。

「た、助けていただきありがとうございますうございませう!!」

飛びかかるうさ耳少女を片手で抑えるハジメだったが、後ろにいた男女が声をかけてきた。

「もう、シアは少し落ち着いてよ!この人困ってるよ」

「あの、ありがとうございます!…もしかしてその服、ザフトの…?」
そう言ったのはうさ耳少女と一緒にいたやや緑がかった金髪の少年。

その服装はハジメのコートによく似た赤いコートで…

「嘘でしょ……………ニコル・アマルフィ。それに…」

ハジメはシアと呼ばれたうさ耳少女とともにいる少女を見て驚きを隠すことができなかった。

「マユ…アスカ…?」

そこにいたのはコズミック・イラの新たな戦争の引き金にもなったと言える少女。

ハジメが扱っているインパルスガンダムの本래のパイロット『シン・アスカ』の妹だったのだから…

一方、ヘルシャー帝国のある宿では。

「どう?ヨハン兄。その荷物に何かお宝とかあった?」

シャワーから帰ってきたネーナが以前どこからか買い取ったハジメの荷物を調べていたヨハンに質問する。

「…いや。武器のアイデア帳くらいしかないな。通信端末は我々の世

代から数世紀前の代物だ。しかし…」

ヨハンは一つのケースに収められていたもの…『デステイニーガンダム・R』のガンプラを取り出す。

「その人形って、ガンダム…よね？見た限り太陽炉は積んでないけど」「ああ。しかし見る限りどうやら別の動力源で動くらしい。見ろ、ご丁寧にケースの中に詳細なデータまである」

ハジメが書いたデータメモに目を通したヨハンは小さく息を吐き、椅子に座り込むのだった…

第2話 命の重み

ハジメとユエが兎人族の少女『シア・ハウリア』や彼女と同行していた『ニコル・アマルファイ』、『マユ・アスカ』と出会ってから数十分。ハジメ達はシアの『家族を助けて欲しい』という頼みを一応聞き入れ、シユタイプをもう一台出現させてともに移動していた。

「…それにしてもまさか、ニコルさんが魔力操作を扱えるなんて…」
「あ、ニコルでいいですよ？ハジメ君も僕とそんなに歳は変わらないでしょうし」

「だったら、僕のことハジメでいいよ。敬語じゃなくタメ口にもするけど…」

そんなやり取りをしながら移動する2台のバイク。

因みにシアはハジメの後ろに乗り、マユはニコルの後ろに乗りながら移動している。

「……………で、シアさん達の話をもとめると…まずニコル達は前世…『コズミック・イラ』の世界での記憶を引き継いだままこの世界で生まれ、それがハッキリしたのは1年ほど前と」

「ああ。僕もマユちゃんも幼い頃は教会で育てられて…そんな中で僕達が1年前、ステータスプレートを発行したんだ」

「そしたら私達の技能欄に『魔力操作』の技能があつて…でも、教会としては魔物と同様の技能を持つ私達がいるのは宗教的な理由から忌避するべきことだと言っていました」

「どうやら、そんな経緯があつて彼らは教会から逃げ出しフェアベルゲン…亜人が住む国の近くまで流れたところをシア達ハウリア族に保護されたという。」

「…でも、亜人族は人間族を敵視してる。どうして2人は受け入れられた？」

ユエの質問に答えたのは、シアだった。

「…………私も魔力操作の技能を持っていたからです。本来は亜人は魔力を持たないのに私はそれを扱える。その上『未来視』と呼ばれる固有魔法が使えます」

　　どうやらその未来視は自身の危機が近づくと自動で発動する場合と自分の意思で発動させる二つのパターンがあるらしく、使える回数と必要なインターバルも決まっているがシアはその力を駆使してこれまで生き残ってきたのだという。

「…………ですが、つい先日私の存在がフェアベルゲンの者たちにバレてしまい、ハウリアは樹海から追放。北の山脈を超えて新しい集落を築こうとしましたがそこで帝国兵と鉢合わせしてしまいました。しかもあの時はすでに魔力を使い切っていたので未来視も使えず…」
　　その結果半数近くのハウリアが捕まるか殺されてしまったらしく、シア達は魔法の使えなくなるライセン大峡谷に逃げてきたのだという。

「…ハウリアのみんなは戦闘能力は無いから、実質戦えるのは僕だけだった。でも武装のない状況ではみんなを連れて逃げるしか…」

　　悔しそうな表情を浮かべるニコルにハジメ達は何も言えなくなる。
「…シアさんを連れて私達はこの峡谷に来たんですが、当初の予想が外れて帝国兵達は峡谷から出るための場所にテントを張って待ち構えています。私達がいずれ耐えられず出てくるのをおそらく狙っているのかと……………」

「そういうことだったんだね……………わかった。なら……………」

　　ハジメは一度バイクを停車させ、ニコル達に向き合う。

「…僕達は僕達の目的がある。だから……………ハウリア族を助ける代わりに手伝って欲しいことがあるんだ」

ワイバーンのような外見の魔物…ハイベリアの群れが峡谷の中でハウリア族を襲撃している。

「みんな、岩陰へ逃げろ!!」

シアの父、カム・ハウリアが指示を出すのが殆どが恐怖から逃げ遅れてしまい、ハイベリアの餌食になろうとしていたのだが…

「伏せてください!!」

どこからか聞こえてきた声とともに、ハイベリアの頭が吹き飛ぶ。ハウリア達が周囲を見ると、ある一点から見慣れない乗り物に乗った謎の少年と自分たちの仲間でもあった少年の姿が見えた。

「ニコル、確か拳銃の成績良かったよね？」

「う、うん………って、本物お!？」

ハジメがドンナーやシユラークとは別に開発していた試作拳銃をニコルに投げ渡し、2人はすぐさまハイベリアの群れに狙いを定める。

ドパンツ!!ドパンツ!!

ドンナーとニコルの銃弾がハイベリアの頭を貫き、次々とハイベリア達は墜落していく。

「な、何が…?」

いきなりすることにハウリア達は呆然としてみると、見知った人物が

走ってきた。

「父様〜!!みんな〜!!助けを呼んできましたよ〜!!」

『シア?!』

ハジメ達の介入により、ほどなくしてハイベリア達は全滅。

ホルスターにドンナーをしまったハジメは代表であるシアの父、カムと改めて話をする事となる。

「南雲ハジメ殿…で宜しいか？私はカム。シアの父にしてハウリアの族長をしております。この度はシアのみならず我が一族、そしてシアの同胞でもあるニコル殿やマユ殿までお助け頂き、なんとお礼を言えればいいか…」

「いえ…僕達も少しだけ力を借りたいことがあります。実は…：…僕達の目的を達成するため一度ハルツイナ樹海まで戻る必要があります。その見返りという形になりますが…：少なくとも樹海内部で無事に生活出来る様になるかの交渉を行う形になりますか…」

そんな会話の中でハジメはふと疑問に思ったことを質問する。

「ところで、随分と人間族に対しての警戒心が薄いような…：ニコル達のことでもですけど、人間族によってここまで追われたのにどうして僕のことをすぐ信用してくれたんですか…?」

本来ならシア達亜人種族は被差別種族であり、ここにいるのもその人間族によって追われたせいだ。

にも関わらず人間族であるハジメの存在をすんなりと受け入れているカム達に疑問を抱いてしまう。

「確かに私達は人間族によってここまで追われましたが、あなた方のせいではありません…それに、ニコル君達もあなたもシアが信頼した相手なのです。だから我々も信じようと思いましたが……私たちは、家族なのですから」

(家族…ね)

カムの言葉を聞いてハジメの脳裏によぎったのはもう4ヶ月近く会っていない両親の顔。

どれほど辛い状況においても家族を信じようとするその姿は自分たちが忘れてはならないものだと思ひ知ることとなるのだった…

「…みなさん。ここはまだ魔物がいつ現れるかわかりません。この峡谷を脱出しましょう」

ハジメがそう言うのと宝物庫から3体のハロ(電撃、フラッシュなど)の簡易攻撃が可能な戦闘タイプ)が出現してハウリア達を護衛するよう周囲をくるくると回転する。

「ハロ達はハウリアの皆を守ることに専念。もし敵が近づいてきたら守ること優先でね」

『リョウカイ！リョウカイ！』

『シャーネーナ！シャーネーナ！』

『シビレルゼ！シビレルゼ！』

ハロ達の元気な返事を聞いたハジメが頷き、一同は大峡谷を抜けるべく歩き出した…

ハウリア達を連れてからおよそ30分。

近づく魔物達に応戦するためハジメは基本装備の他インパルスの武装を実体化させてのテストも兼ねて戦い、ニコルもハジメが貸したナイフや銃を使い着実に敵を倒していく。

やがて峡谷の出入り口である岩壁を削って造ったと思わしき階段が見えてくる。

「あの…ハジメさん、もし帝国兵達がいたら…」

「戦うよ。正直殺すのは最後の手段にするけど…もしみんなの命を向こうが狙ってきたら、そのときは戦う」

ハジメとしては神と戦い教会と敵対する以上いつかは『そういう日』が来ると覚悟はしている。

だが、酷な言い方をするが帝国兵が亜人を奴隷にすることは残虐な犯罪ではなくこの世界においては『普通のこと』であり、それを『気に入らない』などの理由で命を奪うことにハジメは迷いを感じていた。

だが、彼らを制圧しなければハジメ達はハウリア族を樹海に連れていけない。

(…大丈夫。みんなを守るため……覚悟を決めろ、南雲ハジメ!!)

知らず知らずのうちにドンナーに伸びていた手。

その手はわずかながら汗ばんでいた…

ハジメ達が階段を上り切ると、そこには大型の馬車が数台と30人ほどのカーキ色をした軍服を着た帝国兵たちがいた。

「おいおいマジかよ。本当に生き残っていたとはな…隊長の命令だから仕方なく残ってたけど、いい土産話ができそうだ」

「小隊長！隊長が探してた白髪の兎人族もいますよ！俺達ますますラッキーじゃないすか！」

「小隊長…女もかなりいますし、少しだけなら『味見』していいですよね？」

「じゃあねえなあ…2、3人程度ならな？」

ハウリア達に下卑た視線を向けてくる帝国兵に嫌悪感をあらわにするニコル達。

当然ながらハジメ、ニコルが帝国兵の目からハウリア族を守るために立つ。

「あ？お前ら…兎人族じゃねえよな？」

「はい、見ての通り人間です」

ハウリアを狙いつこく網を張っていた帝国兵を素通りできるとは思えなかったハジメ達はあえて彼らと真つ向から向かう合うことにした。

「はあ？…なんで人間族が兎人族と一緒に…そうかお前ら奴隷商人だな？情報掴んで追いかけたと。まあそいつら全員帝国で引き取るから置いてけ」

「それはお断りします。彼らはすでに僕が引き取っており、亜人奴隷の所有権は最初に手にした者…つまり彼らと契約を交わした僕らにあるんですよ」

とんでもなく上から目線にさすがのハジメも多少引つかかるものはあったが、あくまでも穏便に事を進めるため所有権を主張。

だが断られると思っていなかった帝国兵達は眉をひそめ、さらにガラの悪い態度になる。

「…おいガキ。口の利き方に気をつけろ。痛い目に遭いたくなかったらさっさと兎人族、そして後ろにいる女達も渡せ」

「…それは脅迫行為…でいいんですね?」

ハジメとニコルはコートの内側にこっそり手を忍ばせ…

「ああ?…たたく状況がわかってねえガキだな!お前らはいいいから俺らの言葉を黙って聞いてry」

最後まで言い切る瞬間、ドパンツ!!という音が聞こえ男が膝をつく。

ハジメがドンナーに込めていた弾丸の一つ『非殺傷ゴム弾』を顎に撃ち込み、意識を刈り取ったのだ。

「っー」

突然のことに驚く帝国兵だが、小隊長が倒れてもすぐに前衛が剣を持つて後衛が呪文を唱え始める。

性格面が腐っていてもやはり実力主義の国出身なだけあり、戦闘力は紛れもなく本物だ。

だが…

「ふっー」

ハジメがドンナーのゴム弾で敵の足などを撃って怯ませ、シユラークに込めた実弾が相手の剣やアーティファクトを破壊。

ニコルもまた帝国兵の背後に回るとアキレス腱を切り、行動できなくなるように武器や手などを銃で撃ち抜いていく。

片や奈落の底で地獄を見たハジメ。片や基礎能力に優れたコーティネイターでエリート軍人であり、『実戦』をいくつも経験してきたニコル。

実力があれど場数の差に帝国兵達は為すすべもなくほぼ全員が無力化され、残るは一人だけになった。

「お、お前らー！俺達にこんなことをして、ただで済むと…ひいつ!?」
腰を抜かしながらも啖呵を切る帝国兵に対してハジメはシユラー
クの弾丸をスレスレで撃ち、黙らせる。

「僕の質問に答えてもらおう。そうすればここにいる他の兵士はもちろ
ん、あなたの命も助かるかもしれない」

「他の兎人族はどうになりました？彼らの仲間をすでに何人も捕まえた
と思うんですが…?」

ハジメ達が知りたかったのは自分達が出会う前に捕まったであろ
う兎人族の行方。

聞いた話だと捕まったのは1000人規模だったため、移送に時間か
かかるようなら助けるつもりだった。

「多分…全部移送済みだと思う。人数は絞ったから…」

その言葉にシア達が絶句するのが後ろからでも伝わり、ハジメは
シユラークを握る手に力が入る。

人数を絞った。それはつまり、老人など『愛玩奴隷としての需要の
ない兎人族は殺した』という意味に他ならないからだ。

「……………わかりました。それだけ聞けたら十分です」

そう言うとハジメは帝国兵の首をつかみ持ち上げる。

「ハジメ!？」

殺さないと宣言していたはずのハジメの行動に思わずユエが叫ぶ
が、ハジメは黙って帝国兵に視線を送っていた。

「ぐ……………た、助け…」

「言ったはずです。あなたは『殺さない』。だけど……………」

ハジメの体に僅かながら電気が流れていく。

「これはハウリア達の痛みのほんの欠片です。あなた達の『仕事』の代償…それを覚えてもなお奴隷として彼らを狙うのなら…もう僕は何も言わない」

それはハジメなりの落としどころ。

彼らが『仕事』で奴隷を使っているのがこの世界の常識であり、自分達が気に入らないからと彼らを殺すのは暴虐でしかない。

だが、彼らの行動は倫理的に目に余るのも事実でありこれを見逃しているものかと迷った結果…この行動に移った。

「奴隷を探すというのなら、『この顔』を覚えてくださいね」

そう言うときハジメは優しい笑顔になり、『纏雷』を使って帝国兵を失神させるのだった…

余談だがこの時ハジメが放った魔法『威圧』によって気絶していた帝国兵達も夢の中で彼の姿が焼き付いたらしく、飛び道具や電撃を使う魔物に対してトラウマを植えつけられたのは別の話…

第3話 亜人の森

ハジメ達が帝国兵達を退けてから1時間。

彼らの残した複数の馬車にハウリア達を乗せてハルツィナ樹海まで移動を続けていた。

「じゃあ…ハジメさん達も魔力を直接操れるんですか？」

「ユエさんは最初からね…僕の場合、落ちた場所で魔物を食べるしかなかったから自然と魔力操作の技能を身につけたというべきかな…」

今までのことを話しながら移動する中で、ニコルが口を開く。

「…魔力操作を持つ僕達は亜人の国でも人間族でも異端です。もしフェアベルゲンとの問題が解決したら…ハジメに少し手伝って欲しいことがあります」

「手伝って欲しいこと？」

ハジメの疑問にニコルが頷く。

「以前僕達がいた教会で噂を聞きました。僕らのような魔力操作を持つ異端扱いの人々をかくまっている国の『ディーレ共和国』があると…ただ、その場所はここより離れた『アンカジ公国』の近くにあるんです」

（なるほど…わざわざ魔力操作持ちを集めている国……ん？ディーレって…）

ニコルの言葉を聞いて考えていたハジメは、ふと王宮にいた時のことを思い出す。

「…わかった。なら僕達もディーレに行くよ…少し気になることがあるし、何より僕達の目的である大迷宮の近くなんだ」

（ディーレ共和国…確か、レイさんはあの国から来たはず…）

どれほどたったのか、一同はハルツィナ樹海にたどり着きながら先を進む。

途中、ハジメ達の『気配遮断』にハウリア達が戸惑うこともあったが…

突如としてハジメ達の周囲に複数の気配が現れ、囲まれる。

「偶然…にしても最悪なパターンだ」

「お前達…何故人間とここにいる!？」

現れたのはトラ模様の耳と尻尾をつけた複数の男達。

見るからに筋骨隆々といった男達は親の敵でも見るような目でハジメ達を睨む。

「白い髪の兎人族だと…キサマら、報告のあったハウリア族か!」

亜人：虎人族のリーダーらしき男が鉈のような武器を抜く。

「亜人族の面汚し共め! 長年同胞を騙し続け、忌み子を匿うだけでなく今度は人間を招き入れるとは! 反逆罪だ! もはや弁明など聞く必要もない! 全員この場で処刑する!!」

虎人族のリーダーが攻撃をしようとするが、ハジメは咄嗟に『秘密兵器』の一つを使う。

「すいません、少し待ってください!!」

そう言うとハジメは籠手…『リユストウング』に仕込んでいた武器の一つ『ワイヤーアンカー』を射出し、リーダーの鉈を持っていた腕に巻きつけて無力化。

さらに気配のあつた場所に威嚇射撃としてゴム弾を放ち、その場にいた亜人の動きを止める。

「な、何を…!？」

いきなり動きを封じられ、さらに一人残らず位置を特定されたこと

に驚く虎人族達。

屈強な体躯ならまだしも柔和な顔立ちのハジメにそれをやられたことで彼らも困惑から動きを止めた。

「今の威嚇のとおり、周囲に隠れている人たちも全て察知しています。ですが僕達の目的は決してフェアベルゲンの侵略でも亜人を奴隷にするためでもありません！ここは一度剣を置いて、僕の話聞いてもらえませんか…？」

あくまでも平和的に解決法を模索するべく警告するハジメ。

その間にも視線は隠れていた全ての虎人族を捉えており、彼らは手が出せなかった。

「…なら、何が目的だ？」

「僕の目的は一つ…この樹海に眠る『大樹ウーア・アルト』。そこにたどり着くことさえできれば僕は自分から貴方達に危害を加えるつもりはありません」

その言葉に驚く虎人族のリーダー。

なぜなら神聖視こそされているが所謂観光名所扱いに近い大樹が目的だというのだから。

「…僕の推測ですが、大樹こそがこの樹海に眠る『七大迷宮』の入口だと考えています。僕らの目的は大迷宮の攻略…それだけです」

「迷宮の入口？何を言っている？七大迷宮はこの樹海そのものだ。一度踏み込んだが最後、亜人以外には決して進むことも戻ることもできない天然の迷宮だ」

「僕も最初はそう思っていました…大迷宮の本質は『解放者からの試練』なんです。なのに亜人だけフリーパスなんて不公平ですからね…何らかの試練を兼ねているなら樹海そのものではなく樹海のどこかに迷宮に繋がる入口があるはずなんです」

ハジメの言葉を聞いた虎人族たちは混乱する。

彼らは解放者という存在を知らず、普通なら戯言扱いとして切り捨

てていただろう。

だが彼は差別対象の亜人族に対して敬語を使い、余計な危害を加えようもしない。

その上どう見ても有利なのは彼らなのだから、嘘をつくメリットが無いのだ。

「…お前達が同胞や国に危害を加えないというなら、大樹の下へいく位は構わないと俺は判断する。部下の命を無意味に散らすわけにはいかないからな」

リーダーが選んだのは部下の命を優先してハジメ達を見逃すこと。

「だが一警備隊長の私が独断で下せる判断ではない。一度本国に指示を仰ぐ。お前達の話も長老なら知っている方もおられるかもしれないしな」

「わかりました…その間は大人しくここで待機しています」

そう言う他他の虎人がどこかに走り去っていき、膠着状態が続いて

…

一時間後。

先ほど去っていった虎の亜人…警備隊副長のザムとともに数人の亜人が訪れ、その中にいたのは尖った耳と金髪が特徴的で唯一動物の要素を持たない種族…森人族だった。

「ふむ、お前さん達が問題の人間族かね？名はなんと言う？」

「初めまして…僕は南雲ハジメといいます」

「…ユエ」

「ニコル・アマルファイです」

「…マユ・アスカです」

「私はアルフレリック・ハイピスト。フェアベルゲンの長老の座を一つ預らせてもらっている。さて、お前さん達の要求は聞いているのだがその前に一つ聞かせてもらいたい……解放者とはどこで聞い

た？」

「オルクス大迷宮の最深部：解放者の一人、オスカー・オルクス氏の隠れ家で全てを」

ハジメはいくつかの証拠として奈落の中で得た魔石とオスカーから受け取った指輪を見せて証拠とした。

「これほどの純度の高い魔石：見たことない」

「ふむ：確かにこれはオスカー・オルクスの紋章だ。信じがたいが：確かに彼の隠れ家にたどり着いたと。よからう、とりあえずフェアベルゲンに来るがいい。私の名で滞在を許そう。あと、ハウリアの者達も一緒にな」

アルフレリックの言葉にざわめく他の亜人達。

何せこれまで人間が樹海に入ることすら特例なのに、フェアベルゲンへ客人扱いで入国など異例中の異例である。

「彼らは客人として扱わねばならん。その資格を持っているのでな：それが長老の座に就いた者にのみ伝えられる掟の一つだ」

「……………あの、別にそこまでしてもらわなくても。僕達の目的は大樹なわけで…」

「いや、大樹の周囲は特に霧が濃くてな。亜人族でもまともに歩くことはできません。一定周期で霧が弱まるから、大樹の下へ行くにはその時でなければならん。次に行けるのは十日後といったところだ……………亜人族なら誰でも知っているはずだが……………」

ハジメ達が後ろをチラツと見ると：

「……………あっ」

今思い出したといった顔のカム達に小さくため息が出てしまった。

「カクムくさくん？」

ハジメとニコルが恨みがましそうな声を出し、カム達ハウリアはどろろすべきか頭を悩ませるのだった…

その後。

フェアベルゲンへと向かう途中にアルフレリックが足を止める。

「…ところでだ。ハジメ殿はオスカー・オルクスの隠れ家についてたということは…『機人』を見たということかな？」

機人：モビルスーツのことに気づいたハジメが足を止めた。

「…ええ。それも2体」

「やはりか…実は、我々もすでに5体近くをこの森で見つけていてな…」

「5体!？」

アルフレリックの言葉に驚愕するハジメ。

彼の誘導で『それ』が眠る場所にたどり着き、ハジメ達は戦慄する。

「二つとも灰色の機人だが、君達はこれについて…?？」

アルフレリックの言葉は、もうハジメとニコルの耳には入ってこない。

「まさか…ここで会えるなんて…」

ニコルが触れたのは『かつての相棒』そして…

「どうして…?…?…僕の予想から外れた『この機体』があるんだ…?…」

ニコルが触れたのは『電撃』を意味するかつてのパートナー『ブリッツガンダム』。

そしてハジメが見つけたのは…大地を意味するザフトの新型モビルスーツ『ガイアガンダム』だった。

第4話 約束

(どうしてブリッツだけじゃなくガイアまで…そもそも、モビルスーツはどこから…?)

亜人の国、フェアベルゲンに案内されたハジメだが、彼はさきほど見た2体のモビルスーツについて考えていたため半ば無意識で亜人の国に足を踏み入れていた。

「…………なるほど。この世界は神の遊戯盤でしかなかった…それがこの世界の真相か」

「随分と冷静なんですね…?」

「元々この世界は我々亜人に優しくないからな。今更…というものだ。神に対しての信仰などより自然への感謝の念しか私たちには存在しない」

ハジメはオスカーの屋敷で得た情報…『解放者の正体』『神代魔法』『ハジメ達異世界人の存在』『迷宮を攻略し、神殺しを実現させ故郷に帰る目的』などを一通り説明すると他の長老たちも黙ってその話を聞いていた。

「それにだ…この大迷宮を創設した『リューテイルス・ハルツィナ』が我々の先祖にメッセージを遺していたのだよ。曰く『攻略者とは敵対せず、気に入れば協力するように』とな…これまで攻略者は現れず、そなた達が初の客人ということになる」

リューテイルス・ハルツィナ。それはオスカーの残した遺品の日記にも記されていた名前であり、彼女の意思は確かに伝えられていた証明でもあった。

だとするとあと10日…それまでハジメ達はフェアベルゲンにとどまる必要があるがこれまでの人間族に対する確執などから対立する可能性が高いことを考慮し、ハジメはそこについてアルフレリク

と話を進めようとしたのだが…

「…ん？」

突如、ハウリア達が待機している下の階が騒がしくなってきた。

嫌な予感がしたハジメとニコルが確認しようとするところそこに現れたのは熊の特徴を持った亜人やドワーフのような姿の亜人。

彼らはハジメ達を剣呑な目つきで睨み、乱入してくる。

チラツとハジメが後ろを見るとカムがシアを庇うように立ちふさがっており、2人の頬が赤く腫れている。

「カムさん！シアさん！」

ハジメが2人に声を掛けようとするが、熊の亜人はその大柄な体躯で威嚇するようにハジメだけでなくアルフレリックまで睨む。

「アルフレリック…貴様、どういうつもりだ!?何故人間だけでなくこの忌まわしい汚れた兎人族まで！返答によつては長老会議にて貴様に処分を下すことになるぞ！」

激情が抑えきれないのか拳を握り大声で叫ぶ熊の亜人。

さきほど同行していた虎人族以外の亜人のうち、熊の亜人と共に入ってきた殆どがアルフレリックを睨みつけていた。

「何、口伝に従ったままで。お前達も各種族の長老の座にあるのなら事情は理解できるはずだが？」

「何が口伝だ！そんなもの、眉唾ではないか！フェアベルゲン建国以来一度も実行されたことなどないだろう！」

「だから今回が最初になるのだろう。それだけのことだ。お前達も長老ならば口伝には従え。それがこの国の掟だ。それなのに我ら長老が掟を軽視してどうする」

アルフレリックの言葉にますます怒りを募らせる熊の亜人。

「なら、こんな人間族のガキが資格者だというのか！敵対してはなら

ない強者だと！」

「そうだ」

ここまでの言い争いの中でハジメはいくつかの推測をする。

見るからに寿命の長いアルフレリックと他の長老では微妙ながら価値観に差異があるのだろうか。

（人間族や魔族と違い、彼らは言わば『その他大勢の動物的種族』の集まり…なら、価値観の違いによる衝突は人間族以上のものになるのか…）

確かに歴史に縛られない発想は時として技術の進歩や革命を起こすための起爆剤となる。

だが、歴史に縛られないのと歴史を軽視するのではもたらされる未来も大きく違うということをこの亜人は気づいていない。

そして…彼らは選択を最悪な形で間違っってしまう。

「…なら、今この場で試してやろう！」

熊の亜人はその豪腕をハジメめがけて振るってきた。

突然のことにアルフレリック達も反応が遅れ、驚愕のあまり目を見開く。

亜人族随一のパワーと耐久力を誇る熊人族は大木すらもへし折るほどの豪腕。その上、この亜人は熊人族の代表『ジン』であり、そのパワーも熊人族最強だった。

しかし……………

「っー」

「なっ!？」

ハジメはその豪腕を真正面から受け止め、さらにリユストウングのギミックの一つ『パルマファイオキーナ』が発動。

内臓を傷つけないレベルの魔力砲撃に調整したものの、腹部に強烈なカウンターパンチをくらうジンは膝をついて吐き戻す。

「…あなた達に聞きたい。シアさん達の存在は…ただ家族に生きて欲

しいと願われ、生まれてきた命は……あなた達の価値観で無闇に奪っていいほど軽いものだと思えますか?」

ハジメの視線は殴られたであろうシア達に向くが、ジンは悪態をつくように叫ぶ。

「当然だ！魔物同然の力を持つ化け物とそれを隠していた恥さらしなど、生きる価値もない!!」

『無能』『役立たず』

そんな風に周囲から一度蔑まれたことを思い出し、ハジメは内心で黒い炎が燃えるのを感じる。

強さが正反対だったとはいえ、周囲からの迫害による痛みも家族の存在の大きさもハジメは十分に理解している。

だからこそハジメは『人と違うことを理由に迫害する存在』に対しては理性のリミッターが弱くなってしまう。

「生きる価値が無いのは……彼女の痛みを、苦しみを何一つ理解しようとしなくて切り捨てるアンタ達だああ!!」

ハジメの言葉はジンだけでなく周囲で見ているだけで彼の凶行を止めなかった他の亜人族にも響き、ハジメは無意識に『S. E. E. D』を発動。

木製の壁が崩壊しかけるレベルで打ち付け、ジンはそのまま失神するのだった…

それから数分後。

一触即発の空気をアルフレリックがとりなして一度落ち着き、ハジメ達はもう一度話し合いの場を設けることに。

集まったのはアルフレリックのほかには虎人族の代表ゼル、鳥の特徴を持った翼人族のマオ、狐の特徴を持った孤人族のルア、ドワーフのような外見の土人族のグゼ。

ハウリア達はニコルやマユ、ユエが守るように前に立ち、さらに戦闘用ハロが2体周囲を飛び回っていた。

「あくまでも僕達の希望は大樹を調べ、この樹海にある大迷宮の攻略です。攻略が終われば僕達はこのフェアベルゲンに来る理由はありません。僕としてはなるべく平和的解決を希望しますが：先ほどのように実力行使を行えば身を守る範囲での反撃をしないわけにはいきません」

「：だからジンを攻撃したことを許せと言いたいのか？」

ゼルがハジメに対して剣呑な目を向けてくる。

なお、ジンは簡単な治療で後遺症もなく回復したものの人間族の子供に手加減されて敗北したこと、そしてハジメの全力の怒りと殺気に精神的ダメージを負ったことからここにはいない。

「最初に攻撃したのは彼です。仮にも亜人族最強の豪腕を持つ熊人族、それも族長の本気の攻撃なんて普通なら原型も残らない死体になってもおかしくない攻撃をくらいかけたんです。それに対してこっちは最低限の加減はしたので、あなた達に批判する理由はありませんか：？」

「貴様ああ！ジンは、ジンはな！いつも国の事を思っで：！」

ハジメはいつになく強い口調で言い返す。

「国のための思うのならいきなり他者を殺すつもりで攻撃してもいいと？シアさんの可能性にすら気づかないでただ追放する獣は知能も人以下ってことですかね!？」

グゼは個人的にジンと仲が良かったらしく、非を認めようとしな
い。

だがハジメもシアの一件があるからかますます怒りがヒートアップして普段からは考えられないほどの乱暴な口調になる。

「ハジメ、一度落ち着いてー！」

「グゼ、気持ちをはわかるがそのくらいにしておけ。南雲ハジメの反撃はジンに酷い手傷の一つも負わせていない、正当な範囲内だ」

ニコルとユエがハジメをなだめ、アルフレリックがグゼを諫める。
「…ジンを加減して無力化するほどの実力。確かにこの少年は紋章の一つを所持しているし、実力もさきほど見せてもらった。僕達孤人族は彼らを口伝の資格者と認めるよ」

ルアが公的にハジメ達を認めると宣言し、マオ達翼人族も同様の答えを出す。

「南雲ハジメ。我らフェアベルゲンの長老衆はお前さん達を口伝の資格者と認める。故にお前さん達と敵対はしないというのが総意だ。可能な限り、末端のものにも手を出さないように伝える。しかし………」

「知つての通り亜人族の中には人間を相当恨んでいるものがある。家族を奴隷として拐われたりしたものもな。なので絶対というわけにはいかない。血気盛んな若者達は長老会議の通達を無視してお前さん達を狙うものも多い。特にジン達熊人族は………」

「………それで？」
「お前さんを襲った者たちを殺さないで欲しい。先ほどのジンのように………」

アルフレリック達の要求は、ハジメ達を狙う存在を殺さないで欲しいというもの。

「………でしたら、交換条件があります。僕達をいくら狙っても構いませんが………ハウリア族の存在を黙認してください。それさえ通ればあなた方との約束を守ります」

ハジメはハウリア達が無事に北の山脈まで移動するより、自分たちで力を得てこの森で独立できればこれ以上の被害を出すことはないと考えていた。

そもそもハウリア達に犠牲が出たのは山脈まで逃げようとして帝国兵に襲われたのが原因であり、樹海の中ではむしろ探知能力に優れている分安全だと考え、どうにかして樹海に残れないかと交渉を決め

ていたのだ。

「ふ、ふざけるな！その忌み子とフェアベルゲンを謀ったハウリアは全員処刑する！すでに長老会議で決定したことだ！」

真つ先に抗議してきたのはやはりゼル。どうやら長老会議で決まったというのは事実らしく、アルフレリック達の様子から間違いないと確信する。

「長老様方！どうか、どうか一族だけは！」

「シア、やめなさい！皆とつくに覚悟は出来ている。お前は我々の下に生まれてきてくれただけで、お前にはなんの落ち度も無いのだ。なのに：そんな家族を見捨ててまでどうして生きていけようか。すでに何年も前から我らは話し合い、決めていたよ：お前を見捨ててまで生き延びるつもりはないと」

「でも……」

あまりにも無慈悲な現実にはシアは必死に長老達に懇願するも、ゼル達はそれを聞き入れる様子はない。

泣き崩れるシアの頭を撫でるカム。そんな姿を見たゼルはしてやったりと言わんばかりの顔をハジメに向け、長老衆もそれを止める気配はない。

(……………ああ、やっぱりそうか)

そんな長老衆に対してハジメは心の中で何かが冷えていくのを感じ、拳を握る。

(…弱者を見下し、自身の小さな強さに胡座をかいて自分を越えようとする可能性を排除する)

教会やあのクラスメイト達と変わらない現実を見たハジメはアルフレリックに対して告げた。

「…わかりました。ハウリア族の処刑を覆さないというならフェアベルゲンは…」

『僕達と敵対する』ということでもよろしいですね?」

ハジメはアリスタに魔力を流すと腰のガンプラケースが光り、フェアベルゲンの町に突如インパルスが実体化する。

「なっ!?き、貴様何を!」

突然現れたインパルスとハジメの冷淡な雰囲気混乱する長老衆だが、構わず続ける。

「僕達がシアさんやハウリアと交わした取引は『迷宮の入口まで案内してもらおう代わりに、その間はみんなの安全を保証する』というものです。まだ入口である大樹までたどり着いていない以上、この約束は有効ですからね…もしあなた達が国の総意でシアさん達を処刑するということなら…彼らとの契約を守るべく『あらゆる手を使って』ハウリア族を守ります」

ハジメの宣言にユエだけでなくニコル達も頷く。

「それに…僕達がいずれ戦うのはこの世界で神を信仰する全ての国やこの世界そのものですよ?だったら…:…ここだかが一国家に屈服するのであれば、僕達は大迷宮に足を踏み入れる資格なんてない」

「…本気かね？フェアベルゲンから案内を出せば、無益な争いなど…」
「お断りします。僕はカムさん達ハウリアと出会いまだ一日も経って
ませんが…すでにあなた方より信頼できる」

信頼という言葉に他の亜人達が訝しげな顔になる。

「あなた方はともかく、僕達はこの樹海の中では迷ってしまう。僕達
にここまで敵意を向けてくるあなた方に道案内を託せるとでも？」

そう。ハジメ達ですらこの樹海ではまともな移動が難しいのだ。

魔物なら簡単に倒せるが、脱出が困難な状況に陥れば消耗は自明の
理。その点からみてもハウリア族は他人を裏切るような性格ではな
いため信用できる。

「…それに僕は誓いました。ハウリアはこれ以上誰も死なせないし殺
させない。ここであなた方の提案を受け入れたら僕達は約束を守れ
ない単なる人でなしになります…：…それだけは、絶対にしたくな
い」

もしここでフェアベルゲンの側につけば、もうハジメは香織達に一
生顔向けできなくなる。

大切な人達ともう一度会うために奈落から這い上がってきた以上、
愛する人に顔向けできない情けない存在には死んでもなりたくない。
「だから僕達は何があってもシアさん達を守ります…それが彼女たち
との『約束』ですから」

ハジメの絶対に退かないという意味を感じ、アルフレリックが小さ
くため息をつく。

「……………なら、お前さん達の奴隷ということにでもしよう。フェアベ
ルゲンの掟では樹海の外に出て帰ってこなかったもの、奴隷として捕
まったことが確定した者は死んだものとして扱う。樹海の深い霧の

中でなら我らにも勝機があるが、外では魔法を使うものに勝機がない。故に無闇に後を追い被害が広がらぬよう、死んだものとして後追いを禁じている……すでに死亡した者を処刑はできぬからな」

「アルフレリック……いくらなんでも」

「ゼル、わかるだろう。この少年達が退かないことも、そしてあの外にいる機人も……我らが扱えず放置しかできなかった機人を彼は自在に扱える。ハウリア族を処刑すれば、彼らの逆鱗に触れてどれだけの犠牲が出るか……長老の一人としてそのような危険は断じて犯せん」

「しかしこのままでは示しがつかん！力に屈して化け物の子やそれと与する物を野放しにしたと噂が広まれば、長老会議の威信は……」

「……さつきから好き勝手言ってますけど、いくつか言わせてください」
ハジメは再び口を開く。

「あなた方はシアさんを化け物だの好き勝手言いますけど、彼女は一度でもその力であなた達に危害を加えましたか？それと……彼女を持つ力を『化け物』としか本当に見てないんですか？」

彼の言葉が理解できなかつたのか、グゼが叫ぶ。

「そいつは我々の仇敵である人間と同じく魔力を持ち、さらには魔物同然の力も備えてる！化け物以外のなんだと言うんだ!?!」

ハジメは大きいため息をついて語る。

「もう一度言います。シアさんは一度でも『魔力を使いあなた方を傷つけましたか？』」

「ぬう……!」

改めて言われると、返事などできない。

シアはこれまでハウリア達に存在を隠され、一度たりとも危害を加えるどころか顔を見せることも無かつたのだから。

「それが答えです。確かに他と違う存在を受け入れるのは難しい……でも、ハウリア族の皆さんはそれでもシアさんを受け入れ、家族として

接してきました。怪物ではなく、同じ家族として…そんな彼らを、あなた達は非難できるほど尊いことをしているんですか？一度もあなた達に危害を加えなかった優しい女の子を蔑み迫害することが、あなた達の正義とでも言うんですか!？」

それだけ言うと、ハジメはシアの手を取って扉を開く。

「考えてください。もしあなた達の子供が同じ運命を背負ったら…あなた達は自分の子供を殺せますか？『化け物』と罵って愛する誰かの子供を殺せますか？」

ハジメの言葉は長老達に一切の言い訳をさせることなく、彼らの胸に刺さり続けるのだった…

「僕はこの町を一目見て、美しいと思いました。自然の中に存在する人の命と自然が調和した町…そんな場所を創れる皆さんには、醜い差別意識で凝り固まったような人でいてほしくないんです」

「…すまない、ハジメ殿。約束しよう。我々は今後ハウリア族に危害を加えないと」

インパルスを戻し、シア達と共にフェアベルゲンを出たハジメ達。

「…あの、何が起きたか今でもわからないんですが…」

「えっとね…とりあえず、一件落着…かな？」

かなりのワガママを言った自覚が有るため、よく認めてくれたものだとしハジメは思っている。

だが、一同に一件落着を伝えたハジメ達はハウリアの新しい拠点となる場所を探すべく歩き出すのだった。

ハジメ達はフェアベルゲンから少し離れた場所にあったブリッツとガイアを回収すべく動き、ニコルはブリッツに乗り込んでいた。

「どう？ブリッツは…」

「いや…システムは僕が使っていたものと変わってないよ。ただ…バッテリーの他に未知の動力源が使われてるけど」

「そう言われハジメは動力源があるであろう場所を確認すると、そこには以前見かけたものがあつた。」

「…やっぱり、ブリッツにも魔導炉が搭載されてる」

グシオン、サザビーと同様にこの世界のモビルスーツには魔導炉が搭載されてるのが確定となつた。

「だとしたら…これを上手く運用すれば」

ハジメはすでにこのモビルスーツを運用するための計画を立て始めた………

第5話 強さを掴め

「え…鍛えて欲しい？」

「はい！私達に戦い方を教えてください！」

大樹の近くに拠点を作ったハジメ達だったが、シア達がハジメに突然頼み込んでくる。

因みに拠点とはいったものの、近くの開けた場所にフェアドレン水晶（フェアベルゲンの町を作るのに必要な鉱石で、ハルツイナの霧がある程度晴らし魔物が近づきにくくなる結界を張る）でとりあえず場所を作っただけのものだ。

「私達、考えてました…ハジメさん達は大樹にたどり着けばここを離れて、また私達は無力な存在に戻ると」

「…だから、身を守るだけの技術を覚えたいと？」

ハジメの問いにシアは首を振る。

「身を守るだけじゃありません。私達はハジメさん達に繋いでもらった命を…無意味に散らせたくないんです」

「ハジメ殿、どうかよろしく頼みます！」

カム達の言葉に悩んだ末…

「…わかりました。とりあえず僕の提案するプラン通りのトレーニングに励んでもらいます」

かくして、ハジメ主体によるハウリア族パワーアップ期間が始まるのだった…

「ああ〜!!どうか、どうか私の罪を許しておくれ〜!!」

小さな魔物をナイフで葬り、ハウリアの一人が懺悔の言葉を叫ぶ。

「ごめんなさい！ごめんなさい！でもこうするしかないの!!」

魔物を裂いた小太刀を握り、震えるハウリアの女性。

「……………Oh…」

思わず項垂れるハジメ。

彼らハウリア：兎人族は他の種族ほど腕力に優れているわけではなく、翼人族達のような特殊能力があるわけでもない。

強いて言うなら、彼らの才能は『索敵』と『隠密』、そして家族として長らく過ごしてきたことによる『連携』だ。

敵から逃げるための索敵能力や隠密性を攻撃に転じさせれば相手が捉えるよりも先に攻撃ができる。

ハジメが参考にしたのは気配の薄さからガンプラバトルでも大暴れした盟友の遠藤浩介であり、彼のように隠密能力が高ければどんな相手でも自身のペースを掴む前に葬れる。

その上、彼らの連携力の高さに目をつけていたハジメはやがてハウリアを奇襲と連携に特化させたチームに育てようと計画していた。

なお彼らに渡しているのはハジメが錬成の技術を磨く過程で作りに上げた小太刀であり、また他の武装として樹海で容易に矢の補充が可能なクロスボウも新たに作り上げた。

言うまでもないが、かつてベヒモス戦で使っていたものとは圧倒的にグレードアップしている。

因みにシアは戦闘力の高さや魔力操作の一件からユエに任せ、ニコル達は現在ブリッツ達やまだハジメが確認していない残る3つのモビルスーツを解析に行った。

(でも、まさか(´▽｀)まで酷いとは…)

訓練開始二日目。

魔物を狩る度に懺悔の言葉を叫び、それに一同が同じく反応して遅々として訓練が進まない。

というか、罪の意識から変な芝居でもしているかのような光景にハジメもため息をつく。

さらに…彼らが訓練の中で無意味にサイドステップをしたりと奇妙な動きを行う理由が『お花さんや虫さんを踏まないようにする』という理由だったことを知り、ハジメは…

(…こうなったら、気は進まないけど『あれ』やるしかないか)

未だに芝居？を続けるハウリア達からそっと離れ、ユエ達の修行場へと向かった…

ハジメが修行場へと向かうと、ちょうど休憩中だったらしい。

「ユエさん、シアさん」

「ハジメ…どうかした？」

「ハジメさん、なんか浮かない顔してますけど…父様達が何かやらかしました？」

シアの言葉に苦笑いするハジメは、これまでのことを軽く説明する。

「…というわけで、一度カムさん達に特別メニューを準備しようと思っただけ。そのためにはシアさんの協力が欠かせないんだけど」

「協力…って、どうするつもりですか？」

ハジメは今回建てた計画を説明し、ユエは驚きで目を見開き、シアも大胆すぎる計画に唾然となる。

「…でも、…こうしなきゃ父様達は変わらないんですよね…？」

シアの言葉に小さく頷くハジメ。

「…だったら、このシア・ハウリア！協力します！」

「えっと…ハジメ殿と模擬戦ですか？」

カム達が困惑した声を上げる。

「はい。ルールは僕に傷をつけること。そして皆さんの敗北条件は全員心が折れることです」

ハジメはドンナーとシュラークを取り出し、説明する。

「僕はドンナーとシュラークを使い相手をします。弾丸は非殺傷のゴム弾ですが…」

ハジメがドンナーの引き金を引くと、弾丸が木をえぐる。

「6発の弾丸の中に1発だけ実弾を紛れ込ませています。なので当然…当たったら怪我では済みませんよ」

そこまでハジメが説明し、シア達は各々の武器（シアだけハジメお手製の巨大ハンマー）を持って戦闘準備に入った…

森の中で気配を殺し、ハジメに接近してくる男2人。

「甘いです！一瞬踏み込みが緩いですよ！」

ナイフの攻撃がためらったのか遅くなり、ハジメは容易に躲しながらドンナーとシュラークから弾丸を1発ずつ放ち、眉間にゴム弾が直撃して2人とも崩れ落ちる。

だが、立て続けにクロスボウからの矢が10発飛んでくるがハジメは余裕でバックステップしながら避ける。

「狙いが大雑把です！撃つ前からバレてるのがわかってるなら連携を取って追い詰めるように撃ってください！」

ドンナーの銃口に反応して逃げると、近くの草むらが弾ける。

どうやら、実弾が発射されたようだ。

弾丸を撃ち終わるとハジメはすぐさまリロードを行い、近くにいるハウリア族の存在を感知するため目をつぶり…

「はあああ!!」

右側からカムがナイフを持って攻撃してくるが、ハジメは屈んで攻撃を避けてシユラークのゴム弾で足元を撃つ。

「くっ…っ!!」

反撃に転じようとするカムだが、足元に咲いていた花に気がつきその場から飛び退く。

「……………」

次の瞬間…

ドパンツ!!

「…え…?」

背後から攻撃をしてきたシアめがけてドンナーの引き金を引き、シアの左胸が赤く染まった…

「し…シア!!」

胸を抑えて倒れるシアに対してカム達が駆け寄るがハジメは表情一つ変えず続ける。

「下がってください。ユエさんに治療させるので皆さんは訓練の続きをしましょう」

冷徹なハジメの顔にギョツとするカムだが、ハジメは無表情で訓練再開を促す。

「ま、待つてくださいいハジメ殿!シアが…」

「…言ったはずです。実弾を使うと。当たったら怪我じゃ済まないって…皆さん、それを覚悟してこの訓練を受けたんですよね」

それを思い出し、何も言えなくなるカム達。

「……………さつきから見れば躊躇って直前で鈍ったり花や虫を優先したり……………あなた達が訓練して強くなろうとしていたのは虫のためですか!?!そこらの花のためですか!?!」

ハジメの怒声に思わず縮こまるハウリア。

「カムさんはさつき、僕に一撃入れることができたタイミングで花を避け、手の空いた僕はシアさんを撃てた…それは、カムさんはシアさんの命より花の命を優先したことになります」

「そ、それは…」

「カムさん達の優しさは確かに尊いものだと思います。ですが…時には命を選ばなきやいけない時もある。皆さんが守らなきやいけないのは、そこらにある虫や花ですか?それとも…隣にいる家族ですか?」

その言葉にカム達は俯き、拳を握る。

「もう一度思い出してください…小さきものに愛を込めるより先に、まずは自分と…仲間の命を守ってほしいんです」

そう言うハジメは弾丸を全て抜いて、『実弾のみ』を装填する。

「みなさんが強くなるため、僕は本気できます。それでも戦うというなら…かかってきてください!」

『はいっ!!』

樹海内部に大きな声が響くのだった…

一方、ユエに運ばれたシアは…

「ぶはああっ!!死んだふりも大変ですう!」

カム達に聞こえない距離まで連れてきてもらい、ようやく起き上がる。

「ん。：でも、ハジメの『ペイント弾』は優秀。シアの血を使って作ったから、血の匂いもして私も一瞬騙された」

シアの服は真っ赤に染まってこそいるが、それはハジメが準備した『偽装ペイント弾』によるもの。

カム達の惨状を聞いたシアはハジメの協力要請を受け入れ、死んだふりをしてくれたのだ。

「さて：ユエさん!あの約束、覚えてますね?」

「ん……………まだ時間はある。でも果たして私に勝てる…?」

妖艶に微笑むユエに、シアは闘志を滾らせるのだった…

(助けてもらったこの恩：絶対に返すんです!)

その頃…

樹海の中で何かから逃げる3人の姿があった。

「ちよっと…あれ、速く逃げないとヤバイってば!!」

「ごめんなさ〜い!『クリス』さん、『リヒティ』さん!!」

一組の男女に手を引っ張られながら犬の特徴を色濃く持った少年

が走る。

「いや、『フレディ』のせいじゃないっすよーでも、このままじゃ…」

リヒティと呼ばれた青年は霧に包まれた樹海の中を必死に逃げると、その中で

『あるもの』を発見。

「これ……………」

「ガン…ダム…?」

3人が見つけたのは背中に大きなコンテナを背負った巨大なモビルスーツ…『陸戦型ガンダム』。

「ああもう！この際使えるかわかんないっすけど！」

リヒティ達は素早く陸戦型ガンダムに乗り込む。

「ね、ねえリヒティ！あなたマイスターの適正って…」

「……………すいません、操縦方法サツパリわかんないっす!!」

「ええええええええええ!!」

森の中に二人の悲鳴が響く中、木々を破壊しながら『4本足の悪魔』が近づこうとしていた…

第6話 大地の目覚め

森に入って9日目。

ハウリアの意識改革を行ってから彼らはメキメキと戦いの腕前を上げ、ペアで魔物を狩れるくらいには成長していた。

「隊長！目標の魔物を狩ってきました！」

若い男性のハウリア達5組を筆頭に全員が戻り、そこには魔物達の残骸が纏められていた。

「お疲れ様です。あとは…これから行う卒業試験の後に渡したいものがあります！今から明日の朝まで自由時間にしますので、もう少しだけ頑張りますよう！」

『はいっ!!』

自然と統制が取れているものの、彼らの目には確かな実力を身につけたという自信が見て取れる。

(…これなら、樹海で見つかった『あれ』を預けても大丈夫かもしれない)

ハジメは訓練の合間にニコルから呼び出され、樹海で発見された5機のモビルスーツについてどうするか話し合っていた。

「…ブリッツはニコルに預けるとして、ガイアと他2機も操縦系統はザフト製モビルスーツだったから基本操縦を彼が教えれば問題ない。でも…陸戦型ガンダムはどうしようかな…」

別次元でのモビルスーツなためブリッツ達とは操作が異なったのだが、幸いなことに操縦はブリッツ達より簡略化されていたらしい。そのためハジメは陸戦型ガンダムをこのままハウリアに預けるか、それとも後でミネルバに格納して解析するか判断に迷っていたところだった。

「…ハジメ、お疲れ様」

「ユエさん。シアさんの様子は…？」

ふと気が付くとユエが戻ってきており、ハジメはそれとなくシアについて尋ねる。

「…魔法の適正はハジメと変わらないけど、膨大な魔力を全て身体強化に特化させてる。単純な力技ならハジメに次ぐレベル」

「生まれつきの才能でそこまで行くんだ…因みに、具体的なスペックは？」

「………推測だけど、今のハジメの6割くらい。でもまだ成長段階」

その話を聞いてハジメは驚く。

「…これ、近い将来僕よりはるかに強くなりそう。ユエさんも油断していると傷つけられちゃうかもよ」

「…大丈夫。まだ負けない」

ユエはシアから『どんな小さな傷でもつける』というルールでユエと手合わせしており、この様子だと本当に負けそうに思えてきたためユエは一抹の不安を抱えていたのだった…

その日の夜。

ハジメ達が寝静まった頃、森の中を歩く複数人の男達がいた。

「レギン殿！まもなく『機人』のある場所にたどり着きます！」

「ああ…」

完全武装していたのは以前ハジメによって吹き飛ばされた熊人族の若き戦士、レギンを筆頭とした戦士達。

族長のジンがあつさり敗北し、格下と侮っていた人間族の子供に負けたという事実から自信喪失しかけていたのを見て、仇討ちと言わんばかりに若い戦士たちを集めて動いていたのだ。

「しかし、よろしいのですか？機人を勝手に動かすなど…」

「構わん！どうせやつも機人を使う以上、我々が同じものを数人で使えばどうともなる！」

亜人達は自らの族長達が課したルールによって機人…モビルスーツの使用を禁止されている。

それは単に彼らがその扱いを知らないことだけでなく、その秘めたる力を警戒してのこと。

しかし、ハジメがインパルスガンダムを持っていたことから自分たちも同じだけの力がなくては対処できないと考え、モビルスーツを使いハジメ達を暗殺しようとしていた。

「レギン殿！みつめました！」

部下の報告にレギン達が向かうとそこには緑色でモノアイを持ち、左肩にスパイク付シールドを装備した機体：『ザクウオーリア』と四足歩行の犬を思わせる青みがかったモビルスーツ『バクウ』が鎮座している。

「これさえあれば…ええい、使い方などどうにでも…ん？」

コックピットまで登ろうとしたレギンだが、ふと近くの茂みに気配を感じる。

「何者だ!？」

レギン達が武器を抜いて威嚇すると、そこから出てきたのは…

紫色のキヤタピラのような触手が、近くにいた熊人族の首を切断してその首を茂みの奥に引っ張っていく。

「ひっ!?!ひい!?!ひい!?!」

突然の仲間の死に動揺する一同。

だが、さらに二つの触手が迫り…

夜の樹海に男達の悲痛な叫びが響いたのだった…

翌日。

カム達の特訓の間にハジメはニコルと共にガイア、ブリッツのメンテナンスを行っていた。

「ニコル…ブリッツの改造プランだけはどうする？」

「うーん………とりあえず、もう少しだけ武装増やしたほうがいいかも。ブリッツは連合の試作機って扱いだったから、武器も限定的なのしかないからね……」

そんなやり取りをしていると、一人の少年が走ってくる。

「は、ハジメお兄ちゃん!!」

「パル君…何があつたの？」

来たのはハウリアの年少メンバーでもあるパル。

その慌てぶりにハジメ達は何かがあつたと察して質問する。

「く、熊人族が近くで倒れてて…死体もあつて…!」

その報告を聞いたハジメはニコルに目配せをし、現場に向かう。

現場に訪れたハジメが見たのは、ガタガタと木陰で震えハウリア達に介抱されていた数人の若い熊人族達。

「あ、ハジメ部隊長!」

「カムさん…一体、何があつたんですか？」

カムに事情を尋ねるハジメ。

因みに戦い方を教えた影響からか『部隊長』と呼ばれるようになったハジメである（カムは族長と普段呼ばれるが、戦闘や訓練の際は隊長呼びに変更された）。

「それが…どうやらこの者たち、私達の命を狙っていたらしいのです。部隊長が熊人族の長であるジンに勝利したことがよほど腹に据えたのでしょうか…」

「なるほど…でも、どうして彼らはあそこまで怯えて？」

すると、震え声で熊人族の一人が語りだした。

「お、俺達…あんたの機人を倒すために森で見つけた機人を動かそうとしたんだ…でも、でも…!!森の中で変な魔物みたいなやつが出てきて、仲間の首を…!」

すると、遠くで爆発音が聞こえてきた。

「や、奴だ！もう俺達を追いかけてきたんだ…!うああああ!!」
頭を押さえて悲鳴を上げる熊人族達。

その様子を見たハジメはカムに対して指示を出す。

「カムさん、彼らのことをお願いします！僕は敵を抑えてきますのでニコル達にも伝えてください！」

そう言うとハジメはその場から走り出し、インパルスのガンプラを取り出すと叫ぶ。

「来い！コアスプレンダー！」

ブレスレットにしたアリスタが輝き、ハジメは実体化したコアスプレンダーに乗りながら発進。

空中から敵の姿を確認しようと旋回するが、そこでハジメは2機のモビルスーツを発見する。

「あれは陸戦型ガンダムと…あれは、デスビースト？」

視界に映ったのは倒れた陸戦型ガンダムと、それを攻撃していたのは灰色に近いカラーリングをした『デスビースト』に似たモビルスーツらしき存在。

(あの陸戦型ガンダムに誰か乗ってる…?だったら!)

コアスプレンダーが上空からデスビーストに似た機体…『エルドラ

ブルード』に機銃を撃ち込んで意識を逸らすと、ハジメは残ったパーツを実体化させる。

「ドッキング開始……！」

飛来したチエストフライヤー、レッグフライヤーと合体し、さらに飛んできたフォースシルエットと合体することでハジメのコアスプレnderはフォースインパルスガンダムに変形。

ビームサーベルを抜いたインパルスは、エルドラブルードに斬りかかった。

一方、ユエとの『約束』のための戦いにひとまずの決着をつけたシア。

2人は爆音を聞きつけてニコル達の元へと走り、マユとニコルの姿を発見する。

「マユちゃん！一体何が!？」

「わ、わかりません……でも、熊人族の人達が何かに襲われたらしく……きやつ!？」

さらによく見ると、少し離れた場所から爆炎が上がっている。

「あの煙の量……間違いなくモビルスーツが戦ってる!」

「じゃあ……ハジメが!？」

ニコルの言葉に反応するユエ。

それを知ったニコルは急いでブリッツを起動させるべく動こうとする。

(ハジメさんが戦ってる……モビルスーツ……ガンダムで?)

またしてもハジメは戦火に身を投じている。

目的があるとは言え、ハウリアを…自分達を守るために彼はまた先頭に立っている。

『シア…もしあなたがハジメについて行こうと思うなら、一つだけ約束して』

思い出すのは、ユエから特訓の合間に伝えられたメッセージ。

『ハジメと一緒に戦うつもりなら…私の手が届かないとき、ハジメを支えて…』

「私は……………ニコルさん！」

シアは気が付くと大声でニコルを呼び止め、周囲がシアに注目する。

「…どうしたの、シア？」

「……………お願いがあります。私に——」

狭い森の中で翼の大きいフォースシルエットが邪魔になるのか、苦

戦を強いられるインパルス。

(かといってセイバーもそれなりに翼があるし、バーストじや周囲を焼き払う…いつそシルエツトを外すか、もっと広い場所に…)

だが、次の瞬間インパルスの背中が爆発。

「うああああ!?!」

後ろを見ると、そこには発見されたモビルスーツの一つであるはずのバクウがレールガンを使っていた。

「バクウが誰かに奪われたのか!?!でも、誰が…ぐうう!?!」

突然のことに混乱する中、もう1体のエルドラブルード、さらに原型と思われる『デスアーミー』が出現し、不意を突いてインパルスを攻撃。

あつという間に4対1となり、劣勢になるインパルス。

(まずい…コアスプレnderを破壊されないようにするならシルエツトは外せない!でもここじやまともに動きが…)

絶体絶命の危機に陥り、自然と操縦桿を握る手に力が入り…

『おおおおりやあああ!!』

突然聞こえてきた気合の入った声とともに黒いバクウに似たシルエツトのモビルスーツがバクウに体当たり。

さらにエルドラブルード2とデスアーミーに対してビームが飛び、咄嗟に避ける。

「ブリッツ…ニコルか！でも、そのガイアとザクは…？」

助けに来たのはニコルの駆るブリッツとパイロット不明のガイアガンダム、そして発見された今のところ最後のモビルスーツ『ザクウォーリア』。

すると、ガイアとザクから通信が入る。

「ハジメさん！お手伝いにきました！」

「部隊長！あの棍棒持つ小さいのはこのカム・ハウリアにお任せあれ！」

なんとガイアのパイロットはシアで、ザクのパイロットはカムだったのだ。

「2人とも…どうして!?!」

「私達、散々ハジメさん達に救われてきたんです！少しはいいとこ見せないと、女が廃るってもんですよ！」

「ハジメ殿への恩義…万分の一でも返させてください！」

ガイアはインパルスと同型のビームサーベルを抜き、ザクもまた武器であるビームマシンガンを構える。

「2人とも、僕の言ったとおりに操縦するようにね！」

ニコルの言葉に頷くガイアとザク。

「了解ですう！シア・ハウリアとガイアガンダム！守るために、戦います！」

「はい！カム・ハウリアとザクウォーリア！家族のためにその身を捧げる！」

「なら僕も…ニコル・アマルフィとブリッツガンダム！対象を破壊します！」

インパルスと並び、動き出す3機のモビルスーツ。

樹海を巡る大きな戦いが動き出した…！

第7話 信念と誓いと

バクウの高速移動に翻弄されながらも反射的にビームサーベルで対応しようとするガイアガンダムだが、操作ミスなのか前のめりに倒れてしまう。

「うわああああ!?!や、やっぱり簡単にはいかないですう…!」

「シアさん、気をつけて!」

インパルスがビームライフルでバクウを牽制しつつ、攻めてきたエルドラブルードーと接近戦を繰り広げていく。

(もう少し…せめてもう少し広いところに出れば『新兵器』が使えるのに…!)

「シアさん…少し離れるけど、大丈夫そう?」

「は、はいです!私はどうにかあの犬型を倒してみせます!」

力強く頷いたシア。

その様子を見てインパルスは何かを召喚し、ガイアに投げ渡す。

「これ使って!」

「ええ!?って、何ですかこのドデカなハンマーは!?!」

ハジメが宝物庫から取り出したのはガイアの全長とほぼ同じサイズの巨大なメカニカルハンマー。

にも関わらず一部に魔法陣などのデザインが落とし込まれた、近代的なデザインとファンタジーなデザインが融合した新装備。

「それはモビルスーツ専用アーティファクト『ボーデインドリユッケン』!強力な破砕系魔法と機体を守るための結界魔法を取り込んだ近接用武装だ!」

ドイツ語で『地面』を意味する単語を織り交ぜたそのアーティファクトを持ったガイアは、バクウが迫る中でボーデインドリユッケンを振りかぶる。

「でええりゃああああ!!」

気合の入った可愛らしい掛け声とともにハンマーが地面に打ち込まれ…

地面が大きく揺れ、バクウの足元に地割れが起きる。

「もらったですよおお!!」

抜けなくなつたボーディンドリユツケンを手放すとシアはコックピット内部であるコマンドを入力し、ガイアは四足歩行をするバクウと似たシルエットの『モビルアーマー形態』に変形。

一気に加速しながら背部の『ビームブレイド』でバクウを一刀両断し、撃破に成功する。

「ですう!!」

フェアベルゲンの近くではブリッツとザクウオーリアがデスアーミー、エルドラブルードの2体としのぎを削り合っていた。

「くうっ!」

ザクウオーリアはビーム突撃銃を使ってデスアーミーを牽制しているが、デスアーミーは構わずにフェアベルゲンの付近まで接近していく。

「カムさん！絶対に敵をフェアベルゲンに入れてはいけません!」

ブリッツはアンカー『グレイプニール』でエルドラブルードを捕縛し、必死に引っ張っていく。

「ニコル殿…でしたら、私に一つ策があります!」

ザクウオーリアはビームトマホークに持ち替え、デスアーミーの腕

を破壊。

すぐさま通信で作戦を伝え、できる限りフェアベルゲンから遠ざけるべくタツクルをする。

「敵を一箇所に集めてくださいー！」

「わかり…ました!!」

グレイプニールを全力で引っ張り、デスアーミーとエルドラブルードが激突。

その隙にザクウオーリアがビームトマホークを投げつけ、エルドラブルードの頭に突き刺さる。

「これでも…」

「くらええ!!」

ザクウオーリアは腰のグレネードを投げつけ、ブリッツは右腕の複合武器『トリケロス』から実体槍『ランサーダート』を二発撃ち込んでデスアーミーとエルドラブルードに突き刺すと、ビームライフルに切り替える。

ザクウオーリアのビーム突撃銃とブリッツのビームライフルがそれぞれの武器に着弾し…

大爆発とともにデスアーミー達は粉々に砕け散った。

ニコル達の勝利を感じたハジメは、眼前のエルドラブルードを倒すべくビームサーベルを二本抜いて応戦し、胸部マシンキャノンでエルドラブルードをひるませようとする。

「くっ…こいつ、怯む様子がない!？」

エルドラブルードはバックパックのビームキャノンでインパルスを攻撃し、インパルスは陸戦型ガンダムのある場所まで吹き飛ばされてしまった。

突然動き出した陸戦型ガンダムに気を取られるインパルスとエルドラブルードだが、なんと陸戦型ガンダムから放たれた胸部バルカンがエルドラブルードに被弾して動きが鈍る。

「っー」

そのチャンスを見逃すハジメではない。

インパルスは片方のビームサーベルを投げつけてエルドラブルードの左肩を破壊。

続けてビームライフルを使って4本の足のうち半分を撃ち抜いて機動力を奪い…

「シルエットチェンジ…セイバー!」

赤い翼のバックパックが装着され、刀『シロガネ』を出現させたインパルスはその刀で縦一文字にエルドラブルードを切断。

一拍遅れ、エルドラブルードが爆発を起こした…

決着がつき、インパルスから降りてユエ達と合流したハジメ。

「あれ?カムさんとニコルは…?」

「ん。二人は今回の一件についてフェアベルゲンの長老達と顔を合わせに行った。未遂とはいえ熊人族達はハジメやハウリアを狙っていた…ハジメとの契約に反すること」

ハジメがフェアベルゲンと交わした契約は『ハウリアは死んだ存在として扱い、危害を加えない』というもの。

にも関わらず、しかもハジメがいる段階で報復として攻撃をしてきた彼らの存在は契約違反に当たるため下手をすればフェアベルゲンが滅ぼされてもおかしくないのだ。

「まあ今のカムさんならフェアベルゲンの長老に臆するなんて無いとは思うけど…でもまあ、これでひと段落ついたね」

その言葉の意味を悟るシア。

「…それは、迷宮を攻略して樹海を出ていくということですか？」

「うん。もうシアさん達は僕がいなくても十分やっていける。家族を守るために強くなれたし、仮にここを出て行ってもどうにか一人で生きて…」

そこまで言うと、ハジメの前にシアが立つ。

「シア…さん？」

「ハジメさん。私…ずっと伝えていなかったことがあります」

シア・ハウリアにとってこの世界は小さく、そして生きづらい世界だった。

人とは違う力に自身が怪物だと苦悩し、外に出ることすらままならない。

何より、優しい家族に苦勞をかけているという事実は純粹で心優しい少女に暗い影を落とすには十分すぎた。

「私、思ったんです。こんな力を持って生まれたのは何故だろうって…家族を危険に巻き込んで、一人、また一人と死んでいって…拳句の果てに皆が罪人か奴隷のどちらかの道しか選べない…こんな疫病神に生きる意味があるのかって…」

だが、目の前の優しい少年は彼女の暗い未来を切り開いた。

「あの日までなんの縁もない私のために、ハジメさんは本気で怒ってくれた」

『生きる価値が無いのは……彼女の痛みを、苦しみを何一つ理解しようとしなくて切り捨てるアンタ達だあああ!!』

「私達の未来を守るためにフェアベルゲンに真つ向から立ち向かってくれた」

『ハウリアはこれ以上誰も死なせないし殺させない。ここであなた方の提案を受け入れたら僕達は約束を守れない単なる人でなしになります……それだけは、絶対にしたくない』

そのまっすぐな思い、どんな理不尽にも立ち向かう強い意思にシアは惹かれていた。

「ハジメさん……私はあなたが好きです！私の『運命』を切り開いてくれたあなたのことを、もっともっと知りたいんです！だから……」

私も旅に連れて行ってください!!」

樹海の中で一人の少女の覚悟の言葉が木霊するのだった…

一方、シアの行動を察したユエは空気を読んで陸戦型ガンダムの方へと歩いて行った。

「…私はユエ。愛弟子を応援するために空気を読む女」

そんな独り言を呟きながらユエが陸戦型ガンダムの傍まで来ると

…

「あゝ!!すいませくん！」
そこには元気に手を振るフレディ達の姿がある。

「……………あなた達、誰？」
どうやらフェアベルゲンの災厄は過ぎたが、まだひと段落残っているらしい。

その頃。

首を切断された熊人族の遺体の前に一人の女が立つ。

「…生体ユニット、回収」

銀髪の『戦乙女』と言えそうな服装をした女は、熊人族の遺体を担ぐと忽然と姿を消したのだった…

第8話 人の世へ

シアからの告白に戸惑いを隠せなかったハジメ。
だが、彼女の顔を見て意を決したハジメは答えを告げる。

「……………ごめん。シアさんの気持ちは正直嬉しいんだけど…今の僕には大切な人がいる。だから…君の気持ちには答えられない」
「っ…！」

シアとてユエから聞いていたのだ。
ハジメの心を支えていた少女…香織のことを。

「…だと思いました」
「え？」

シアは泣きそうになるのをこらえながら語る。

「ハジメさんの心にはとっくに大切な人がいるって…何となくですがわかったんです。それでも……………私は諦めたくなかった。例え、この想いが届かなくても……………それでも、私は最後まで足掻くのをやめません」

そう言うと、シアはハジメに抱きつく。

「未来は変えられるって…諦めなければ、可能性は低くても望んだ未来へ進めるって…教えてくれたのは他でもないハジメさんですよ？だから……………」

シアはハジメから離れ、涙を拭うと宣言する。

「これから先、ハジメさん達の旅に同行させてもらいます！そして、いつか私のことを振り向いてもらえるように頑張って、私に心奪われる

ようにしてみせます!!」

「え、えつとお…その…」

力強く宣言したシアに困惑したハジメだが、続けて告げられた言葉に衝撃を受ける。

「それに、ユエさんからもキチンと許可はもらえました!私の覚悟、キチンと伝えましたからね!」

どうやらハジメの知らないところで外堀を埋めていたらしく、ハジメは頭を悩ませるが…

「……………もう、わかったよ!なら、しっかりついてきてね!」

「っ!!はいですう!!」

何はともあれシアが旅の仲間に加わったことを伝えるべくユエを探していたハジメだったが、そこには先程までいなかった3人の男女がユエと会話している姿があった。

「あれって……………うつそお」

「ん…ハジメが来た」

ユエがそう言うと、3人がこっちを向く。

「あ、もしかしてさっきのガンダムのこと?」

「は、はい……………あの、つかぬ事をお伺いしますが…」

ハジメは何故か改まった口調になる。

「…もしかして、ソレスタルビーイングの『リヒテンダール・ツエーリ』さんと『クリステイナ・シエラ』さんですか？」

それから数分。

クリスとリヒティは自分たちの存在を知っていたハジメに驚いていたものの、彼による説明に一応は納得を見せた。

「まさか俺達が物語となっている世界とはね…驚きつすよ」

「でも、君が持っている『それ』を見たら…ね？」

ハジメは並行世界の存在になるかもしれないと証拠品…『ガンダムエクシア・フリーユージェル』のガン普拉を見せ、2人を納得させた。

「とりあえず2人がトータスに来た理由は後回しにするとして…君は一体…？」

ハジメが気になったのはこれまでのガンダム作品で見たことのないフレディの存在。

だが、不思議と彼はどこかでフレディを見た記憶があった。

「えくつと…僕はフレディって言います！エルドラの大地からこの世界に突然連れてこられて…」

「エルドラ…？エルドラ…………ああああ!!」

その名前を聞いたとたんハジメが叫び、フレディやクリス達だけでなくユエも思わず肩を震えさせる。

「エルドラの民のフレディ…もしかしてカザミ達が助けたっていう!?!」

「か、カザミさん達のお知り合いだったんですか!?!」

良く知る友人の名前が出たことに思わず聞き返したフレディ。

「一応、友達…かな?カザミとはよく一緒にミツシヨンこなしてたりするし、ヒロト達とも交流はあるから」

「よかつた〜!!ようやく共通の知り合いがいる人に会えて!!」

ホツとしたのかその場で座り込むフレディに慌て出すハジメ達。

それから場が落ち着くまで数時間を有した…

一度フレディ達を落ち着かせてから3人を連れ、ハジメ達はカムによる案内で目的地…ハルツィナ樹海の大樹ウーア・アルトまでついにたどり着くが…

「枯れてる…?」

目の前には見上げるほどの大きさの朽木がたっており、ハジメは思わず口にする。

「なんでも、フェアベルゲン建国以前から枯れているらしく…ずっと枯れた状態を維持していることから珍しがられて観光名所のような扱いを受けているとのことです。まあ、それだけなんですけどね」

カムの説明に耳を傾けつつ、ハジメ達は何か手がかりがないかと周囲を観察すると…

「ハジメ、これ…」

ニコルが指さしたのはそこそこ大きな1枚の石版。

その中にはオスカー・オルクスのもと同じ紋章があった。

「てことは、ここが迷宮に繋がってる入口…ん？」

石版を観察すると裏に何やら6つの窪みをみつける。

「この大きさ…もしかして」

ハジメは試しに持っていた宝物庫を窪みに差し込むと、カチリと音を立てて宝物庫は窪みにはまる。

それと同時に石版の表が光り、文字が映し出される。

「えつと…？」

『四つの証』 『再生の力』 『紡がれた絆の道標』

全てを有するものに新たな試練の道は開かれるだろう』

「これって…どういうことでしょうか？」

マユが首を傾げるが、ハジメは冷静に考えて自分なりの答えを告げる。

「おそらく四つの証っていうのはオスカーの指輪と同じ攻略の証だと思う。この紡がれた絆の道標は…」

チラリとシアに目を向けるハジメ。

「多分、亜人による案内が頼めるかどうかなんじゃないかな。他の種族ではここまでたどり着くことが困難なわけだし」

そんな中でユエが喋る。

「…再生の力って…私の自動再生の技能？」

「いや…多分違うと思う。だってそれはユエさんしか持ってない技能なわけだし…先に最低四つの迷宮を攻略したことを前提とするなら、その四つのうちで『再生』に関係するタイプの神代魔法が必要なんじゃないかな」

なんにせよ、ここは7つのうち5番目以降に攻略する…即ち高難易度の迷宮だとわかった。

「まあここは後回しだね…条件をクリアしたらまた向かうとしようか」

せつかく見つけた二つ目の迷宮を後回しにしなければならぬことに肩透かしをくらった感覚があつたが、次の迷宮を探そうとハジメは頭を切り替えるのだった…

翌日の朝。

フェアベルゲンの出口でハジメとユエ、そして新たに加わったニコル、マユ、リヒティ、クリス、フレディ、シアが旅支度を済ませておりシアとカムが別れの挨拶をしていた。

「それじゃあ父様！行ってきますー！」

「ああ、シアもしっかりと頑張りなさい…部隊長、私の娘のことをよろしく願います」

ハジメから習ったザフト式敬礼をするカムに同じく返すハジメ。

「わかりました。これから先…必ずシアさんも守りますので」

そう言うのとハジメは宝物庫からシユタイフを3台出現させ、サイドカーのついている1号と3号にはそれぞれハジメとリヒティが運転手として乗り込み、サイドカーのついていない2号にはニコルが跨る。

他のメンバーが乗り込むのを確認すると、ハジメはニコル達に告げる。

「……………行こう、次の街へ！」

「はい！」

「うっすー！」

シユタイフ達が走り出すと、1号のサイドカーに乗っていたシアと2号に乗っていたマユがハウリア達に手を振った。

「父様〜!!みんな〜!!また、いつか会いましょうね〜!!」

「あ…ありがとうございます!!」

大きく手を振っているハウリア達。

家族との一時の別れを覚悟していたシアは真つ直ぐに前を向き、ハジメはその様子に小さく笑みを浮かべた。

「さて……ここからは次の街だ。数日で準備を済ませたら……大迷宮へと向かうよ！」

「それはいいっすけど、早いところ食事タイムにしてもいいっすよね？」
「そうだね……まずは次の街でお昼でも！」

昼下がりの空の下、ハジメ達は新たな仲間達と旅を続けるのだった。

一方、王宮では……

「はあっ!!せああー！」

迷宮での訓練から一時帰還した勇者パーティーはしばしの休息をとっている中、光輝は一人で聖剣を振るい、自主練を行っていた。

「お疲れ様です、光輝様」

聖剣を鞘に収めた光輝に対して話しかけてきたのは彼の専属メイド『ユナ』。

「どうやら訓練が終わる時間を推測してタオルを持ってきてくれたらしい。」

「ありがとうございます、ユナ」

「いえ………光輝様、何かお悩みで？」

何気に気の利く専属メイドに苦笑いした光輝は、小さな声で告げる。

「………このところ、香織達の様子がおかしいと思ってね。迷宮で

の訓練はできないのにわざわざホルアドに残るなんて言い出して……」
香織と雫、そして遠藤は王都に戻らずホルアドに残るといい、結局
光輝達は3人を置いて帰った。

「……きつと、まだ香織も雫も南雲のことを気にしてるんだ。一応は同じ部活のメンバーだったわけだし、2人とも優しいからね。でも……それじゃダメなんだ」

光輝は汗を拭い終わると、顔を上げる。

「もう南雲はいない。なのに……いつまでもあいつの死に引きずられて香織達が苦しむなんて、きつと南雲も望んでない。だから………香織達が心配する必要がなくなるように、俺はもっと強くなりたいんだ」
決意にあふれた光輝の表情にユナはあえて何も言わない。

「ありがとう、ユナ。わざわざ聞いてくれて」

タオルをユナに返すと、光輝はそのまま走り去っていった。

「………勇者様。貴方は………いえ、きつとこれは私ごときが口にすべきではないでしょう」

言い知れぬ不安感に囚われそうになったユナは首を振り、そのまま踵を返すと仕事に戻るのだった……

第9話 人の営み

フェアベルゲンを離れてからおおよそ3時間。

そろそろ最寄りの街に着く頃だと考え、ハジメ達は二輪から降りると徒歩で街に向かった。

「ステータスプレートを。あと、街に来た目的は？」

「はい：目的は素材の換金と、食料や物資の補給です」

小さな町、ブルックを訪れたハジメ一行。

その中でステータスプレートを所持していたハジメ、ニコル、マユがそれぞれプレートを見せる（魔力操作の技能やハジメのステータスなどの情報は隠蔽を行っている）。

「そっちの5人は……」

「あゝ：その、樹海の方で魔物の襲撃を受けちゃいまして：あと、後ろの2人は：ね？」

後ろに隠れていたシアとフレディの『首輪』を見て、大体のことを察する。

「：なるほど。随分と珍しいな。白髪の兎人族に獣の要素が強い犬人族とは：あんた、案外金持ちだったり？」

「さあ？どうでしょう？」

やがてハジメ達は門番から渡された小さい地図を頼りに町に入っていく。

「なるほど：まずは冒険者ギルドで素材の換金か……」

地図に書かれていたメモを見て歩くハジメ達だが、シアとフレディの顔が少し暗い。

「ごめんってば：でも、こうしないと後々面倒なんだよ？」

「わかつてはいるんですよ…でも、なんというか…」

「ハジメさん…流石にいきなり首輪をされて落ち込むってほうが無理なんです!!」

シアが半泣きで叫ぶが、ハジメは何とかして落ち着かせる。

「一応説明するけど、奴隷の扱いは持たない亜人は人間族の街を歩けないんだ。それに…」

頭を搔いたハジメは説明をする。

「フレディは亜人としては珍しい、人間より獣の要素が強い外見なわけだし…シアさんは髪色だけじゃなく容姿も可愛いんだから余計な騒ぎに………って、何クネクネしてんの?」

呆れ顔のハジメを他所に、シアは恥ずかしそうに身をくねらせる。

「も、もう何言い出すんですか!世界一可愛くて魅力的だなんて…」

「そこまで言っていない!!」

シアのセリフに思わず叫ぶハジメ。

そんなやり取りの中で彼らはギルドへと向かっていく。

(やっぱりホルアドのギルドと外観は変わらないんだ…)

以前ホルアドを歩いた時に見かけたギルドと外観が変わらなかつたことを思い出したハジメは、先頭に立ってギルドに入る。

「ここが本物のギルドか…」

小説やゲームなどでありがちな『酒場と併設になったアウトローな雰囲気』とは異なり、清潔感がある小綺麗な場所だった。

「なんていうか…喫茶店みたいですね」

「うん…」

ニコルの言葉に同意するハジメ。

中にいた冒険者達はハジメ達に視線を向けると、後ろにいたユエやシア、クリスとマユに視線を向けてきた。

ユエやシアは勿論のこと、ソレスタルビーイングでオシヤレに気を遣うだけあってクリスも中々の美人でありマユも容姿端麗なコーデイナーなだけあってか男性たちの目を引くが、誰一人として異世界小説でありがちなちよっかいをかけてくる相手はいない。

ハジメが内心ホツとしながらカウンターにたどり着くと：

「キレイな花を4つも連れてくるのに、まだ足りなかったのかい、お兄さん達？」

受付にいたのは恰幅のいいおばちゃん。横幅がユエ2人分くらいある、笑顔の似合う受付だった。

美人の受付など幻想だったと突きつけられた気分のハジメ達だが
：

「あははは、女の勘を舐めちゃいけないよ？男の単純な中身なんてアタシくらいになると簡単にわかつちまうんだからね。まあ、そっちの男前君と坊やはそんなこと考えなかったみたいだけど……」

フレディとリヒティが小さく笑い、ハジメとニコルはぶいっと目をそらす。

「どうやら、このおばちゃんのお陰でこの冒険者たちの素行がいいらしい。」

「…っと、そういうえば忘れかけてましたけど…素材の買取、お願いします」

「あいよ。じゃあステータスプレートを出してくれるかい？」

そう言われ、ハジメ達は疑問に思いながらもプレートを出す。

「何でって顔してるね？冒険者だとわかれば、買取金額が一割増しになるんだよ。他にも宿の割引やら馬を安値で借りられたり…冒険者の行動で素材だのは手に入るから、それくらいの恩恵はあるのさ」

「なるほど…あの、僕達持ち合わせがないので、買取金額から冒険者の登録料差し引いてもらっていいですか？」

登録しておけば後々役に立つだろうとハジメ達は冒険者登録を頼む。

「可愛いお嬢ちゃん達連れて文無しかい。今回はおまけに登録後の値段で買ってやるから安心しなよ」

その後、ハジメ達は買取金額の『50万3千ルタ』を受け取る。

「意外と高額買取ですね…」

「そりゃあ、樹海や峡谷の魔物の素材なんて貴重も貴重。並みの冒険者じゃ挑むことすらできない魔境だよ？これでも登録料引いてるんだけどね」

お金を受け取ると受付のおばちゃんは地図を渡してくる。

「町の簡素な地図さ。オススメのお店や宿も纏めてるから、参考にしな」

「って、これ立派なガイドマップじゃないですか…普通にこれで商売

できますよ?。」

「なあに、アタシが趣味でやってる程度さ。『司書』の天職持ちなら朝飯前だよ」

立派な地図をもらい、ハジメ達はギルドを後にすると今夜の寝床を探すため動き始めた。

一同が訪れたのはこの街でもかなり人気の宿で、名前は『マサカの宿』。

少し割高だが、その分食事と風呂がついてくるため資金に余裕のできたハジメ達は迷うことなくこの宿にチェックイン。

因みに部屋割りで多少揉めた（主にユエとシア）が、ハジメの計らいにより

『ハジメ、ニコル、フレディ』

『ユエ、シア、マユ』

『リヒティ、クリス』

の三つに別れることになる。

：なお、リヒティ達の部屋に関してはハジメによる珍しい邪念のこもった考えであることは言うまでもない。

「さて……これで男子組は全員だよね？」

クリス主体で食料品やシア達新規女子メンバーの洋服などを揃えるため買い物に出かけた女子達だったが、ハジメは男性メンバーを揃えて今後について話をすることにした。

「……とりあえず明日にでもライセンス大峽谷に行き、迷宮攻略を始めたと思います。それで……」

一度言葉を切るハジメ。

「……………今回行くメンバーは僕、ユエさん、シアさん、ニコルの4人。リヒテイさんとフレディ、マユちゃんとクリスさんには頼みがあります」

「頼み……つつすか？」

リヒテイの言葉に頷くと、ハジメは語りだした。

「今回の戦いで、樹海にモバイルスーツがあることが判明しました。おそらくですが、今後もモバイルスーツが見つかる可能性は高い。なので……それを運用するための準備をして欲しいんです」

ハジメはオルクスの宝物庫を指から外す。

「リヒティイさん。今回残ってもらうメンバーには、僕が以前作って今はオルクス大迷宮に保存しているモビルスーツ運用戦艦：『ミネルバ』が運用できるか、操縦訓練などをして欲しいんです。それさえできれば、僕たちの活動範囲はより広がりますので」

そういったハジメの目には…強い光が見えた。

ハイリヒ王国のどこか。

薄暗い階段をアリー・アル・サーシエスは一人歩いていた。

「よお、その後『ガンダム』君の完成具合は？」

ニヤニヤと笑みを浮かべたサーシエスは軽薄に聞くと、聞かれた青年は嫌そうな顔をする。

「テメエ、俺の前でわざわざその名前を強調するか…？」

殺意をぶつける『赤髪の青年』に対し、サーシエスはどこ吹く風。

「…まあいい。見ての通りこの低レベルな技術しかねえ人間達にしちやあ、よく頑張ってる方だな」

サーシエスと青年の眼前にそびえ立っていたのは、金色の鎧を纏った巨大なモビルスーツ。

その頭部デザインと見れば、多くの人が『ガンダム』と答えるであろうV字アンテナのモビルスーツ。

しかし、ハジメ達がその頭部を見たらこう呼ぶだろう……

『Zガンダム』と。

「拾いもののガンダムの頭をわざわざ兄弟のモビルスーツに据え付けるなんて面倒、よくやったもんだな？…え？」

「あのお花畑勇者のことだ。どうせ元の顔じゃ俺達を疑うだろうしな…嫌な顔だが、仕方ねえよ」

Zガンダムの頭を持った金色の騎士にも見えるモビルスーツ…だが、『臀部から見える尻尾』だけがその隠された異質さを表している。

「…『ガンダム・ギラズイ』…勇者のガキ専用モビルスーツってわけか

…こりやあ、今後のこのゲームが楽しみになるぜ」

邪悪な笑みを浮かべて赤髪の男：『デシル・ガレット』はサーシエ
スと共にこれからの波乱に楽しみを抱くのだった…

第10話 突撃、死の大峡谷

死の峡谷と名高い、トータス屈指の危険地帯『ライセン大峡谷』。神代の時代では処刑場としても利用されていたと伝えられるこの土地で、複数の人影が暴れまわっていた。

「どりゃあああ!!粉砕っ!ですう!」

これまでの民族衣装から一転し、ミニスカートや青をメインとした動きやすい衣装(それでも露出度は以前とさほど変わらず)になり、エンジ色のコートを羽織ったシアの振るうハンマー型アーティファクト…ガイアに搭載させたボーデインドリユツケンを人間サイズで使えるようにと開発した新装備『ドリユツケン』は、峡谷の魔物を次々と粉砕していく。

「…っ!燃えろ!」

ユエは接近してきた魔物を近距離から放った魔法で焼き払って倒す。

魔力を分解する大峡谷の作用もあつてか大規模魔法が封じられているが、彼女は自身の膨大な魔力に物言わせたゴリ押し戦法を使うことでそれを解決している。

なお、このリスクな戦法を取り入れている背景としては『この限られた状況で何回まで魔法が使えるか』を大迷宮に挑む前に測るという目的があつたりする。

「ふっ!!セヤアア!!」

「これで…どうだ!」

ハジメはドンナーとフォールディングレイザーを使い、遠距離の敵は一体ずつ確実にヘッドショットを決め、近距離の敵には纏雷をまとわせたフォールディングレイザーで切り裂くなど、距離に合わせた戦法で戦っている。

ニコルはハジメが作り上げたサブマシンガンを扱うが、従軍経験もあつてか銃火器の扱いはハジメ以上で一切の無駄なく魔物たちを

葬っていく。

「はあ…やつぱライセンのどこかにあるって情報だけじゃ見つけるのは難しいよね…」

狩った魔物から素材を回収し終え、ハジメが小さな声で愚痴る。

「まあ、まだ二日目ですし…予定を過ぎてもみつからなかったら一旦街に戻りませんか？」

「ん…マユ達をあまり長く向こうに置いておくのもよくない」

出発前、ハジメはリヒティ、クリス、フレディ、マユの4人をオルクス大迷宮の最深部にあつた屋敷に案内し、ミネルバの操縦や細かい部分の調整などを頼んでいた。

ただし、持ってこれた食料の数からして期限はおそらく2週間程度。

「とりあえず、明日探して見つからなかったらまた予定を練り直しません？」

ニコルの言葉にハジメ達も小さく頷く。

そんなやり取りをしているとハジメは日が沈んでいくのに気がついていた。

「…じゃあ、今日はここで野営しようか」

ブルックで揃えた調味料や食材によりハジメ達の食糧事情は大幅な進化を遂げた。

調理器具のフライパンや鍋は魔力を流すことで自在に熱量を調節できる仕掛けがしてあり、かつての宿敵だった爪熊の固有魔法『風爪』を付与した包丁、水魔法と火魔法を掛け合わせたスチームクリーナーなども作ったことでどこでも自由に料理ができるようになっていた。

また、野営用テントには魔法を付与させた『暖房石』と『冷房石』が
が取り付けられているため、常に快適な温度を保ってくれる。

さらにハジメはこれらの技術を応用し、冷蔵庫や冷凍庫、果てはレ
ンジにミキサーやフードプロセッサまで開発するという念の入り
ようである。

また、骨組みにも気配遮断の技能を付与しているため夜間の防犯能
力についても非常に高い信頼を誇る。

「ん〜!!それにしてもハジメさんの世界の調理道具ってすごいですよ
ね〜。短時間で凍らせた食べ物を温かくする道具とか、このフライパ
ンとか!」

「ん…それに保存技術も」

女性陣からの賞賛に照れるような笑みを浮かべるハジメ。

「いや…神代魔法の使い道を広げるための練習で作ったものだけど、
ここまで好評になるなんて」

「でも、この魔力操作ができること前提の仕組みをどうにかすればザ
フトでも便利アイテム扱いされる気がするよ…電源無しで操作でき
る冷蔵庫なんて、あると無いとじゃ大違いだから」

因みに今ハジメ達が食べているのはシアとハジメで前日に作った
『クルルー鳥のトマト煮』である。クルルー鳥とは外見が鶏に似てい
るが自在に空を飛び、味や肉質は日本で食べた鶏と変わらない。

今回はハジメが鳥を一口サイズに切り、小麦粉をまぶしてソテーし
たものをシアが各種野菜と一緒にトマトスープで煮込んで作ってい
た。

大満足の夕飯を食べて、その余韻に浸ったハジメ達はいつも通り食
後の雑談をしていた。

「じゃあハジメさんの故郷ではそのガンプラを使ったバトルが人気だつてことですか？」

「うん。最初は特殊な技術でガンプラを本当に動かして戦わせるのが主流だったんだけど、機体が壊れてその都度修理する都合上、決してプレイ人口は多くなかったんだ。でも、今の仕様より昔のほうが好きって人もいるんだよ」

ハジメの言葉にキョトンとするシアとユエ。

「…どうして？自分の大切なものが壊れるのは、辛いはず…」

「そうだね…でも、傷ついたからこそ一緒に強くなるうって思えるんじゃないかな。壊れたらそこを直して、そして強くして…だからこそ、実機バトル…『ガンプラデュエル』を愛する人もいたんだと思う」

その言葉を聞いて一同が静かになるが、ニコルが口を開いた。
「…それでも、僕は今ハジメがやっているバトルの方がいいかな」

ハジメの視線がニコルに向くが、彼は続ける。

「仮想世界で…モビルスーツでの戦いが戦争とかじゃなく、純粹に自分の『好き』を表現できるって、楽しそうだなって思ってた。アスランのイージス、イザークのデュエル、ディアツカのバスター、僕のブリッツ…それに、ミゲル達の使ってたジン…僕たちにとって単なる兵器だったモビルスーツが、その世界の人にとっては何よりも楽しい『想いの象徴』になってる。僕達の戦争の力が、遠く離れた誰かに希望を与えてたって思うと…ちよつとだけ、ハジメの言う世界を見てみたい…なつた」

そんなニコルの言葉に、ハジメは小さく笑う。

「だったら、いつか僕達の世界に来なよ」

「え？」

「僕が世界を超えられるなら、ニコル達が来れない道理も無い。そして…いつか皆にも見て欲しいんだ。GBN…自由な世界を」

就寝時間になりシアとユエ、ニコルが眠る中でハジメは外の焚き火の前で見張りの役割につきながら武装のメンテナンスを行っていた。

「んみゅ…」

「シアさん…見張りの交代はまだだよ？」

ハジメが声をかけると、起きてきたシアが少し恥ずかしそうにする。

「えつと…実はお花を摘みに…」

「ああ…気をつけて」

野暮なことは言うものじゃないとハジメは早々に会話を切り上げ、シアはそそくさとテントを出ていく。

数分後…

「は、ハジメさ〜ん!!!こつち来てください!!!」

突然のシアの大声にぎよつとしたハジメと寝ていたユエ、ニコルが飛び起き、すぐさま走っていく。

「ど、どうしたの急に!？」

シアがいたのは巨大な一枚岩が壁の壁面にもたれ掛かるように倒れており、わずかな隙間が空いている場所だった。

「こつち…こつちですよ!!!ついに見つけました!」

見つけたという言葉で一同はシアが何を見つけたのかを察する。

「…………マジだ」

ハジメ達の眼前にあったのは、一枚のプレート。

そこには…

『おいでませー！ミレディ・ライセンのドキワク大迷宮へ♪』

女の子らしい丸文字でやたら可愛くデコレーションされた案内板だった。

「……………なあにこれえ？」

シアの話によると、どうやら『お花摘み』の後に偶然見つけたらしく、大迷宮という文字があったことからここが入口だと判断し、ハジメ達を連れてきたらしい。

「…本当にここが迷宮なのかな？」

「……………ん」

「多分…………？」

「やたら長い間をあけて返事をするユエとハジメ。その根拠はただ一つ。」

「名前が…『ミレディ』ってあるからほぼ間違いないと思うよ」

ミレディ。その名前は奈落でオスカーの日記にも記されていた人物であり、ライセン大峽谷の主のファーストネームだ。

ライセンの名はこの世界に広く浸透こそしているが、ファーストネームのほうは世間には全く知らされておらず、だからこそハジメ達はこの『ミレディ・ライセン』の名前を使っていることが迷宮の入口

だと考えた。

「でも…なんかチャライよね…」

「ん…なんか挑む前から疲れてきた」

既に脱力気味のハジメ達だが、シアは入口を探そうとあたりを触りまくって…

「ふぎや!？」

近くの岩が回転し、まるで忍者屋敷のようにシアの姿が消えていく。

「し、シアさあああん!？」

「ふぎやあああああ!？」

ハジメの絶叫から一拍遅れ、シアの悲鳴が聞こえる。

(これ…オルクスとはまた違う意味で攻略がしんどそう…)

ようやく見つけた第2の迷宮。

だが、ハジメは波乱の予感を早くも感じ取っていた。

(香織さん…僕の心は果たして君に会うまで保つのだろうか…?)

同じ頃、王宮で雫と近接訓練をしている香織は…

「っ!?今、ハジメ君の心が疲弊している気がした」

「あんたはニュータイプか!」

「違うよ雫ちゃん!私はイノベーターだよ!」

第11話 第2の迷宮

オルクス大迷宮、第84層。

誰もが寝静まった深夜、そこでアークイを思わせる魔物がある異物を発見した。

小さな球体のような形をし、目にあたる部分を光らせながらこちらを観察する奇妙な物体。

本能的に警戒した魔物だったが……

次の瞬間、耳を何か突き破り、二度と魔物は自分の意思を目覚めさせることはなかった……

ライセン大迷宮にたどり着いたハジメたちだったが、早速出迎えを受けた。

「えっと……シアさん、大丈夫？」

「ひぐつ……えぐつ……」

ハジメの前にはぺたりと座り込み、大泣きしているシアの姿が。

実は……一足先に乗り込んでしまった際に迷宮内部の罠だった黒塗りの矢に襲われ、扉に礫状態にされてしまったのだ。

そしてよく見ると扉の下には僅かながら水たまりのようなものが見えるが……本人の（乙女としての）名誉のため、ハジメ達はあえてそこに触れようとしない。

『ビビった？ねえ、ビビっちゃった？チビってたりして、ニヤニヤ』

『それとも怪我した？もしかして誰か死んじゃった？……ぶふっ』

「『……………』」

一同が思わず『イラっ』とするくらいには精神を逆なでしてくるメッセージが浮かんできた。ストレートに表現すれば『うざい』と言えるレベルの。

「……………とりあえず、みんな落ち着こう？ハジメ、シアさんの着替え出して」

「うん…」

ユエに着替えを渡し、ハジメはニコルと共に迷宮攻略の準備を進めていく。

「フーツ!!フーツ!!」

「お、落ち着いてよ…」

血走りながらドリユッケンを引きずるシアにドン引きする一同だが、ニコルがどうにかなだめようとしていた。

「シア…すごい怒ってるけど…」

「あれはしょうがないよ…僕が同じ立場だったら流石にキレる」

ミレデイ・ライセンの煽り技術はとてつもない。

なにせ石版が腹いせに破壊されてもなお自動修復されるというメッセージが地面に浮かぶように仕掛けをしているなど、気分が晴れた瞬間に追い討ちをかけるのだから。

それ以上に厄介なのがこの迷宮での魔力消耗のレベル。

まず、外よりはるかに強力な分解作用が働いているため魔法がマトモに使えないのだ。

物理装備メインのハジメ達はともかく、魔法が主体戦法となるユエはいつもより消耗が激しい。

いくつか検証したところ、上級以上のレベルの魔法はまず運用が不可。中級でも一発か二発が限界であり、5メートル飛ばせれば十分と

いうほどに魔力が分解されてしまう。

一瞬で初級か中級魔法を放ち、いつもより多めに魔力を使えばなんとか運用できるものの、これまでのような高火力で魔法を使うことができなくなった。

「魔晶石も予備をあまり使いたくない……ユエさんにはこれを預けるよ」

ハジメはドンナーの改造で作った反動の少ない小型拳銃とその他、小柄な彼女でも運用できそうな武装を数種類ユエに渡すと、今後の魔力消費を考えコートの内側に予備弾薬をできる限り（動きに支障が出ない程度）詰める。

（尤も、僕もだいぶヤバイけどね……）

ハジメに出た影響は固有魔法の制限と銃の火力低下。

彼が戦闘で使うことの多い固有魔法は『空力』や『風爪』などの外部に発動させる類が多く、それらはこの迷宮では分解されてしまうため運用が難しくなっている。

また纏雷も封じられたため、ドンナーなどの電磁加速やフオールディングレイザーの電撃刃まで使えなくなるなど、彼とて決して無視できない影響が出ている。

（魔法戦闘に慣れてないニコルと身体強化に特化したシアさん……頼れるのはこの二人か）

ハジメ達は道なりに迷宮を進み、ある程度広い空間に出てきた。

そこにあつたのは階段や通路などが規則性もなく乱雑につながった異質な部屋で、見ているだけで頭が混乱しそうな内装となっている。

「ようやく大迷宮らしいデザインの部屋に来たけど……」

「とりあえず、近くにマーキングしておこう。もし道が違うなら、また引き返せばいい」

ニコルの提案に賛同したハジメ達は一つの道を決め、ハジメが持つ固有魔法『追跡』を発動。

因みにこの追跡、魔力を直接触れた場所に添付させることで対象の痕跡を追跡する魔法であるが、今回は壁に使うことで目印代わりに使うつもりらしい。

なお空間に魔力を放出するタイプではないため、この迷宮で使える数少ない魔法の一つである。」

「この鉱石…ライセン特有のものかな？」

ハジメは進みながらこの迷宮で気になっていた鉱石…壁などの材質になっていた薄ら発光する性質を持つ鉱物を試しに鑑定したところ、ハジメも知らなかった鉱石の名前が表示された。

「ハジメ。それってどういう鉱石なの？」

ニコルが聞くと、ハジメは答える。

「リン鉱石。空気と触れることで発光する性質があるみたい。だからこの迷宮で視界に困ることはないと思うけど…」

そんな会話をしていると…

ガコンッ

「………ガコン？」

ハジメが踏んだ床のブロックが僅かに沈み、何かが作動したような

音が聞こえてくる。

その瞬間、壁と床のブロックの隙間から高速回転する円形のこぎりが飛び出してきた。

「か、回避い!!」

ユエは幸い軽く屈むことで回避できたが、ハジメ達は髪の毛が軽く刃に掠っており3人も身の危険を感じた。

「っ！また来るー！」

咄嗟にハジメがシアを、ニコルがユエを抱えて走ると天井から無数のギロチンの刃が降ってくる。

「…物理トラップか。だから魔眼石でも反応しない…」

オルクスでの苦い経験から魔法トラップを警戒したハジメだったが、考えてみればここで魔法はほとんど封じられている。

魔眼に反応しないからと油断した己に反省するハジメだった…

「ぬあああああああ?」

移動していくつかのトラップに引っかかる中、突然タールのような液体で床が滑りやすくなったかと思えば床が傾き、まるでスロープのようになる。

ならば当然、ハジメ達は滑り落ちるわけ…

「ひゃあああああ!!助けてくださいハジメさあああああん!!!」

ハジメは靴とリュストウングの内蔵スパイクを使い、ユエはハジメのコートにしがみつく。

ニコルはハジメから渡された武装の一つでブリッツの装備を再現した『グレイプニール』を使い滑らないように固定できたが、シアだけはドリユツケンの特殊ギミックを遣う間もなく滑り落ちていく。

「まずい！」

シアが滑り落ちる先で道が途切れており、その対岸に通路が見える。

それを確認したハジメはスパイクを破壊し、ユエがしがみついたままシアのところまで滑り落ち、彼女に手を伸ばす。

「シアさん、掴まって！」

シアがハジメの手を握り、続けて叫ぶ。

「ユエさん、飛ばして！」

「ん！『来翔』！」

ユエが使ったのは強烈な上昇気流を発生させて跳躍力を引き上げる初級魔法。

数秒しか使えなかったが、ハジメはその間に切り札を使う。

「来い！フォースシルエツト！」

ハジメはアリスタの力を使い、一時的に背中にフォースシルエツトを具現化。

その力で一気に対岸まで渡ると、魔力を消費しすぎたのかフォースシルエツトが消えてしまった。

「あ…あつぶなかった〜！」

「ハジメ…魔力、使い切った？」

ユエから魔力回復薬を受け取り、一気飲みするハジメ。
「そこそこ使ったかな…でも、時間かければ何とかなる」

魔力を消耗したハジメの代わりにシアがまだ残っていたニコルに叫ぶ。

「ニコルさくん!! 私達は無事ですよ〜！」

「わかった！今そつちに…うげっ」

ニコルはグレイプニールを使って対岸まで飛ばうとしたが、何気な

く向こう岸までの間に広がっていた光景を見て青ざめる。
それはハジメ達も同様であり：

カサカサ、ワシヤワシヤ、キイキイ、カサカサ：

生理的嫌悪を抱くような音を立てて、無数の蠅が下で蠢いていたのだ。

目をそらすかのように天井を見るハジメ達だったが、そこには：

『彼らに致死性の毒はありません』

『でも麻痺はします』

『存分に可愛いこの子達との添い寝を堪能してください、プギャー！』
やたら光るメッセージがそこにあり、ニコルは表情が消えた状態でそこにグレイプニールを打ち込むと一気に跳躍し、ハジメ達と合流。

「……………みんな。もしミレディの墓とか見つけたら錬成で一生もの恥になるような形の墓石をプレゼントしちゃってもいい？」

「「異議なし」」

とうとうオスカーに抱いていたような『偉大なる先人への感謝と尊敬』といった想いが薄れてきたハジメはさらっと『ミレディ』と呼び捨てにする。

嫌な形で心が一つになった一同は次の部屋へと進んでいくのだっ

た…

ハジメ達が探索を続けてから二日。
現在彼らがいたのは…

「…ねえ、ここ、見覚えない?」

「……………うん。特にあの石版」

ニコルが指さしたのは中央の石版。

なにより、この部屋はまるで最初にたどり着いた『入口』のように薄暗いのだ。

すると石版が光り…

『ねえ、今どんな気持ち?』

『苦労して進んだのに、行き着いた先がスタート地点と知ったときってどんな気持ち?』

『ねえ、ねえ、どんな気持ち?どんな気持ちなの?ねえ、ねえ』

『あ、言い忘れてたけどこの迷宮は一定時間ごとに変化します』

『いつでも新鮮な気持ちで迷宮を楽しんでもらおうというミレディちゃんの気遣いです』

『嬉しい？嬉しいよね？お礼なんていいよお！好きでやってるだけだからあー！』

『因みに常に変化するのでマップピングは無駄です』

『ひよつとして作っちゃった？何日もかけて苦労して作っちゃった？残念ー・プギャーー！』

「二」ミイイイレエエエデイイイイイイイ「二」

怒りが爆発したのかハジメ達はドリルやミザイルなどのハジメ（製作者）ですら余程の時以外は封じた近代兵器で武装し、再び迷宮攻略に挑むのだった……………

第12話 その名はサタン

ハジメ達がライセン大峡谷を攻略しているのと同じ頃。

ホルアドの町からおよそ100キロ離れた山の上空で『3機のガンダム』が巨大な怪物と戦闘を繰り広げていた。

「くっそ！何なんだよこいつは!? 清水のビームライフルが通じねえとかおかしいだろ!」

黒をベースにした死神のようなガンダム：『ガンダムデスサイズ』はシールドで飛んできたミサイルを防ぎ、パイロットの少年が叫ぶ。

「喚いていても変わらないぞ、シエル！俺達が抑えなければ、いずれこいつは俺達の国にも攻撃を仕掛けてくる…」

「わーってるよ、ダーゴ！」

ダーゴと呼ばれた少年が乗っているのは青いどことなく龍を思わせるデザインの機体『シエンロンガンダム』。

シエンロンは目の前の強敵に対してビーム兵器が効果が薄いと判断し、格闘装備である伸縮自在のクロー『ドラゴンハング』で装甲を破壊しようとするが…

『グルルラアアア!!』

眼前の怪物は咆哮を上げると、その衝撃でシエンロン、デスサイズが吹き飛ばされてしまった。

「シエル！ダーゴ！くっそ…ミハイルの兄貴とカトレア姐さんのガンダムならまだどうにかなったかもしれないねえってのに…!」

すると、怪物は突然清水達から背を向け、どこかに走り去っていく。「待ちやがれ…2人とも！ミハイルの兄貴にこの件を知らせてくれ!」

そう言うとクロウはレイヴンモードに変形し、怪物：『モビルア―

マー・ザドキエル』を追いかけるのだった…

「よりによつてハシユマルの同型なんざ…ほっとけるわけねえよな！」

ハジメ達がこのライセン大迷宮に入ってから今日で100日目。

5日ほどでこの迷宮のステージ変更には法則性があることに気づいた。

そのため、適度な休息と食事を挟むことによつて心の平穏を取り戻せたハジメ達は攻略に赴くことができたが…

「これ…明らかに最終ステージだよね…？」

立派な扉の前に、サブマシンガンにマガジンを装填したニコルが聞く。

「ん…多分、ここを越えれば攻略できる」

ユエもまた、ハジメが準備した装備の一つである大型の水筒を二つ肩にかける。

因みにこの水筒、高圧で水を放ち対象を切断するほか、水を散布することで氷魔法の消費魔力を僅かながら減らせたりする。

「……………」

ドリユツケンを持ったシアは緊張から何も言えなくなるが、ハジメは震えるシアの手を握る。

「は、ハジメさん!？」

想い人からの突然の行動にテンパるシアだったが、ハジメはその反応に少しだけ苦笑する。

「大丈夫だよ。というか…むしろ今回はシアさんとニコルを頼りにしてるから」

「え…っ？」

いきなり自分を頼るといふ言葉にキョトンとするシア。

「ここでは魔法の使用に大きな制限がある。魔法主体のユエさんや戦闘に固有魔法を取り入れる僕じや能力が大きく制限されるから、魔法を使わない戦いに慣れたニコルやこの空間で影響されにくいシアさんの存在が、勝利の鍵なんだ」

「ん…シアは私の愛弟子。だから自信持って」

ハジメとユエからのエールがよほど嬉しかったのか、シアは目尻に浮かんだ涙を拭う。

「わかりました！このシア・ハウリア、みなさんの勝利を掴むために頑張ります!!」

決心が固まったハジメ達は、扉を開き…

その頃、オルクス大迷宮の最深部、オスカーの屋敷では…

「どうですか、リヒティさん？」

「ああ、推進システムは問題なし、操作系統に関して微調整は完了ですよ」

フレディからの差し入れのパンを食べながらリヒティは答える。

「それにしても凄いやね…この艦、ハジメ君とユエちゃんだけで完成させたなんて…」

ブリッジの通信士の席に座りながらクリスが話す。

「ただまあ…これだけの艦を飛ばすとすると、重力制御とかの課題はまだまだのこりますけどね。GN粒子みたいに重力制御できたらいいんですけど…」

食べ終えた3人はブリッジから出て、ある場所へと移動する。

「武装については…」

「ああ、火線砲も副砲もミサイルも問題なし。まあ機関砲の弾は俺達じゃ生産できないのが痛いっすけど…」

会話をする中で彼らがたどり着いたのは、ある意味この艦で重要とも言える部分…モビルスーツ格納庫。

「ところで、搭載可能な機体は何機までいけるの?」

「ハジメの話だと…今のところ6機は搭載できるようにしてるって聞いたっす。まあ……………」

彼らの視線の先にあったのは、屋敷に置いていたグシオンリベイクとサザビーの2機。

「あのサザビーってモビルスーツ、思ったよりでかいから詰め込めるのもギリギリだったんすよね…」

「なら…あとでハジメさんに頼んでどうにかしてもらったほうがいいかもしれませんね」

「でやあああ!!」

シアのドリユツケンが迫り来る騎士ゴーレムの頭部を破壊。

「っ!」

銃声が鳴り、ゴーレムの頭をハジメのドンナーが次々と砕いていく。

ハジメ達が入った部屋には無数の騎士甲冑の姿をしたゴーレムが現れ、一斉に襲ってきていた。

「ねえハジメ!ここが最終ステージ?」

「いや…この物量と強さからして……………あれだ!」

ハジメが指さしたのは奥にある豪勢なデザイン扉。

「多分ここを超えた先に最後の敵がいる…その前にここを乗り越え

ろってことだと思う！」

ニコルはサブマシンガンの特リガーを引き、迫ってくる攻撃をトリケロスのシールドで受け流していた。

「だったら、周りの騎士を蹴散らすだけですう！」

「シアさん！ドリユッケンのブラストモードを！」

ハジメは開発していたアーティファクトのうちの一つであるミサイランチャー『オルカン』を宝物庫から召喚。

「これをつけて！あとみんなは耳栓しつつ周囲の騎士をできる限り破壊して！」

ハジメはシアに対しウサ耳用の特殊な耳栓（音による衝撃を限界まで緩和した特別仕様）を投げ渡し、全員が耳栓したのを見ると：

シア達の射撃が騎士達をスクラップにし、オルカンから放たれた複数のミサイルが前方の騎士を破壊し、残ったミサイルが扉を打ち砕いた。

「魔法対策の必要がないから予想はしてたけど…これで突破できる！みんな！」

ニコルが扉を担当しながらユエ、シア、ハジメ、ニコルの順に扉へと飛び込む。

それと同時に砕けた石が扉に集まり…再び扉は固く閉ざされるのだった。

扉を超えることには成功したが、周囲が真っ暗になり警戒を怠らないハジメ達。

すると、目の前には…

「なんだ…あれ…？」

「あはは……もう常識なんてぶん投げちゃってますね……」

巨大な空間が広がり、いたるところで正方形の足場がプカプカと浮かぶ奇妙な光景が広がっていたのだ。

しかもただ浮いているだけでなく、真横に流れるように移動したりと明らかに重力を無視している。

「宇宙のように無重力……いや、僕らは普通に歩けてるから、あの石だけが影響を受けて……」

部屋の色こそ全く違えど、ヒュドラの部屋と同じような雰囲気如若干警戒心を顕にしながら分析をするハジメ。

しかし……

「逃げて!!」

「!?」

シアの突然の警告に3人ともその場から飛び、先程まで自分たちがいた地点に浮いていたはずのブロックが降ってきたのだ。

「あ、あつぶな……!」

「ん……シア、ナイス」

「助かったよ……」

「何とか未来視が発動してよかったですけど……でも、今ので魔力がごっそり削られちゃいました……」

ハジメたちの危機を救ったシアの技能『未来視』は発動に2パターンある。

一つはシアが自発的に使った場合であり、シアが仮定した未来がどうなるかを見る能力だが、もう一つは自分たちに命の危機が迫った際に自動的に発動するというもの。

「シアさんの技能が自動で発動したということは……これまでに以上の危険が来るってことか……」

命拾いした彼らだったが、その目の前にとんでもないものが現れる。

「これって…ヒュドラと同じ…？」

ユエがそういうが、ハジメはその姿を見て絶句する。

「嘘…でしょ…？」

そこにいたのは、いささがブリッツやインパルスとは異なるが紛れもない『ガンダムフェイス』。

全体的に銀色のデザインになっているものの、背面に巨大なバックパックが据え付けられている。

だが、その中でも目を引くのは胸部にある不気味な顔のような造形をした装甲とバックパックから出ている6本の足。

そして何より異形なのは両腕がまるで悪魔を思わせるような長い腕になっており、さらにマニピレーターも鉤爪を思わせる形。

そんな姿を見て、ハジメは思わず眩く。

「ガンダムアシユタロンと…ガンダムヴァサーゴのカメラ…？」

『ヤッホー、はじめまして〜！みんなのアイドル、ミレディ・ライセンちゃんだよ〜!!』

いかついガンダムには似つかわしくないような可愛らしい声が聞こえ、ハジメたちは思わずズッコケそうになる。

驚いたハジメたちは声の出処が他に無いか探すが、目の前のゴーレムがため息をつく。

「あのねえ…挨拶したんだから何か返そうよ？最低限の礼儀なんだから…全く、これだから最近の若者は…もつと常識を身につけたまえよ」

ゲテモノガンダムの代名詞みたいな存在から常識を語られるというシニールな状況に少し混乱する一同。

『チツチツチ』といった表現が似合うような指の動きに（変に器用だな、あの指で…）とどうでもいい感想を抱いたが、ハジメ達は話しかける。

「すいません…まさかモビルスーツからそういったことを言われるとは思わなくて…僕はニコル・アマルファイです」

「南雲ハジメです…しかし変ですね。ミレディさんはもう亡くなっているはずなのに…」

「やっだな〜！ミレディちゃんは最初からゴーレム…ううん、モビルスーツの中にいたんだよ？」

すつとぼけようとするミレディだが、ハジメはあるものを取り出す。

「それは無いですね…だって、ミレディ・ライセンは『ここ』にいるんですから」

ハジメが取り出したのは、オスカーの屋敷で見つけたもの…『解放者達の写真』だった。

「この金髪の可愛い女の子…オスカーさんの日記から推察できる人物像と外観からして、彼女が『人間の時のミレディ・ライセン』ですよね？」

「……………ふーん。オー君の迷宮を真っ先にクリアしてたんだ、君は」

その声には若干の驚きの声も混じっている。

恐らく、攻略順で言えば最後に設定されていたはずのオルクスを最初にクリアしたことに驚いていたのかもしれない。

「でも、それだけでミレディちゃんが人間だって言えるのかな…？」

「もちろん、それだけじゃない。現代の魔法の中にはある程度魂へと干渉できる魔法がある…ですが、神代魔法ならその根幹。『魂そのもの』を何かに移植することだってできるんじゃないですか？」

かつてのクラスメイトの一人であり、ハジメ達が個人的に信頼していた降霊術師の少女『中村恵里』。

彼女は人の魂を死体に一時的に戻せるが、それでもできたのは人形のように操ることくらい。

だが、それ以上の力を振るえる神代魔法なら…

「ふー…大正解。まさかもうそこまで推測してたなんてね」

おちやらけた言動が消え、真面目な口調になるミレディ。

「じゃあ今度はこっちからの質問。どうして神代魔法を求めるのかな？オー君の迷宮をクリアしたのなら、あのメッセージも見たはずだけ」

その口ぶりからは一切の嘘偽りを許さないような雰囲気が出てお

り、ユエ達だけでなく元軍人のニコルすら一瞬圧倒される。

だが、それも当然だろう。彼女はかつてこの世界を解放するため神に挑んだ者。自らが後世に託す力がどのように使われるのか、知る権利は当然ある。

「…僕達の目標は故郷である別世界への帰還。そして…その前に神工ヒトを討伐することです。僕だけじゃない。約30人近くの僕と同年代の人間が別の世界から約3ヶ月前にこの世界に連れてこられました。その理由は…魔族との戦争に人間族が勝利するためです」

ハジメは語る。

本来なら交わるはずのなかった世界の住人がトータスに連れてこられ、神の遊戯の駒にされたことを。

「異世界人の中でエヒトの真実を知っているのは今のところ僕だけです。他の人に伝えても信じてもらえない可能性は低いですし…何より、この世界にはモビルスーツがある。だからこそ、他のみんなを巻き込めば死者が出る」

正直、裏切ったあのクラスメイトについて思うところが無いというのは嘘になるし、一発くらい殴りたいというのが本音だ。

だが、彼らが命の危機に巻き込まれるというならできる限り避けたいというのもまた事実。

「エヒトを討ち、世界を越える。それが僕のやろうとしていることです」

ミレディはしばらくハジメ達を見ていたが…

「んく、そっか！なるほどく……よし！ならばとりあえず第1審査合格ってとこだね！あとは……」

すると、ミレデイのガンダムから突然何かが飛んできてハジメの手に渡る。

「これは……？」

「フェアを貫くためのプレゼントだよ。それを被せた状態でアリスタを使えば、『ここ』での魔力消費は抑えられると思うよ」

渡された『バンドナ』をハジメはじつと見ていたが、すぐにそれをアリスタのブレスレットに巻きつける。

「まあここまでやればわかるかもだけど……この迷宮をクリアしたければ、私に勝ってみるがいい!!これがミレデイちゃんの本気……『サタンミレデイガンダム』だよ!!」

「だったら……僕たちも行くぞう！」

ハジメが叫ぶと、全員で戦闘態勢に入るのだった……

第13話 鋼の少女

ブルックの町の冒険者ギルド。

ハジメ達が出会った受付のおばちゃん、キャサリンは来客に声をかけた。

「いらっしやい…って、おやおや久しぶりじゃないか」

キャサリンの前に現れたのは少し薄い金髪の18歳くらいの女性と、紫がかった黒髪のどこか儂げな雰囲気的女性。

「お久しぶりです、キャサリンさん…実は、またあの建物を貸して欲しくて」

金髪の女性が説明するとキャサリンは頷く。

「いいよ。で、今回はどれくらい留まる予定なんだい？」

「そうですね…フリットは今回の予定だと2週間くらいって言ってました」

黒髪の女性が説明すると、周囲で聞き耳を立てていた冒険者達が少しだけ騒がしくなる。

「そうかい。じゃあ今年も『アスノ工房』の世話になるとしますか」

慣れた手つきで手続きを済ませたキャサリンが書類を渡すと金髪の女性『エミリー・アモンド』と『ユリン・ルシエル』はペコリと頭を下げた。ギルドを後にした。

エミリー達が帰って再び席に座るキャサリンだったが…彼女たちの来訪から10分もしないうちに再び客が訪れる。

「おやおや、今日は随分と懐かしい顔に会うねえ」

「お久しぶりです、キャサリンさん」

今度の来客は金髪をツインテールにした活発な雰囲気的女性。

だが、その雰囲気とは裏腹に周囲を魅了するようなスタイルが男性冒険者達の視線を誘うのだが彼らはすぐに目をそらす。

何故なら、その後ろから現れたのは二人の男。

片方はまだ小柄な少年だが、もう一人は薄手のジャケットの上からでもわかるほどの凄まじい筋肉を持った大柄な青年だったからだ。

「どうもお久しぶりです。今回はこれらの積荷についてなんですけど…」

筋肉質な青年が持ってきた書類に目を通し、キャサリンがギョツとする。

「え…これ、どうやって馬車まで運ぶつもりだい？まさか…」

「？そりゃあ持って運びますけど…あれくらいなら1時間で終わりますし」

そこに書いてあったのは馬車5台くらいで運べるほどのとんでもない量の鉱石やら素材。それをこの青年は自分ですぐに積むというのだ。

「あく…もう明弘！昌弘と一緒に荷物お願い！」

「わかりました、姐さん。昌弘、手伝ってください」

「わかったよ、兄ちゃん」

そんな会話をすると、兄弟はすぐにギルドの倉庫へと向かっていく。

「全く…そんだけ鍛えてりや確かに楽だろうけどさ」

呆れ声だったが、少しだけ楽しそうに笑う女性にキャサリンは声をかけた。

「…ふうん。若いつてのは随分といいもんだねえ。大方、あの兄ちゃんには単なる荷物持ちって理由じゃないだろ？」

「アハハ…やっぱバレちゃってました？」

キャサリンの言葉から見抜かれていたかと苦笑いする女性…『ラフ

タ・フランクランド』はすぐに明弘と昌弘を追いかけたく、手続きを終わらせると出ていくのであった。

「よし！じゃあ出発するよ、2人とも！」

先頭の馬車に乗るラフタと、2番目の馬車に乗る明弘と昌弘。

「ところで姐さん、次はミカ達の所に向かうんすか？」

「そうだよ。目指すは『湖畔の町、ウル』！着いたらまた美味しいもの食べよう！」

5台の馬車を引き連れ、ラフタ達は旅立つのだった：

薄暗い空間で響く爆音。

そこでは、4機のモビルスーツが激闘を繰り広げていた。

「おりゃあああああ!!」

シアの駆るガイアガンダムがボーディンドリユツケンの衝撃波を放つが、ミレディの操るサタンミレディガンダムは俊敏な動きで回避。

「くらえー！」

ハジメのセイバーインパルスがシログネを引き抜いて攻撃し、サタンミレディガンダムもまた両腕の『ストライククロー』で受け止める。

「そんな程度じゃこのミレディちゃんは……倒せないよ!!」

無造作に振るわれるストライククローはインパルスとガイアを弾き、背後に回り込んでいたブリッツツまでも巻き込む。

「シアー！」

「ニコル……このお!!」

セイバーインパルスはビームライフルで攻撃し、さらにフォースインパルスの武器でもあるビームサーベルを出現させるとサタンミレ

デイガンダムのストライククローとぶつかる。

「へえ…君といいもう一人の少年君といい、やけに戦い慣れてるね？」

「そりゃあ、それぞれ過去に色々ありましたから…ねっ!!」

至近距離でマシンキャノンを発砲し、メインカメラを壊そうとするが無造作に振るわれたストライククローにより失敗。

距離を取られたインパルス達は再び接近しようとするが…

「っ!？」

突然、ガンダム達の動きが目に見えて鈍くなる。

その違和感の正体。それは…

「これは……『機体重量が増してる!？』」

そう錯覚してしまうほどにバーニアの出力を上げなければ飛ぶことがままならない状態に陥っていたのだ。

よく見ると、サタンミレデイガンダムの目が妖しく光っており、彼女が何かしたのは明白。

「ぐっ…これじゃあ、宇宙用のブリッツの推進力じゃ…」

重力下での戦闘をメインにしていたガイアや大型スラスタ―を装

着したインパルスとは異なり、負荷が大きくなったブリッツは移動すら難しくなり、ニコルもコックピットでどうにか操縦しようと動く。

(ハジメ達のガンダム動きが鈍くなった…それに、この部屋の浮いている足場…)

「…ハジメ。もしかしたらミレデイの神代魔法は…」

「物の動きを鈍らせる…いや、『ものにかかる重力』に干渉してるってことか！」

それに気がついたハジメはセイバーシルエットを解除し、フォースシルエットを装着。

出力の高いフォースインパルスで高重力を無理矢理振り切ると、ビームサーベルを抜刀しサタンミレデイガンダムのボディに小さな一撃を入れることで高重力フィールドを解除させる。

「ニコル！グレイプニールでミレデイを拘束！シアさんはモビルアーマーに変形させて射撃をして！」

「了解!!」

ブリッツがアンカーを飛ばしてミレデイを捕縛し、モビルアーマー形態に変形したガイアが背部のビーム砲で射撃をする。

「ハジメさん…これを使ってください！」

ガイアは後ろ足で器用にボーデインドリユツケンを蹴り飛ばし、インパルスに渡す。

「もらったああああ!!」

バーニアを吹かしながらインパルスはサタンミレデイガンダムのコックピット目掛けてボーデインドリユツケンを打ち込み、確かな手応えを感じるとサタンミレデイガンダムは吹き飛ばされていった。

吹き飛ばされ、ガレキの中に埋まったミレデイ。

「流石に…あの一撃をうけたらいくらなんでも…」
「そう言いながらも誰一人臨戦態勢を崩さない。」

「……………変。ミレデイに勝ったのに最後の部屋への道標が繋がらない。きつとまだ…」

ユエは前回の勝利の経験があつたためか、未だ迷宮に変化がないことに警戒。

一同が周囲から何かが来ないか構えていると…

「っ！『未来』が見えました！上から来ます！」

シアが叫ぶと、遙か上から『30機のモビルスーツ』が降ってくる。

「まさかあれ……………『ビットモビルスーツ』なのか!？」

ビットモビルスーツ。『アフター・ウォー』の世界に存在したガンダ

ムタイプのサポートを目的とした無人機体であり、オリジナルのガンダムと同じ装備を用いる強力な兵器として扱われていた機体。

現れたのはモビルスーツの一機『ガンダムエアマスター』専用として開発されていた、戦闘機型への可変機構を持つ『GWビット』。それらが一斉に空から襲撃してきたのだ。

「さあさあ、果たして彼らをくぐり抜けて…ミレディちゃんに勝てるかなあ！」

ガレキの中から現れたサタンミレディガンダムは、不気味に目を光らせながら笑うのだった…

第14話 運命の一打

上空から飛んでくるGWビットが放つビームの雨にインパルス達はシールドで防御するが、敵の数はおよそ30機。

「このままじゃ…シールドの方がもたない！」

回避と防御に専念するしかなく、ハジメ達は防戦一方になる。

(どうする…？ビームじゃPS装甲も対して効果が薄いし、かと言って無策で突っ込んでも空中戦ができるのはインパルスだけだ…)
必死に脳をフル稼働させてチャンスを探すハジメだが…

「ハジメさん！…ここは私が先陣を切ります！」
「シア!？」

ハジメとユエが驚くと、ガイアが勢いよく飛び上がる。

「私だって…いつまでも皆さんの影に隠れてるだけじゃないんです！」

ガイアは近くまでできていたGWビットの一体を踏み台にして跳躍すると、ビームライフルで次々とビットを撃ち落としていく。

「これでも…くらえですううう!!！」

さらにボーデインドリユッケンを使い、5体のGWビットを殴って破壊。

続けてガイアは背部のビーム砲を使い2体を撃破。

(まだ…まだいけます！)

しかし、その背後にGWビットの1体が特攻をかけ…

GWビットをブリッツのアンカーが捕縛し、インパルスのサーベルがビットを貫く。

「シア…背後にも気を配る」

助けられたと気づいたシアに、ユエからのやや手厳しい一言が聞こえる。

「は、はい…」

「でも…お陰で突破口が見えてきたよ」

ハジメは残り10機を切ったビットに目を向け、最後の攻略のために指示を出す。

「シアさんとニコルはミレデイの相手をお願い！僕はビットを全て撃ち落としてから合流する！」

「了解!!」

インパルスはさらに装備を換装し、ビーム兵器による遠、中距離戦闘を得意としたバーストインパルスに変化。

友人である『クガ・ヒロト』の扱う『ヴァイトウルーガンダム』の

ものに酷似したバックパックから放たれるビームとミサイルがGW
ビットを纏めて破壊。

「…ねえ、ハジメ。私に提案がある」

「……………ん？」

ブリッツとガイアの連携を相手にミレディは余裕を崩さず、時折
ビームで反撃をしていた。

「やるねえやるねえ…でも、ミレディちゃんの反応速度に追いつけて
ないよ!!」

サタンミレディガンダムのクローをくらい、ガイアが吹き飛ばされ
る。

すると…

インパルスが武装の『ビームジャベリン』を振るい、ミレディとイ
ンパルスが床に激突。

「どうしたのさ！突撃したところで勝てるほど…!?!」

ミレディの言葉を遮り、インパルスは大きなタンクを宝物庫から出
現させ、投げつけるとバルカンでそれを破壊。

大量に水を被るサタンミレディガンダムだったが、さらに予想外の
事が起きる。

「この時を待ってた…『凍枢』!!」

インパルスから聞こえてきたのはハジメではなく、彼と共にいたは

ずのユエの声。

「はっ!？」

何故この空間で氷の最上級魔法が発動できたのか

何故インパルスにユエが乗っているのか

そして、ハジメはどこに消えたのか

そんな疑問がよぎるが、一瞬だけサタンミレディガンダムは氷の鎖によって拘束される。

「3人とも、今!」

そう言うときインパルスの姿が消え、ユエは落下しながらもアリスタをミレディの背後に投げつける。

それを受け取ったのはいつの間にか生身で戦場を駆けていたハジメ。

「香織さん…僕に力を!!」

インパルスを手放していたハジメがアリスタを受け取ると、彼はもう一機のガンプラを実体化。

「ガンダムエクシア・フリーユージェル! 目標を駆逐する!」

あの日に香織から受け取っていたエクシア・フリーユージェルを展開したハジメ。

そのままエクシアはメイン武器のGNソード改を突き出し、さらに背部からGNビームダガーを引き抜くとそれをコックピットブロックに突き立てる。

「…残念…でした!!」

だが、ミレディはストライククロードエクシアをなぎ払い、エクシアは壁に衝突。

同時にビームダガーも砕かれてしまう。

「いや…計画通りだ!」

コックピットの中でハジメがニヤリと笑うと、暗闇から現れたブリッツがトリケロスに装備していたランサーダートを発射。

ビームダガーによって空けられた穴に突き刺さり、一瞬ミレディが怯む。

「シアー…止めはあなたが!」

ユエが叫ぶと、ガイアがボーディンドリユツケンを構えながら走り…

「終わりですううううう!!!」

フルスイングで放たれた一撃がランサーダートを深く打ち込み、コックピットブロックに突き刺さると同時に爆発したのだった…

オルクス大迷宮、最下層。

そこではミネルバの魔導エンジンの点検を終えてオスカアの屋敷でくつろいでいるフレディ、クリス、リヒティ、マユの4人がいた。「しかしハジメって色々ぶっ飛んでるっすね…これだけの艦をユエちゃんと二人だけで完成させてたなんて」

「魔法の才能とかはこの迷宮に来てから一気に伸びたらしいけど、それでもここまですることができるものじゃない。地球から転移してきた子達はみんな何かしらの才能があるらしいけど、彼の才能ってこういうった開発関連なのかも」

リヒティとクリスの言葉に皆が頷く。

「…でも、今日で10日ですよ？ハジメさん達大丈夫でしょうか…？」
フレデイがポツリと不安を口にするが、マユは首を振る。

「きつと大丈夫…だってシアちゃんやニコル君だっているんだし…案外、明日にでも迎えに来たりしてね」

戦闘に参加できずとも、彼らは自分達の戦いのため動くのだった…

第15話 悪魔のシステム

サタンミレディガンダムのコックピットが破壊され、力なく倒れたのを確認したハジメ達はようやく戦いが終わったと息を吐き、それぞれのモビルスーツから降りる。

「今度こそ終わった…?」

「ん…コックピットを正確に破壊したから間違いない」

ユエがコックピットを覗き込むと、原型をとどめないレベルで爆発したのか、コックピットはボロボロになっていた。

「つてことは…初勝利ですう!!」

シアが喜び、エクシアを手に握ったハジメも合流する。

「お疲れ様、シアさん、ニコル」

「ん…ニコルはもちろんだけど、最後のシアの一撃は迫力があつた…」
従軍経験のあるニコルはともかく、元々争いと無縁だったシアが1月ほどでここまで戦いにおける結果を出したことはハジメ達にとって予想外だったらしく、ユエの素直な褒め言葉にシアは照れ笑いを浮かべていた。

『あ、あの…楽しそうな雰囲気が悪いんだけど、そろそろヤバイからちよつとこつちに注目してくれないかな』

「!?!?」

後ろから聞こえてきたミレディの声にハジメ達は反射的に武器を手取る。

よく見るとサタンミレディガンダムの目がまだ光っており、どこかについたスピーカーから喋っていたらしい。

『ちよつ！もう大丈夫だって！試練はそちの勝ち！モビルスーツの内部にエネルギーがまだ残ってるから少しだけ話す時間をとっただ

けだよ〜』

しかしどうやらミレディに戦う意思は無いらしく、ガンダムのも光が点滅している。

「話とは…?」

『話っていうか…アドバイス? 君の望む魔法が手に入らなくても、残る5つの神代魔法は必ず手に入れること…君達が元の世界に帰るのにもあの神を滅ぼすのにも、私達の神代魔法は必ず必要になるから…』

「…だったら、残る5つの迷宮の場所を教えてください。貴女達が表舞台から姿を消して、少なくとも500年以上は過ぎていきます。だから情報が失われていて分からないんです」

『そうなんだ…そっか、もう迷宮の場所がわからなくなるほどの時間が外では過ぎていったんだね…うん、場所……場所はね…』

砂漠の中央にある『グリューエン大火山』。司るは『忍耐の試練』

西の海の沖合周辺にある『メルジーネ海底遺跡』。司るは『狂気の試練』

聖教教会総本山『神山』。司るは『意思の試練』

東の樹海にある『大樹ウーア・アルト』。司るは『絆の試練』

そして最後は大陸南側、その東にある『シユネー雪原氷雪洞窟』。司るは『真実の試練』

『…以上だよ。あとは頑張つてね』

「はい…ありがとうございます」

『いいってことだよ…それより、色んな仕掛けでイラつかせてごめん…でも、あのクソ野郎共はホントに嫌な奴でさ…これに乗れ越えられたら、きつと大抵の嫌がらせじや揺さぶられることはないはずだから…』

『…でも、君達は自分の信じた道を進めばいい。それが……その選択がきつと、この世界の『最良』だから…』

そしてサタンミレデイガンダムから小さな光が天へと登っていく。
その様子を見てユエが静かにミレデイに近づいていった。

『どうしたの…?』

「…お疲れ様。よく頑張りました」

自分よりも遥かに長く、孤独に身を投じた偉大な先人に対するユエ
なりの労いの言葉。

それに続くようにハジメやニコルはザフト式の敬礼をし、慌ててシ
アも同じ礼を取る。

(……………あつ)

ユエとミレデイの最後のやりとりを見ている中でハジメは『あるこ
と』に気がつき、表情が引きつる。

『…さて、時間だね……………君達のこれからが…自由な意思の下に…あ
らんことを……………』

オスカーと同じメッセージを残し、『伝説の解放者』の一人は天へと
消えていった…

ミレデイの気配がガンダムから消えると、周囲に浮いていたブロッ
クが一行に並び、一つの道を作り上げた。

「…最初は根性がねじ曲がってると思ってましたけど、ただ一生懸命
な人だったんですね」

「……………ん。ずっと希望を求めて孤独の中で戦っていた。きっと、す
ぐ他の仲間と会える…そう信じた」

女子達が会話をしている中、ハジメは物凄く微妙な表情をしていた
が…

「…ねえ、ハジメ。今更気づいたんだけど…」

「ニコル。今は言わないほうがいい」

「どうやらニコルもまた気づいたらしい。」

「それでも何も言わずに通路を進んでいき…」

「ヤッホー！さつきぶり！ミレデイちゃんだよお！」

「……………ん？」

華奢なボディに乳白色のローブを纏う小さなゴーレムがいた。
しかもご丁寧な表情が簡易的な絵として浮かび上がる。

「ああ…やっぱり生きてたんですね、ミレデイさん」

「おやあ？男子達は気づいてたみたいだねえ」

意外と言うように語るミレデイにハジメが説明する。

「この迷宮はオルクスと違って魂をこの世に残したミレデイさんが管理しているってのはさつきから分かってましたけど、じゃあもしさつきの戦いでミレデイさんが消滅したらこの迷宮の維持は誰がするのか…そう考えたら気がつきましたよ」
「それに…浮遊してたブロックは貴女が動かしてたって思い出したので」

ハジメとニコルの説明にうんうんと頷くミレデイ。
そこに硬直が解けた女子達が質問をする。

「……………さつきののは？」

「ん〜？ああ、もしかして消えちゃったとか思った？ないない！そんなことあるわけないって〜！」

「で、でもさつき光が昇って…」

「ふふ、中々の演技だったでしょあれ！ずっと考えてたけど、まさか本気で信じちゃうなんて、ミレデイちゃんは役者の才能も……………あれ？」

ようやく気が付く。

ユエの目から光が消え、シアがドリユッケンを構えていることに。

「…ハジメさん。そういえばまだ試練でドリユッケン使ってませんでした。性能テストしてみますね」

「ああ…ほどほどにね？」

「え、えーっと……………」

目がマジなシアに恐れを抱いたミレデイが取った行動は…

「…てへぺろっ♪」

次の瞬間、爆音がミレデイの部屋に響くのだった…

オルクスと同じ魔法陣の中に案内され、第2の神代魔法を習得するハジメ達。

「…やっぱり、予想通り『重力魔法』だったね」

ハジメとユエは前回経験したため無反応だったが始めて経験するニコルは僅かに体が震え、シアに至っては思いつきり体が跳ねた。

「私の神代魔法は重力力そのものを自在に操る『重力魔法』！うまく使つて…と言いたいところだけど、金髪ちゃん以外あまり適性無いね。ハー君とウサギちゃんは笑えるレベルで適性無いし」

「いや…まあ覚えさえすれば生成魔法との組み合わせもできますし。それに…：…これがあれば『ミネルバ』だって動かせるかも知れない」
やはり適性の壁は高く、元々錬成に特化した才能に割り振られたハジメや身体強化に特化したシアでは重力魔法はさほど使えるものはなかったらしい。

「二つ君は普通だけど、多分使えるとしたらウサギちゃんと同じように体重を軽くしての白兵戦の補助くらいかな？でも金髪ちゃんは適性バツチリ！これなら十分ど派手な魔法を使えるはずだよ」

どうやらニコルはそこそこ使えるようで、ユエは新たな戦法が広がるほど適性が高かったらしい。

「それで…ここからはボーナスだね。あのクソ神を倒すのに使えそうなものを特別にプレゼントしておくよ」

そう言ってミレデイが歩き出し、ハジメ達もついていく。

「二応、オー君のところでは説明してたかわかんないけど、私が知り得

る限りのやつの情報を教えておくね。質問があつたら遠慮なく聞いて」

歩くなかでミレデイがそう言い、説明を開始する。

神エヒト。その本名はエヒトルジュエという『元人間』。

彼もまたトータスとは異なる異世界から訪れ、類い稀なる才能で到達者に至ったという。

「到達…者？」

「まあ、わかりやすく言えば今の君や私と同じ…世界に影響を及ぼせる神代魔法の使い手ってこと」

だが、その高い力が原因で彼の世界は消滅。そのため彼を含む生き残った異世界人はトータスに流れついたらしい。

そしてその才能をトータス人に見せたことにより崇められ、いつしか神性を得た。

しかし…それによって人の上に立つ快感を知ったエヒトは彼らの作り上げた英知を破壊することに愉悦を感じるようになってしまう。

「神代魔法が使える異世界人…じゃあ、この世界が歪められたのは彼による『侵略』ってことに…」

「そうだね…あと、旅を続けるならば一つ忠告。君達とは違う、正真正銘の『神の使徒』が奴の懐にいる。能力自体が非常に高いけど、奴らは権力者を洗脳してエヒトの手駒にしてくるから要注意だね。外見は銀髪の女で、私の予想だけどクソ神の手駒だから修道女か何かに変けてる可能性がある」

そこまで説明を聞くと、ハジメが質問をした。

「あの…ずっと気になってたんですけど」

あのモバイルスーツは一体どこから入手したんですか？」

オスカーの日記から、このモバイルスーツは解放者が旅の中で見つけたというのは予想していたハジメ。

だが、どうしても詳細は本人の口から聞きたかった。

「あれはね…私達が旅をしている中で打ち捨てられたりしてのを拾ったんだよ。内部は相当複雑だったけど、オー君が中心となって修理して、私達が神の使徒と戦うための切り札として使おうとしてただけど…流石に殺傷力が桁違いすぎるから、おいそれと使えなかったんだ。それに…数だけは大量にあったけど、使える人材が少なかったしね」

多分だけど…と一度区切るミレディ。

「モビルスーツは、多分エヒトが別世界から持ち込んだんじゃないかな？奴はこの世界だけでなくハー君達の世界にも干渉している。だとしたら…」

「確かに…シアさんのガイアを除いてほとんどが原典となる世界で破壊された機体です。ガイアも最終的には戦場に出る機会を失っていたから、そういったモビルスーツを中心にエヒトが回収していった可能性は十分あります」

そんな会話を続けていると、目の前に大きな鉄製の扉が。

「さあ、これがミレディちゃんから君達へのプレゼントだよ！」

「こ、これは………!?!」

ミレディの『コレクション』の数々にハジメは言葉を失う。

「モビルスーツが…4体…」

「ふえええく…これ、全部持って行っていいんですか?!」

ユエとシアが驚く中、ハジメはその4体の名前を呟く。

「すごい…『バルバトスルプス』に、『フラウロス』に…『オーバーフラッグ』と『ジェガン』まで…!」

以前見つけたグシオンと同じ『ガンダムフレーム』搭載型のモビルスーツ『ガンダム・バルバトスルプス』と『ガンダムフラウロス（流星号）』。

そしてガンダムエクシアのライバルが乗っていた『オーバーフラッグ』に宇宙世紀の名機と言われた量産機『ジェガン』。

さらによく見るとそれぞれのモビルスーツの修理用パーツまである程度揃っている。

思いがけない報酬にハジメが目を丸くしていると、さらにミレディはある紙の束を渡してくる。

「あと、これはオー君が残してた鉱石のレシピ表ね。これさえあれば、この迷宮で使ってたからくりは再現できるから。それと…」

懐に手を伸ばしたミレディが取り出したのは、『上下の楕円を一本の杭が貫く』デザインが施された指輪。

「はい、これがライセン攻略の証ね。これは樹海の鍵としても使えるから無くさないように」

「あ、ありがとうございます！」

指輪とレシピを受け取ったハジメがレシピに目を通す中、ミレディは最後にこう言った。

「…じゃあ、これがミレディちゃんからあげられる最後のプレゼントかな」

ミレディは自身を浮かばせてバルバトスのコックピットに潜り込むと、そこから何かを持ってくる。

「これはオー君や私達が研究してきた、モビルスーツ操作の要と言えた技術…それを君に託すことにするよ」

そう言ってミレディが渡したのは、一つのヘルメット。

「この機体に搭載されていた『阿頼耶識システム』…だっけ？それをオー君は独自に解析して、私達のモビルスーツに取り付けた。その実

物は、君が持って行って」

「っ！」

渡された物。その『重さ』にハジメは思わず息を飲んだのだった…

夜の空。

ある小さな町で夜空を眺めていたのは、ハジメ達と共にこの世界に訪れてしまった数少ない大人の一人、畑山愛子。

「…あれって、流れ星…？」

一筋の光が一瞬通り過ぎたのを見た愛子だが、この時の彼女はまたその正体に気づくことはなかった。

「ぐっ…あぁっ!？」

夜の森の中で肩が外れたのか、全身傷だらけの清水が倒れていた。

(ちくしょう…下手打った…)

ザドキエルを追いかけた清水だったが、本人の魔力が切れかけたタイミングで反撃をくらい、あちこちを負傷して動けない状態まで追い込まれていた。

「…いー…っ!!」

意識が遠のく中、清水は誰かに呼びかけられていることに気がつく。

「しっかりするのじゃ！今治療をする！」
「……あ……」

意識が途切れる瞬間に見えたのは……和装をした黒髪の女性だった。

第16話 『救世主とガンダム』

ライセン大迷宮の最深部でミレディから一通りの道具や阿頼耶識にまつわる情報を受け取ったハジメ達。

「…あのく、ハジメさん。そろそろ地上に戻るべきでは？」

「そう…だね。リヒティさん達の食料も限界が近いかもだし」

オルクスに残った仲間達と合流すべくライセンを立ち去ろうと決め、ハジメは受け取った道具やモビルスーツを宝物庫に収納する。

「あー!!!ごめんごめん、一つだけ忘れ物があったんだった!」

すると、突然ミレディがロープの内側に手を突っ込み、二つのビームサイズの石を渡してくる。

「おっと………って、これアリスタ!」

ハジメとユエがそれぞれ受け取ったのは、ハジメが使うアリスタと同じ石。

「これも大迷宮の攻略報酬として準備してたんだ。オー君のは昔迷宮で神結晶と一緒にポロつと落としちゃったんだけど、他の迷宮でも1個か2個は手に入るはずだよ」

「そうだったんですね…」

さらつと語られたが、ハジメの命をつないだ二つの石の思わぬ出処にちよつと驚いている本人。

「あく、気にしないで。神結晶もアリスタも将来的に奈落に落ちて偶然拾った幸運なんだか不幸なんだかわからない人に譲ろうってオー君とは話してたから」

そう言うとミレディは近くのロープを引っ張る。

「じゃあ、帰りの試練も頑張ってね」

『…え?』

次の瞬間、足元が開き…激流の中に4人とも流されてしまう。
その様子はさしずめ、地球の水洗トイレのように…

「アハハハハハ!!油断大敵〜!」

「二」ミイイイレエエエデイイイイイイイ
!!!
「二」

最後の最後で思わぬ仕返しを受け、ハジメ達は叫びながらライセン
大迷宮から出て行くのだった…

『第二試練 ライセン大峡谷……クリア』

山の中。

清水達との戦いでいくつか損傷していたザドキエルは身を潜め、そ
こから身動きを取らないまま数時間が経過していた。

『……………』

だが、ザドキエルの目だけは忙しく赤や黄色、緑など様々な色に
変化しており、そんなザドキエルに呼応するように動き出す影が周囲
に現れる。

『それ』は一言で言えば異形。

バイソン型の魔物やネズミ型、さらには狼型など統一性はないが、
それら全ての体の一部が機械化されているというこの世界に似つか
わしくない不気味さを漂わせていたのだ。

そして…この異形の魔物達は既にザドキエルの周囲だけの存在ではなくなっていた。

「…ぷはあっ!!」

5分ほどで河から脱出することに成功したハジメ達。

しかしその際にシアが溺れて息をしていないというアクシデントこそあったが、ハジメによる人工呼吸でどうにか蘇生に成功。

その際、王都では某治癒師の背後から真っ白いエクシアのオーラが溢れていたのは余談である…

「あら、お久しぶりじゃない」

「…!?!」

野太い声が後ろから聞こえて咄嗟に警戒したハジメ達が振り返ると、そこには見知った顔があった。

「…ん。クリスタベル、久しぶり」

「店長さん！お久しぶりですう！」

そこにいたのはブルックでシア達を買った服を取り扱っていた服屋の店長クリスタベルと、ハジメ達が世話になったマサカの宿の看板娘ソーナ・マサカ。

よく見ると後ろには護衛らしき冒険者の男が3人いる。

「ど、どうしたんですか!?!いきなり湖から這い上がってきたときはビックリしましたよ！」

「あ、アハハ…実は近くで素材を狩ってたら川に流されちゃって…」
大迷宮を攻略していたなど信憑性が薄いと考え、当たり障りない理由を語るハジメ。

とりあえずリヒティ達を連れてブルックに戻ろうと考えたハジメはソーナ達から街への方角を聞き、別れようとする。

すると、街の方向で爆発音が聞こえた。

「!?爆発…!」

ソーナ達が驚き、ハジメは近くの木の上までジャンプするとそこから双眼鏡型アーティファクトでブルックの町を見る。

「ハジメ…どうなってるっ?」

ユエも風魔法で横に現れ、ハジメに聞く。

「…正直、酷い状況。数百を越える魔物が町の中に入り込んでる。それに…」

双眼鏡が捉えたのは、モビルスーツに負けないレベルの巨体を持つ狼や牛型の魔物達。

それも全てが機械化されており、狼の足や牛の角などが生物では有り得ないほどの銀色の光沢を放っている。

「あの魔物、絶対におかしい…とりあえず、僕はインパルスで出るからユエさんにはこれを預けるよ」

ハジメはそう言うと言必要道具やガイアなどを全て出現させ、ユエに宝物庫を渡す。

「リヒティイさん達を地上に連れてきて欲しい。もし可能なら置いてあるモビルスーツを使って合流しても構わない」

「……………ん。わかった」

ユエが宝物庫を指にはめると、彼女はオルクス大迷宮へと転移。

「ニコルとシアさんはガイアに乗って現場に向かって。ただ、今回は生身での地上戦をお願い!」

「わかった。ハジメも気をつけて」

「了解ですう!」

既に出現していたガイアに飛び乗るシアとニコル。

すぐさまガイアは走り出し、ハジメは啞然としているソーナ達に叫ぶ。

「とりあえず僕達は現場に向かうので、魔物に気をつけてくださいね!」

「は、はい!」

ハジメは『空歩』で空を駆けながらコアスプレnderを実体化させ、現場へと急行した…

ブルックの町では、現在無数の巨大な魔物が住民達を襲おうとしていたが…

ビームの音が聞こえ、魔物の頭部が蒸発。

魔物から人々を守っていたのは明るい青と白が特徴的なモビルスーツ、アデル。

「この魔物…なんでこんなサイズに！」

コックピットで原因を探りながらパイロットのフリットは叫んだ。

『フリット！避難は大分進んだよ！』

「ありがとう、エミリー！」

エミリーからの連絡に答えたフリットだが、この状況は決して良いものではない。

（数十を超える巨大な魔物…それに、通常サイズの魔物の軍勢にブルックの冒険者たちでどこまで対応できるか…）

それでも手を止めることなく、フリットは主力武器の『ドツズライフル』で空から飛来する魔物を撃ち落とし、ビームサーベルで巨大な魔物を切り裂く。

「せやああああ!!」

すると上空から何かが飛んできて、魔物の1体を切断。

そこにいたのは…

「ガン………ダム？」

4本の角にツインアイ。

自身が作った機体とは似て非なるデザインだが、紛れもなく『それはガンダムだった。』

『アデル………すいません、状況を教えてください！』

すると、目の前のガンダムから通信が入る。

『こちらは南雲ハジメ、このインパルスガンダムのパイロットです！
そちらは!?!』

映し出されたのは赤いコートを着た17歳ほどの青年。

「僕は………フリット・アスノ。このアデルを使っています！」

『フリット………まさか、あのガンダムAGE-1からAGE-FXまで開発したあのフリットさんですか!?!』

ハジメの食いつきに驚くフリットだが、それに対して彼は頷く。

「は、はい………でも今は………」

『そうですね………半数は僕が引き受けます。あと、地上の魔物たちに対しても仲間が対処してくれるので心配はいりません!』

そう言うといんパルスは背中のフォースシルエットからビームサーベルを抜き、魔物の軍勢と戦闘に入る。

「だったら………僕も遠慮なくいかせてもらいます！」

迫りくる狼型の魔物が食らいつこうとするが、インパルスはシールドで防ぐとシールドで殴り飛ばし、ビームサーベルで狼を縦に両断。

その背後から襲ってきた牛型魔物に対してアデルはビームサーベルで角ごと頭を破壊し、町の被害を抑えるべくアデルはサーベルの出力を調整し、ビームダガーにして2体纏めて魔物を切り裂いていく。

「やりますねえ、ハジメさん！だったらこっちだつて………」

シアはドリユツケンを振りぬき、ニコルもサブマシンガンで魔物を

狩る。

「…どうやら、向こうは気にしなくても大丈夫そうだね」

とりあえず大丈夫だと判断したハジメはインパルスのビームライフルを構え、空から飛んできたプテラノドン型の魔物を撃墜。

町に侵攻してくる魔物たちを倒すべく、アデルに通信を入れる。

「フリットさん！あとは一発で決めましょう！」

『わかった！』

インパルスは装備をバーストに換装し、全銃火器を魔物の軍勢に構える。

そしてアデルも続くようにドツズライフルを精密射撃モードにし、魔物の中で一番巨大な個体に狙いを定めると…

『『終わりだあああ!!!』』

インパルスとアデルによるビームの雨が魔物達を殲滅。ブルツクを襲った危機は最悪の事態を迎える前に鎮圧されたのだった…

魔物が全て討たれ、夜が明けたブルツクの町。

インパルスから降りたハジメの前には、アデルから降りたフリットの姿があった。

(…………フリット・アスノ。ニコル達と同様にトータスに訪れていたガンダム世界の人間)

「えっと…君がああのガンダムのパイロットかな？」

「は、はい…」

改めて対面したフリットに緊張気味になるハジメだが、フリットの元へ二人の女性が走ってくるのが見えた。

「……………嘘……まさかあの二人までいるなんて……」

思いがけない人物との交流。

これがやがてハジメ達に訪れるさらなる戦いへの入り口となるなど、この時の彼らは予想していなかった……

特別編第1話 楽園の勇者

時はハジメ達がライセンスから地上に戻る数時間前のこと…

「それじゃあ、今日もお疲れ様！」

ホルアドの酒場で最前線に立っていた勇者パーティーは85層突破の労いを行っており、周りの冒険者達も勇者達の目まぐるしい活躍を称えていた。

「お疲れさん、光輝」

他の生徒達と会話をしていた光輝に龍太郎が話しかけてくる。

「ああ………香織と雫は？」

「二人なら、疲れたから今日は部屋で小さな打ち上げやるって先に宿に戻ったぜ。ここんとこ相当張り詰めてたしな」

幼馴染の少女二人の姿が見えないことに疑問を持った光輝だが、龍太郎の言葉に納得する。

「そうか………でも、2人ともようやく元気になってくれてよかったよ」

あの悲劇から3ヶ月。

ハジメが奈落へ転落してしまい、模型部のメンバーが離れ離れになるといった事態からそれなりに時間がたった今、ようやく香織達も前を向いて戦っていけると安心していた光輝。

そんな中、突如として一人の男が入ってくる。

「あんたは……」

「いきなりですまない。俺はホルアド冒険者ギルドの『ロア・バワビス』だ」

メルドが対応したのは、この町の冒険者を仕切っていた男だった：

聖教教会の地下。

そこを訪れたデシルは牢獄の中に入っていた男に声をかける。

「よう、久しぶりだな」

「……………」

投獄されていた男はデシルの呼びかけに反応せず、デシルは小さく舌打ちをする。

「…まあいい。それよりちよいと仕事してもらおうか。お前の機体なら既に準備が出来ているからな」

「……………仕事？」

デシルは牢獄を開けると、手錠に繋がれた男を引っ張っていく。

「ちよいと妙な奴が暴れてるらしくてな。そいつが例の『勇者様』達と遭遇する可能性がある。だから……………テメエが処理してついでに勇者様をこっちに連れてこい」

やがて、デシルは男をある1体のモバイルスーツに案内する。

「…わかってるだろうが、逃げても無駄だぜ？その『首輪』でテメエの反逆はすぐに察知できる。そうなれば……………『あの女』もどうなるだろうな？」

デシルの言葉を聞いて男は身を震わせる。

「ほら、ヤっつと仕事してこい……………しくじるなよ、『ゼハート』」

「……ですか」

ホルアドから少し離れた森を訪れていた光輝達。

ロア曰く、数日前から謎の巨大な魔物が夜にのみ出没するようになっていたという。

だが、つい先日冒険者の一人が殺され、その魔物に捕食された。

この危険な魔物は通常の冒険者の手に余ると判断し、王国の騎士と一般の冒険者を凌ぐスペックを持つ光輝達に白羽の矢が立ったというわけである。

因みに今回来ているのは光輝、龍太郎、香織、雫、鈴、恵里、浩介、メルドの8人だけである。

「……………本当にここに魔物がいるのか？」

聖剣を持った光輝が警戒しながら歩くが、魔物どころか動物の気配すら感じられない。

本当に敵がいるのかと疑問を感じたが、そんな光輝に対してメルドが返す。

「油断するな。もし本当に魔物がいるとしたら、何が起こるかわからん……………」

王国の騎士として多くの修羅場をくぐり抜けてきたメルドの言葉に改めて警戒する勇者一同だったが……………

突然、月明かりが何かに遮られる。

「っ！上だ！」

メルドが叫ぶと光輝達はそれぞれ別方向に飛ぶと、『何か』が砂埃を上げながら着地してくる。

『それ』は、これまで誰も見たことのないような魔物。

外見的特徴を挙げるのなら『カラス』という表現が一番合うが、その体軀はどう見ても通常の魔物を凌ぐ18メートルほどはある。

さらに驚くべきことは、不気味な腕のようなものがついていたこと。

その姿はまるでカラスに人間の腕をくっつけたような歪な姿で、さらに驚いたのはクチバシが生物としてはありえない銀色の光沢を放っていたこと。

「これが……………あの魔物か！」

「総員、戦闘態勢に入れ！」

光輝達はそれぞれの武器を構え、すぐさま戦闘が開始される。

(まずい……私達じゃこの敵には圧倒的に不利だ！)

戦いの中で香織は冷静に状況を分析していたが、はつきり言って好ましい状態ではない。

まず、このカラスの魔物の脅威はその体躯。

圧倒的なサイズからくりだされる攻撃は一撃一撃が非常に強く、規格外のステータスを持っているはずの自分達でも直撃すればただでは済まない。

しかも戦いの中で気づいたが、クチバシだけでなく体のあちこちが生物としては明らかにおかしい耐久性を持っている。

現状、この防御を突破できそうなのは最大の火力を誇る光輝や近接戦最強の龍太郎、そして雫の3人。

しかし、もう一つの問題がある。

「でも……今のみんなじゃ遠距離戦が……」

もうひとつの問題。それは遠距離攻撃に乏しいという弱点だった。

近接戦特化の龍太郎や雫は言わずもがな、光輝の光魔法もせいぜい中距離戦闘が可能になるだけの射程距離であり、ある程度距離を取られても戦えるのは現状、魔法の中でも攻撃魔法にそこそこの適性のある恵里だけ。

だが、ほぼ密着状態にある光輝と遠藤が射程に入るため恵里も香織も魔法による攻撃ができないでいた。

「雫ちゃん！一度光輝君達を下がらせて！」

香織の言葉に頷いた雫はすぐに光輝達に駆け寄り、強化された斬撃でカラスの魔物を僅かに退かせる。

そして、その隙を見た香織と恵里は炎魔法『羅炎』を使い、カラスの魔物の顔面を炎に包んだ。

「よっしやあ!!」

「やった！これならいくら強力な魔物でも…！」

龍太郎がガッツポーズをし、光輝がホツとした表情で語る。

「ちよつと光輝君！変なフラグ建てないで!!」

不穏なセリフに思わず香織が突っ込むが…

『クウウルウウウオオオオオ!!!』

炎が晴れ、顔面の皮膚が燃え尽きたカラスの魔物がその眼光を光輝達に向ける。

「そんな……………」

「なんだよ…あれ…?」

顔面の皮膚が剥げたカラスの魔物

その顔はまるでロボットのように金属の質感がハッキリ出ており、その異様な姿に香織達は声が出なかった。

「ロボットの…魔物!？」

その姿に動揺していたため、香織達は一瞬反応が遅れてしまった。

次の瞬間、カラスの魔物が放ったビームが辺りの地面を吹き飛ばして香織達は宙を舞う。

「こいつ……………マジで何なんだよこれ!!」

遠藤は思わず叫ぶが、光輝達に対してカラスの魔物がビームを放とうとして…

突如飛んできた光の玉がカラスの魔物を攻撃し、カラスの魔物の口の中が暴発。

「え……………？」

思わず目をつぶっていた香織達が顔を上げると、満月をバックに大きな翼を持った『巨人』がいた。

真っ赤なボディは全体的に生物的なデザインになっており、どことなくエイリアンのような出で立ちをしている。

だが、その顔はスリット状の目にこそなっているものの4本の角という顔になっており、その顔を見て香織、雫、遠藤は愕然とした。

「嘘……………だろ？」

「あの姿……………それにあの色……………」

光輝達が困惑している中、香織は眼前の巨人の名前を口にする。

「ガンダム……レギルス！」

カラスの魔物を見上げているガンダム：『ガンダムレギルス』の
コックピット内部でパイロットの『ゼハート・ガレット』は宣言する。

「ゼハート・ガレット、ガンダムレギルス！対象を破壊する！」

『ギユウエエエエ!!』

不気味な叫び声をあげたカラスの魔物に対し、レギルスは掌から
ビームサーベルを展開するとカラスの魔物の表皮を斬り裂く。

「この魔物……やはり『ザドキエル』の刺客か！だが……」

手持ち武器のレギルスライフルを使い、カラスの魔物の片翼に穴を
開ける。

『ギユウアア!!』

怯むカラスの魔物だが、負けじと固有能力のビームで応戦。

それに対して胸部のビームバスターを放ち、相手のビームを相殺。

「凄い……あのレギルス、魔物の攻撃に対応してる……」

的確に対応しているレギルスに関心の声が出る香織。

そんな彼女達の様子をよそに、ゼハートは勝負を決めるべく動い
た。

「あまり長居は無用だ…一気に決めるぞ、レギルスビット!!」

レギルスは実体盾『レギルスシールド』を展開させ、球体状のビーム『レギルスビット』を射出。

15発のレギルスビットは一斉にカラスの魔物に襲い掛かり、魔物の表面が無数の穴を開けられたことにより墜落を始める。

「これで…終わりだ!!」

レギルスはビームサーベルを展開させると、そのままカラスの魔物の頭部を穿いて地面に叩き落とすのだった…

カラスの魔物をあつさりと撃破したレギルスに一同が驚く中、レギルスは跪くように着地すると、その頭部が開き内部から聖教教会の騎士団の制服を着たゼハートが降りてくる。

「はじめまして。私は聖教教会のイシユタル様からの命によって派遣された者…教会騎士のゼハート・ガレットです。以後、お見知りおきを」

騎士団の敬礼をするゼハートに、メルドが返事をする。

「あ、ああ………助けてくれて感謝する」

軽く会釈をしたゼハートは、その視線を光輝に向ける。

「勇者殿…実は、イシユタル様が勇者殿に教会へと来て欲しいとおっしゃっている。突然ですまないが、私と一緒に教会へと戻ってくれな

いだろうか?」

「え…俺一人で…ですか?」

突然の名指しに困惑する光輝。

「ああ。どうやらエヒト様はこのような魔物が暴れだす事態を予想していたらしくてね…こういった魔物に対抗するためのアーティファクトを勇者殿のためにと教会が準備してくれていたんだ。だが、そのアーティファクトは勇者殿専用らしくてね…」

しばし考える光輝だが、視線をふと向けた龍太郎達が頷くと顔を上げる。

「…わかりました。ですが、あまり仲間達を置いて留守にするわけには…」

「それなら心配ない。レギルスに乗れば片道1日もあればたどり着けるはずだ」

やがて話がまとまったのか、光輝はみんなに語る。

「…ということ、俺は一度教会に戻る。その間クラスの皆は…」

そう言うと、手を挙げたのは香織と雫。

「わかってる。あんたが戻ってくるまでとりあえず私達でどうにかするから」

いつもの雫の姿に安心したのか、光輝はゼハートと共にガンダムレギルスに乗り込む。

やがて、レギルスは大きく翼を羽ばたきながら空へと消えていくの

だった…

「……………雫ちゃん。あのゼハートさんって…」

「こないだのトリニティと同じかも…でも、なんというか『腑に落ちない』のよね…」

仲間達と共に帰路につく中、香織達はどうしても違和感が拭いきれなかった。

ゼハートに連れられて教会に降り立った光輝は、そこで待っていた人物に驚きの声を上げる。

「よう、久しぶりだな勇者の兄ちゃん！」

「ゲイリーさん！お久しぶりです！」

いつぞやに出会った冒険者、ゲイリー・ビアツジがそこで陽気に手を振っていた。

「ゲイリーさんはどうしてここに…？」

「ああ、ちよつとここの教会とは縁があつてな……………お前さんのための新しい力を渡すために俺が案内役を買って出たってわけさ」

やがてゲイリーは光輝を教会の地下へと連れてくると、その扉を開く。

「なっ……………!？」

『それ』を見て、光輝は思わず声がこぼれた。

「これは……………ガンダム!？」

「おうよ！教会の管理していた異世界からの最強アーティファクト……………その名も『ガンダム・ギラズィ』。何でも、エヒト神に選ばれて世界を救える真の勇者にしか扱えない代物…って教会の上層部にしか伝えられていないらしい」

銀の装甲を身に纏ったモビルスーツに、光輝は思わず魅了される。

「……………これが、これがあれば…」

あのカラスの魔物に手も足も出なかったとき、光輝は己の無力さに怒りすら感じた。

だが、見ただけでわかる。

「これがあれば、仲間達だって守れるんだな……！」

新たな力に決意を固める光輝。

だが、その横に悪意を秘めた怪物がいたことに、彼はまだ気づいていなかったのだ……

特別編2話 再開への秒読み

「くっ……ここまでかよ……」

ボロボロになった体を引きずりながら、清水幸利は山の中を歩いていた。

「最悪だ……こんな時にはぐれるなんて……」

（テイオさん……すみません、少しだけ……）

意識が朦朧する中、清水は気が付くと開けた土地に出て気を失った。

（ん……ん）は……？）

どれほどの時間が過ぎたのか。

清水は外から差し込む光で目を覚ますと、自分がどこかの部屋のベッドで寝ていたことに気が付く。

「気がついたんですね、清水君！」

「せ……先生……？」

自分の横に居たのは小学生のような身長教師、畑山愛子だった。

「つてことは……ここは人間族の領地の町ですか……？」

「はい。ここは北の山脈の麓にあるウルの町です。清水君は山の麓で倒れてて、龍峰君達が運んでくれたんですよ」

自分がいた場所を知って、清水はベッドに倒れこむ。

「…先生。周囲に俺以外の人はいませんでしたか？」

「…いいえ。他に誰もいませんでしたよ」

その言葉を聞いて清水は自分の置かれた状況を理解する。

「清水君…誰かを探しに行くのなら、せめて今日だけはしっかりと休んでくださいね。無茶をして倒れては、一緒に行動している人も大変ですから」

愛子が出ていき、清水はしばらく外の風景に目を向けていた。

「先生…清水の様子はどうですか？」

食堂でおにぎりを作っていた愛子に質問をしたのは彼女と一緒に行動していた大翔と優花。

「本人は大丈夫そうです…ただ、どうやら一緒に行動していた人がいたらしくて」

愛子は先ほどの清水の様子を思い出す。

「…恐らく、清水君は明日の朝にはまた出発するでしょうね。正直に言えば、これ以上危ないことはしてほしくないのですが…」

クラスメイトとの確執の深さといい、恐らく清水が自分からクラスに戻ってくることは無いだろうと薄々感じていた愛子。

「…あいつの気持ち、わかりますよ。俺だって本音を言えばもうクラスメイトには関わりたくなんてなかったですから」

親友を奈落に落とされ、ろくな捜査もせずに死んだことにされてしまったことで大翔は光輝に掴みかかり、一度は投獄されてしまった。その経験からか大翔の中にほとんどのクラスメイト、そして光輝への信頼はほぼ消え失せてしまっていた。

「でも…私はやらなきゃいけないことがありますから」

愛子から差し入れを受け取り、優花と大翔は清水の部屋へと向かった…

ドアがノックされ、部屋に入ってくる大翔と優花。

清水はすでにトータスでの戦いのための衣服に着替え終わっていた。

「思ったより元気そうだな。ほれ、先生からの差し入れだ」

「…ありがとな」

おにぎりを食べ、部屋の椅子に座る3人。

「なあ清水…お前、今は冒険者として行動してるんだよな？」

「まあな。それなりに稼いではいるが…思ったより情報も手に入りやすい。天之河達の行動についてもそれなりに情報は入ってくる」
それを聞いた優花が本題を切り出した。

「…だったら、一つお願いがある」

優花は以前、香織から頼まれた一件を口にした。

「清水…南雲を探して欲しいの！」

その頃、ブルックでは…

「…はあ、またやってたの？」

アスノ工房として借りていた建物の地下で大量のお手製アーティファクトに埋もれながら眠るハジメとフリットの姿に、思わずエミリーはため息をつく。

「ご、ごめんエミリー……つい熱が入って…」

ハジメとフリットが出会ってから2週間近くが経過し、アスノ工房の契約期間も明日で終わりとなりフリット達はブルックから再び旅立つ。

無論、ハジメ達と同行することにはなっているがそれでも設備が整った場所というのはそんなに多くは存在しないため、できる限りの調整を行っていたのだ。

「でも…フリットが仲間になってくれたおかげで色々と捗ったよ。ミネルバの管制システムといい、移動用アーティファクトの微調整は多分僕だけだと難しかったからね」

フリットが加わったことでハジメの装備関係は大きく進化を遂げ、ミネルバの操舵システムや火器管制システムは機械技術と遜色ないレベルにまで昇華。

さらに現在は保有しているモバイルスーツについてもパワーアップの計画を検討中だった。

「はいはい、もう契約期限切れちゃうから身支度を整えて！私も手伝うから！」

流石に前世の頃から夫婦として過ごしていたからか、手馴れた様子でフリットの片付けを手伝い始めるエミリー。

そんな二人を邪魔しないようにと、ハジメは荷物をまとめてそそくさと工房から出ていくのであった…

荷物を纏めたハジメ達をみて、キャサリンは少し驚く。

「おや、エミリーちゃん達と一緒に行くのかい？」

「はい。ようやく次の町に行く準備も整いましたので」

続けてハジメは次の旅に関してキャサリンに質問をした。

「実はグリユーエン大火山に向かいたいんですけど…立ち寄った方がいい場所とか情報はありますか？」

そう聞くと、キャサリンはいくつかの資料を持ってくる。

「そうだねえ…グリユーエン大火山は大陸を西に進んだ大砂漠の中にある。麓にはアンカジ公国って国があるけど、しっかりと準備をしたいなら途中にある中立都市『フューレン』に行くといい。大陸一の商業都市だから大体のものは揃ってるからね」

資料を閉じるとキャサリンは近くの掲示板を示す。

「今ならフューレンへの護衛の依頼が1件あるね。お前さん達は随分と人が増えたし、受けてみたらどうだい？」

現在のハジメ達は11人というかなりの大人数での移動となっている。

この中で冒険者登録を行っているのはハジメとニコル、そしてフリットだけだった。

「うーん…正直、乗り物については大丈夫だけだな…」

ハジメとしては四輪でさっさと向かったほうが早いというのわかってる。

だが、せっかく異世界で冒険者になった身としては一度くらいはこういう冒険者らしいことをしてみたかったのだろう。

「…だったら、僕がマユちゃんやリヒティさん達を連れて先に向かっているよ。そんなに急ぐ旅じゃないし、ハジメ達は情報収集とかしてかんでも十分じゃないかな？」

迷っていたハジメの背中を後押しするようにニコルが答え、ハジメは仕事を受けることにする。

そしてそのままギルドを出ようとすると、ある手紙を渡された。

「これは？」

「あんだ達は見込みがありそうだからね。もし他の町でギルドが出張するような揉め事に巻き込まれたときはその手紙をギルドの人間に見せな。大抵のことは何とかなるはずだよ」

…その言葉を聞いてハジメは目の前のおばちゃんが持っているで

あろう影響力を察し、すこし寒気がするのだった。

正門に向かうと護衛の依頼主である隊商が集まっており、その中で責任者らしき男が近づいてくる。

「私の名はモットー・ユンケル、この隊商のリーダーをしている。護衛よろしく頼むよ」

「はい。僕は南雲ハジメです…今回同行するのは僕以外だと二人ですね」

ハジメの横にユエとシアが立ち、ハジメはモットーと握手を交わす。

「……………ふむ。早速で悪いが、君に相談がある」

モットーの目が鋭くなり、その視線はシアに釘付けとなった。

「よければその兎人族…売るつもりはないかね？」

その言葉を聞いて、新たな波乱をハジメは感じ取った…

翌朝。

ウルの町を出た清水は昨晚の大翔と優花の二人と交わした会話を思い出す。

『南雲をつて…あいつが生きてるのか!?!』

優花からの言葉に驚愕した清水だが、優花によると香織が感じ取った直感だという。

『確証は確かに無い…でも、香織と雫がいくら探しても南雲の手がかりが見つからないまま3ヶ月以上経ってる。ひよつとしたら可能性も…』

優花の必死な姿に、清水は頷いた。

『……………わかった。それなりにツテも増えたから南雲らしい人間がいたら教えてくれるよう、知り合いにも頼んでみる』

「まさか…あいつが生きてるのか…？」

半信半疑な清水だが、不思議と嘘だと言えない気がした。

「……………だとしたら、さっさと白崎に顔出せつての」

やがて周囲に人影が見えないことを確認し、清水はアリスタを握る。

「来い…クロウ！」

クロウガンダムを実体化させ、清水は空へと飛び立った…

第3章 狂い咲く勇士

第1話 商業都市へ

「シアさんを…？」

今回の雇い主であるモットー・ユンケルから言われたことに驚くハジメ。

「私も職業柄亜人には何度か会ったことがあるが…彼女ほど美しい人は中々お目にかかれませんか？…勿論、言い値をお出ししますが？」

商人としての性だろう目でシアを値踏みするように見るモットー。
だが…

「申し訳ないですが、その話はお断りさせていただきます」

シアを庇うように前に立つハジメ。

その視線にモットーは思わず一步後ろに下がる。

「彼女は僕の大切な仲間ですし、メンバーも誰一人シアさんを売るなど賛成しません。ですので…彼女を売ることはありません。例えばどんな存在が立ちほだかろうと、絶対に」

ハジメの目を見てこれ以上の交渉は無理だと判断したのかモットーは引き下がる。

「…わかりました。では、本日はよろしくお願いします」

モットーが先頭の馬車に乗り、ハジメ達は護衛のリーダー達と今後の打合せを行うのだった…

ゆつくりと馬車に揺られながら空を眺めるハジメ。

因みにこう見えても索敵系の技能を使い周囲に異変がないかを確認

認し続けている。

「なんかのんびりしてますね、ハジメさん…」

「うん…ほら、ここまで迷宮攻略とか神の使徒一行としての仕事とか立て続けにバタバタしてたからね…トータスで陽の光を浴びながらこうして空を見ていられるのは初めてな気がして」

ブルツクの街を出てから三日。

すでにニコル達はフューレンに着いたのだろうと考えていると、すっかり夕日が沈んで辺りが真っ暗になる。

「確か、今日で折り返しでしたよね？あと、暖かいコーヒーいります？」

「ああ。このまま何事もなければすんなりフューレンに入れるはずだ。まだ繁忙の時期じゃないしな…おっと、コーヒーくれ。砂糖は2つな」

野営の準備を終え、護衛のリーダーと共にコーヒーを飲みながらハジメは地図を確認。

するとシアから声がかかる。

「みなさ〜くん〜飯の準備が出来ましたよ〜！」

「…待ってましたあ!!」

シアの言葉に護衛、商隊関係なく全員が反応する。

因みに初日の夜、うっかりハジメ達が全員の前で宝物庫を使ってしまったことでモットー達が食いついてしまい、宝物庫を買い取らせて欲しいと迫られたのは余談である。

「やっぱり、普通なら食料は携帯食のほうがいいんですかね？」

「そうだなあ…確かに普通ならばそんなに多くの持ち運びはできないから、干し肉だの保存性の高い食料が冒険者には需要が有るぞ。あれはあれでなかなか旨いし」

シチューを食べながらハジメと会話をしているのは、冒険者としては珍しい亜人の男性。

王国により公的な保護を受けているはずの海人族の青年『カイル』。

「…ふと気になったんですけど、どうしてカイルさんは冒険者に？海人族は人間族全体から保護を受けてる種族なのに…」

「え…まあ、いろいろあつてな……………」

ポツリポツリとカイルは説明を始める。

「まあはつきり言っちゃえば…何かの事故にあつたみたいで昔の記憶が一切無いんだよ。覚えてるのは自分の名前だけ…」

苦笑いするカイル。

「ただ、海人族の住んでいる町に着けば何か思い出せるような気がしてさ…それで、路銀稼ぎながら旅をしてるってわけだ。もうかれこれ4年になるんだけどな」

コーヒーを飲んで空を見上げるカイルに、ハジメは何を言えばいいのか迷ってしまう。

「でもまあ、悪いことばかりじゃないぜ？こうやっていろんな人達と旅ができるし、何より出会った人も案外優しいからな。俺に冒険者登録を進めてくれたのだからあの町にいたキャサリン姐さんだし」

「キャサリンさん…そこまで面倒見が良かったんですね」

飲み終えたのかカップを置いて、カイルは小さく笑う。

「…だけど、その旅ももうすぐ終わりそうだ。フューレンまでたどり着いたら、あとは最後の荷物を纏めて故郷に…エリセンに帰る。それまで記憶が戻ってなくても、向こうに着けば流石に何か思い出すだろうしな」

旅の終わり。それが近づいていると感じていたのか遠い目をするカイルにハジメは思うところがあつた。

(カイルさんはもうすぐ故郷に着く…だけど)

故郷と遠く離れていることだけは間違いないこのトータスという世界。

(果たして………僕達が帰れる日って来るのかな……?)

帰還に必要な神代魔法はあと5つ。

そして何より、帰還のためにはエヒトを討たなければ同じことの繰り返しになる。

(…いや。例え何年かかっても、必ずやらなきゃ)

自分だけじゃない。

今もオルクスで戦っているかもしれない想い人や友人達のことを考え、ハジメは思いを新たにしました。

ブルックを出てから6日目。

あと数時間もすればフューレンに到着というところまで来て、ハジメ達は馬車から降りるための身支度を終えると護衛任務に戻る。

「…どう?…ここまで、何か接近してきたとかは」

「うーん…今のところは………っ!」

馬車の上で自慢のウサ耳を立てながら周囲を索敵していたシアが突然何かに反応を示す。

「魔物の足音と息遣いが聞こえてきました!方向は私達の進行方向!」

「数は!?」

ハジメの言葉にシアは返事をする。

「数は…おそらく100体は超えてるです!」

シアの報告にざわつくなか、ハジメも馬車の上に飛び乗ると眼帯を外して魔眼石を発動。

望遠状態に切り替えると、シアの報告が間違っていないことを悟った。

「100以上?!最近魔物が出ないと思ったら勢力を溜め込んでたのか

！」

リーダー達が慌てて戦闘準備に入ろうとするが、ハジメがそれを止める。

「いえ、ここは僕達で片付けます！」

この距離ならまだフューレンまで距離があり、幸いなことに通行人もいない。

つまり、最低限情報を隠せたまま武器を試せるということになる。

「べ、別にいいが…本当に大丈夫なのか？」

「絶対…とは言えませんが、少なくとも戦力を大幅に削るくらいなら。魔物の数が減ればこの戦力で十分対処できますよね？」

ハジメはそう言う周囲に十字架のような浮遊する物体を出現させ、手にはサブマシンガンを出現させる。

「あ、ああ…だが、いけるのか？」

「はい。僕とユエさんが奴らに先制攻撃をして殲滅に入ります。もし撃ち漏らしがあれば、あとはお願ひします」

ハジメとユエは馬車から降りると魔物達の前に歩き出す。

「坊主…くれぐれも気をつけてな！」

カイルの言葉にハジメ達は頷き、戦闘準備に入った。

「ユエさん…人目もあるし、今回は詠唱ありで魔法をお願い」

「ん。今回は大規模な魔法使うからすこし長く詠唱してみる」

魔力操作で詠唱破棄ができるが、この世界の人達に不審がられないようにあえて呪文を唱えるユエ。

「彼の者、常闇に紅き光をもたらさん——古の牢獄を打ち砕き、障碍の尽くを退けん」

天を指すユエの指先に電撃の玉が精製される。

「最強の一角たるこの力、鋼が紡ぎし絆とともに、天すら呑み込む光と

なれ」

ユエがよく使う雷魔法は、ハジメ達も知らない新たな魔法へと進化して魔物達に迫る。

「『雷龍』」

ユエが魔法を発動させると、暗雲が出現して雷鳴が集まり、巨大な『龍』を作り出す。

龍は雄叫びをあげ、魔物の群れを飲み込むとほとんどの魔物を一撃で消し飛ばした。

「…ハジメさん、あの魔法って…」

「多分だけど…ミレデイさんの元でゲットした重力魔法を応用した技かも」

「ん。大正解…私のオリジナル複合魔法、雷龍。ミレデイが言っていたように重力魔法の適正があったから、ブルックのギルドの修練場で練習してた…でも、今は手加減してる。扱いが難しくて全力で使うと周囲を吹き飛ばしかねないから」

雷を龍の形にして発動させることで、まるで雷の龍が質量を持ったかのように襲いかかるのだという。

「ちなみに詠唱はハジメ達との出会いと、ガンダム達を表しています」

ドヤ顔でサムズアップを決めるユエ。

だが、僅かに5〜6体ほどの魔物が生き残っていた。

「あとは僕がやる…行け、『クロスドラグーン』!!」

ハジメが叫ぶと、背後に浮遊していた十字架のような形をした武装が自動的に飛行。

それは空中で分離し、ワイヤーらしきもので繋がった状態で銃撃を開始した。

『グウウウオオオオ!?!』

四方八方から放たれた銃弾が残った魔物達を打ち抜き、ほどなくして魔物の群れは全滅。

「ハジメ…今のは？」

「重力魔法を応用した武器で、分離して四方から攻撃可能になるオーレンジ兵器さ。元々ガンダム世界にあった兵器の一つを再現してみたけど、簡易的な操作で有線式操作にしても最大8機が限界だったけど…」

そう言ううとハジメは座り込んでしまった…

魔物の襲撃から数時間後、ついに一行はフューレンへとたどり着く。

しかし、モットーは宝物庫やクロスドラグーンなどのアーティファクトを売ってくれないかとしつこく食い下がっていた。

「ハジメ殿、着く前によろしいですか…？出発前に話した宝物庫などのアーティファクトとその兎人族…まだ売る気にはなりませんか？」
「すいません。これを売るつもりはないですね。今後の旅にも必要なので」

アーティファクトのほとんどはハジメが試行錯誤を重ねて作り上げた一品ものであり、戦闘用のものとなるとそう簡単には手放せないほど武器としての価値以外での愛着もある。

宝物庫に至ってはこれから先も必要なものであり、尚且つ現在のハジメでも作れないアーティファクト。

シアに至っては彼女はもう自分達の仲間であり、間違っても売り飛ばすなんてことは考えない。

「商会に来ていただければ公証人立会のもと、一生遊んで暮らせるだけの金額をお支払いしますよ？それに貴方のアーティファクト…特に宝物庫は商人にとっては喉から手が出るほど手に入りたい代物ですからな」

実際、宝物庫があれば馬車に大量の荷物を積んで運ぶ必要もなくな

る。

それだけでなく護衛を雇う人数も削れる。確かに商人にとっては是が非でも欲しい代物だろう。

「宝物庫の力は個人の手に余る代物……この先、厄介なことになるかもしれないぞ？ 例えば彼女達の身に何か起きたり……」

そこまで言うが、ハジメはにこやかな顔で返す。

「でしたら、それこそ戦う力のないモットーさんには危険な力じゃないですか？」

それを言われ、流石のモットーも言い返せなくなる。

「手に余る代物というなら……それはあなたにとっても同じ。ですが僕達と違い貴方にこれだけの力を守ることとはできない」

万が一護衛を雇ったとしても、金での繋がりである以上モットーにとって警戒すべき存在に変わりはない。

ハジメはそこまで見越してモットーに警告を返したのだ。

「……そうですね。私も欲に目がくらんだものだ」

流星に修羅場を超え続けた商人なだけあったのか、モットーは大人しく引き下がることにした。

やがて入場手続きが済み、ハジメ達だけでなくカイル達他の冒険者とも別れの時が来た。

「じゃあな坊主。さん達も早いところ家に帰れるといいな」

「カイルさんも……この一週間、色々教えてくれてありがとうごさいます」

せめてものお礼にと、ハジメはカイルに自作のナイフを渡す。

「カイルさん、確かちよつとだけ魔力使えるって言ってましたよね？

なので、身体強化の魔法陣を柄の部分に刻んでおきました」
「いいのか？こんなナイフ、店売りならそこそこするのに…」

さすがに立派な武器ともなると多少は躊躇いがあるのか受け取るべきか迷うそぶりを見せるカイル。

「まあ、色々教えてくれた報酬ってことで…ね？」

そう言われようやく素直に受け取ったカイルは、腰に鞘を付けるとナイフを収める。

「サンキュー、坊主。いずれエリセンに来たら俺を頼ってくれや。まあ…その前に俺が家を見つけないきや行けないがな」

小さいながらも出会いと別れを繰り返し、ハジメ達はフューレンの街を歩きだす。

「さて…フリット達と合流しないとね」

赤いコートを翻し、ハジメはユエとシアを連れて街に歩き出した…

第2話 支部長からの依頼

「その冒険者、止まりなさい」

周囲を囲む町の衛兵達と、ハジメの視線の先には腰を抜かして倒れこむ丸々太った身なりのいい男。

(……………うあああ…やっちゃったあ…!)

なぜこうなったかというと、話は30分ほど前にさかのぼる。

「ハジメ!こつちだよ!」

町中を歩く中でハジメ達は先にこの街に来ていたニコル達と合流して朝食を一緒に食べていた。

「…あれ?ニコルとマユちゃんだけ?」

「実は…フリットさんは昨日までここでお仕事して寝ちやつてて…」

「ユリンとエミリーは付き添い。リヒティとクリスは買出しに行ってる」

朝食のトーストを食べ、5人は宿泊場所について話し合う。

「先に泊まっててわかったけど、観光区の宿の方がサービスとかもいいみたいだよ。すこし料金は割高だけど、ご飯とかほかのサービス含めればちよんどのいいと思う」

フューレンは大きく分けて町の中核を担う中央区、他の街から来たモットー達のような人々が商売をする商業区、旅の冒険者達が立ち寄る観光区の三つに分かれている。

「流石に全員で泊まるのは大変だから、それぞれが選んだ宿に泊まるってやり方にしよう。とりあえず宿代を得るためにも以来完了の報告をギルドにしないとね…」

そうして食事を終えたハジメ達が席を立とうとしたが…

(っ…)

不意に嫌な視線を感じたハジメが周囲を見回す。するとそこには肥満体ながら身なりだけはいい男がこちらを見ていた。

(あの人の視線…ユエさんたちに向いてる)

警戒心をマックスにしていたハジメだが、丸い男は体を大きく揺すりながらハジメ達の方へと歩いてきて、開口一番に告げてきた。

「お、おい、ガキ。ひゃ、百万ルタやる。この兔を、わ、渡せ。それとそっちの女2人はわ、私の妾にしてやる。い、一緒に来い」

微妙に滑舌が悪い喋り方でハジメに決定事項とでも言うかのように告げてきた男だったが、ハジメとニコルはさつと3人の前に立ち、無視してさつさと歩いていこうとする。

「お、おい！言うことを、き、聞け！」

男はユエの手を掴もうとするが、ハジメは咄嗟に間に入ると男の手を弾いた。

「ギャアアッ！」

(あ、やば…)

つい反射的に相手の手を叩いたが、ハジメの人間離れたパワーで叩かれたことで腕を痛めたのか男はうずくまってしまう。

「ニコル、早くここから離れよう」

大騒ぎになる前に離れようとハジメはユエとシア、ニコルはマユの手を掴んで離れようとするが、その前に大男が仁王立ちして道をふさいできた。

「れ、レガニド！やつを殺せえ！わ、私に暴行を働いたのだ！」

「坊ちゃん、殺すのは流石にまずいですぜ」

「いいからやれえ！お、女は傷つけるな！私のものだあ！報酬はいくらでも弾んでやるー！」

そう言われ、レガニドと呼ばれた大男は不敵な顔になる。

「というわけだ。俺の報酬のためにとつと引き下がってくれや」

レガニドが拳を構え、周囲がざわつき始める。

「おい、あいつって『黒』のレガニドじゃねえのか？」

「噂通り『金好きのレガニド』ってことかよ……」

周囲のヒソヒソ声で目の前の大男のことを察したハジメ。

（天職はあるかわかんないけど、ランクは『黒』……この世界じゃ割と強めの実力者ってところか）

向こうが戦闘態勢に入ったため、ハジメはなるべく目立たないようにとフオールディングレイザーを引き抜こうとするが……

「ハジメ。ここは私とシアが戦う」

ハジメに制止の声をかけたのはユエ。

隣にはいきなり指名されたからか慌てるシアの姿が。

「わ、私もですかあ!？」

「……シア。よく考えて」

ユエは白コートを靡かせるように動き、語る。

「ここで私達がハジメの手を借りることなく勝てば、下手なちよっか
いも掛けられなくなる」

それを聞いたシアは目を輝かせる。

「そういうことなら！全力でやるですよ〜!!」

そう言つてシアはドリユッケンを取り出し、凄まじい衝撃波が出る
ほどの素振りを始めた。

……その後。

うっかりシアが全力で放ったドリユッケンの一撃を咄嗟にガード
したレガニドだったが全身粉碎骨折の大怪我を負ったことで駆けつ
けたギルド職員によりハジメ達一行は逮捕されることとなつてし

まった：

因みに例の貴族の男：『プーム・ミン』はシアにより吹き飛ばされたレガニドの巻き添えをくらって頭に傷を負い、入院中である。

「……………シアさん」

「うっ……………ホントにぶめんなさいですう……」

ギルド内で説明を終え、職員達が一度立ち去るとハジメはシアに対してジト目を送る。

「…さて、こうなった以上今後の旅をどうしようかな…説明やら拘留でどれだけ時間取られるかわかんないけど」

むこうが売った喧嘩とは言え、流石に全身粉碎骨折はやり過ぎと言える。

あれだけの力を持つことへの説明も要求されるだろうし、被害者は偉い貴族だと考えると冤罪を吹っかけられることもあるかも知れない。

（…しかも、ここにきて身分証問題が出てくるとかさあ…）

当然ながら話を聞く前にハジメ達は身分証明を求められ、この世界に来た時にステータスプレートを購入していたハジメと教会にいた頃にプレートをもらっていたニコルとマユはどうにかなった。

しかし300年前に封印されたユエと亜人族のシアはステータスプレートを持っておらず、かと言ってギルド職員立会いのもと新たにプレートを発行すれば、ユエ達の持つ特異性がこの世界の人間に顕になっってしまうリスクがあった。

そう考えるとハジメも思わずため息が出てしまった。

「…ハジメ。こういう時こそキャサリンから渡された手紙の定番」

「……………あ!!」

ユエの言葉でハジメはブルックで受け取っていた手紙を思い出し、宝物庫から取り出す。

「すみません！この手紙をギルドの偉い人に渡してもらえませんか！」

留置所の職員に声をかけ、ハジメは手紙を職員に渡した。

最初こそ手紙を受け取った職員は訝しげにしていたものの、手紙の主を知るときよつとした顔になり慌てて留置所から出ていく。

そして…

「はじめまして。冒険者ギルド、フューレン支部支部長のイルワ・チャングだ。南雲ハジメ君達…でいいのかな？」

応接室に通されたハジメ達の前に現れたのは金髪オールバックの男性だった。

「は、はい…」

「この手紙には目を通したよ。将来有望だが少々トラブルに巻き込まれやすそう…先生に随分気に入られているみたいだね」

イルワの言葉にシアが気になったのか質問をする。

「あ、あの…先生って…？」

「ああ、キャサリン先生のことだよ。あの人は元々、王都のギルド本部で当時のギルドマスターの秘書長をしていたんだよ。その後はギルド運営に関する教育係に携わっていてね、現在各町に就いているギルドマスターの半数以上はキャサリン先生の教え子なのさ。僕も含めてね」

そう言うとイルワは1枚の写真を取り出す。

そこにはハジメと変わらないであろう頃の年頃のイルワと、長い赤髪が特徴的な美女が写っていた。

「彼女は美人で人柄も良かったから、当時の僕らからすれば憧れの存在でね…彼女が結婚して地方のギルドに移籍したときはもう、王都が

荒れるほどだったさ」

(……………時間の流れって、どの世界でも残酷なものなんだな)

余計なことを言わないように心の中で留めたハジメだったが、すぐさま真面目な話に戻る。

「……ところで、身分証明については問題ありませんか？」

「ああ、先生の推薦なら大丈夫……と言いたいがね。例の貴族が少しばかり問題を起こしている」

その言葉に嫌な予感が走るハジメ達一同。

「簡単に言えばね……今回の一軒で君たちが明確な殺意を持って攻撃してきたと言いがかりをつけようとしているのさ。勿論、そんなことはないと分かっているし仮に裁判なんてことになっても問題なく勝てる。だが……」

「判決が出るまで時間がかかってしまい、僕達が足止めされるリスクがある……と?」

ハジメの言葉にイルワが頷く。

「何分、君達はまだ冒険者として結果を出しているわけではないからね……手紙に書いてあったライセン大峽谷攻略については、あまり他言しないほうがいいと先生からの忠告もある」

するとイルワは机の引き出しからある一枚の書類……依頼書を持ってくる。

「そこでだ。私が時間稼ぎをする間に君達にこの仕事を引き受けて欲しいのだが……」

依頼書に目を通すハジメ達。

「……………北の山脈地帯を搜索していた冒険者チームが行方不明。その中に貴族の三男がいたと……イルワさん、この依頼は行方不明者の実家が?」

「その通りだ。そもそもの発端は、北の山脈地帯で複数の魔物の目撃

情報が地元の町に寄せられたのがきっかけでね…」

北の山脈地帯は一つ山を越えるとほぼ未開の地となっており、流石に奈落の魔物には遠く及ばないがそれでも普通の人間には厳しいレベルの魔物が生息している。

そのため今回の依頼を受けたのはギルド内でも有名な一団だったという。

「しかし、私はある理由からそのパーティーメンバーの中に彼を：ウイル・クデタを参加させてしまった。彼は貴族としての生活が肌に合わないと言いつついてね：実力者ばかりのパーティーなら問題ないと思いい、権限も使ってウイルをやや強引に参加させてしまったんだ」

だが、そんなウイルを加えたパーティーが突如として消息不明になり、監視といざという時の護衛役として雇っていた冒険者も連絡が取れなくなったという。

「家の方でも捜索隊を結成してはいるが、それでも人手は多い方がいいからね。先生からの手紙を見る限り、君達の実力は疑いようもない。少なくとも：並の冒険者を凌ぐだけの実力は間違いなくある」

「どうかな？もし引き受けてくれるならばミン家の介入を止めるだけでなく、報酬も言い値を出そう」

一通りの説明を聞いて、ハジメは依頼書をテーブルに置く。

「…この依頼を受けても構いませんが、ひとつだけ質問よろしいですか？」

「…構わない」

ハジメは鋭い目を向けて質問する。

「あなたは：何をそんなに焦っているんです？貴族の暴走を止めたり、あろうことか言い値で報酬を出すなんて普通の冒険者に行うことじゃない。あなたがウイルさんにこの仕事を斡旋しただけでここまでのグレー手前な行動を取る理由にはならないと思います」

鋭い追求の目に、イルワはゆっくりと語る。

「…ウイルの両親とはギルドマスターになる前からの友人…幼馴染というやつでね。あの子が生まれた時から面倒を見ることも多かった」
拳を強く握り締めるイルワの目は、何かを思い返すような光を秘める。

「彼は冒険者としての素質はない。あの子は他人の命を割り切ることができないから、誰かが死んだり怪我をすればそれを重荷として引きずってしまう可能性があった…だから私は現実を見せるためにあえて厳しい場所に送って…それがこのザマさ」

深い後悔の念がこもったイルワを見て、ハジメは立ち上がる。

「わかりました。この仕事は僕達が引き受けます。ですが…二つほど条件があります」

「条件？」

「はい…まず、僕達のチームでステータスプレートを持たない人を作って欲しいんです。その上で表記された内容について、誰にも他言しないことが最初の条件…そして、出来る限りで構いませんので僕達の行動に対して便宜を計ってもらいたいんです」

「なっ…!？」

驚いていたのはイルワではなく秘書長のドットで、イルワは声こそ出さないが驚いた顔になっている。

「…何を要求するのかな？」

「そう身構えないでください。僕達は今後の目的のために行動をすれば、いずれ教会と真っ向から対立することになってしまいます。一応移動拠点は持っていますが、伝手の一つでもあれば助かりますからね」

万が一指名手配されたときにでもどうにかかなりそうだったらありがたいんですが……と苦笑するハジメ。

「指名手配されるのが確実なのかい？ふむ……いいだろう。報告にあつたシア君の怪力や噂になつているユエ君の特異な魔法……それらもまた、君達が隠そうとしている秘密ということか」

やがて、イルワは立ち上がる。

「便宜を計るなら、その前に必ず私に報告して欲しい。犯罪に加担するような内容や倫理的にダメだと判断した場合は協力しないつもりだ。だが……できる限り君達の力になるのだけは約束しよう」
「ありがとうございます……その言葉が聞ければ、十分です」

ハジメとしてはユエやシアのステータスプレートをどう入手するかが小さな悩みだったが、思わぬ形で入手できる可能性ができたことで内心ホツとしていた。

「どんな形であれ、ウィル達の痕跡を見つけて欲しい……どうか、よろしく頼む」

イルワは真剣な眼差しでハジメたちを見つめ、ゆっくりと頭を下げた。

「……………わかりました。この依頼、必ず成功させてみせます」

フューレンの門を潜ったハジメ達は、先に外に出ていた仲間達に念話石を使い通信をする。

「リヒティ、発進は？」

『いつでもいけるっすよ！魔導エンジンも快調っす！』

少し歩くと、光学迷彩を施されていたミネルバにたどり着いたハジメ達は素早く艦内に乗り込む。

「みんな、お待たせ！」

ブリッジに入ったハジメを、席に着いた仲間達が見る。

「これでみんな揃ったっすね。じゃあ…」

ハジメが頷き、ユエが艦長席に座る。

「…よし。本艦はこれより、初出撃となります。みんな…準備はいい？」

ユエが聞くと、全員が頷く。

『こちらフリット。モビルスーツの固定も完了している！』

『こちらエミリー、メンバーも全員乗り込んでます！』

格納庫にいたフリットと医務室にいたエミリーから連絡が来て、ユエは頷いて叫ぶ。

「……………機関始動。コンデイション・イエロー発令」

「ミネルバ、発進します！」

ユエの言葉とともにミネルバの底面に刻まれた重力魔法の魔法陣が作動。

浮き上がったミネルバのスラスタに火が灯り、空中で翼を広げて飛び去るのだった……………

一方、ハイリヒ王国の王都では…

「お待たせしました、先生」

「おう。わざわざ悪かったな、レイ」

夜の街を歩いていたのは、とある事情から一度王都に戻っていたレイと宗一の2人。

「しっかし、複製はこの1丁が限界だったか…ま、弾もそれなりにあるから無いよりマシかもな」

「仕方ありません。元々この世界では『これ』を何度も複製するような技術はありませんから…弾についても同じサイズで全く同じものを作るとなると、ここのウオルペン氏ほどの実力者でなければ厳しいでしょう」

そう言った2人が持つカバンの中に入っているもの…それは以前レイがハジメに解析させていたアサルトライフルとそのコピー品だった。

「天之河達も思ったより先に進んでるからな…メルドの旦那、ちゃんと約束守ってるのかそろそろ心配になってきたぜ」

「ええ、とりあえず一泊したら夜明けと共にすぐホルアドに向かいましょう」

現在、光輝達はオルクス大迷宮の訓練を第88層まで進めているが、半月ほど前から王都にいた2人はそれを知らない。

そして、宗一が最初に王国と交わしていた『約束』もまた果たされていけないことも…

そんなことはつゆ知らず、宗一とレイは夜の闇に消えるのだった…

第3話 再会、友よ

広大な平原の遙か上空。

普通なら鳥か飛行できる魔物くらいしかいないはずの空間を、巨大な物体が飛んでいる。

…言わずもがな、ハジメの作り上げた戦艦ミネルバだ。

「ほえ〜…風が気持ちいいですね〜…」

そんなミネルバのデッキで風を浴びながら目立つウサ耳をびよこびよこ動かしているのは、外の空気を吸いに来たシア。

「もう、シアったらここで寝るつもり?」

「そんなことありませんよ〜!でも、空の上で浴びる風を体感してみたくて…」

様子を見に来たマユに促され、艦内に戻るシア。

廊下を歩く中で2人は会話をする。

「それで、いつ頃目的の町に着くんですか?」

「うん。思ったより早く着くみたいで…少しだけなら買い出しで美味しいものも買えるみたいだよ」

その言葉を聞いて艦内で『料理担当』を割り当てられていたシアの眼が輝く。

「本当ですか!?!なら、ハジメさんが言ってた故郷の料理も作るチャンスがあるってことですよね!」

「そうなるね。でも…まさか異世界でお米が買えるとは思わなかったな…一応、オーブでもそれなりに食べてたから私もちよつと楽しみなんだ」

やがてシアは厨房に着き、仕事に戻ろうとするが最後に質問をする。

「そういえば町の名前ってなんでしたっけ?」

「えつとね…『湖畔の町ウル』だったかな」

「はあ…」

ウルをトボトボと歩くのは、ハジメ達と共に転移してきた数少ない大人の一人である畑山愛子先生。

その原因は1週間前に偶然再会した生徒の一人、清水幸利の安否である。

偶然にもこの町に現れた清水を介抱した愛子達だったが、どうやら清水はこの町から少し離れた場所にある北の山脈で誰かと行動していたらしく、一晩だけ休むと翌朝にはすぐに町を旅立ってしまった。

「そう心配することないですって先生。状況を見極めるくらい、清水ができないと思いますか？」

不安を感じながら食事の席についた愛子に励ましの言葉を送るのは、清水と同じ部活をしていた園部優花。

その横では夕飯を楽しみに目を輝かせている弟の優翔の姿もある。「そうですね園部さん…じゃあ、ご飯にしましょうか！お腹いっぱい食べて、明日に備えましょう！」

これ以上暗い顔をしては生徒達ではなく幼い優翔や護衛についての騎士達にまで心配をかけてしまう。

そう考えた愛子は気持ちを切り替え、今日一日を共に頑張った子供達を労うことにした。

愛子達が宿泊している宿はウルで一番の高級宿である『水妖精の宿』。なんでも、この町の名物でもある『ウルディア湖』から現れた妖精をひと組の夫婦が泊めたことがこの名前の由来になっているらしい。

余談だがこのウルディア湖は非常に広大な湖で、その大きさは日本の琵琶湖の4倍ほどもあり、澄んだ水はこの国の要である農業に欠か

せないものとなっている。

現在愛子達の拠点となっている水妖精の宿は1階がレストランになっており、この町の名物とも言える米料理が多数提供される。

当初こそ高級宿に泊まることに抵抗があつた愛子達だが、王宮から派遣された『神の使徒』御一行という肩書きから断りきれずにこの宿に泊まることを承諾。

だが、この国に来てから王宮が拠点だったこともあり3日ほどで馴染んだ愛子達はすぐにこの宿を気に入った。

今では農地改善などに奔走する愛子達にとって、この店の料理が一日の楽しみとなっている。

そして今日も奥の個室（カーテンで仕切られたVIP席）で一日の疲れを癒していた一同だったが…

「え…スパイスの在庫が無い!？」

愛子達に話しかけてきたのはこの宿のオーナー兼料理長であるフォス・セルオ。

「ええ、いつもはこのようなことがないように在庫を確保しているのですが…ここ一ヶ月ほど北の山脈に不穏な動きがありまして。それで香辛料を採取に行く者が激減していたのが原因です。つい先日も調査のために来た冒険者数名が行方不明になりました…それもあつてますます採取に行く者がいなくなりました。ですので、次の入荷については目処が立っていない状況です」

思った以上に深刻な状況だったことを知り、一同が重い空気に包まれる。

「しかし、その一件も解決の兆しがあるのでですよ」

「それって、どういうことですか？」

「実は日の入りくらいに新規のお客様が団体でいらしたのですが、どうやら何人かでこの異変を解決するため、明日にでも北の山脈に向かうそうです。フューレンのギルド支部長様直々の依頼らしく、ひよつとしたら異変の原因も解決してくれるかもしれません」

愛子達地球組は今いちピンと来ていないようだが、護衛の騎士たちは興味深そうな反応をする。

なにせフューレンは人間族の国の中でトップクラスの大都市であり、冒険者もかなりの数がいる上、支部長のイルワはギルド幹部の中でもかなり高い地位にいる。

そんな男が直々に指名した冒険者となると、戦いを生業とする騎士として興味を抱かないわけがない。

すると、二階の宿泊部屋のあるフロアから階段で誰かが降りてくる。

「おや、噂をすれば…ですな。騎士様。彼らは明日の朝にでも出発するとのことですからお話をするなら今かと思われますよ」

「ああ、感謝する。…だが、こんな若い声の男が『金ランク』にいたか？」

騎士のリーダー…デビットは困惑する。

本来、ベテラン揃いの金ランク冒険者でこのような若い声の人物はいないからだ。

そして、カーテンの向こう側で5人の男女の会話が聞こえてきた。

「あー、まさかこつちで白米食べられるなんてね…」

「…ふふっ、『ハジメ』、嬉しそう」

「私としては、実際に食べてレシピの一つでも欲しいところですけどね。せっかく『ハジメ』さんが船に立派なキッチンも作ってくれたんですし！」

「そういうえば、ニコルさんってプラント住まいでしたけどお米料理ってプラントだと普及してたんですか？」

「うーん…農業プラントが規制されてたから、そこまで…ってかんじかな。専らパン食が多かったよ」

その会話の内容に愛子の、そして優花達の心臓が一瞬にして飛び跳ねた。

彼女達は何と言った？少年のことをなんと呼んだ？

そして、最初に話していた少年の声は、『彼』の声ではないのか？

愛子の脳内を一瞬で疑問が埋め尽くし、金縛りにあったように硬直しながら、カーテンを凝視する。

それは傍らにいた優花や大翔、クラスメイトの玉井達も同じだった。

その中でも『彼』と親友だった大翔は気がつかないうちに立ち上がっている。

クラスメイト達に『異世界の死』という現実を認識させ、多くのクラスメイトが忘れたかと思っていた記憶の根幹となっていた少年。

「…南雲君？」

「…ハジメ…なのか？」

愛子と大翔は勢いよく椅子を蹴倒しながら立ち上がると、すぐさまカーテンを開け放った。

シャアアア！という大きな音にギョツとして立ち止まる5人組。

愛子と大翔はその中で、咄嗟に『彼』の名前を叫んだ。

「南雲君！」

「ハジメえ!!」

「え……………畑山先生に……………大翔……？」

愛子達の前にいたのは、片目を大きく見開き驚愕の表情を浮かべる、銀髪に眼帯をして赤いコートを着た青年。

その周囲にはウサ耳が特徴的な青白い髪少女と、金髪の小柄な少女。そして大翔から見たらどこかで見たことのある少年少女がいる。

その中で、自分にはつきりと反応をした銀髪の青年へ愛子と大翔は視線が吸い寄せられた。

記憶より10センチほど伸びた身長に髪色は記憶の中にある南雲ハジメと目の前の彼は大きく異なった外見。普通なら他人だと思うだろう。

だが、慌てた時の反応と驚いて目を泳がせているのは、大翔もよく知る彼の癖だ。

それに髪色や体格が変わっても、顔立ちや声は記憶のものと何ら変わらぬ。

何より、青年の腰には自分や優花達と同じ『チームメンバーの証』であるガンプラのホルダーが着けられている。

「南雲君……やっぱり南雲君なんですよ？生きて……本当に生きて……」

死んだと思っていた教え子とのまさかの再会に感動して涙腺が緩む愛子。

だが、顔を合わせたハジメの内心は決して穏やかではなかった。

(……………なんでここに先生と大翔がいるのおおおお!!え!!?もしかして先生の農地改良の場所にピンポイントで来ちゃったわけ!?)

できる限り落ち着いて対処しようとするが、混乱のあまり変な声が出そうになるハジメ。もう頭の中はパニック状態だった。

すると、ゆらりと大翔が近づいてくる。

「えつと……や、大翔……くん?」

ただならぬ雰囲気なたじろぐハジメだったが……

次の瞬間、大翔の拳がハジメの顔面に突き刺さった。

「!!!?」

突然のことに動けずにいるその場のみんな。

だが、突然殴られたハジメはよろけてしまい、大翔に胸ぐらを掴まれる。

「この、バカ野郎!! 4ヶ月も俺らに連絡の一つもよこさねえで一体どこほつつき歩いてた!」

大翔の怒声に思わず固まるハジメ。

だが、ハジメは何も言うことができなかった。

「お前がいなくなつて、俺達は大変だったんだぞ……それでも、白崎はお前のこと諦めてなくて……」

「……………ごめん。もっと早く無事を伝えるべきだった」

大翔の目に涙が浮かんでおり、ハジメは悟った。

(…そうか。まだ大翔も香織さんも、僕のことを…)

親友達に無事を伝えるべきだったと反省したハジメは、カーテンの向こうからこつちを見ていたクラスメイト達に声をかける。

「みんな…久しぶりだね」

「ハジメにいちやあああああん!!!」

すると、今度はようやく状況を理解したらしい優翔がハジメの足にしがみついてくる。

「優翔も……ごめんね。ちゃんと戻ってきたなら声をかけるべきだったよ」

視線を合わせ、優翔の肩に手を置くハジメ。

そして、彼は愛子にも視線を向ける。

「……………南雲君、まずは無事で良かった…これは私達の本心です」

すると、愛子は真っ直ぐにハジメの目を見る。

「ですが、この4か月間で君の身に何があつたのか……………話せる範囲で構いませんので教えてくれませんか？」

第4話 真実の遊戯

ウルの町、高級宿『水妖精の宿』で注文された料理に舌鼓を打つハジメ達。

そんな中で愛子は改めてハジメに質問をする。

「南雲君…まず、橋から落ちた後どうやって生き延びたんですか？」

最初の質問にハジメは少し困ったような顔をする。

「…それなんですけど、実はあまり覚えてないんですよ。ただ、気が付いた時には迷宮内部を走る川の中にいて」

スプーンで米をすくい、口に運ぶと改めて語る。

「多分なんですけど、ウォータースライダーみたいに流されて奇跡的に助かった…のかもしれないです」

「何故南雲君は髪が白くなっているんですか？ あと、南雲君の左目のアイパッチは何ですか？」

「…………橋の上で、どこかの誰かによって撃たれた魔法が直撃したんですよ。気が付いた時には完全に失明してましたし、オルクスの最下層にいた魔物の攻撃で完全に眼球がなくなっちゃいました。今はアーティファクトの義眼を入れてるんですが、常に機能させてると頭が痛くなる上基本的にこの義眼は光ってるんで普段はこうしてアイパッチで機能を抑えてるんです」

実際に眼帯を外して紅く光る魔眼石を見せると、愛子先生や他の皆も絶句する。

「ッ……………」

「あと僕のこの見た目ですが、簡単に言えば空腹に耐えかねて魔物を食べたんです」

「なっ!？」

それに驚いていたのは愛子先生だけでなく、周囲の生徒達や神殿騎士たちも一緒。

「本来魔物を食べれば死ぬはずなのですが、壁に穴を開けて逃げた際に偶然神結晶……………強力な回復薬を作り出すアイテムを発掘しまして。そのお陰で強引に魔物の肉の毒素を体になじませて適応したんですが、その代償がこの派手な姿って事ですよ」

そこまで聞いて、一応納得したのか押し黙る愛子先生。

「……………何故直ぐに皆の所に戻らなかったんですか？」

少し間が空いたが愛子先生は一番聞きたかった質問をしてきた。

「…一番の理由は、戻ったところでどうなるって思ったんです」

水を飲み、ハジメは語る。

「元々僕は王国やクラスメイトから『無能』扱いでしたからね。碌な思い出もないのに戻っても、いやな予感しかしなかっただけです」

ハジメの空気が冷たくなり、交流の少なかったクラスメイト達はその態度に何も言えなくなるが…

「おいお前！ 愛子が質問してるんだ！ もっと誠意をもって答えろ！」

しかし、そんなハジメの態度が気に入らなかったのか、愛子先生の傍らにいたイケメンが叫んだ。

「ちゃんと質問には答えてますよ？　つて言うか…先生、この人は？」

ハジメが口にニルシツシル（異世界カレー）を含みながら聞くと、

「あつ、紹介しますね。こちらは私達の護衛隊長をしてくださっているデビットさんです。聖教教会の神殿騎士の方で………」

「よしてくれ愛子。俺は神殿の騎士としてではなく1人の男としてここにいるんだ。愛子と教会を天秤にかけるなら信仰すら捨てる覚悟でここにいる」

デビットというイケメン騎士を見て、ハニートラップ要員かと思っていたが…

（いや、そつちが堕とされてるのか！）

ニコル達も内心で思わずツツコむ。

「まあとりあえず、僕は僕でこうして生きてるんでそこまで深刻に悩まなくても問題ないですよ」

ハジメは愛子先生に普通に語り、デビットはハジメを睨むがハジメは内心でため息をついた。

「貴様！　愛子の教え子だからと図に乗るなよ！」

デビットは拳をテーブルに叩きつける。

その拍子にテーブルが揺れ、料理が零れそうになる。

「今食事中ですよ。行儀が悪いって教会から注意されないんですか？」

いつになく鋭い態度のハジメにユエ達が多少困惑していると、デビットはある一点に指をさす。

「ふん、行儀だと？ その言葉、そっくりそのまま返してやる。薄汚い獣風情を人間と同じテーブルに着かせるとはな。しかもなんだそのふしだらな格好は、汚らわしい!! お前達の方がよっぽど礼儀がなっていないでは無いか!!」

「デビットさん！　なんてことを……………」

そう。これこそハジメがデビット達に刺々しい態度をとっていた原因。

顔を合わせてからずっと、デビットはシアに対して見下すような視線を向けていた。

「愛子も教会から教わっただろう。魔法は神より授かりし力。それを使えない亜人共は神から見放された下等な種族だ」

「私達と殆ど同じ姿じゃないですか！　どうしてそこまで彼女を……!？」

「ならばその醜い耳を斬り落としたらどうだ。それなら少しは人間らしくなるだろう」

愛子先生の言葉でも止まらず、苛烈になっていくデビットの言葉。シアはショックを受けているのか俯き気味になっている。

他の騎士達も同じような反応をする中で優花達が騎士達を睨み、空気が重くなるが…

「…小さい男。シアを侮蔑することではか女の前で強く見せられないなんて」

ユエのよく通る声に、他の客の目がデビットに集中する。

「……………この異教徒が！神殿騎士を侮辱してただで済むと思うな！」
腰の剣を抜こうとしたデビットを他の騎士達も流石にまずいと思ったのか、全員で止めにかかる。

カオスな状況に生徒達もおろおろするが、ハジメはシアを励ましため隣に座る。

「あまり気にしないでねシアさん。『これ』がこの世界にはびこってる常識だから…辛かったら僕やみんなにいつでも言っていていいんだから」
「はい、そうですよね…：わかってはいるのですけど…：やっぱり、人間の方には、この耳は気持ち悪いのでしょうね」

そんなシアの言葉をユエが否定する。

「そんな事ない」

「ふえ？」

「シアのウサミミは可愛い。私達を癒してくれるから」

そう言うとユエはシアのウサミミを優しく触る。

「そうだよ！ユエだけじゃなく私もほら！シアの耳は大好きだよ！」

マユも一緒に、シアのウサミミを触りだす。

「……ユエさん、マユちゃん……ありがとうございます」

嬉しさが滲み出ているのか、少し元気よく動くシアの耳。

その空気に生徒達がほっこりする中、興味を持った子供……優翔が近づく。

「ん？もしかして、触ってみたいんですか？」

シアの言葉に小さくうなずく優翔。

「い……いいですか？」

「大丈夫ですよ！あ、でも強く握らないでくださいね」

結局微妙な空気が完全に払拭できなかったため、シアとユエは先に宿の風呂に入るため食堂を出ていく。

「ニコルはどうする？僕は一度ミネルバに戻るけど」

「じゃあ、僕達は街の屋台とか見てからフリットさん達に差し入れるね」

そう言うとニコルとマユは食事代だけ置いて去っていく。

みんながそれぞれ席を立ったあと、ハジメも席を立とうとするが…

「…ん？」

去り際に大翔のポケットに小さなメモをこっそり隠させる。

「…今日は久しぶりに知り合いに会えて、楽しかったです。では…」

それから1時間後。

大翔は優花、愛子先生と共にウルの町の郊外に出ていた。

「本当にここなんですか…？」

「そのはずですけど…あ、いた！」

少し歩くと、その先にはランタンを持ったハジメが立っている。

「大翔、園部さん、先生…わざわざ呼び出してすいません」

ハジメは3人を連れて自分達の拠点…ミネルバへと連れていく。

「こ、これって…あのミネルバよね…?」

「な、なあハジメ…お前、この船どこで見つけたんだ…?」

愛子は驚きで声も出ず、優花と大翔がハジメに質問する。

「オルクスの地下で良質な鉱石を沢山みつけてね…多少時間もかかったけど1から作ったんだよ」

そういうとハジメは3人をミネルバに乗せ、話ができるようにと会議室に案内し、3人にコーヒーを出す。

「さて…これから話す内容は、先生達にとって衝撃的かもしれませんが。これが教会の連中に露呈すれば、今度は先生達だけじゃなく他のみんなが異端者として国から追われるリスクもあります」

その言葉に3人とも息をのみ、ハジメは語りだす…

そこから語られたのは、教会がひた隠しにしていたこの世界の残酷な真実。

『解放者』と呼ばれた7人の神代魔法の使い手達を中心とした人々がかつてエヒトの支配に抗っていたこと。

しかし、エヒトの『神託』に従った人々によって襲撃され、守るべき相手に刃を向けられなかった解放者達は戦うことなく敗北したと。

オルクス大迷宮をはじめとする七大迷宮は、解放者達が後世の者達に神殺しを成してもらったために遺した、彼らにとっての最後の希望だということも。

「僕の作ったアーティファクト…ミネルバ含めてほとんどはオルクスの地下に眠っていた『生成魔法』で作ったものです」

「じゃあ南雲君は…その狂った神を倒すため旅をしてるんですか?」

愛子の言葉に頷くハジメ。

「本音を言えば、この世界のために命を懸けるのは嫌です…でも、エヒトが僕らをこの世界に召喚できたということは、また地球に奴が干渉できる可能性も高いということになる。そうなれば…」

魔族と人間族のうち、勝ったほうが地球侵攻の駒として使われる可能性もある。

或いは、他の生徒たちが得たチート能力を使って地球の街を蹂躪するため…という可能性も。

「…確かに、そりゃあ俺らと別行動するわな」

大翔は、これまでハジメが他のクラスメイトと接触しなかったことに納得する。

「基本的に俺も先生も白崎達も、教会の庇護下にある。それに…ネットクは天之河だろ？」

その名前が出たとたん、優花は苦い顔をするが愛子先生はよくわかっていない顔をする。

「え、どうして天之河君の名前が…？」

「先生…多分ハジメがいくらこの真実を告げても、天之河が教会を信じてる限り一部除いたクラスメイト達はハジメの味方をしませんよ。だって『天之河光輝が正しいと信じている』のが教会なら、考えることをしない連中は間違いない向こうの言いなりだ」

そう。ここまで迷宮で戦う生徒たちを引っ張ってきたのは教師の愛子ではなく1生徒に過ぎない光輝だ。

彼持ち前のカリスマ性が多くの生徒を引っ張り、愛子先生はその道半ばで心が折れた生徒達のメンタルケアを兼ねて共に農地を周っている。

一応向こうには三木先生もいるとはいえ、彼ですら光輝のカリスマ性を止めることはままならない。

「…まあそういうわけです。あと、これを教えたのはみんなに合流するんじゃない、大翔と園部さん、先生なら疑われないで聞いてくれると思っただけですよ」

それからしばらくして、大翔は優花と共に席を立つ。

どうやらミネルバの見学をしてから愛子と合流するつもりらしいのだが、その真意に気づいた愛子は小さく頭を下げる。

「…南雲君。先生はまず、君に謝らないといけません」
お互いに机を挟んで向かい合い、愛子は語る。

「まずは…あの日皆を守るためにベヒモスに単身で挑んだ君に、私達は何も返せていません。それどころか、君の決死の行動をあざ笑うかのような結末になってしまいました…」

そこから語られたのは、ハジメにとって衝撃的なこと。

ハジメを攻撃して奈落に落としたのは檜山だが、その罪は事実上無かったことにされたこと。

一度の土下座を見た光輝が、檜山が反省していると判断してその罪を許してしまい、彼は今も大迷宮で戦っていること。

『みんな！やっちゃってしまったことは仕方がない。思うところはあるかもしれないが、いつまでも一つの失敗を咎めるべきじゃないんだ！そんなこと、死んだ南雲も望んじやない』

『今俺達が為すべきことは、これ以上の悲劇を起こさないため檜山の失敗を許し、南雲が繋いでくれた命を精一杯生かすことだ！そうだろう！』

「……………そう、ですか」

ハジメはわかっていたはずだった。

光輝が許してしまえば、皆もそれを許すと。

元より交流のあった『仲間』以外のクラスメイトなど欠片も信じてなどいなかったと。

「……………やっぱり、僕ってその程度…の…！」

だけど、何故だろうか

どうして、『皆から早々に切り捨てられた』と知って自分の視界がここまで揺らぐのだろうか…？

「っ！南雲君……！」

教室に入れば他の生徒から嫌な顔をされ、嫌われているのは知っていた。

1年生の時の光輝とのいざこざだけでなく、騒動の中心に立つことも多かったから、よく思われてないことだっただって理解していた。

そして、ステータスの低さから『無能』と呼ばれ蔑まれていたことも。

「……先生。僕がやったことって何だったんでしょうか……」

それでも、悲しいという気持ちは消せなかったのだ。

「……大丈夫です。例え他のみんなが君を見捨てても、君を信じて

……君の生存を信じて今も懸命に戦っている人がいるんですから」

愛子はハジメをそっと抱きしめる。

「白崎さん、八重樫さん、遠藤君、谷口さん、中村さん、坂上君……彼らは、今も君を信じてオルクス大迷宮の攻略を進めています」

「清水君も冒険者として独り立ちし、君が生きているのか情報を集めてくれると約束してくれました。それに……」

「君の生存を信じて、喜んでくれた人はちゃんとしたじゃないですか」

ハジメが生きていると知って、喜んでくれた大翔と優花、優翔を思い出す。

「南雲君……私は君が一番苦しいときに何もできなかった無力な大人です。」

それでも、そんな私からのお願いを聞いてくれませんか？」

ハジメは何も答えないが、愛子は言葉を続ける。

「君は先ほど、みんなを助けたことを後悔したのかもしれませんが…でも、先生はそんな風に動けるのが君の良さだと信じています。地球よりも命の価値が軽いこの世界で他人を慮れるその心は、強大な力を持たず力に溺れなかった君が持つ最大の武器です」

愛子は、先ほどハジメと共にいた少女達やこの船にいた人達を思い出す。

「この船に乗っている人も、さつき一緒にいた人達も…きっと君が手を差し伸べて出会えた仲間なんですよね？」

「…はい」

その返事を聞いて、愛子はもう一度向き合う。

「なら、あの日の選択を後悔する必要なんてありません！君の持つ人を思いやる心がこうして多くの仲間と出会わせてくれたのなら、君はクラスで一番強くて立派な人です！」

「だから…たとえ何度裏切られても、君が持つその心を……絶対に捨てないでください……！」

ハジメはミネルバを出て、一足先に宿に戻った愛子達を追うように宿へと歩を進める。

「…後悔する必要はない…か」

思えば、奈落で歩き出してから碌にこれまでのことを振り返ってなかったと思えたハジメ。

(……結局、僕はクラスのみんなをどう思っているんだろう)

今でも心ではぐちやぐちやになった感情が残っており、明確な答えは出ない。

それでも…

「…まず、会わなきゃいけない人に会わないとね」
小さくつぶやくと、ハジメは再び歩き出した…

第5話 厄災の爪痕

愛子達との邂逅から一夜明けた朝。

チエツクアウトを済ませたハジメ達はおにぎりの入った包みを持ちながら水妖精の宿から出る。

因みにこのおにぎりは朝食用にと宿のオーナーが準備してくれたものであり、さりげなくも粋な計らいにハジメ達は感謝の言葉を告げながら宿を出て行ったのだ。

ウィル・クデタの失踪からすでに5日が経過しており、普通に考えるなら生存は絶望的だろう。

だが、それでも自分というイレギュラーな生き残り方をした前例が存在する以上は可能性を捨てるのはまだ早いとハジメ達は改めて搜索の準備を整え、町の正門を潜る。

そうしていざ向かおうとするハジメ達だが…

「……………一応聞くけど、何してんの？」

ハジメ達の視線の先には冒険者としての格好をした大翔達7人の生徒と優翔、そしていつものスーツ姿の愛子がいた。

「南雲君。私達もあなたのいう搜索活動に協力させてください」

「俺からも頼めねえかな…一応、冒険者として別の依頼もあるから、どっちにしても山には行く必要があったんだ。勿論、お前の人探しにも協力する」

愛子だけでなく大翔からの頼みとあれば、ハジメとて即断することはできない。

「……………ちよつと待って。皆はまさか馬で行くつもり…？」

後ろには優翔を除く8人分の馬が並んでいるが、ハジメからすればそれでも遅いほうだ。

「……とりあえず移動手段はこっちで準備するから、馬を元の場所に戻ってきて。それと先生……」

呆れた顔のハジメは普通に告げる。

「とりあえず山の搜索でスーツ姿は無いです。とりあえずこの中で動きやすい格好に着替えてくださいね」

そう言うとハジメは移動手段の一つ……車型アーティファクト『ブリーゼ』（ハマー型）を出現させ、ドアを開ける。

突然現れた車に啞然とする一同だが、言われるがまま愛子は着替えるためにブリーゼに乗り込む。

その間にハジメは通信用アーティファクトを起動し、ミネルバへと連絡を取っていた。

10分もすると、今度は黒い高級ミニバンに似せた外見の『ブリーゼマーク2』と軽自動車型の『ブリーゼマーク3』が現れ、マーク2からはユリン、マーク3からはリヒティが降りてくる。

「ハジメ、ブリーゼ持ってきたっすけど……どっち使う?」

「じゃあ、今回はマーク2で。リヒティとユリンは優翔を連れてミネルバで待機して欲しい」

因みに優翔だけ預ける理由については、流石にステータスが他より高いとは言え幼い優翔を危険地帯に連れていけないという判断であり、優花もそれは納得している。

「じゃあハマー型は僕が運転して……ニコルはマーク2の方、頼める?」

「わかったよ。じゃあ、それぞれ乗ってください!」

ニコルが号令を出し、乗ったメンバーは

1号車

ハジメ（運転手）

ユエ

畑山愛子

龍峰大翔

玉井淳史
宮崎奈々

2号車

ニコル（運転手）

シア

園部優花

菅原妙子

相川昇

仁村明人

の割り振りとなり、2台の異世界カーは北の山脈目指して走り出すのだった…

山道を走る道中、ハジメはベンチシートで並ぶように座る愛子と大翔に少しだけ視線を向け、大翔に声をかける。

「……………大方、ニコル達の正体が気になって聞きたいから追いかけてきた…つてのもあるんでしょ？」

「…やっぱわかるか」

「当然。何年親友やってると思ってるのさ」

すでに聞きたいことを見抜かれていたことにバツの悪そうな顔になる大翔だが、ハジメは気にするなとばかりに語る。

「…ニコルもマユも、みんな本人だよ。みんな、ガンダム世界で戦って命を落とし、その果てにこの世界で新しい命を手に入れている」

おそらくはあのレイ・ザ・バレルもそうなのだろうとハジメは考えている。

「もう彼らは物語の登場人物…架空の存在じゃない。僕にとって彼ら

は、この世界で苦楽を共にした戦友だよ」

「…そっか」

1時間ほど走ると2台のブリーゼは停車し、ハジメ達は車から降りる。

今回彼らが向かった北の山脈地帯は標高千メートル八千メートルの山々が連なっており、山ごとに生えている木々や植物どころか生態系まで大きく変化しているという不思議な土地だ。

因みにレストランなどで使われていたスパイスの原料はこの山脈のうち二つ目と三つ目でよく採れるらしく、大翔達は不足したスパイスの原料を採取するという目的を兼ねてハジメへの同行を求めた。

「まあ、ほかにも目的はあるんだけど…どうやってこの山脈地帯から行方不明者を探す？」

するとハジメは宝物庫を使い、8つの鳥型アーティファクトを召喚。

そしてメガネを取り出してユエに手渡すと、アーティファクトのうち4つが空へと飛んでいく。

そしてユエがメガネをかけて縁を触ると、同じように残った4つが飛んでいった。

「僕が開発したドローン型アーティファクト『フェルニル』。僕が義眼として使ってる魔眼石やユエさんに渡したメガネ型ディスプレイに映像が映るんだよ。因みに操作方法はこの制御ユニットを介しての魔力操作ね」

さらっと取り出した現代チックなアイテムに啞然とするクラスメイト達だったが、フェルニルを飛ばしたハジメ達は歩き出す。

しかし……………

「…なあハジメ。実はさ…ちよつと見て欲しいものがあるんだ」

そう言うと大翔は先頭に立ち、ある洞窟へと入っていく。

「大翔…？一体どこに…!?」

急いでついて行ったハジメはみんなをその場に残し、大翔と共に洞窟へ入ると…

「確かこの辺りにあったような……………」

大翔が先頭を歩き、ハジメ達はどうかついていこうと歩を進める。

「ねえ大翔…一体、ここに何…が…」

そう言いながら歩くハジメは、視界に広がっているものを見て愕然とした。

森の中で苔に覆われていたのは、ハジメがこれまで見つけたモビルスーツに負けず劣らずの巨体。

だが、その形状はこれまでハジメが見つけてきたものとは明らかに異なる『キャタピラのついた脚部』。

それはあの『RX-78 ガンダム』と共に戦った伝説の名機の一つ…

「これ…まさか、ガントク!?!」

『RX―75 ガントク』が北の山脈地帯に鎮座していた…

ハジメはユエの重力魔法で埋まりかけていた脚部を掘り起こし、宝物庫に収納する。

「前にここで採取の仕事やってた時に見かけてさ…ただ、俺の力じゃ掘り出すのも整備も無理だから放置するしかなかったんだけど…」

「なるほどね…とりあえず、仕事を終えたら本格的なメンテしてみるよ」

それからおよそ一時間後。ハプニングこそあったもののそれ以降は採取と捜索を続け六合目に到着したハジメ達は、一度そこで立ち止まった。理由は、そろそろ辺りに戦闘の痕跡がないかじっくり調べる必要があったのと…

「はあはあ、きゅ、休憩ですか…けほつ、はあはあ」

「ぜえー、ぜえー、大丈夫ですか…愛ちゃん先生、ぜえーぜえー」

「うえつぶ、もう休んでいいのか？ はあはあ、いいよな？ 休むぞ？」

「…ひゆうー、ひゆうー南雲っち達…ヤバい」

「えつと…みんな、大丈夫？」

予想以上に愛子達の体力がなく、休む必要があったからである。

本来、愛子達召喚組のステータスはこの世界の一般人の数倍を誇る

ので、六合目までの登山でここまで疲弊することはない。

ただ、奈落で生き残ってきたハジメ達や元プロ軍人のニコルなどの移動速度が速すぎて、結果的に殆ど全力疾走しながらの登山となり、気がつけば体力を消耗しきってフラフラになっていたのである。

「ごめん南雲…私もちよつと休憩…」

「すまねえハジメ…情けねえ姿見せちまった」

「いや、それはいいんだけどさ…近くに川があるから少し休もうか。ひよつとしたら探してる人たちの痕跡もあるかもしれないし」

四つん這いになり必死に息を整える愛子達にハジメは若干申し訳なきような視線を向ける。

どちらにしる、詳しく周囲を探る必要があるので休憩がてら偶然見つけた近くの川に行くことにした。ここに来るまでにフェルニルからの情報で位置情報は把握している。

ハジメ達がたどり着いた川は、小川と呼ぶには少し大きい規模のものであった。索敵能力が一番高いシアが周囲を探り、ハジメも念のため宝物庫から取り出したハロで周囲を探るが魔物の気配はしない。

危険がないと判断し取り敢えず息を抜いて、ハジメ達は川岸の岩に腰掛ける。

「とりあえず10分くらい休憩したら、また搜索に戻るけどいい？」

ハジメの質問に大翔達はうなづく。

女性陣が川の水を汲み、山登りで熱くなった体を冷ますためか何人かが川の水に足をつけるなどして各々で休む中、ハジメは魔眼石に映るフェルニルからの映像を確認していた。

「…………っ。みんな、ちよつと準備して。フェルニルが冒険者の痕跡を見つけたんだ」

ハジメの言葉に大翔や優花が率先して立ち、手早く準備をするとハジメはフェルニルの視界を共有する水晶玉を取り出し、愛子に渡す。

「これは…盾ですか？」

「マジかよ…剣が焦げて炭化してる…」

映像越しでもわかるレベルで現場がめちゃくちゃになっており、一同は走りながら現場に到着する。

「なっ……………!？」

落ちていたのは、ひしゃげて原型をとどめていないラウンドシールドと紐がちぎれたカバンや完全に炭化したロングソードなど。そして、何らかの攻撃で一部の地形がえぐれた河川だった。

「これは……………」

岩などに血痕が飛び散り、よく見ると炭化した人体らしきものがあり、ちこちに落ちており生徒達の何人かはかつてのオルクスでのトラウマが蘇ったのか顔色が悪い。

それでも遺品などを探して歩くと、ユエが一つのロケットペンダントを発見する。

「ハジメ、これ…」

ユエから受け取ったロケットを開けると、中には20代半ばの女性の写真が入っていた。

それほど古い写真ではないので、おそらく最近のもの…冒険者の誰

かが持つてきたものだろうと推測する。

いくつかの遺品は見つかり、その中でも身元につながりそうなものだけ回収した一行だったが…

「どうしたの、南雲…さつきから渋い顔して」

「ああ、ちよつと気になってね…」

ここまで登ってきて、殆ど魔物と遭遇していない。

あれから歩き続け、現在は8合目辺りであるにも関わらず片手で数えるくらいしか魔物に襲われていないのだ。

「普通ならもう少し魔物に襲われてても不思議じゃない。それに…出会った魔物もやたら弱ってた。それに…」

この辺りに出没する魔物は、強くてもブルータルと呼ばれる魔物くらい。

ブルータルは地球のRPGで言うオークやオーガに相当する魔物だ。

知能はそこまで高くないものの集団戦法や固有魔法『剛壁』による簡易的な身体強化が驚異的だが、この辺りで現れたことはほぼないという。

「でも、ブルタールの攻撃とは思えないんだよな…まるで、ビームみたいな攻撃だし、ブルータルに地面を抉るような攻撃ができるとは思えない」

冒険者の行方不明、魔物の失踪…そしてこの山に消えた清水。

嫌な予感がしたハジメ達だが、僅かな痕跡から『生存者は川に流されて下流に逃げたのでは?』と考え、下流へと歩き出す。

夕暮れが近づく中でハジメ達が見つけたのは、巨大な滝壺。その中から生きている人間の反応を感知したハジメ。

「ユエさん、お願い」

「ん。…………『波城』、『風壁』！」

ユエは無詠唱で魔法を唱え、滝の水を割ると風魔法が水を壁のように固定。

詠唱無しで二つの魔法を操ったユエの技に驚きを隠せない大翔達だが、魔力も有限ではないのでハジメは愛子達と共に滝の中に入っていく。

滝壺は入ってすぐ上方へ曲がっており、そこをぬけるとそれなりの広さがある空洞が出来ていた。

天井からは水と光が降り注いでおり、落ちた水は下方の水たまりに流れ込んでいる。水が溢れないことから、奥に続いているようだ。

「…いましたー！」

周囲を確認すると、ボロボロの服を着た青年が一人横たわっていた。

確認すると年齢は二十歳くらいで育ちが良さそうな顔立ちだが、今は死人のように青ざめた顔をしている。

しかし大きな怪我は見当たらないし、鞆の中には未だ少量の携帯食料も残っていることから、単純に眠っているだけのようだ。

顔色が悪いのは、精神的なものだろう。彼がここに一人でいるのと関係していると判断できる。

「だ、大丈夫ですか!？」

愛子が何度か揺さぶると、青年は小さくうめきながら目を覚ました。

「う……ここは……？」

「初めまして。僕らはフューレンの冒険者ギルドから派遣された冒険者です。あなたがクデタ家3男、ウイル・クデタですか?」

ハジメは目を覚ました青年に近づくと自身の立場を伝え、名前を確認する。

「えっ、君達は一体、どうしてここに……」

状況を把握出来ていないようで目を白黒させる青年に、ハジメは持つてきていた水筒を差し出し、これまでの経緯を話す。

「そうですか。イルワさんが……また借りができてしまったようだ……あの、あなたも有難うございます。イルワさんから依頼を受けるなんてよほどの凄腕なのですな」

尊敬を含んだ眼差しと共に礼を言うウイル。

それから、全員の自己紹介を済ませて、早速何があつたのかをウイルから聞く。

話をまとめるところだ。

ウイル達は五日前、ハジメ達と同じ山道に入り五合目の少し上辺りで、突然、20体のブルータルと遭遇したらしい。

だが、それがただのブルータルではなかったという。

「ところどころに金属のようなものがついていたんです：最初は鎧か何かだと思っていたのですが、ブルータルに鎧をまとう知能があるとは思えないと言われ、よく見ると：体から金属が飛び出ていたんです」

流石に異常な姿で数も多いブルータルと遭遇戦は勘弁だと撤退行動に移ったらしいのだが、襲い来る変異型ブルータルを捌いているうちに数がどんどん増えていき、気がつけば六合目の例の川に追い込まれたようだ。

そこでブルタールの群れに囲まれ、包囲網を脱出するために盾役と軽戦士の二人が犠牲になったのだという。

それから、追い立てられながら大きな川に出たところで、前方に『悪夢』が現れた。

「鋼の魔獣：ゲイルさんは：私を連れて行ってくれたリーダーはそう呼んでいました」

その姿は『魔獣』の呼び名がふさわしい巨大な魔物で、獅子のような姿の魔物だったらしい。

その鋼の獅子はウイル達が川沿いに出てくるや否や、特大のブレスを吐き、その攻撃でウイルは吹き飛ばされ川に転落。流されながら見た限りでは、そのブレスで一人が跡形もなく消え去り、残り二人も後門のブルータル、前門の竜に挟撃され殺されたらしい。

ウイルは、流されるまま滝壺に落ち、偶然見つけた洞窟に進み空洞に身を隠していた。そして、ハジメ達がそこを見つけて今に至る。

（鋼の獅子：ブルックで見かけたサイボーグの魔物がまさかここまで

来てるなんて…)

ウイルは、話している内に感情が高ぶったのか啜り泣く。

無理を言って同行したというのに、冒険者のノウハウを嫌な顔一つせず教えてくれた面倒見のいい先輩冒険者達。

そんな彼等の安否を確認することもせず、恐怖に震えてただ助けが来るのを待つことしか出来なかった情けない自分。

救助が来たことで仲間が死んだのに安堵している最低な自分。

歡喜と嫌悪。相反する思いが混ざり合い涙となつて溢れ出した。

「わ、わだじはさいでいだ。みんな死んで点しまったのに、何のやぐにもただない、ひつく、わたじだけ…わたじだけ生き残つて…それを、ぐす…よろこんでる…わたじはっ！私なんて生き残らなければ！」

洞窟の中にウイルの慟哭が木霊する。顔をぐしゃぐしゃにして、自分を責めるウイルに、どう声をかければいいのか言葉が見つからず、誰もが黙っていた。

「……………生き残つて悪いんですか？自分の命が助かつて、何が悪いっていうんですか！」

ハジメが声を荒げ、ウイルの胸ぐらを掴む。

「な、南雲君!？」

ハジメの行動に愛子が驚くが、大翔が手で制する。

「誰だつて自分の命は大切です。だって、自分が死んだら何もできない…それでもあなたを守ったのはあなたの存在がそれだけ彼らにとって重いものだったからだ！」

「なのに、自分の一時の感情で自分の命を否定するか！あなたを助けようと、未来を託そうとした彼らの最後の戦いをドブに捨てようとするのか！」

ハジメの言葉にウィルは目を見開き、座り込む。

「…もし、自分を許せないというなら…生きてください」

そう言うとハジメは自身の眼帯を外し魔眼石をあらわにする。

「僕はかつて仲間と…いえ、仲間だと思い込んでいた者達に裏切られ、目を潰されて奈落の底に叩き落とされました」

その言葉に悲痛な顔になる愛子と、罪悪感から目をそらすクラスメイト達。

「何があっても心だけは折れないでください。絶望に染まりかけても諦めないでください。守られ生かされたその命が、きつと誰かの力になるかもしれない…そうすれば、いつかきつと生かした者達に顔向けできるはずです。生きてどんな形でも多くの人間を助けていくことこそ、彼らへの最大の恩返しになります」

「生きる、こと……」

ハジメの言葉でウィルの目に光が戻り、ハジメは内心でやりすぎたと考えていた。

(…感情的になりすぎたな)

力がなく、限界ともいえる状況で生き残ったウィル。

多少なりとも自分と同じような境遇で生き残った彼が自身を否定した姿を見て、ハジメはまるで自分が生き残って地上に来たのが間違いないのではないか…という不安に襲われたのも事実だ。

「…………ハジメ。お前が生きててくれたのは絶対に間違いじゃねえ。

俺もみんなも何度だって言ってるよ」

大翔の言葉にハジメは照れ臭そうに笑う。

やがてウイルの容体が落ち着き、ハジメは撤退を促した。

このままいけば、日の入りまでには十分に間に合う。

鋼の獅子など気になることは諸々あるものの、さすがに夜に戦うのは得策ではない。

何より戦闘能力が低いウイルや愛子達を街にまで連れていかなければ調査も戦闘も厳しいのだ。

ウイルは自分が足手纏いであるとは自覚しているようで撤退には反対せず大人しく従う。

淳史達は街の人たちも困っているから調査すべきだと正義感からの主張をしたのだが、愛子と大翔、優花は危険性が高いと言うことで断固拒否し、結局全員で撤退することにした。

そうしてハジメを先頭に洞窟を歩いていったのだが…

滝壺に近づいた時、彼は徐に足を止めると、滝壺の方を凝視し武器を抜く。

「この気配…ユエさん、シアさん、ニコルは戦闘準備を」

ハジメの言葉に3人は何がいるのか理解し、愛子達はよくわかっていない。

「気配感知にデカいのがかかりました。多分、鋼の獅子です…」

『っっっ!!』

外にウイル達冒険者一行を襲った獅子が待ち構えていると知り、愛

子達は一斉に表情を強張らせる。

ウイルに至っては、トラウマを思い出してかカタカタと震え始めた。

「どうするの、ハジメ…?」

ニコルが警戒し、ハジメが口にする。

「とりあえず僕が戦う。ニコルはブリッツが今使えないから、みんなの避難を優先して

」

そう言うとハジメは滝から飛び出し、ドンナーを取り出して構える。

『グウルルルルル…グウウアアアアア!!』

低い唸り声を上げ、漆黒の毛で全身を覆い、20メートルにも達するほどの巨体の獅子が予想通り待ち構えていた。

「やるしかないなら…ここに狩る!!」

第6話 集う戦士たち

『グウウウオオオオ!!』

咆哮を上げる鋼の獅子にハジメはドンナーを発砲し、相手の出方を見る。

が、ドンナーの弾丸は鋼の獅子の体にかすり傷一つ付けることはなく、ハジメは小さく舌打ちをする。

「ドンナーが直撃してこれか…なら、重火器使うしかっ!？」

すると、獅子は大口を開けて逃走している愛子達…厳密に言えばウイルに狙いを定めていた。

「まずい!みんな、伏せて!!」

ハジメは宝物庫から大型シールドを取り出し、ウイル達を庇うように前に立つ。

ゴオオオオオッ!

辺りの草木を一瞬で消し飛ばす強力なビーム兵器にハジメは必死に踏ん張り、シールドに内蔵されたアンカーを作動させることで下がらないようにする。

「ぐっ!ウウウウウ!」

だが、それでもモビルスーツのビームライフルを超えそうな威力にハジメの足は少しずつ下がっていくが…

「南雲!」

後ろにいた優花と大翔が支え、後に続くように淳史達も必死にハジメの背を支える。

「くっ……今だ、ユエさん!シアさん!」

ハジメが叫ぶとシアがドリユツケンを振りかぶり、ユエが3つの上級魔法を同時発動。

ユエの妨害によりビームの軌道が逸れ、ドリユツケンが鋼の獅子の

顎に直撃する。

(まずは安全なところまでウィルさんや先生…戦えない人を遠ざけな
いと)

ハジメは念話石を使い、ミネルバのクリスに通信する。

「クリス！ヤバい敵が出たから僕達のいる場所にミネルバを向かわせて！」

『う、うん！モビルスーツと武器はどうする!?!』

少し考え、ハジメは指示を出す。

「シアさんにガイアを送って！あと、できれば僕の作った実弾兵装の調整をフリットに頼んでほしい！」

続けてハジメは宝物庫からヒュドラ戦で使ったスナイパーライフ
ル：『ネオシユラーゲン』を取り出し、全体に指示を出す。

「ユエさんは先生達の防衛に回りつつ、魔法で敵の攻撃を相殺！シア
さんとニコルは隙があれば魔獣に攻撃！僕はシユラーゲンで狙撃し
てチャンスを作る！」

『了解!!』

愛子達はどうにか距離を取り、魔獣の姿が見えない距離まで移動。

「…結局、また南雲に助けられてばかりだな」

逃げる道中で淳史がぼつりとつぶやき、生徒たちの間に重い空気が
流れる。

異世界に来て常人より強い『異世界チート』なんて手に入れても、自
分達は結局何も果たせていない。

オルクスでベヒモスに襲われた時も、鋼の獅子に襲われた時も…自分達を守っているのは力を持たないはずのハジメだった。

「……………そうだな。俺達はまだ…あいつのいる場所に進めてない」

大翔が足を止め、生徒たちはお互いに目を合わせると頷く。

「…先生。ウイルさんとここに隠れてください。さっき南雲が船を呼んでたので、多分見つけてくれると思いますから」

「ま、待ってください！園部さん達はどうするつもりですか!?!」

愛子の質問に答えるかのように優花達は自分の武器を取り出す。

「南雲より弱い今の私達じゃ足手まといかもしれない…けど、変わらないままなのはもっと嫌なんです!」

ウイル達を避難させたことで、ハジメはオルカンなどの高火力兵器で対処するがそれでも圧倒的な防御力と機動性を持つ鋼の獅子には攻撃が通らない。

『ハジメさん！おまたせしたですよおお!!』

すると、空中からシアの乗ったガイアが現れてボーデインドリユツケンで攻撃。

さらにどこからか飛んできた投げナイフが雷を纏い、鋼の獅子の体

に小さな傷をつける。

「南雲ー!」

ハジメが振り返ると、そこには逃げたはずの優花や大翔が武器を持って立っていた。

「みんな…何してんの!?!」

「悪い…でも、お前に何度もキツイ戦いを任せたくなかったんだ」

ロングソード二刀流の状態の大翔がハジメの目を見据える。

「…言つとくけど、ベヒモスなんて比じゃないよ、あれ」

「わかってる。それでも俺達は来たんだ」

見ると、他の生徒たちも覚悟を決めているようだ。

「…………よし!ならみんなはあくまでも援護に専念して!あの魔獣に対応するための切り札ならある!」

そういうとハジメはアリスタを使い、インパルスを実体化。

突然ハジメのガンプラがモビルスーツとして実体化したことに優花達は驚くが、その中で一人特に動揺している男がいた。

「あの宝石…もしかして!」

大翔はポケットから『あるもの』を取り出して…

一方、鋼の獅子にビームライフルで攻撃するフォースインパルスとガイア。

だがその防御性能も中々高く、2体だけではどうしても攻めあぐねてしまう。

「まずい…こいつ、ビーム耐性持つてみたいだ…」

「だったら…!」

ガイアはバーニアを吹かしてボーディンドリユツケンを振り抜くが、鋼の獅子は高速で走って攻撃を避け、逆にガイアの背部ウイングに食らいつく。

「ああああああ!!」

衝撃がコックピットにまで伝わり、損傷したことによる火花が全身に走りシアの悲鳴が響く。

「シアさん！お前えええー！」

フォースインパルスは新装備…レールガンを発射しながら接近し、ビームサーベルで鋼の獅子に斬りかかる。

「逃がすかー！」

加速しながら鋼の獅子を蹴りつけるインパルスだが、獅子の尻尾がインパルスの左肩を破壊。

さらに前脚のクローが胴体を深く抉った。

(ヤバイ…こいつ、僕らだけじゃ…)

すると、空中から『何か』が飛来して鋼の獅子の前脚を1本切断。

『大丈夫か、ハジメ!!』

そう呼びかけてきたのは…

「す…ストライクMarkⅡ…大翔なのか!?!」

親友の愛機『エールストライクMarkⅡ』がハジメのインパルス

を守るように前に立つ。

「待たせた…それと、もう一人いるぜ！」

鋼の獅子は突然の乱入者に唸り声を上げると、更なるモビルスーツが鋼の獅子に対して『投げナイフ』を投げってくる。

「こいつ…くらいなさい！」

現れたのは、実体化した優花のガンプラ『G―エグゼスアサルト』。

「2人とも…どうやって」

「それについては後からいくらでも言う…まずは…」

大翔は以前マクギリスから貰ったアリスタを握り締め、優花も先ほどユエから受け取ったアリスタを握っていた。

「あいつを倒して、みんなでウルの町に戻る…でしょ？」

優花がそう言うと、2体のモビルスーツは鋼の獅子に立ち向かっていった…

鋼の獅子によるレーザーをシールドで防ぐストライク。

「園部！」

「了解！」

G―エグゼスは投擲ビームナイフを発生させ、3本のビーム刃が鋼の獅子の装甲の一部を融解させる。

「ライフルは無理でも…サーベルと同じなら耐性を貫ける！」

続けて背部のビームサーベルを左手で持ち、右手からサーベルを発生させながら攻撃。

「この射撃ならどうだ！」

ストライクは腰部のレールカノンを展開し、インパルスもレールガンで鋼の獅子の武装を次々と破壊していく。

だが、鋼の獅子とてただやられているだけではない。

『ガアアアアア!』

雄たけびを上げると4本の脚から煙が出て、一瞬でインパルスの前に走ってきた。

「っ!速い!…」

獅子のカギ爪は何とかVPS装甲で防げたが、その重量にインパルスは押し倒されてしまう。

「ハジメから!離れろ!!」

ストライクがエールストライカーのバーニアを吹かして加速し、鋭いキックを獅子の横っ面に叩き込むとインパルスは獅子の頭を掴む。

「これで!」

コックピットのハジメがスイッチを押すと、インパルスの頭部バルカンが獅子の視界をつぶした。

『ギユウオオオオオ!』

視界を潰されて痛みと暗闇に叫ぶ獅子だが、無抵抗でやられるものかと言わんばかりにビームを放射し、ストライクの右腕とインパルスの左腕を破壊。

「まだよ!」

すると、G―エグゼスは両腰からステイレットを抜いて投擲。

それは獅子の頭部で炸裂して獅子の耳と鼻に甚大なダメージを与えた。

「優花さん！大翔！」

「わかってる！」

「ここで…決めるぞ！」

ハジメはインパルスをフォースシルエットからセイバーシルエツトに変えると腰のシロガネを抜き、構える。

続けてG―エグゼスも右腕に赤い刀身のビームサーベルを生成し、ストライクは無事な左腕でサーベルを掴む。

そしてわずか一瞬の静寂の後…

「セヤアアアアアア!!」

ストライクとG―エグゼスのサーベルが獅子の前腕を破壊し、インパルスの一太刀が振り下ろされ…

鋼の獅子は縦に真っ二つになり、その機能を停止させた。